

マジンカイザーVS真
ゲッターロボ！

元ゴリラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ゴラーゴン事件」から半年。人々は平穏の中にいた。

しかし、宇宙から降り注ぐゲッター線が増大する不可解な現象に早乙女博士は唯ならぬものを感じていた。

ゲッター線解明のために新たなるゲッターロボが生み出されようとしている最中、宇宙の彼方からある男が帰還する。

それが、虚無との戦いの幕開けだった！

目次

プロローグ	1
第一話『壮絶!』Aパート	8
第一話「壮絶!」Bパート	28
第二話『覚醒!!』Aパート	55
第二話『覚醒!!』Bパート	82
第三話『地獄!!!』Aパート	107
第三話『地獄!!!』Bパート	135
第四話『絶闘!』Aパート	181
第四話『絶闘!』Bパート	215
第五話『対決!!』Aパート	268
第五話「対決!!」Bパート	291
最終話『夢幻!!!!』Aパート	331

最終話『夢幻!!!!』Bパート	355
最終話『夢幻!!!!』Cパート	390

プロローグ

遠い宇宙の彼方にて、一台の円盤がソラを駆けていた。その蒼く、そして黒い円盤が向かっているのは太陽系第3惑星。円盤に乗る男の顔は、フルフェイスのヘルメットに隠されていて伺えない。しかし、その眉間に寄る皺と険しい目は、男が焦りと、苛立ちを感じていることが見て取れる。

「急がなければ……」

男の名前は、デューク・フリード。地球人としての名前を宇門大介という。男は10年前、故郷フリード星をベガ星連合軍に滅ぼされ……そして落ち延びた先・地球を守るためにフリード星の守り神・グレンダイザーを駆り地球の仲間達と共にベガ星連合軍や、地球を脅かす敵と戦った。

そして、全てが解決した後フリード星を復興するために地球から旅立った。

それから、10年。デューク・フリードが第2の故郷である地球へ向かうのは、ただの里帰りではない。

「既に、進化が始まっているかもしれない……」

宇宙を滅ぼすモノが、彼の故郷・地球で生まれようとしている。グレンダイザーが、告

げている。そしてそれは、デューク・フリードも知っているものだった。いや、友であると言ってもいい。

「リョウ君、ハヤト君、ムサシ君……」

かつて、地球で共に戦った仲間・ゲッターチーム。彼らの乗るスーパーロボット・ゲッタードラゴンが、世界を……宇宙を滅ぼす悪魔になる。そして、それを阻止するべく宇宙の彼方……次元の彼方より、地球に新たな脅威が迫っている。

「僕は……」

グレンダイザーは、告げている。ゲッターロボは危険だと。しかし遠い故郷の友が、ベガ大王のような宇宙を滅ぼす悪魔になるなど信じられない。

「急がなければ……」

暗く、冷たい宇宙のソラを円盤スペイザー……グレンダイザーの円盤航空形態は急ぎ、走る。地球は、もう目前に迫っている。スペイザーが加速すると共に、1時間もせずに青い星が肉眼で確認できるまで迫っていた。

「地球だ……」

地球。青く美しい自然に囲まれた緑の星。デューク・フリードが、宇門大介が愛した星。彼の愛する友が暮らし……今まさに宇宙のガン細胞となろうとしている星。その美しさに見惚れたくなるが、しかしデューク・フリードは急がなければならなかった。

地球の青が、やがてデュークの眼前に広がっていく。

あれから100年。みんなどうしているだろう。そんな感慨に耽りたくなる。しかし……。

「ッ!? 来たか……」

重力振。無重力の宇宙空間に、巨大な振動とデュークを抑え付けるような重力場が発生する。それは、フリード星で感じたものと同じだ。

「お前も、地球に辿り着いたか………百鬼帝国!」

百鬼帝国。かつて、世界征服の野望を燃やし地球の各地で破壊活動を行なった敵。その本拠地とも言える宇宙要塞が、グレンダイザーの眼前に現れたのだ。

その百鬼帝国の宇宙要塞から、通信が入る。

「貴様も……地球に来たか。グレンダイザーよ」

「ブライ大帝……!」

モニタに映る百鬼帝国のブライ大帝は、体の殆どが機械に繋がれ一つになっている。どのような原理かはわからないが、ゲッターとの戦いで滅んだ肉体をその力で再生させているのだろう。

「デューク・フリードよ……我らの目的は同じ。共に戦おうではないか!」

「断る! 僕は、友を貴様のような悪魔にさせないために来たんだ!」

円盤形態から人型の魔神……グレンダイザーへと機体を変形させ、デューク・フリードは百鬼帝国と対峙する。しかし、百鬼帝国から放たれた無数の百鬼獣に瞬く間に取り囲まれてしまう。

「スクリュークラツシャーパンチ！」

グレンダイザーの腕が飛び、その質量で百鬼獣を貫いた。その隙を突くように別の百鬼獣がグレンダイザーの懐に飛び込む。

「反重力ストーム！」

しかし、グレンダイザーの胸部から放たれた反重力光線が百鬼獣を焼く。さらなる百鬼獣がグレンダイザーに迫るも、スクリュークラツシャーパンチが再び腕部に戻ると同時に、肩に格納されている二刀の刃が、百鬼獣を切り裂いた。

「ダブルハーケン！」

グレンダイザーは、百鬼獣を相手に一騎当千の戦いを繰り広げていた。しかし、次第に数を前に押されていく。

「フフフ、どうした。もう終わりかねデューク・フリード？」

「グレンダイザーをなめるな！ 貴様らなど……」

しかし、グレンダイザーがダブルハーケンを構え百鬼要塞へと飛び込んでいく。それを塞ごうと立ち上がる百鬼獣を蹴散らしてその中へと侵入していくグレンダイザー。

そして……………。

……………

……………

……………

異常な重力振を感じし、統合軍は緊急事態体制を取っていた。剣鉄也も、その最前線にいる。

彼とその愛機・グレートマジンガーは、半年前の「ゴラーゴン事件」の功労者でもある。本来ならば一線を引いてもいい。しかし、彼の愛機グレートマジンガーを操るに相応しい操縦技術と正しい正義感を持つ後継者が現れない限り、彼は現役の戦士で居続けるつもりだった。

「何が起きているのかわからんのか？」

鉄也は、現在岩国基地に駐留している光子力空母・剣蔵の格納庫内で出撃の時を待っていた。無策で飛び出すわけにはいかない。現在、情報を光子力研究所と早乙女研究所が全力で観測している。その答えが出次第、鉄也はグレートマジンガーで出撃することになっていた。そして、すぐにその答えはやってくる。グレートマジンガーのコクピツ

トでもある戦闘機・ブレインコンドルに早乙女研究所から通信が入る。

「鉄也君！」

「早乙女博士、何かわかりましたか？」

ゲッター線研究の第一人者であり、ゲッターロボの開発者でもある早乙女博士だ。彼は心なしに顔色が青く、それは決して良くないことが起きていることを物語っていた。

「ああ。これを見てくれ……」

そう言うと、早乙女博士はブレインコンドルに一枚の写真を転送する。そこに映されていたものを見て、普段冷静な鉄也は思わず叫び声を上げた。

「そんな……バカな！」

百鬼要塞。直に見るのは初めてだが、資料で見たものとそれはよく似ている。鉄也も何度か戦ったことのある百鬼帝国の百鬼獣がその要塞に傅くように展開されていた。それだけでも驚嘆すべきことだが、既に鉄也は「死んだはずの敵」であるドクターヘルとの戦いを経験したばかりである。鉄也が驚愕していたのは、その百鬼要塞の中央部に
ある。

「グレンダイザーが……デューク・フリードが……負けた？」

そこには。

十字架に架けられた聖者のように磔にされた、友の姿があった。

第一話『壮絶!』Aパート

百鬼帝国。10年前、世界の支配を目論んだブライ大帝率いる鬼の軍団。彼らは、ゲッターチームとの戦いで滅びたはずだった。しかしその百鬼帝国の要塞が、そして百鬼獣と呼ばれる戦闘ロボット軍団がたしかに、早乙女研究所の観測した映像には映し出されていた。

「早乙女博士、これは……」

神隼人。ゲッターライガールのパイロットであり、現在はゲッター線研究及びゲッターロボ開発にも携わる早乙女博士の後継者とも呼ぶべき青年は、その光景に戦慄していた。

「わからん。しかし、百鬼帝国はあの戦いを生きていたと結論づけざるを得ん」

早乙女博士もまた、動揺を隠せずにいる。

「そんなバカな! 百鬼帝国は、俺の目の前で滅んだ。ブライの最期だって、この目で!」

隼人の記憶にある百鬼帝国の最期は、壮絶なものだった。宇宙空間で、太陽エネルギーを浴びたゲッタードラゴンの必殺技・シャインスパークを受けたのだ。たとえ要塞

が無事だったとしても、中にいたブライ大帝は無事なはずがない。そして、百鬼帝国の要塞その亡骸も、アトランティス帝国の遺産ウザーラが宇宙の彼方に運んでいったのだ。その百鬼帝国が今、こうして復活している。

宇宙の盟友グレンダイザーを磔にしていると言う事実もまた、隼人の理解を越えた事態だった。

「グレンダイザーが負けるなんて、信じられん……」

グレンダイザーとデューク・フリードの強さと頼もしさは、隼人も一目置いていた。その彼がこんな敗北を喫するなど。

「……それだけ、敵の戦力は強大になっているということだろう」

一方で、早乙女博士はただただ冷徹に事態を観察しているようだった。と、2人が険しい顔をしている時だった。

「おい隼人！ 早乙女博士！」

静かな2人とは対照的な、騒がしい男達がその場に乱入する。1人は長身の男。もう1人は大柄な男だった。長身の男……流竜馬はその全身に闘争心を激らせているかのような男だった。一方でもう一人の大柄な男・巴武蔵は、体格こそ竜馬や隼人以上の巨漢であるにも関わらずどこか和やかな目を顔立ちをしている。しかし、その目は竜馬同様、熱く燃えている。

竜馬、武蔵、そして隼人……。3人こそは10年前、太古の世界より蘇った恐竜帝国や、今復活した百鬼帝国と戦った初代ゲッターチームである。彼らは、後進の教育のために最前線での戦いからは身を引いていた。しかし、そんな彼らが再び早乙女研究所に集まったのには理由があった。

「竜馬、武蔵……。真ゲッターロボの起動実験は中止だ。今は……」

「そんなことはどうでもいい! 百鬼帝国が復活したつてのは本当なのか!」

「ああ……。グレンダイザーを倒しての凱旋だ」

そう吐き捨てて、隼人は写真を竜馬に回した。

「……………!?!」

「グ、グレンダイザーが……」

信じられない。と言うように武蔵。

「こうしちゃいられねえ。行くぜ隼人、武蔵。今度こそ百鬼帝国にトドメを刺してやる!」

「待つんだリョウ」

ゲッタードラゴンの下へ走ろうとする竜馬と隼人を、早乙女博士が止める。

「博士?」

不振がる隼人。そして、早乙女博士は続ける。

「竜馬、隼人。お前達は真ゲッターロボで弁慶と待機。武蔵はゲッタードラゴンで出撃だ」

「なっ……………」

それは、非情とも言える決断だった。待機を命じられた竜馬と隼人だけではない。出撃を命じられた武蔵も、驚愕の表情を浮かべていた。

「……………おい、早乙女博士。そりやどういう見だ？」

その決断を下す早乙女博士に、竜馬が凄む。

「…………敵の戦力は未知数。そしてグレンダイザーすら敵わなかったものが待っているのだ。真ゲッターの起動準備を急ぐしかあるまい」

「…………ジジイ。てめえ…………俺と隼人に実験もしてない新型をぶつつけ本番で乗りこなさせて言うのはまあ、いいだろう。だがな、武蔵とゲッタードラゴンを捨て駒にする気か!？」

武蔵は、ゲッターロボ操縦士としては竜馬、隼人に比べて劣っていた、しかし、それでも初代ゲッターチームのメンバーである。他の訓練生や、補充パイロット達とは一線を画している。実際、現在ゲッターロボを出撃させる際には竜馬と武蔵がリーダーとなり他の予備員や訓練生と共に合体することも多かった。

しかし、それはあくまで訓練や哨戒の時の話である。

ゲッターロボは、3つの心を1つにすることで真の力を発揮するロボットだ。3人のパイロットがいなければ、全力を発揮することはできない。しかも、相手はあのグレンダイザーを倒すほどの力を持っているのだ。武蔵が一人で乗ったゲッタードラゴンが勝てる相手ではない。それを承知の上で、早乙女博士は武蔵達を死地へ送り出そうとしている。

「よせ、竜馬」

しかし、それに激昂する竜馬を諫めたのは他ならない武蔵だった。武蔵は、早乙女博士の目を見据えていた。

「博士……真ゲッターロボが完成すれば、この危機を乗り越えることができるんですね」

早乙女博士の首肯を認めると、武蔵はニヤリを笑う。

「まあ、落ち着けよ竜馬。俺は死に行くわけじゃねえ。お前達が真ゲッターロボを動かすまでの時間を稼ぎに行くのさ。鉄也だけじゃ心許ないからな」

「武蔵……」

「竜馬、隼人、後は頼んだぜ」

そう言つて、武蔵はウインクして親指を立ててみせた。

「ああ……任せてくれ」

ずっと押し黙っていた隼人はようやく、それだけを口にする。

「へへっ、こうしちゃいられねえ。巴武蔵、ゲッタードラゴンで出撃します！」

そう言つて、武蔵は走り出した。今走ることのできない竜馬と、隼人の分まで。

「……チクシヨウ」

武蔵の姿が見えなくなって、隼人は呟く。

「……恨みますよ博士、武蔵だけに行かせるなんて。俺だつてゲッターと一緒に死にたかつた」

若き頃の、あの血潮の滾りのまま3人で戦っていたあの頃。竜馬と、武蔵と、ゲッターと駆け抜けた青春を。隼人は片時たりとも忘れたことなどなかった。きつと死ぬときは3人で、ゲッターの中で死ぬのだろうと思つていたこともある。いや、むしろゲッターと共に死ぬのならば本望だと。

しかし、若き日の3人でゲッターと共に死ぬ日はもう来ない。

隼人は、ゲッターのために死ぬことを許されずゲッターのために生きることを選ばされたのだ。

そして、死地へ向かう友を送り出さねばならない。

「甘つたれるな隼人、竜馬。お前達にはもつと残酷な未来がある。そのために武蔵は行くのだ」

「ジジイ……」

一発殴らせろ。そう言おうとした竜馬は、早乙女博士の顔を見てその拳を解く。早乙女博士が、苦しんでいるのがわかったからだ。苦渋の決断だったのだろう。それで許されることではないが、かつて早乙女博士に言われた言葉を思い出した。

『リョウ！ 非常になりきれ！ 敵はお前が考えているほど甘くはない!』

『リョウ！ そいつらの死に様をよく見ろ。我々の戦う敵の恐ろしさを見る!!』

あの時も、早乙女博士は助手であり息子である達人を喪っているのだ。早乙女博士は、竜馬達よりもずっと長く、戦い続けた人なのだ。

それを、竜馬は知っている。

「……行くぜ、隼人」

だから、竜馬は何も言わずに従うことにした。

「……竜馬」

「俺たちが真ゲッターを動かすのに成功すれば、武蔵も死ぬ必要はねえんだ。だったら、やるしかねえだろ」

「……ああ」

武蔵の去った後を追うように、竜馬と隼人も走り出す。その後ろ姿を見送りながら、早乙女博士は「すまん」とただ一言、呟いた。

.....
.....
.....

劍鉄也は、既にグレートマジンガーで成層圏を飛んでいた。量産型マジンガー「イチナナ式」では、成層圏までの飛行は不可能。宇宙空間スレスレの戦いが可能な戦力は現在、統合軍にはグレートマジンガーただ一機しか存在しない。主力部隊の宇宙への展開が終了するまでに可能な限り百鬼獣を殲滅するのが、鉄也とグレートマジンガーに与えられた任務である。すぐにゲッタードラゴンが応援に駆けつけると通達はあった。ならば、十分に勝機はある。

「……見えた!」

すぐに、グレートマジンガーの周囲を地球と宇宙の狭間の大気熱が襲う。しかし、超合金ニューZのボディはビクともしない。そのまま大気圏を突き抜け、劍鉄也は宇宙へ飛んだ。

「こちら鉄也、宇宙空間への突入に成功!」

と、同時にグレートマジンガーに装着されていたロケットブースターが切り離される。既に、百鬼帝国は眼前に迫っていた。そして、百鬼帝国の艦首に礫にされていた友

の姿を鉄也は肉眼で確認する。

「待ってる、デューク・フリード……!」

グレートマジンガーは単身、百鬼獣の群れへと飛び込んでいく。

「鉄也君。今ゲッタードラゴンが出撃した。すぐに合流するはずだ!」

同時、早乙女博士から通信が入る。

「了解。さあ、行くぜグレート。今度は鬼退治だ!」

マジンガーブレードを構えて突撃し、周囲の百鬼獣達を蹴散らしていく。一本角の鬼を模した百鬼獣が、その巨大な鋭い爪でグレートマジンガーに迫るが、グレートマジンガーは機敏な動きでそれをいなし、ブレードを構えていない片方の腕をドリルのように回転させ射出する。

「ドリルプレッシャーパンチ!」

グレンダイザーのスクリュークラッシュヤーとよく似た豪腕に貫かれて、百鬼獣は爆発を起こす。しかし、次の百鬼獣がグレートマジンガーに迫り来る。それをわかっていたかのように、グレートは胸部のV字状の放熱版を披露するように大きく見せる。

「ブレストバーン!」

鉄也の叫びとともに、グレートマジンガーのコクピット内のモニタに『承認』と表示される。それと同時に、放熱版から超高熱の熱戦が放射された。それを浴びた百鬼獣達

は、忽ち溶けていく。

「お前達も強くなってるのかも知れんが、俺とグレートもこの10年でより強力になってるぜ！」

雑魚の百鬼獣を無視して、グレートマシンガーは最大推力で百鬼要塞へと駆け抜けていく。目指すは、磔になってる友。グレンダイザーとデューク・フリード。

グレンダイザー1機では不覚をとったかもしれない相手がこの先にいる。強化されたグレートマシンガーでも、そいつを相手に無策で勝つのは難しいかもしれない。だが、グレンダイザーと……デューク・フリードと2人でなら。この後来るゲッタードラゴンと3機でなら。かつて、この3機の連携で宇宙怪獣と戦ったこともある。その連携でなら、どんな強敵にも負ける気はない。

鉄也の最大目標。それはグレンダイザーとデューク・フリードの救出だった。

百鬼獣を蹴散らしながら、グレートマシンガーはグレンダイザー目掛けて突き進む。そして、百鬼要塞の艦板へ着地した。いや、無重力空間なので「着地」という表現は正確ではない。ただ、既にグレンダイザーはグレートマシンガーがその手を伸ばせば届くところにいる。

「聞こえるか、デューク・フリード！」

「ウ……………」

グレンダイザーから、通信音声が入る。懐かしい声は間違いない、デューク・フリードのものだった。

「グレートマジンガー……。鉄也君か？」

「ああ、今助ける！」

グレンダイザーを礎ている鎖を斬ろうと、マジンガーブレードを抜く。しかしその瞬間、凶悪なまでの殺気を感じて鉄也は、グレートを振り向かせた。

百鬼要塞の内部から、一機のロボットが現れた。人型である。百鬼獣の象徴でもある鬼の角もついている。しかし、問題はその数だ。まるで人間の髪の毛のように、鬼の角がその頭部には無数に生えていた。頭部だけではない。その肩部にも、大きな角が生えている。さらに、胴体には人の顔のような目と鼻と口がついており、頭部と合わせて二つの顔を持っている。

二つの顔。それに鉄也は一瞬、阿修羅という言葉を思い浮かべた。しかし、あしゆら男爵とは違う。怪物的な、あるいは仏教における修羅のような雰囲気を感じたその機体は百鬼獣でありながら、明らかに異質だった。

「フフフ……。どうだね。この超羅王鬼の恐ろしさに声も出ないようだな」

超羅王鬼。そう呼ばれた百鬼獣から、声がする。その声も、鉄也には聞き覚えのある声だった。

「ブライ、まさか本当に生きていたとはな……!」

ブライ大帝。かつて百鬼帝国の長として地球支配に乗り出した、狂った独裁者。それがこの超羅王鬼と一つになっていた。身体の殆どが機械のコードのようなもので繋がれており、生身と思える部分の殆どに食い込んでいる。それは、文字通りにブライ大帝が、超羅王鬼という百鬼獣のパーツとなっているかのようだった。

「フ、フフ……どうやら、この姿が気になるようだな」

「ああ。死んだはずのお前が生きて、こんな姿になっているんだからな。一体何者が、何の目的で貴様を再生させたのか吐いてもらおうか!」

超羅王鬼から発される殺気は、一瞬たりとも気の抜けないものだった。もし、グレンダイザーを助けようとして背中を見せたらその瞬間に鉄也は死ぬだろう。そう、直感が告げている。

「いいだろう……冥土の土産だ。教えてやる」

.....

.....

.....

ブライ大帝は、たしかに死んだはずだった。そして、その亡骸は百鬼要塞と共に宇宙を彷徨っていた。

それを、彼らは見つけ出した。

彼らは、百鬼要塞の中に朽ちていた羅王鬼と、ブライ大帝の遺骸を修復し、ブライ大帝に残されていた記憶情報を読み取って行った。

「そうか……この個体はゲッターに滅ぼされたのか」

彼らのうち一人が言った。

「これは、使えるかもしれない。この個体が抱えているゲッターへの憎しみは本物だろう」
彼らの中の、誰かが閃いた。

それから、ブライ大帝の身体を羅王鬼と合体させ、甦らせるための実験が始まった。身体のだろどを機械へと置き換えられた時、ブライは自らが鬼になった時のことを思い出していた。

彼がまだ人間だった頃、ブライはうだつの上がらぬ科学者として、古代遺跡の調査隊に参加していた。

その古代遺跡は、南極の氷の下に存在していた。ブライは、優秀ではないが体格も良く若かった。それゆえに先発隊に任命されたのだった。

そして、遺跡の奥に進んだブライが目にしたのは、古代ミケーネ文明に似た象形文字

と、数多くの機械の巨人だった。それが何なのか、若く愚鈍なブライにはわからなかった。しかし、その最奥。一つの面があった。それは、鬼のような形相の面だった。鬼。東洋のデーモン。それに不思議な魅力を感じたブライは、調査隊の中で禁じられていたことをしてしまった。

即ち、遺跡のものに触れてしまったのだ。いや、触れたなどという生易しいものではない。ブライは、一面を被ったのだ。

すると、無数のイメージがブライに降り注いだ。

宇宙。争いの海。この古代遺跡は、宇宙船だ。そして、彼らは滅ぼされようとしていた。強大な敵を前に、今まさに滅びようとしていた。しかし、彼らは逃げ延びたのだ。彼らの子孫は逃げ延びた先のこの星で、文明を築いた。そして、この船は役目を終えようとしていた……………。

「そうか……………そういうことだったのか……………」

羅王鬼と一つになっていく中で、ブライは全てを理解した。自分は、ゲッターを滅ぼすためにこの力を得たのだと。そして、ブライを拾い上げた彼らもまた……………。

……………

……
……

ブライの語る言葉は、鉄也には信じ難いことだった。

「バカな……」

しかし、いくつかの辻褄が合ってしまうのもまた、事実である。

「百鬼帝国と、ミケーネ帝国のルーツが同じだともいうのか?」

ブライの語るそれは、かつてドクターヘルがバードス島で機械獣と古代ミケーネ文明の遺産を見つけた時の状況と似通っていた。いや、それだけではない。鉄也の脳裏に、半年前に戦った魔神の姿が過ぎる。

マジンガーインフィニティ。ミケーネ文明の遺産であり、世界を作り替える力「ゴラーゴン」を発動させる力を持った魔神。その出現と同時に謎の復活を果たしたドクターヘルとその一味。

古代ミケーネ超文明には、まだ謎が多い。鉄也は確かにミケーネ帝国と戦いはしたが、その内容は未だに明かされていない。いや、人類以前の超文明が地上から姿を消した理由もはつきりしてはいないのだ。

だが、しかし。

もしそれらの超文明が宇宙からの来訪者であるとしたら。

そのルーツが多種多様な進化と、変化と、分岐を繰り返したことでミケーネ文明やハチウ人類、そして鉄也達人類へと枝分かれしていったとしたら。

「……鉄也君、デューク・フリード。君たちは不思議に思ったことはないのかね。地球のマジンガーとフリード星のグレンダイザー。違う星で生まれながらどうしてこんなに似ているのかと」

「……………」

「……………ブライ、まさか貴様は」

ブライが何を言おうとしているのか、鉄也とデュークは瞬時に理解した。

「それだけではない。ベガ星連合軍の多種多様な宇宙人達と比べて、フリード星人は地球人とあまり姿形も、言語も変わらないではないか！ それを不思議に思ったことはないと言わせん！」

つまり、地球人とフリード星人もまた同じルーツを持つのだと。しかし、それがたえ真実だったとしても鉄也のやることは変わらない。

即ち、悪を倒すということは。

「だからどうした！ たとえお前の仮説が真実でも、お前が世界を征服しようとする悪魔であることは変わらん！」

抜いたマジンガーブレードを構え、グレートマジンガーは超羅王鬼へと向かっていく。しかし、超羅王鬼は身体中から触手のようなコードを伸ばし、グレート四肢を拘束していく。

「クッ……アトミックパンチ!」

拘束を受けた腕を飛ばし、マジンガーブレードで触手を斬って拘束を解く。しかし、斬り落とされた触手はみるみるうちに再生していく。

「チツ、なんてやつだ……!」

「気をつけろ……鉄也君。奴は全身が凶器のような奴だ!」

「何の、それなら……サンダーブ레이크!」

鉄也の叫び声と同時に、「承認」の文字が表示される。それと同時に、グレートマジンガーの指先に蓄えられた必殺パワーの超電力が解放され、超羅王鬼に稲妻が走った。

グレートマジンガーの必殺武器・サンダーブ레이크。宇宙空間ではグレートブースターが射出されても間に合わない。現在、イチナナ式の主力部隊が光子力空母・剣蔵で向かっている。そこには当然、グレートブースターもある。剣蔵が到着するまではグレートブースターなしで戦わなければならない。もし、このサンダーブ레이크でも倒せないのであれば……。嫌な予感が、悪寒と言つてもいいだろう。そんな感覚が鉄也を襲

う。

「……………フッフ」

鉄也の予感は、的中した。

「全くの……………無傷だと!?!」

「当然だ!… この超羅王鬼は、彼らの力で強化されているのだからな!」

超羅王鬼がその鋭い爪でグレートへと迫る。

「速い!?!」

その巨体に似合わぬ機敏さでグレートマシンガンの眼前へ踊り出た超羅王鬼。回避は間に合わない。鉄也は、咄嗟にマシンガンブレードで防御の姿勢に出た。しかし、超羅王鬼の爪は容易くマシンガンブレードを折ってしまう。

「バカな……………!」

「こんなものかね?」

爪の中央。掌の部分に砲門があるのを鉄也は見た。そして次の瞬間、超羅王鬼の掌からミサイル弾が放たれグレートマシンガンに降り注ぐ。

「クツ、グオオオオツ!?!」

ミサイルの雨は、超合金ニューZのボディを容易く傷つける。それは、地球の軍事力ではあり得ない超絶な威力だった。

「これが彼らの力だよ鉄也君。どうだね、君もこの力がほしくないかな？」

ブライの言葉からは、あからさまな余裕が見て取れた。それが、鉄也の癩に触る。
「ふざ……けるな！」

「鉄也君、君は強い。しかし君のグレートマシンガーは、この超羅王鬼には遠く及ばないのは今の攻防で理解したはずだ。一方で私も部下を失っているからね。君のような優秀な戦士がほしいのだよ」

「俺は……貴様の手駒になどならん！」

「剣鉄也。お前も鬼になれ。鬼の思想を植え付けてやろう。人間社会破壊学をな！」
「俺は……」

このままでは勝てない。それは紛れもない事実だった。現にグレンダイザーは磔のまま動けず、そしてグレートは倒れ伏し百鬼獣に取り囲まれている。

それでも。

鉄也は地球で待っている妻の顔を思った。まだ言葉も話せない息子のことを思った。パパとママ。どちらの名前を先に呼んでくれるか競争だとジユンと笑い合ったことを思い出した。

それが。傷だらけの鉄也の心を奮い立たせた。

「俺は、偉大な勇者だ。悪の手先になど、なるものか！」

その叫びと同時に、ブレストバーンで周囲の百鬼獣を焼き払い立ち上がる。

「そうだぜ、よく言った鉄也！」

それは、懐かしい友の声だった。

声が響くと同時に、超高熱のビームが百鬼要塞周囲の百鬼獣を焼き尽くしていく。

「この声……この姿……！」

磔られたグレンダイザーの中で、デューク・フリードはその赤い姿を見た。グレンダイザーが告げた神託にあつた姿は、まだしていない。

「出たな……」

ブライ大帝は、その姿を憎々しく見つめていた。

その赤いシルエットこそ、放たれたゲッター線の光こそ、ブライの野望を潰えさせた張本人。

そして、彼らが滅ぼそうとする悪の化身。

「出たな、ゲッタードラゴン!!」

ゲッタードラゴン。百鬼帝国の……ブライ大帝の宿敵の姿が、そこにはあつた。

第一話「壮絶!」Bパート

ゲットマシンの格納庫に一人、巴武蔵はドラゴン号の操縦桿を握る。

「なあ兄弟。おめえらとも長い付き合いだったな」

ゲッターロボと共に若い命を真つ赤に燃やした日々。それは戦いの連続だった。しかし、娑婆に馴染めない武蔵のような人間にとってそれは、何よりも充実した日々でもあった。

戦うことくらいしか脳のない自分が、誰かの役に立てる日々。その中に自分の居場所があった。そして、その中心にあったのは間違いないゲッターだった。

そのゲッタードラゴンも、本来は今日ここで役目を終えるはずだった。真ゲッターロボの起動実験に成功した後は、ドラゴンの残るゲッターエネルギーを全て真ゲッターのゲッター線増幅装置に回す手筈だったのだ。

そうしたら、このゲッタードラゴンはロボット博物館へ寄贈され、平和を築いた象徴となるはずだった。

しかし、その日はもう来ない。

その日を武蔵が見ることも、もう叶わないだろう。それでも、巴武蔵はここを死に場

所と決めたのだ。

「フフフ……」

操縦桿を握る手が、汗をじんわりと感じている。熱い汗だ。血の滾りを思い出すような。

これから飛び込む死地を思い、熱くなる。

「だが、もうひと働してもらうぜ。ゲッタードラゴン！」

その熱のままに、武蔵は自動操縦のスイッチを入れた。そして、発射台から猛々しくドラゴン号、ライガー号、ポセイドン号の3つのメカが空を飛ぶ。

「チエエエエンジ、ドラゴン！ スイッチ・オン！」

武蔵が叫ぶ。すると3機のマシンが垂直に並び、ライガー号のフロントノズルがドラゴン号のリアに刺さった。しかし追突はせず、しっかりとハマり込む。それと同時にドラゴン号から手が生え、ライガー号とポセイドン号も同じように合わさり、足を作る。ナノ細胞のような超合金が、手足の形状に合わせて装甲を作り出しそして、頭が生えた。真紅の竜人。ゲッタードラゴンの誕生である。

「アバヨ、ダチ公！ これが男・巴武蔵の最期の戦いだ！」

武蔵の叫びに呼応するように、ゲッタードラゴンは空中でその勢いを増していく。そして、すぐにその姿は空の彼方へ消えていった。

「ゲッタードラゴン、発進しました!」

早乙女研究所の所員は、飛んでいったドラゴンの姿を観測し続けていた。偉大な遺産を残すために、死地へと飛び込んでいった友のために、その観測は続いていた。早乙女博士もそれに頷く。

「そのまま、ドラゴンの観測を続ける。真ゲッターはどうなっている?」

「ゲッター線出力が、思うように上がりません。このままでは発進にまだ30分はかかります!」

しかし、その武蔵を死地に追いやったのもまた早乙女博士なら、武蔵を死なせずに済ませたいと思っているのも早乙女博士だった。30分。それでは間に合わない。

「10分で終わらせろ!」

「やってみます!」

「やるんだよ!」

無理を言っているのは早乙女博士も承知の上だ。しかし、武蔵の命がかかっている。それを所員も承知の上で頷くと、真ゲッターのモニタリングを再開する。

「ワシは……本当はもう誰も失いたくないんじや。達人……」

達人。恐竜帝国の襲撃で犠牲となり、博士自らが引導を渡すしかできなかった最愛の

息子の名を、早乙女博士は祈るように呟いた。

……

……

……

光子力空母・剣蔵。父の名を授かった艦のドッグの中で英雄・兜甲児は一人、押し黙っていた。

彼は、「ゴラーゴン事件」の後、パイロットとしてはもう戦場に出るつもりはなかった。妻さやかと、これから生まれる子供……もし女の子だったなら、リサと名付けようと思っている。と、その家庭を守るために生きたいと思っていた。しかし、

「大介さん……」

遠きフリード星の友。デューク・フリードの……宇門大介の危機にいてもたってもいられなくなってしまうのだ。今、マジンガーZは「ゴラーゴン事件」で起きた奇跡の影響で大幅なオーバーホールを余儀なくされており、新光子力研究所に預けられている。しかし、それでもデューク・フリードのために甲児は駆け付けられるべく、無理を言つて剣蔵への乗艦を許可してもらったのだ。

「アニキ！」

統合軍のイチナナ式パイロットの一人である兜シロー……つまりは甲児の弟が、そんな様子を見かねてか声をかける。

「ああ、シロー。すまねえな、気を使わせちまった」

「いいや。あのグレンダイザーって、アニキの友達が乗ってるんだろ。だつたら仕方ねえよ」

そう言い笑って返すシロー。強くなったな、と甲児は思う。既に30歳を目前と控えている甲児と違い、シローは今が最も血気盛んかもしれない。そういう意味では危なっかしくもあり、心強くもある。

「グレンダイザーは、スペイザーと合体することでより万能に戦える機体なんだ。だから……」

「わかってる。兄貴の露払いは俺たちに任せてくれ」

「ああ、頼んだぜ」

そう言って、笑い合う兄弟。

今回、甲児が搭乗するのはマジンガーZでもなければイチナナ式でもない。

ダブルスペイザー。かつて、甲児が開発に携わった地球製スペイザー。このスペイザーもグレンダイザーとの合体機能を有しており、それによりグレンダイザーはさらなる機動力を得ることができる。

英雄・兜甲児は今回、あくまでサポートのための参戦だった。グレートマジンガーとゲッタードラゴンがグレンダイザーを解放してくれば、その後ダブルスペイザーと合体することでグレンダイザーに力を与えることができる。

観測された映像や写真で見える限りでも、グレンダイザーの受けているダメージは計り知れない。戦線に加わるにしても離脱するにしても、機動力が必要なのは火を見るよりも明らかだった。それ故に、甲児は宇宙科学研究所に保管されていたダブルスペイザーをこうして引つ張り出したのだ。

だが、それが功を奏するかどうか。全ては鉄也達の戦いにかかっていると断言している。いい。

「頼んだぜ、鉄也……みんな……」

今マジンガーZが使えれば。そう思わずにはいられないもどかしさを感じていた。あの時と……ドクターヘルが蘇ったあの時と同じもどかしさだった。友は今も、命を燃やして戦っている。その最前線にいる。しかし、マジンガーZのない今自分が行ってもこのままでは足手纏いになるのもわかってる。

この焦ったさ押し殺しながら、甲児は剣蔵のドッグでその時を待ち続けた。そんな時である。

「甲児ー」

新光子力研究所の現所長であり、甲児の妻……さやかから緊急の連絡があったのは。「さやか、どうしたんだ?」

さよかの表情は、明らかな焦りの色がある。それが只ならぬ事態の変化を報せる連絡であることを、甲児は言葉を聞かずとも悟ることができるほどの。

「早乙女研究所から連絡があったの。グレートマジンガー並びにゲッタードラゴンが、グレンダイザーの救助に成功したわ」

しかしさよかの口から出たのは、事態の好転。

「本当か!」

思わず、甲児はガッツポーズしそうになった。しかし、さよかの表情は晴れていない。それが、まだ何かあることを甲児に伝えている。振り上げようとした腕を抑えて、甲児はさやかに続きを促す。

「……………まだ、何かあるんだろ?」

「ええ……。敵の宇宙要塞……百鬼帝国が、そのまま地球目掛けて加速しているの」「なんだって……………!」

……………

……………

.....

真紅のボディにマサカリのような二振りのトマホークを持つロボット……ゲッタードラゴンの登場で、戦況に変化が訪れようとしていた。周囲の百鬼獣を蹴散らしながら、ゲッタードラゴンはグレートマシンガーの前に出て庇うようにゲッタートマホークを構える。

「待たせたな鉄也！ 俺とゲッターが来たからには百人力よ！」

「武蔵……。お前一人なのか？」

「ああ。なあに、このゲッタードラゴンは百鬼帝国にトドメを刺したんだ。ブライの野郎なんてちよちよいのよいよ！」

そう、余裕綽々という風に言ってみせる武蔵。一方で、それと対峙するブライ大帝と……礫にされているデューク・フリードはゲッタードラゴンの乱入に只ならぬものを感じていた。

「ムサシ君……リョウ君とハヤト君は？」

「あいつらなら、すぐにくるぜ。それよりも待つてくれよ。今助けるからな！」

そう言つて、武蔵とゲッタードラゴンは超羅王鬼へと飛び込んでいく。それを待つていたとばかりに、ブライ大帝は先ほど鉄也にやったように、身体中から触手を伸ばして

ゲッタードラゴンの手足を絡め取っていく。

「フ、フフフ……フハハハハハハ！ 待ち侘びたぞ、この時を待ち侘びたぞゲッターロボよ！」

「ブライ、てめえ……生きてやがったにしちやあ随分とエグい姿になりやがったな。まあ、自慢のツノが機械とつつついちまつてるじゃねえか」

挑発するように、武蔵。本来、ゲッターロボはこのようなピンチに対してオーブンゲットによる緊急回避ができる。しかしライガー号、ポセイドン号が自動操縦の今、分離は再合体の隙を作ることになってしまふ。その一瞬の隙があれば、たとえ武蔵の乗るドラゴン号を狙わずともライガーとポセイドンを墜とすことで、ゲッタードラゴンは再合体できなくなる。それだけはなんとしても避けたい武蔵は、あえてオーブンゲットせずに四肢を拘束されていた。そして、再合体の隙を作るためにとかく挑発でもなんでもする。

「フフフ……ゲッターチームの武蔵君だったかな。君は私を哀れんでくれるのかね？ このような姿になって」

ブライもそれを理解しているのか、まるで遊ぶように武蔵と言葉を交わし合う。

「ああそうさ！ へっ、惨めよのお百鬼ブライが聞いて呆れらあ！」

「だが、私はこの姿に身を落とすことでこの力を手に入れたのだ！」

そう言つて、力強く触手でゲッタードラゴンを締め付けていくブライ。

「グオっ!？」

「フハハハハハハ！　これが我が超羅王鬼の力だ！　今こそゲッターが滅びる時なのだ！」

「……超羅王鬼、だど？」

超羅王鬼はたしかに、武蔵が以前に戦つた羅王鬼よりも遥かに強力なことがそれだけでも痛感できる。しかし、羅王鬼というその名前を聞いた瞬間、武蔵はドラゴンのゲッタービームを羅王鬼の胴体にある大きな顔目掛けて放つた。しかし、サンダーブレークを受けて尚傷付かないそのボディはゲッタービームで溶けるようにはできていなかった。

「効かん！　効かんぞゲッター！　ははは、素晴らしい！　あれほど苦戦したゲッタービームがまるで痒いぞ！」

興奮するままに、ブライは超羅王鬼を動かし拘束したゲッタードラゴンに近づいていく。万に一つでもオープンゲットで逃げられるようなことがないように、その胴体に爪を立てる。しかし、尚もゲッタードラゴンはゲッタービームを照射し続けていた。それを意にも介さずに爪をギリギリと強く立てていく羅王鬼。しかし、それでも武蔵はゲッタービームの出力を上げ続けていく。そして、

「……………鉄也今だ!」

「ああ!」

武蔵の叫びと同時に、グレートマシンガーが動いた。超羅王鬼がゲッタードラゴンを羽交い締めに行っているその隙に、グレートはグレンダイザーへと到達し、グレンダイザーの肩部に格納されていたハーケンを取り外す。

「行くぞ!」

そのままハーケンでグレンダイザーを縛り付けていた鎖を切った。

「しまった……………」

「ありがとう鉄也君、武蔵君……………」

再び自由を得たグレンダイザーは、残る僅かの力を振り絞り立ち上がりグレートマシンガーと並び立った。

「おのれ小癪な……………」

「おっと、お前の相手はこっちだぜ鬼野郎!」

超羅王鬼と密接する状況でゲッタービームを放ち続ける武蔵。ドラゴンのエネルギーの殆どをゲッタービームに転換して超羅王鬼に照射し続けていた。

「待ってろ武蔵! 今……………」

そのドラゴンを助けようと、グレートとグレンダイザーが動く。しかし、「来るな!」

という武蔵の音が、2人の動きを止めた。

「お前達は退路を確保するんだ。こいつは……百鬼帝国は俺の獲物だ！」

「しかし……」

鉄也が食い下がる。しかし、それをデューク・フリードが制した。

「鉄也君、見るんだ」

そう言つて、グレンダイザーがゲッタードラゴンを指差す。言われて鉄也も、ゲッタードラゴンを凝視した。

「こ、これは……」

ゲッタードラゴンは、己の放つゲッタービームの熱量で溶けはじめていた。超合金ニューZではないが、ゲッタードラゴンもまたメガトン級の爆発にすら耐えられる装甲を持つスーパーロボトだ。しかし、その装甲表面はたしかに融解をはじめており、それは既に超羅王鬼も巻き込まれはじめていた。

「こ、これは…………！」

ブライも驚愕を隠せず、狼狽した声を上げる。

「は、ははは……ちつたあ驚いたみたいだなブライよお」

武蔵の音が、ソラに木霊する。

「これこそがゲッター最大の武器よ。驚いてもらわなくちゃ困るんだよな……フッフ

……。ゲッターエネルギーをフル回転させればここまで凄い事になるとは、今まで乗り続けてた俺も思わなかったぜ」

「武蔵、何を!？」

グレンダイザーの制しを振り切り、グレートが飛び込もうとした。しかし、ゲッタードラゴンの周辺で発生している放射線量、ゲッター線濃度の全てが危険域をすでに越えており、踏み込もうとするとブレーキがかかる。

「へ、へへへ……。どうやら、羅王鬼は前に戦った時同様、この百鬼帝国の心臓と繋がっているみたいだな」

不敵な笑みを浮かべて、武蔵が凄む。その並々ならぬ殺気に、ブライは思わず気圧される。

「き、貴様……。まさか!」

「ああ。羅王鬼なら百鬼帝国の自爆装置になってるはずだ。その自爆装置の誤作動をゲッタービームで誘発したのさ。ははは……。見たかブライ。これがてめえの恐れたゲッターの真の力よ」

「恐れた……。だと?」

「そうよ、てめえはな……。ゲッターを恐れるが故にゲッターに負けるのだ」

武蔵の肌にも、異常が起き始めていた。皮膚がブツブツと膨張をはじめている。それ

が至近距離でゲッタービームの最大出力を……リミッターを外したゲッターの全力を放射した影響なのか、原因はわからない。しかし、武蔵からしたらそんなことはどうでもいい。

「リヨウ、ハヤト……」

かつて、そんな愛称で呼び合った10年来の友のことを、武蔵は思った。武蔵は、ゲッターの中で走馬灯のようなものを見ていた。ゲッター線の熱に浮かされた夢だろうか。と思った。その中に、若き日のリヨウとハヤトと、ムサシ自身の姿がある。それだけではない。早乙女博士や、ミチル、元氣。みんなの顔が浮かんでいた。彼らが、武蔵の愛する仲間達を守るために武蔵は逝くのだ。今が、その時だ。

そんな、幸せな夢を武蔵は見ている。

「ふざけるな……ふざけるなよゲッターロボ！」

ゲッターのメルトダウンに巻き込まれながら、ブライが吼える。次の瞬間、次の瞬間百鬼要塞が大きく揺れた。そして、メルトダウンしたゲッター諸共に百鬼要塞は地球へ向けて加速を始めていた。

……

……

.....

それと同じ頃、浅間山の早乙女研究所では、桁たましいサイレンの音と、所員達の慌ただしい動きの中、流竜馬と神隼人。そして車弁慶の3人はその時を待っていた。

「ゲッターエネルギーの充填はどうなっている?」

「60……70……80%にまだ、届きません!」

モニタールームで早乙女博士と研究員達がそんなことを言い合っているのが、竜馬達の耳に届いていた。

「隼人、どう思う?」

「70%も引き出せるのなら、十分だ。それだけで真ゲッターはカタログスペック上ではドラゴンを遙かに上回るパワーを出せる」

それだけ言って、竜馬と隼人は視線を交わす。それだけで、2人の会話は十分だった。竜馬と隼人が真ゲッターの下に駆け出し、弁慶もそれに続く。

「悪いな弁慶。いきなりぶつつけでこんな化け物に乗るハメになるなんてよ」

そう冗談めかして言う竜馬に、車弁慶……武蔵同様の巨漢の青年はニイッと笑って返す。

「なあに、俺はドラゴンの操縦経験もあるんだ。武蔵先輩に負けない働きくらいしてや

るさ」

弁慶は、豪胆な性格の男だった。その豪胆さが、ゲッターチームに選ばれた最大の理由であるとも言えた。

「フツ、それだけの大口が叩けるなら十分だ」

皮肉っぽく、隼人。

「コクピットは……今までのゲッターと同じなんだろう。それなら……行くぜ隼人、弁慶！」

そう、竜馬が2人に発破をかける。それがいつもの、ゲッターチームの合図。そして、その時だった。3人はゲッターロボへと走り出す。

「竜馬さん、隼人さん、弁慶さん！」

「悪いがこれ以上は待てねえ。俺たちも出撃だ！」

強靱な肉体と身体能力を有する3人を止めようと、整備班はスクラムを組むようにして竜馬達を取り押さえんとした。それが、間違いだった。

「邪魔するんじゃない！」

流竜馬は、空手家・流一蔵の一人息子である。一蔵から厳しく空手の指導をけた竜馬は、一蔵の「相手を倒す」「より強いやつをぶちのめす」という教えを実践するケンカ殺法と空手の複合総合格闘技……バリツ使いでもある。竜馬の拳を顔面にもろに受けて

気絶で済むのなら運がいい。最悪の場合は死に至ってもおかしくはない。パンチがお見舞いされて、顔を破壊されたスタッフを飛び越えて竜馬がいの一番に躍り出た。

「目だ! 耳だ! 鼻!」

神隼人は、あらゆる才智に長けた天才だった。その頭脳を生かし学生時代は、学生運動を起こし学園や政府をきりきりまいさせていたほどである。そして、その戦略眼と体操で鍛えたというしなやかな身体から繰り出される独自の体術は、学生運動仲間すらも恐怖で支配するほどのものだった。その鋭利な爪を立てた拳は、人体の急所を的確に抉る。恐怖に竦んだその一瞬で、隼人はゲッターへと飛び込んでいく。

「俺も続くぞ! 武蔵先輩直伝の、大雪山おろしいいいいいいいっ!」

車弁慶は、柔道家ではない。学生時代は野球部所属だった。しかし、その堅強な肩を買われてスカウトされ、そして柔道家であった武蔵の技を数々を伝授されている。武蔵の奥義である大雪山おろしすら会得した弁慶は、柔道の達人でもあるのだ。根の優しい弁慶は、竜馬や隼人のように致命傷を与えかねない攻撃はしなかった。それでも、大雪山おろしを受けた所員はそこで伸びている。他の所員が怯んだ瞬間に走り出し、弁慶もゲッターへと向かった。

「は、博士！ ゲッターチームが、真ゲッターロボに搭乗しました！」

モニタリングしていた所員が、驚愕したように報告する。

「行かせてやれ」

「しかし、真ゲッターはまだ……！」

「わからないのか。今がその時なのだ！」

所員を一喝し、早乙女博士は真ゲッターのコクピットに通信を入れる。

「竜馬、隼人、弁慶！」

「ジジイ、止めても無駄だぜ！」

竜馬が言う。しかし早乙女博士は首を振ると、今起きている現象を真ゲッターのモニタに繋いだ。

「この映像は……ゲッタードラゴンと、百鬼の羅王鬼とかいう奴か！」

「武蔵先輩……！」

隼人、弁慶もそれを見て驚愕する。

「百鬼帝国は要塞ごと、地球へ向けて降下をはじめている。おそらくドラゴン諸共、メルトダウンで地球を焼き尽くす算段だ」

「何だと!？」

「いいか、この危機を救うことができるのは真ゲッターしかない。お前達ならできる

!」

「上等だ……待ってろよブライ! 必ず息の根を止めてやるぜ!」

そう、竜馬が叫んだ時だった。真ゲッターロボのカメラアイに一瞬、まるで意識があるかのように瞳が映る。

「ゲッター線出力、急上昇!」

「これなら、いける。行け、竜馬!」

「おう!」

真ゲッターロボの、翼が大きく翻った。そして、バサリ。と大きな羽音と共に、ゲッターは発進する。

一瞬。その一瞬で真ゲッターロボは、遙か上空へと飛び上がった。

「なんてスピードだ……!」

激しいGが、3人を襲う。

「隼人、弁慶! 意識を集中させろ。こいつは……!」

それは竜馬も例外ではない。竜馬は、今まで感じたこともない激しいGに一瞬意識が飛びそうになる感覚を覚えた。それでも気力で操縦桿を握り続け、意識を保つ。そして……。

「こいつは、俺たちの精神力で操縦するマシンだ!」

既に真ゲッターロボというマシンを、自分の手足にしていた。真ゲッターは、光速に迫る速さで飛び上がり、宇宙を目指す。

「待つてろ、死ぬな武蔵！」

そして、一瞬後。竜馬の、隼人の、弁慶の視界が黒く染まる。いや、青空を突き抜けたのだ。無限の黒い闇の中。そして緑色の光を放ち燃えるゲッタードラゴンと、羅王鬼。メルトダウンを起こしながら地球へ迫るその二機が見える。瞬く間に真ゲッターロボは、百鬼要塞に飛び込んでいたのだ。

.....

.....

.....

デューク・フリードは、現れた新たなゲッターロボに只ならぬものを感じていた。

「これが……新しいゲッターロボ」

ゲッタードラゴンにはない禍々しさすら感じられる。それだけではない。あのゲッターは、光速で地球から宇宙まで駆けつけてきたのだ。おそらく、ドラゴンやグレート、グレンダイザーよりも遥かに強力な機体だろう。

「待たせたなブライ! 今度こそ地獄に叩き落としてやるぜ!」

真ゲッターに乗る男・流竜馬は高々とそう叫び、巨大なゲッタートマホークを掲げてゲッタードラゴンと、超羅王鬼の間に割り込んでいく。

「来たか……真ゲッターロボ!」

ブライの声が響くと同時に、生き残っていた百鬼獣達が一齐に真ゲッターロボ目掛けて襲いかかる。

「邪魔するんじゃないぞ!」

ゲッタートマホークの一振りだが、百鬼獣を次々と破壊する。

「何という威力だ……!」

それは、今までのゲッターとは桁違いの強さだった。

「竜馬、隼人、弁慶!」

グレートマジンガアの鉄也が、真ゲッターに通信を入れる。

「ドラゴンと百鬼帝国は共にメルトダウンを起こしている。このままでは、地球に落下した百鬼帝国は汚染物質の詰まった質量兵器になってしまう!」

「だったら、ここで百鬼帝国を跡形もなく消してやるぜ!」

「待て、竜馬!」

ゲッタービームを放とうとする竜馬を、隼人が制する。

「どうした、隼人！」

「ゲッタードラゴンと羅王鬼が、融解している……今のままゲッタービームを放てば、武蔵は……」

そう。ここで超羅王鬼を倒せば、そのまま融解しひとつになっている武蔵もまた……。

「俺に構うな、リョウ……！」

ドラゴンからの武蔵の声。それと同時に、ドラゴンのコクピットが真ゲッターや、グレートマシンガー、グレンダイザーのモニタに映し出された。

「ウツ……！」

その姿は、悍しいものだった。

身体中の皮膚という皮膚が腫れ上がり、所々が溶けて赤い肉が露出している。目は瞳孔が完全に開かれ、ヘルメットすら溶け始めていた。

それでも、意思だけはあつた。身体も動く。今にも死ぬであろう姿でありながら、武蔵の目は生氣に満ち満ちていた。その矛盾すら、恐ろしい。

「ハ、これが……」

デューク・フリードは呻く。これが、ひとをこんな姿にしてしまうものが。ゲッターの正体なのだろうか。

だとしたら。ゲッター線を使い続けければ地球は、人類はどうなってしまうのだろうか。

「お、俺はどの道助からん……それなら……ここでゲッターと共に死なせてくれ」

今の自分の状態を察しているのか、武蔵が続ける。

「そんな……武蔵先輩……」

力なく、弁慶。

「いいか。弁慶……これからはお前がゲッターチームの3人目だ。リョウト、ハヤトを

……頼んだよ……」

超羅王鬼に拘束されたまま、ドラゴンが熱を上げていく。もはや人体どころか、全てを溶かすほどのゲッター線量。

「武蔵……お前……」

「……やるぞ、竜馬」

竜馬の迷いを打ち消すように、隼人が決断する。

「隼人、しかし……」

「武蔵の覚悟を、無駄にするんじゃないやねえ……!」

それは、隼人にとっても苦渋の決断だった。そして、それができる人物だからこそ隼人は

それ以上の脅威として、ゲッターは成長しようとしている。

それは。

それは。

グレンダイザーが見せた、宇宙の未来と同じものだった。

「ほぎげ、負け犬が!」

ゲッタービームの出力を上げながら、竜馬が吠える。そして、ゲッタービームの熱の中で、ドラゴンが動いた。

「ああ……そういうことだったのか……」

武蔵が呟く。そして、その直後。

激しい爆発音が、ゲッタードラゴンを襲った。

「武蔵!」

ゲッターのメルトダウンが、限界を超えたのだ。限界を超えたまま、ゲッタードラゴンはその手を伸ばさず。

「リョウ、ハヤト、弁慶……俺は、ドラゴンは死なんよ。見えたからな……」

それは、もはや独白に近かった。手を伸ばしたまま、ゲッタードラゴンに突如、変化が訪れた。

「なんだ……これは……!」

鉄也が叫ぶ。ゲッタードラゴンの装甲が、突如緑色に輝く繭のようなものに覆われていく。

「何だ、何が起きてるんだ武蔵!？」

それは、未知の現象だった。早乙女博士と共にゲッター線の研究をしていた隼人ですらも、答えの出せない現象。

「見える……見えるぞ……」

武蔵の独白は、もう独白と呼ぶのも疑わしいほどに抽象的なものになっていく。それが居た堪れず、弁慶は視線を逸らす。

「リョウ、ハヤト、弁慶……また会おう」

それが、武蔵の最期の言葉だった。巨大な繭に包まれたゲッタードラゴンは、そのまま百鬼帝国から転がり落ち……不思議な重力で地球へと落下していく。

「武蔵!？」

「武蔵君!？」

グレートマジンガーと、グレンダイザーがそのドラゴンを追った。そして、残されたのは百鬼帝国と、真ゲッターロボ。

「は、ははは……見える……見えるぞ! ゲッターの行く末が、世界中に広がる呪いが!」

ブライの最後の言葉もまた、独白のような、あるいは白昼夢のようだった。

「黙れド外道が!」

竜馬の叫びと同時に、ついに超羅王鬼はその炉心を臨界させ、爆発する。そして、それに誘爆していくように百鬼要塞が火を吹いた。

「竜馬!」

「ああ、跡形もなく消しとばしてやる!」

尚も真ゲッターはビームの出力を上げる。そして百鬼要塞全土を飲み込む爆光が起き……それが止んだ時、百鬼帝国だったものは跡形もなく消し飛んでいた。

残ったものは、真ゲッターロボひとつ。

「……武蔵。ムサシ……」

流竜馬は、かつてリョウウという愛称で呼ばれていた青年は、友の名を呟いた。それを隼人、弁慶も沈痛な面持ちで押し黙り聞いている。

「武蔵………武蔵イイイイイイイイイッ!」

竜馬は、叫んだ。その叫びは、暗い闇の中に消えていった。

第二話 『覚醒!!』 Aパート

地上へと降下するゲッタードラゴンを追い、グレートマジンガーとグレンダイザーが空を駆ける。二機の魔神を操る男達は、そのかつてドラゴンだった繭に不穏なものを感じていた。

「鉄也君……君はあのゲッタードラゴンをどう思う？」

「……わからん。だが、ゲッタードラゴンを無視できん」

たしかに、あの時鉄也とデュークの前で起きた現象は不可解なものだった。ゲッタードラゴンはまるで生き物のように繭を作り、その中に閉じこもったまま百鬼要塞から地球へと落下している。その繭も、ゲッタービームの光から変化したもの。即ちゲッター線の塊である。そのまま落下すれば、落下地点でどのような被害が及ぶかわからない。なんとしても、落下を阻止しなければならなかった。

「鉄也！ 大介さん！」

その二機に並ぶように、一機の円盤状の戦闘機が空中で合流する。ダブルスペイザーだ。

「甲児君！」

遠き地球の友との再会。しかし、それを喜ぶ暇もない。

「挨拶は後だ甲児。今はゲッタードラゴンを……!」

「あれが、ゲッター……?」

緑色の光を放つ繭のような球体。それは、甲児の知るゲッターからはかけ離れた姿だった。俄かには信じがたいという風な顔をするが、それがゲッターであろうとなかろうとやることは変わらない。

「2人とも聞いてくれ。このままだとゲッタードラゴンは、10分後にバードス島に衝突する!」

「何だと!?!」

鉄也の顔に焦りの色が表れる。バードス島。かつて甲児因縁の敵であるドクターヘルが、古代ミケーネの遺産を発見し世界征服の本拠地とした場所だった。今そこには考古学の権威が集まり、さらなる発掘、解析のための調査チームが組まれていたはずだ。

全ては、古代ミケーネ文明の遺産を平和利用するために。そして、かつて甲児や鉄也が戦ったミケーネ帝国のような敵が再び現れた時の備えとして。

ミケーネを統べる闇の帝王は、最初の地球侵攻の失敗を悟ると同時に地下深くへと眠りについた。しかし、いつまた眠りを覚まして再び地上へ侵攻を開始するかもわからぬ以上、バードス島の調査は人類の急務であると言えた。

そこに、ゲッター線の塊となったドラゴンが落ちれば。

「ゲッター線が何を引き起こすか、わからんな……!」

グレートマシンガーが、加速する。

「甲児君、僕達も!」

「ああ! 大介さん、久々に行くぜ!」

グレンダイザーが自身のスペイザーを切り離すと同時、垂直で旋回するグレンダイザーを、ダブルスペイザーがグレンダイザーを格納する。

「コンビネーション・クロス!」

地球製のダブルスペイザーと合体したグレンダイザー。それにより、グレートよりも速い加速を可能とする。

「手荒になるが、許してくれ武蔵君……!」

グレンダイザーが、ゲッタードラゴンと並んだ。そして胸の放熱板から重力光線を発射する。

「反重力ストーム!」

反重力ストームは、照射された物体を無重力状態にすることが可能な重力光線。これによりドラゴンの落下速度を落とすのが、デュークの狙いだった。あとは、グレートとグレンダイザーでドラゴンを掴めばいい。それだけのはずだった。

「さあ、鉄也君！」

「おう！」

グレートマシンガーが追いつき、ゲッタードラゴンを挟むようにグレンダイザーと並ぶ。そして、2機がその手を伸ばした時だった。

突如、対空ミサイルがグレートマシンガーとグレンダイザーへ滝のように降り注いだ。

「ぐっ……!!？」

元々ダメージの大きかったグレンダイザーは、そのミサイルを浴びて大きくバランスを崩す。ダブルスペイザー側から、甲兎が何とかバランスを取って体制を立て直し、そのミサイルが放たれた方を見た。

「あれは、マシンガー……？」

いたのは、マシンガーとよく似たロボット達だ。スクランダーのような赤い翼を持つ黒いマシン。しかし、マシンガーZやグレートマシンガーのような『目』を持たず、緑色のバイザーをしているような頭部がマシンガーよりも一層「兵器」或いは「兵士」としての存在感を感じさせる。

「いや、あれは統合軍のイチナナ式だ……。おい、どうして統合軍が俺達を攻撃するんだ！」

甲児が、イチナナ式に通信を試みた。しかし、イチナナ式からの返答は、マシンガンの斉射だった。

「どういふことだっ!?!」

ゲッタードラゴンを刺激しないために、グレートマジンガーが身を挺してゲッタードラゴンを庇いように前に出る。本来なら避けられる攻撃を受けながら、鉄也は呻いた。

「キ、キキ……」

イチナナ式のパイロットの声が、甲児の耳に届く。まるで理性のない声。いや、声というよりも音といった方が正確なのかもしれない。ともかく……甲児の耳に聞こえるそれは、とても人間の声帯から発されたもののようにには聞こえなかった。

まるで、悪魔の囁き。或いはサバトの夜というものは、こんな不気味な声に満ちているのかもしれない。そんな想像が甲児を襲う。そして、3機いたイチナナ式のうち2機が、ゲッタードラゴン目掛けて躍り出た。

「なっ!?!」

ゲッタードラゴンに飛び付いたイチナナ式は、みるみるうちに溶けていく。しかし、溶けながらもイチナナ式から、歓声のような音が鉄也の耳にまで響いてきた。

「何が……何が起こっているんだ!?!」

驚愕の声を上げるデューク・フリード。そして、溶けかかっていたイチナナ式の顔が、

ぐにやりと歪んだ。

「……………!?!」

機械の塊であるイチナナ式に、表情というものは存在しない。あるとすれば、それは人が愛機に感じる愛着や、執着から来るものだ。しかし、今確かに目の前のイチナナ式は、3人の前で歪んだ笑顔を見せつけたのだ。

「ウ……………!?!」

それは、ありえない光景だった。本来味方である統合軍所属の機体であるイチナナ式であるが故に、今までは防御に徹していた鉄也は、その笑顔を見て咄嗟にネーブルミサイルを撃ち放った。ミサイルを受けて、イチナナ式はゲッタードラゴンから離れて落ちていく。しかし、あの不気味な笑顔を貼り付けたまま。

「て、鉄也……………」

その行動を、咎めることができない甲児。

「あれは……………悪魔だ。人間であるものか!」

呻くように、鉄也が叫んだ。その時だった。

「キ、キキ……………」

撃ち落とされたイチナナ式から、不気味な声が響いたのは。

「今、オレを悪魔と呼んだな。クク、キキ。そうだ、その通りだ!」

突如。他のイチナナ式が、撃ち落とされたイチナナ式に並ぶように並列に飛び、そしてその装甲がまるで液体のように溶けて、混ざり合っていく。3機のイチナナ式はゲッターロボのように、いやゲッターの「合体」とは違う。むしろ「融合」とでも言うべきだろうか。その姿形を溶かし、混ざり合い、一つになっていく。

「キ、キキ。オレ達は……オレ達は……」

やがて、その姿を変化させたイチナナ式は、スクランダーの翼を悪魔のような、蝙蝠のような羽根へと変化させた。それだけではない。身体の大きさもゆうにイチナナ式3機分はあるだろう巨体。そして、バイザー型のカメラアイ越しにギョロリとした目玉が、飛び出している。

牙を立てて嗤うそいつは、イチナナ式などではありえなかった。

「我が名は、アモン！ デーモン族の勇者なり!!」

高々と叫ぶイチナナ式の融合態・アモンと名乗ったそれはイチナナ式であればありえない鋭利な爪を持つ腕を大きく掲げる。

「アモン……デーモン族だど?」

デーモン。即ち悪魔。或いは、東洋の鬼。アモンは、狂気と闘争心に満ちた視線をダブルマジンガーに対して向ける。

「ついに、この時が来た！ 我らデーモン族が、再び地上に君臨する時が!」

そう宣言したアモンは、再びゲッタードラゴンへと向かう。

「待てッ！」

それを食い止めんと、グレートマジンガーとグレンダイザーがアモンの前に立ち塞がった。

「アモンと言ったな。貴様達アモンとは何者だ！ 何のためにゲッタードラゴンを狙う！」

グレートマジンガーの胴体の赤い放熱板から、超高熱の熱線ブレストバーンが放たれる。しかしアモンはそれに怯みもせず真つ向からぶつかり、その爪を立てた拳でグレートを思いっきり殴打する。

「教えてやろう。我らアモンは、かつて古代ミケーネの神々に滅ぼされた文明……お前達の神話や伝承で言うところの悪魔さ！」

「何、だと……!?!」

真正正銘の、悪魔。かつて鉄也が戦ったミケーネ帝国も悪魔のような存在だったが、今日の前にいるアモンは暗黒大將軍以上の闘気を感じる。それが、本物の悪魔ということだろうか。

「だとしても、お前達がどうしてゲッタードラゴンを！」

グレートを助けようと、グレンダイザーが躍り出た。ダブルハーケンを、アモンの腕

に叩きつける。しかし、その剛腕はいとも容易くグレンダイザーを振り払い、グレート
を蹴り飛ばして再び、落下するドラゴンへと迫った。

「我らがデーモンの王。悪魔王ゼノンが求めているのさ。そのゲッタードラゴンをな
！」

「何のために!?!」

ダブルスペイザーの機動力を活かして、すかさずグレンダイザーはアモンと並ぶ。し
かしアモンは、長い腕でゲッタードラゴンを掴むと大きな悪魔の羽根を羽撃かせ、その
風圧だけでグレンダイザーを押し返す。

「大介さん!?!」

「クッ……!?! なんて奴だ!?!」

大介、もといデューク・フリードが舌打ちした時だ。アモンの腕の中で、ドラゴンが
ドクン、と脈を打つ。

「な、何だっ!?!」

その本来のメカにはありえない動きに、アモンが一瞬、震えた。尚もドラゴンの繭は、
脈動を続けながら中で変態を続けている。繭の外からでも、それがわかる。

「……武蔵」

果たして、あの中で武蔵はどうなっているのか。嫌な想像が鉄也の脳裏をよぎった。

「キ、キキ……」

ドラゴンの繭を腕に抱えながら、アモンが奇声を上げる。

「これが、これがゲッター線。魔王ゼノンが求める力か！」

アモンが今感じていたのは、高揚感だった。永き眠りから目覚め、アモンが最初に合体……即ち、相手を取り込み自らの力へと変えるデーモンの特殊能力。その標的としたのはイチナナ式のパイロットを務める少年。そしてイチナナ式とも一つになった。光子力エネルギー。それはアモンがかつて感じたことのない素晴らしい力。人間の知識と光子力の力を手に入れたアモンの目の前に今、光子力同様の恐ろしい力の塊がある。

即ち、ゲッター線。今の自分がゲッタードラゴンと合体すれば、どうなるのだろうか。

光子力とゲッター線を手に入れることで、魔王ゼノンすらも越える最強の悪魔に……デーモンの伝説に語られる彼らすらも超えた存在になれるのではないだろうか。そんな期待と、高揚感。同時に、逆にゲッターに取り込まれてしまうのではないかという不安と恐怖。それらの感情がアモンを同時に襲った。

魔王ゼノンが何故、ゲッタードラゴンを求めているのかは知らない。興味がない。しかし、デーモンの勇者であるアモンを恐怖させるゲッターに、興味が湧いた。

「キ、キキ……」

ドラゴンを掴んだまま、アモンはその翼を翻し地上へと急降下する。

「あいつ……!」

「待てっ!」

それを追い、グレートマジンガーとグレンダイザーもさらに速度を上げた。

……

……

……

ヨーロッパの海は、騒がしい。バードス島は、エーゲ海に浮かぶ小さな島だった。かつてドクターヘルがミケーネ文明の遺産を発見し、そして世界征服のための尖兵である機獣や、あしゆら男爵、ブロッケン伯爵ら側近を作り出したその場所に、早乙女ミチルはいた。

「ミチルさん、見てくださいこれを」

部下の青年が、指差す先には、ドクターヘルが手をつけなかったと思われる……或いは、破棄したものと思われる機械仕掛けの巨人達の姿があった。

「やっぱり、改めて見ても信じられないわね。人類の歴史よりはるか昔に、こんな文明が存在していたなんて」

早乙女博士の娘である早乙女ミチルは、考古学者として成長していた。彼女は、ゲッターチームとともに戦う日々の中で不思議に思ったことがあった。

即ち、お父様……早乙女博士の提唱したゲッター線が人類の進化を促したとする仮説は、本当に正しいのだろうか。それを確かめるための手段にミチルが選んだのは、科学とは別側面のアプローチである。それが、考古学だった。

本当にゲッター線が人類の進化を促したのなら、人類以前の文明にもその名残があるはずだとミチルは考えている。即ち、恐竜帝国やミケーネ帝国のような太古の超文明について調べることが早乙女博士のゲッター線研究の助けになるとミチルは考えていた。

そして、ミチルはバードス島調査班に志願した。

半年前に富士山で発見されたマジンガーインフイニティと、ドクターヘルスの復活。それは、まだミケーネ文明には解明できていない神秘が残っていることを示している。それを解き明かすことで、ゲッター線の真実に近づけるかもしれない。そんな、淡い期待もあった。

そのバードス島に残されていたものはやはり、現代科学では解明できないものが多い。先ほど部下の青年が指さした機械の巨人達も、ミケーネ文明の遺産そのままの姿のものなのか、ドクターヘルスが手を加えたものなのかまだ判断ができない有様である。

ドクターヘルと同等の天才科学者は、この世にもう残っていない。早乙女博士でも、ドクターヘルの超頭脳は分野が違う。宇宙開発が専攻の早乙女博士と、考古学と機械工学を中心にあらゆる知識を修めたドクターヘルではその幅の広さという点において、早乙女博士も解明に時間がかかるだろうと言っていた。

そして、その早乙女博士は新型ゲッターロボの開発に心血を注いでおり、この調査・研究チームには所属していない。結局、すぐにわかることなどほとんどないというのが実情だった。

「ともかく、持ち帰れるものは光子力研究所に持ち帰りましょう。あそこなら、機械獣にまつわるデータはここよりたくさんあるはずよ」

「そうですね」

考古学者・早乙女ミチルの前途は多難だった。

「まったく……こんな時に隼人君がいてくれれば心強いのに」

愚痴を言っても仕方がない。ミチルは、遺跡の調査を再開する。そんな時だった。危機を知らせるサイレンの音が鳴り響いたのは。

「何事?！」

そう、ミチルが叫んだのに、若い学者が答える。

「緊急事態です、宇宙空間でメルトダウンを起こしたゲッタードラゴンが、バードス島に

落下する見込みとのこと!」

「何ですって!」

ゲッタードラゴン。若き日にミチルの窮地を何度も救ってくれた鉄の竜神が、墜ちる。その事実が、ミチルには信じられなかった。

「ミチルさん、ここは危険です。早く退避を!」

「え、ええ!」

宇宙で何が起きていたのか、ミチルは知らなかった。だから、ゲッタードラゴンがメルトダウンを起こしたというのも、バードス島に落下するというのも、何かの間違いかと思うほどに。しかし、危機が訪れているということそのものを疑うほど、ミチルは愚かではなかった。

研究員や学者達とと共に、遺跡を走って後にするミチル。ミケーネの遺跡を出た時にミチルを迎えたのは、空の光の異様なことだった。

「何、この光……?」

緑色の輝きが、空を覆っている。いや、バードス島目掛けて降り注いでいる。

それが、何を意味しているのかミチルには理解できなかった。ただ、ひとつだけ理解できたことは。

このまま走ってもきつと、船に間に合わないということだけである。

「みんな、遺跡の中に隠れて！」

「えっ？」

何を言っているのか、理解できないという風に調査チームの研究者や学者達は困惑する。

「今から逃げても、間に合わない。まだ遺跡の中でやり過ごした方が……生き残る確率が上がるの！」

以前、早乙女博士と弟の元氣、それに隼人とパーティに出席した時のことを思い出す。パーティ会場そのものが百鬼帝国の罠で、参加者たちが次々百鬼帝国の道楽で死んでいったあの殺戮パーティ。

あの時、機転を聞かせて自分たちを生かしてくれたのは隼人だった。今は、チームの仲間達を自分が守らなければならないのだ。

「早くしてー！」

怒鳴るように声を上げるミチルに、チームの面々は危機迫るものを感じて遺跡の奥へと引き返すために走り出した。ミチルも、それに続く。

ゲッターに何が起きたのかを知るのは、この危機を脱した後でいい。しかし、あの緑色に輝くものがゲッタードラゴンだというのなら、生身であんな光を受けたら間違いなくただでは済まない。

ゲッター線は人間には無害らしいが、それは通常接種する量の話だ。ゲッター線が本当にハチクウ人類を滅ぼしたのなら、多量に浴びれば人体にもどんな影響があるかわからないのだ。

「リョウ君、ハヤト君、ムサシ君……!」

今はせめて、友の無事を祈ることしかできない。

そして、早乙女ミチルはただ走る。ミケーネの遺跡。その最奥へ。

走って、走って。息を切らせながら走った。そして……。

「何、これ……」

それを、見つけてしまった。

鋼の巨神だった。全体的な色は赤褐色というべきだろうか。一瞬、そういう石像なのかと思った。しかし、それは明らかに鉄でできていると、近くに寄って見ることで理解する。

それだけならば、機械獣の残骸と何ら変わりはないだろう。それが異質だったのは、その姿だった。

大きなツノを持ち、2つの目と、2本の腕と頑強な脚。その姿は細部こそは違うものの、確かに似ていたのだ。

「グレンダイザーが、どうしてミケーネに……?」

ふと、その赤褐色のグレンダイザーの近くに、石板があることに気付いた。ミチルはペンライトでその石板を照らし、抱えていたタブレットに登録していた辞書でミケーネ象形文字の翻訳を試みる。

「ミケーネの守り神ラーガ……？」

ラーガ。それがこの機体の名前なのだろうか。しかし、疑問が残る。

「どうして、ミケーネにグレンダイザーと同じ姿のロボットが。それに……」

どうして、ドクターヘルはこれを使わなかったのか。

ミチルの額に、冷たい汗が滲んでいた。

……

……

……

アモンは、ゲッタードラゴンの脈動をその腕の中で感じていた。それが何を意味するのかわからない。しかし、とても甘美な誘惑がアモンを襲う。

——ゲッターを喰らえ。

そうすれば、お前はゼノンをも越える究極の悪魔になることができる。

「俺は……」

デーモン族の勇者アモン。その名前は魔界の至る所に響き渡っていた。デーモン族は元来、群れることを嫌う。互いに殺し合い、喰い合い、そして強きものだけが生き残る阿修羅地獄の世界を生きていたのがデーモン族だ。ゆえに、同胞であつても殺し合うことを常としている。

そんなデーモン族が地下深くへと眠らなければならない事件があつた。宇宙線が突如、降り注いだのだ。

かつて、デーモン族はハチュウ人類の恐竜帝国、ミケーネ帝国の神々と覇を競い合う存在だった。しかし、その宇宙線はどういうわけか、強すぎる力を持つ恐竜、神々、そして悪魔を諸共に滅ぼすほどの凶悪な熱を発し、瞬く間に地上の環境を変えてしまったのだ。

そして恐竜帝国やミケーネ帝国が目覚め、人類と戦い敗れている間にもデーモン族は氷の中で眠ることしかできなかつた。

デーモンが目覚めたのは、「声」を聞いたからだ。

その「声」は言うのだ。ゲッター線……宇宙線はこの宇宙に大いなる災いをもたらすと。

恐竜が滅び、神が死んだ今、宇宙の静寂を守ることができるのは悪魔しかない。

目覚めよ悪魔よ。ゲッター線に選ばれた種族人類を滅ぼすために。

その「声」に導かれて……勇者アモンも目を覚ましたのだ。

しかし、勇者アモンは誰よりも強い悪魔であり……誰よりも悪魔らしい悪魔だった。

ゲッター線。かつてデーモン族を氷獄へと封じたそれを自らに取り込めば、自分ほどれだけの悪魔になれるのか。

元々、悪魔とは悪魔同士で喰い合い殺し合う生き物だったのだ。今更、魔王ゼノンの命令に叛いたところで……。

ゲッターを喰う。そんな甘美な誘惑に、アモンは今大きく傾いていた。しかし、その爪をドラゴンへとめり込まれせその機能を喰らおうとしたその時。ドラゴンの繭はまた大きく脈動をはじめた。

「ウ、ウオツ!？」

今度の脈は、これまでのそれとは次元が違う。脈を打ったその箇所が焼けるように熱い。その熱が、かつてデーモンを窮地に追い込んだゲッター線の熱……ゲッタービームであることを悟ったアモンは、恐怖に思わずドラゴンの繭を離してしまった。

「し、しまった!？」

急速に、落下していく繭を見つめるアモン。

「追いついたぜ悪魔野郎!」

後方から、グレートマジンガーとグレンダイザーも迫る。

「クソッ!」

ドラゴンをめぐる追いかっこは、振り出しに戻ってしまった。しかも、今回はよりよってターゲツト……ゲッタードラゴンがこの中のどれよりも早い。

「大介さん!」

「ああ、ハンドビーム!」

グレンダイザーの手から放たれた光線が、背後からアモンを襲う。それを避けたせいで、アモンはグレートマジンガーに抜かされる。

「これで逆転だ!」

「ふざけるなよつ、人間ども!」

アモンの、イチナナ式を乗っ取った頭部がぐにやりと歪む。すると、虫の触覚のようなものによきりと生えた。触覚がグレートマジンガーの方へ伸び、グレート足を掴もうとする。

「何度も同じ手を食うものか! ニーインパルスキック!」

しかし、グレートはその触覚の動きを華麗に旋回してかわすと、空中でそれを蹴り上げる。

「バカめ、かかったな!」

「何っ!?!」

突如、グレートマジンガーの動きが止まる。

「クッ!?! コントロールが効かん……!?!」

動きの止まったグレートは空中で大きくバランスを崩し、落下していく。

「これが勇者アモンの超能力がひとつ、電磁触覚よ。貴様はこの触覚の放つ電磁波で、身動きを封じられたのだ!」

「鉄也!」

「鉄也君!?!」

グレンダイザーが、グレートへ向かう。しかし、それを制したのは他ならぬ鉄也だった。

「俺に、構うな! 今は、ゲッタードラゴンを……!」

そう。こうしている時にもゲッタードラゴンは、繭の中でゲッター線を蠢かせながら地上へと落下しているのだ。

「っ! すまねえ、鉄也!」

「おっと、俺を無視できると思うなよ!」

しかし、グレンダイザーを先行させまいとアモンが躍り出る。

「何故だ、何故お前達アモンはゲッター線を求める!」

ハーケンがアモンの拳とぶつかり合い、デューク・フリードが吼えた。

「黙れ！ ゲッター線は、お前達人間には過ぎた玩具なんだよ！」

アモンの拳から、アイアンカッターのような刃が生えた。イチナナ式を取り込んだことで、マジンガーの装備を編み出せるようになっていた。その刃がハーケンと鏢迫り合い、空中で睨み合う魔神と悪魔。

「お前は……知っているのか？ ゲッター線が、あのゲッタードラゴンが何をもたらすのか！」

「大介さん、何を……？」

デューク・フリードの問いかけに、不審なものを感じる甲児。それを嘲笑うように、アモンは嗤う。

「あの力は、宇宙を滅ぼすことだってできる力だ。だがてめえら人間じゃだめだ。我々デーモンが、ゲッター線の素晴らしさをお前達に教えてやるのよ！」

「ほう、そいつあとんだご高説だな！」

その時だった。天高くから光速で飛来するものに彼らが気づいたのは。

「その声は……！」

歓声を上げる甲児。そして次の瞬間、突如巻き起こった竜巻がアモンを巻き込み襲う。

「い、これは!？」

突如、白い体躯に巨大なドリルアームを持つ鋭利なロボットがグレンダイザーを追いつつアモンへと迫った。

「てめえが何者か知らねえが、一緒に降りてもらおうか。地獄へのエレベーターをな!」
その姿は、甲児の知るゲッター2のそれに似ていた。真ゲッター2。先ほど宇宙空間で戦った真ゲッター1で地球へと降下し、僅かな時間でオープンゲット。そして形態を真ゲッター2へと変化させたゲッターロボが、0・01秒を越えるスピードでアモンに取り付いたのだ。

「デューク、甲児! お前達は武蔵を頼む!」

弁慶の声と同時に、グレンダイザーがゲッタードラゴンへと迫る。

「き、貴様あつ!」

「おっと、お前の相手はこつちだ、プラズマドリルハリケーン!」

隼人の叫びと共に、再びドリルから放たれた竜巻。その台風の目を突つ切る真ゲッター2と、アモン。

「こ、これがっ! これが真ゲッターの力だと言うのか!？」

デーモンの勇者アモンに、今までただ一度の敗北もなかった。しかし、今日の前にあるその敵に今、アモンははじめて「勝てない」と思った。

そして、取り込んだ人間の知識がアモンに言うのだ。逃げるべきだ。撤退を。と。それは。

それは。

アモンという悪魔にとって生まれてはじめての屈辱だった。

或いは、人間を取り込み知識などを得なければこのような屈辱を味わうことはなかったのかもしれない。イチナナ式を3体取り込んだことで得たマジンガーと光子力の力を持つてしても、人間の思考が闘争への妨げになるなどアモンにとっては考えてもみなかったことだ。

「おのれっ……おのれえっ!?!」

真ゲッター2と共に、勇者アモンはバードス島の大地へと急速落下する。そして、島の大地を巨大なドリルで抉る中に巻き込まれ、アモンは絶叫を上げた。

「か……はっ……!?!」

ようやく解放された時、頑強なその皮膚は己の血と、合体したことで生じたオイルに塗れていた。さらに血を吐き、アモンは立ち上がる。

「真ゲッターロボ……今日のところは、勝負を預ける!」

翼を翻らせ、アモンは敗走した。

「待てっ!」

「いや、リヨウ。今はドラゴンだ！」

真ゲッターにとつても、ゲッタードラゴンを不時着させることは急務だった。アモンへのトドメと、ドラゴン。2つを天秤にかけて後者を選択する隼人に諭され、竜馬も拳を引つ込める。

空中では、反重力ストームを受けたゲッタードラゴンの繭がゆつくりと、バードス島に不時着しようとしていた。

.....

.....

.....

そこは、地獄だった。

隣接世界。あり得たかもしれないいくつもの世界。これから起こりうる無限の可能性。

可能性の光が閉ざされた袋小路の世界。

少女は、その地獄でひとり戦っていた。

人間は、デーモンとの戦いで滅びた。いや、人間は互いを信じることができず、デー

モンという敵の存在を前に自滅の道を辿っていった。

わずかに残った人間は、デーモンや、ミケーネの神々、そしてハチュウ人類と戦わなければいけなかった。むしろデーモンに身体を明け渡した方が、幸せに死ねたのだろう。と少女は思う。しかし、それでも少女の身体は色白の、生身の人間のままだった。銀色に映る色素の薄い髪と、鋭利な印象の瞳を持つ少女だった。

少女はしかし、その地獄を生き残るための鋼の身体の中で、身を守っていた。

生き残った人間は、戦う為に身体をマシンと同化させていった。その方がダイレクトに戦えるようになるからだ。それだけではない。今となつては希少品となつてしまつたタンパク質も脂質も、水も機械の体になれば必要がない。

ゲッター線に汚染されていない食糧が、あとどれくらい残っているだろう。と少女は考えて……憂鬱になつてやめた。お父さんの友達が経営していたラーメン屋が恋しい。あの味を味わうことはもう、できないのだろう。

それでも、少女が人の身であり続けるのには、理由があつた。

それは、この鋼鉄の鎧……少女が操縦するスーパーロボットにある。

このロボットと少女が一つになれば、きつとこの世界でも生きていける。そのくらいの強さを秘めたマシンだった。それでも、少女はこのマシンを、ある人物に託さなければいけない。

「もう少し、だよ。頑張って……カイザー」

カイザー。そう呼ばれたマシンは、鋼の拳でたった今ゲッターロボを一機撃ち碎いた。今日だけで、15機のゲッターロボ、30体のデーモン、20機の戦闘獣とメカザウルスを倒している。

「お父さんは、必ず助けに来てくれる。だから……」

お父さん。その言葉の響きに少女は胸が締め付けられる思いだった。しかし、夢を見たのだ。ゲッターが目覚める夢を。真ゲッターが覚醒する夢を。ドラゴンの夢を。エンペラーの夢を。

世界の分岐点が、迫っているのだ。

その時のため、少女は……兜リサは1人、カイザーで戦い続ける。今となっては唯一の、両親の形見となってしまうこの魔神を操って。

第二話『覚醒!!』Bパート

兜シローが悪魔と邂逅したのは、甲児達がデーモン……即ち、アモンと名乗る悪魔と戦う数分前のことだった。

光子力空母・剣蔵から出撃した甲児を見送り、シロー自身もいつ出撃してもいいように愛機イチナナ式で待機していた。そんな時のことであつた。

「……おかしい。艦内が静かすぎる」

先ほどまで、艦内はスクランブル体制を知らせるサイレンが鳴り、兵士達は皆格納庫の喧騒を奏ていた。それが、シローがイチナナ式に乗り込んでからというものの、それがピタリと止んだ。不自然なほど、急に。

「……なあ、不動。おかしくないか？」

シローは、同僚のイチナナ式パイロットである不動明に通信を試みる。

「……何がだ？」

不動は、シローとは打って変わって落ち着いていた。普段から大人しくて、兵士として前線に出るよりも本を読む方が性に合っていると云っていた不動。しかし、その落ち着き方はやはり、どこかおかしかった。

「……不動?」

不動のおとなしきは、このような泰然自若としたおとなしきではない。不動のおとなしきは、物腰の柔らかい穏やかなおとなしきだ。しかし、今の不動明はむしろ、武者振るいを必死に抑え付ける武人のような……研ぎ澄まされた刃のような鋭さを感じる。

落ち着いているのではない。落ち着かせているのだ。それは出撃を目前とした兵士ならば自然のものかもしれないが、シローの知る不動明という男は、たとえ戦場でも花一輪、小鳥一匹のために身を張り、泣くような人間だ。

今の不動は、違う。

「……どうした、シロー?」

「いや……お前、雰囲気変わったか?」

闘争心が、外に漏れ出ているような人間では断じて無かったのだ。不動明は。

「キ、キキ……」

こんな不気味な笑いをするような男でも、なかった。

「やはり、騙し討ちは性に合わんな!」

そう言つて、こちらに向ける猛獣のような目。不動明ではあり得ない目。

猛獣の方がまだ、優しい目をするだろう。今の不動明の目は、そんな生易しいものはなかった。

憎悪だろうか、嫉妬だろうか、嫌悪だろうか、侮蔑だろうか、それとも憐憫だろうか。もしかしたら、歓喜なのだろうか。違う。根本的に違う。もしそれらの感情が正しかったとしてもシローが知る、或いは想像するあらゆる感情が、そんな目を人間にさせない。その目は、人間がしている目では無かったのだ。

「ウ……………」

仲間の異変に只ならぬものを感じ、シローは同じく同僚のパイロット、牛久に通信を試みる。

「牛久！ 不動が?!」
しかし。

牛久の乗るイチナナ式のコクピット映像がシローに示すものは、牛久の形をしながら牛久ではないものだった。

「ああ、兜……。ニンゲンは、うまいな」

ニタリ、と正気の死んだ目で語りかける牛久。いや、牛久などであっていいはずがない。絵画が好きで、退役したら軍の年金を元手に画家の勉強をしたいと言っていた牛久。その牛久が、焦点の合わない目で語りかける。しかし、その棒読みのようなそれは人間の声というよりも、人間の声に似せた音のようだった。

牛久の喉を使って、誰かが楽器のチューニングしている。そんな印象を受ける。

「う、牛久……不動……」

この時、兜シローは理解してしまった。

なぜ、突然静かになったのか。

なぜ、一向に出撃命令が降りないのか。

みんな、みんな悪魔に乗っ取られてしまったんだ。

悪魔。シローは昔兄・甲児と共に見た映画で、悪魔に憑かれた人間が豹変してしまうという内容のものを鮮明に覚えていた。だから、今の豹変した不動や牛久を、悪魔が取り憑いたと直感的に感じた。

そして、それは正しかった。

「シロー……お前は他の人間より心が強いのだろうな。合体を精神力で無意識に跳ね除けていたか」

「な……なに……？」

「だとしたら、お前には死んでもらわねばな！」

そう、不動の姿をした悪魔が声高に叫んだ。それと同時に、剣蔵の乗組員達が一斉に格納庫へと雪崩れ込んできた。

艦長や副長。整備兵、軍医。みんな、みんなシローと家族同然にこの艦で過ごした仲間達だ。仲間達……だった。

それが皆、一様に焦点の合わない目でこちらを見ている。それらが一斉に、シローを見た。そこにある邪悪な視線を一心に受けるシロー。

「み……みんな……」

みんなが、一斉に溶け始めた。目の前で肌がぐにやりとゴムのように曲がって、ぶよとした肉の塊になった。肉塊は、くねくねと膨張と収縮を繰り返して牛久の乗るイチナナ式へと寄り集まっていく。ぐちゃり。と音を立てて、イチナナ式の無表情であるはずの顔に牙が生え、口が開いた。そして、そのままより集まった肉塊は吸い込まれるようにイチナナ式の口の中へと入っていく。それを、ぐちゃ、ぐちゃ、ばき、という咀嚼音を以ってイチナナ式は喰らっていく。

「あ……あ……」

シローは、恐怖と混乱の中で必死に、冷静に自らのイチナナ式のビームマシンガンを抜いた。しかし、ロックが外れない。何度試しても、エラーを吐き続ける。

「どうして、どうしてだよー」

「知りたいか？」

叫ぶシローの耳元で、そんな声がこだましました。それが、どこから聞こえたのかを理解して……シローは青ざめた。

声は、シローの愛機であるイチナナ式からしたのだ。

「あ……」

悲鳴も出ない恐怖。それが、シローを支配する。自分の愛機であるイチナナ式。甲児、鉄也と共にドクターヘルと戦った愛機がまさか、知らぬ間に悪魔に取り憑かれていたなんて。

「う……嘘だ……嘘だあっ?!」

必死にコクピットを開けようとしても、開かない。悪魔に支配されたイチナナ式は、既にシローのコントロールを離れている。

それは、つまり。

今自分は、悪魔の腹の中にいるということに他ならなかった。

「ククク……」

「キキキ……」

不動の姿をした悪魔と、牛久の姿をした悪魔の音が響く。いやだ、死にたくない。このままあいつらのように悪魔にもなりたくない。

助けて、アニキ。

そう、言葉が喉元まででかかった。そう思った瞬間、シローの胸の奥に熱いものが込み上げてきた。

アニキは。兜甲児は。

こんな窮地を何度もくぐり抜けてきた。

マジンガーZと共に。いや、たとえマジンガーZがなくても甲児はきつと戦い抜く。そうして自分を守り続けてきてくれた。それは鉄也や、竜馬、隼人、武蔵達だって変わらない。

だから、戦わなければ。

自分は、兜甲児の弟なんだ。

兜甲児にできて自分にできないことなんて、あるものか。

「……やるなら、やれよ」

恐怖と混乱を押しつけて、シローはそう口にする。

「お前ら悪魔にやれるもんなら、やってみる！ 男・兜シローを殺せるもんならな！」

正直、打つ手は何も浮かばない。それでも、啖呵を切らなければ。それが、兜の血だ。

敬愛する祖父と、尊敬する兄が教えてくれた生き方だ。

イチナナ式のコクピットのモニタに、不気味な生き物が映った。まるでホラー映画のワンシーンのように、それは……悪魔はゆっくりとモニタからこちらを睨むようにして、ゆらり、ゆらりと近づいて、少しずつ、少しずつ画面から這い出ている。狭いコクピットの中で、シローに逃げる場所はない。咄嗟に、護身用の拳銃を取り出してそれに……悪魔に銃弾を一発、撃ち込んだ。

しまった。

「ローレライ……ぼくももうすぐ……行くよ……そうしたら……」

今度こそ、一緒に。そんなことを、思ってしまった。

それは、紛れもなく。

兜シローという少年の、敗北だった。

だが。

だが、しかし。

運命はまだ、兜シローに残酷な未来を見せるのであった。

彼はまだ、戦わなければならなかった。

たとえ、愛機を。

イチナナ式を失っても。

兜シローの戦いの未来は、これから始まるのだから！

突如、凄まじい熱が格納庫で広がった。それがゲッター線の光であると、シローは

知っていた。

「な、なんだ!?!」

「どけよ悪魔ども!」

瞬間、シローのイチナナ式をノコギリの刃のようなものが削る。キュイイイインと

いう音はまるで、拷問のようにも感じられ、シローの眼前の悪魔は突如、苦しそうに呻いた。

その瞬間、シローの身体は自由を取り戻す。

「今だっ！」

もう一発、拳銃を撃ち込むとシローはそのまま強引にコクピットハッチを開ける。

そこには、黒いゲッターロボがいた。

「待たせたな、シロー！ とつととずらかるよ！」

そして、ゲッターからはよく知る声。

「もしかして……元気なのか？」

「ああ！ 早乙女元気とブラックゲッター、ダチの危機に参上だぜ！」

シローがブラックゲッターと呼ばれた黒いゲッターロボの手に飛び乗ると、ブラック

ゲッターはそのままマントを翻して格納庫から飛び降りる。

「逃げる気か！」

不動の姿をした悪魔が、吠える。

「てめえらを皆殺しにするのは、次の機会にするぜ。あばよ、悪魔ども！」

そして、高速で離脱していく黒いゲッターロボ。

「アモン、追わないのか？」

牛久の姿をした悪魔が言う。

「オレ達の目的はあくまでドラゴンだ。そのための身体を手に入れるためにここを襲つたに過ぎん。雑魚に構う必要はない」

アモンと呼ばれた……不動明の姿をした悪魔は冷酷に嗤った。

「行くぞ、お前達。悪魔王ゼノンから受けた使命を果たす時だ!」

……

……

……

「なるほど、そんなことがあったのか」

バードス島に不時着した兜甲児は、考古学者達の船舶を借りて新光子力研究所並びに早乙女研究所とコンタクトを取っていた。ミケーネの遺跡。その真上に落下したゲッタードラゴンは、そこで繭を再び成長させているのか沈黙を守っている。また、真ゲッター2がドリルで掘り進めた先でミチルらと遭遇したらしく、ゲッターは地上に戻ってきた時早乙女ミチル以下30名の考古学者達を連れてきた。

そして新光子力研究所には既にシローと元気がおり、先ほど戦った悪魔……デーモン

族のことをお互いに情報交換していた。

「アニキも、あいつらと戦ったのか……」

「あいつらっていうか、あいつだな。3機のイチナナ式が融合して、ひとつのバカでかい悪魔になったんだ」

おそらく、そのうち一機はシローのイチナナ式だったのだろう。そう甲児は推測したが、その件については触れないことにした。

シローが、見るからに憔悴していたからだ。

無理もない。自分だって、マジンガーZが悪魔の手先になった末に溶けて消えてしまったら落ち込むなんてレベルの話ではないだろう。問題は、それよりも。

「次々と、多くのことが起き過ぎている。一度情報を整理すべきだな」

甲児の隣に座ってた鉄也が言う。

「そうね……」

画面越しのさやかだが、顎に手を当てるような仕草をしながら思索していた。

「まず、大介さんだ。どうして地球に戻ってきたんだ？」

また会えたのは嬉しいけどよ。と甲児が付け加えつつ、デューク・フリード………またの名を宇門大介に訊く。

「……………」

一堂の視線が、大介に向けた。

「僕と妹マリアはフリード星復興のために、母星へと帰った。そして、フリード星は以前ほどではないにせよ、人の営みが栄える星へ成長していった。だが……」

そこで大介は、デューク・フリードは一旦言葉を切る。そして、視線を竜馬たちゲッターチームに向ける。

「ある時、マリアが夢を見たんだ。巨大なゲッタードラゴンが、フリード星を滅ぼす夢を」

「……何だと?」

かつてゲッタードラゴンの操縦を務めていた竜馬が、眉間に皺を寄せる。

「最初は、僕も地球恋しきでそう言う夢を見るようになったって笑ったさ。だけど、ある日……グレンダイザーが、僕に同じイメージを見せた」

「グレンダイザーが?」

と、鉄也。一堂は神妙な面持ちでデュークの話聞いてるが、まだ半信半疑というようだった。無理もない、と大介は思う。しかし、ひとつ頷いて話を続けた。

「グレンダイザーは、フリード星の守護神。フリード王家の者しか乗る事が許されない魔神だ。そのグレンダイザーが、僕に見せたイメージ。無視はできなかつた。そして……フリード星にヤツが来たんだ」

「……ブライか」

隼人の眩きに、デュークは頷く。

「ブライは、僕に協力を持ちかけてきた。共にゲッターを倒そう、と。まるでグレンダイザーが見せたイメージを知っているかのような口ぶりだった。僕がそれを断ると、ブライは地球へ向かうと言い残して去っていった。僕は……地球にブライが迫っていることを告げるために。そしてゲッターの脅威を見極めるために再び、地球へ来たんだ。だが……」

「地球を目前にブライと交戦になり、囚われていたというわけか」

弁慶が納得したように呻いた。

「だが……解せねえな。なんでグレンダイザーは、ゲッターを脅威に？」

甲児も腕を組む。大介の言葉を信じはしているようだった。しかし、納得はできていないという風でもある。だが、甲児はアモンとの戦いで大介……デュークがゲッターに何か執心していることを感じていた。

「わからない……だが、みんなも見ているだろう。現にゲッタードラゴンはまるで生物のように繭を作っている」

「繭……か。幼虫が成虫になるための準備期間、繭の中で体組織をドロドロに溶かして成虫の身体を作るための揺り籠だ」

そんな隼人の言葉に、ドロドロに溶けた武蔵を想像して竜馬は苦い顔をする。その繭が成虫になった時、武蔵はどんな姿をしているのか。想像するだけでも、恐ろしい。

「……そのドラゴンの繭を奪うために、デーモン族が現れた」

話が停滞するのを危惧してか、鉄也が続けた。デーモン。西洋の悪魔。その名を冠するものが、一堂の前に姿を現した。

「シローの話を聞く限り、奴らはヒトに取り憑き、メカとも融合できるみたいだな。厄介な奴らだぜ」

と、甲児。

「デーモンの勇者アモン……相当な強さだった。だが、次は負けん」

鉄也が言う。

「しかしよ、デーモンはなんでドラゴンが繭の姿になってるって知ってたんだろうな」

「アモンが言っていた悪魔王ゼノンとやらは、もしかしたら予知能力か何かがあるのかもしれないねえな」

弁慶と隼人が続ける。少なくとも、デーモンに関してはわからないことが多い。

「それだけじゃない……ミケーネの遺跡に眠っていたラーガも、問題よ」

ずつと黙っていたミチルが、口を開いた。

ラーガ。赤褐色のグレンダイザー。フリード星の守り神であるはずのグレンダイ

ザーが何故、地球の古代ミケーネにあるのか。

「……ブライは、ミケーネや恐竜帝国、それに人間のルーツが同じものである可能性を指摘していたな。そして、アモンはミケーネと恐竜帝国、そしてデーモンは太古の昔から戦い続けていたとも」

ずっと、鉄也はその言葉が気になっていた。

「フリード星人と地球人の姿があまりにも似ているのが偶然ではない。そうも言っていたな」

デュークが続ける。

「……だとしたら、ラーガとグレンダイザーが地球人とフリード星人のルーツが同じであるという証拠なのかしら」

ミチルが呟く。誰も、その呟きに答えを持ってはいなかった。

結局のところ、謎が多すぎる。そして、その答えを誰も持っていない。

「チツ、ブライの奴め。肝心な事は勿体つけて言わねえまま死にやがって!」

ブライにトドメを刺した竜馬が悪態を吐いた、その時だった。

「ドラゴンを……ドラゴンを解析するんじや」

沈黙を守り続けていた早乙女博士が、呻くような声を上げたのは。

.....

.....

.....

あの時。早乙女博士は、落下するドラゴンの中から武蔵の声を聞いていた。

聞いていた。という表現は正確ではない。早乙女博士は、繭を作り落下するドラゴンを観測しながら、その息吹を感じていたのだ。

『早乙女博士……』

その息吹は、武蔵の声をしていた。

『武蔵……武蔵！ 無事なのか!?!』

身乗り出し、大声を上げる早乙女博士。しかし、研究所の所員達は武蔵の声を聞こえていないのか。博士の豹変に動揺するばかり。

「博士!?!」

「どうしたんですか!?!」

「お前達には……お前達には聞こえんのか? 武蔵の声が!」

驚愕の表情を浮かべながら早乙女博士。これは幻聴なのだろうか。大事な、家族同然に過ごした仲間達を死地へ送り込み続けてとうとう、自分は発狂したのだろうか。そんな

な人間的な理性が、早乙女博士に自問させる。

答えは、否。

なぜなら、武蔵の声は確かに今も響いているのだから。

『博士……心配しないでください』

「武蔵……君は……」

『俺は……ドラゴンには死にません……』

「武蔵……生きておるのだな」

『見えます……』

「何が……」

『見えるんですよ……』

「何が見えると言うのだ……」

『新しい世界が！』

新しい世界。武蔵は確かに、そう言った。

それは。早乙女博士が本当に見たかった世界なのかもしれない。僅かな期待が、早乙女博士の全身に駆け巡った。

ゲッター線を発見した時、早乙女博士はその宇宙線が放つ膨大なエネルギーを持ってすれば、世界中のエネルギー問題が解決するだけでなく人類は宇宙へのさらなる飛躍を

可能にする。そんな夢を見た。

宇宙へ出て、さらなる繁栄と発展を。宇宙進出のための最先端。それがゲッターロボの最初の開発目的だった。

だが……ある時、早乙女博士は自然界で起きている異変に気付き、ハチユウ人類の侵略を察知した。

その日からだ。早乙女博士の人生が狂ったのは。

ゲッターロボは急遽戦闘用に改造され、ゲッターのパイロットは優秀なだけでなく、戦闘能力までも要求された。無慈悲に敵を殺す迷いなき戦士が、求められた。

若き戦士をそう育てるために、自らの手でハチユウ人類の手先と化した息子・達人に手をかけた。

本当は、戦いなどしたくなかったのに。

それでも、早乙女博士の先に待っているのは血塗られた阿修羅地獄だけだった。

その地獄の果てで……何かが起きている。

それを解明する鍵は、繭となったドラゴンにある。

ドクン。早乙女博士の胸が、大きく高鳴った。

「ドラゴンを……ドラゴンを……」

ドラゴンの繭を、孵す。それが、それこそが。この混迷する事態を解決に導くもので

ある。

早乙女博士は、そう確信していた。

……

……

……

早乙女博士の豹変ぶりに、一同は只ならぬものを感じていた。普段から厳しく、そこそ竜馬達からすれば鬼のような人物だった。しかしその厳しさの中には、常に本来の優しさが見え隠れしていた。優しいが故に非情に徹していたのがマツドサイエンティスト・早乙女博士の正体だと、竜馬達は理解していた。

それが、どうだ。今の早乙女博士は。

「博士……あなたは疲れている」

隼人が諭すように言う。

「そうだけ、ジジイ。今はとにかく眠るんだ……」

口では悪態を吐くが、竜馬も同様だ。

「……………」

しばらく、早乙女博士は無言だった。

「……とにかく、ドラゴン調査班を編成してそちらへ向かう」

そう言って、早乙女研究所は通信回線を落とした。

「……早乙女博士、相当参ってるみたいだな」

「ああ。甲児は知らないかもしれないねえが、博士は自分の手で恐竜帝国に操られた息子を……達人さんを殺してるんだ。武蔵の件で、それを思い出しちまったんだろうな」

竜馬が言う。その場には竜馬とミチルも居合わせていた。幼い元気がいなかったのが不幸中の幸いだと思う。竜馬にとっても、苦い思い出だった。

「達人兄さんは、お父様の助手でもあったの。いい兄さんだったわ……」

ミチルも続ける。

「……とにかく、みんなボロボロだし一度新光光子力研究所に戻って頂戴。具体的な対策は、それからにしましょう」

そういつてきやかが締め、緊急会議は終了した。

……

……

……

どことも知れぬ闇の中で、勇者アモンは苦しんでいた。ゲッターにつけられた傷が痛むのではない。デーモン随一の再生力を誇るアモンは、細胞に細胞が集まるように傷を塞ぎ、瞬間に完治している。

「グッグオオオオオ……」

痛いのは、苦しいのは身体ではない。

「何故だ、何故悲しい！ 何故こんなにも、悲しくなっているんだ！」
痛いのも、苦しいのも心だ。

心。デーモンにはあり得ないものに、勇者アモンは苦しんでいた。

『アモン、お前は俺と合体したことで、弱点を手に入れちまったみたいだな』

アモンの中で、声がする。

それはアモンの声ではない。しかし、アモンの姿をしている。

『誰だ……貴様は、誰だッ!?!』

『お前は俺を喰ったつもりかも知れねえが、どうやら逆だったのかもしれないねえな。俺の名は……』

激痛に悶えながら、勇者アモンはその名を叫んだ。

『ふど、う……不動明!?!』

不動明。己が取り込み、寄生したはずの人間の名前を。

第三話 『地獄!!!』 Aパート

早乙女研究所へ帰還した竜馬は、激しい疲労感に襲われていた。竜馬だけではない。隼人も、弁慶も相当に疲労していた。

真ゲッターロボの操縦は、パイロットの精神力を大きく消耗する。常人が耐えられない重力、衝撃。光速でゲットマシンを分離合体を繰り返させ、状況に合わせたゲッターへ変形させる判断力も要求される。

何より、三人の息をぴったりに合わせなければならない。そんな機体にはじめて乗って、その上で連続での戦闘。いくら竜馬達がタフと言っても限度がある。

「ふう……」

竜馬は、自室のベッドの上に倒れ込むと、そのまま食事も取らずに眠りについていた。こんなに疲れたのは、いつ以来だろう。はじめてゲットマシンに乗った時だろうか。それとも、百鬼帝国と決着をつけたあの戦いだろうか。いやこんな疲労感は生まれてはじめてだ。

深い、深い微睡みが竜馬を襲う。もし、今敵襲があつたら起きることができらるだろうか。

繭へと変貌したゲッタードラゴンと、武蔵のことを思った。武蔵は、生きてはいないだろう。しかし、まだ実感が湧かない。ドラゴンの、異様な変化のせいだろうか。もしかしたら、あのドラゴンの中で武蔵は……。

しかし、思考がまとまらない。隼人や早乙女博士なら、答えを出すことができるのだろうか。いや、あの早乙女博士の様子では……。

そこまで考えて、だけどそれ以上考える間も無く、竜馬の意識は現実から遠のいていく。

「……………」

深い、深い眠りの中。竜馬は声を聞いた。

『……………』

どこかで、聞いたことがある声な気がした。

いや、いつも聞いている声かもしれない。

その声は、強く、深く、激しい声色をしている。

竜馬は、夢を見ているのだと気づいた。それは、視界の中に広がっていた闇の深さが瞳を閉じた時の全てを覆い隠すような闇ではなく、どこまでも先へ行けそうな星の輝きに満ちた宇宙の闇だったから。

しかし、同時に宇宙は、喧騒に包まれていた。光の姿が爆発や、銃撃、ビーム。相手

を滅ぼすための光であることに気づいて竜馬はその夢に只ならぬものを感じた。

夢と呼ぶには、現実感がありすぎる。現実感に満ちた、不可思議な光景。その中心ある巨大な赤い戦艦……おそらく、宇宙戦艦だ。そう竜馬が思ったものに昆虫のような姿をした兵器達が近づくだけで燃えて、弾けて、消えていく。

「なんだ……これは……」

『全艦隊で惑星ダウインを守れ！』

そんな声が聞こえる。しかし、宇宙戦艦の艦首……いや、口から放たれた光が線を描くと同時に数多くの虫メカが消滅していく。

「あれは……」

見間違えようもなかった。

竜馬が見間違えるなど、あり得なかった。

あれは、ゲッタービームの光だ。

真ゲッターロボなど比較にならない出力だった。しかし、はつきりとわかる。

なぜなら、虫メカ達の蒸発の仕方は、竜馬が何度も見てきたメカザウルスや百鬼獣と同じだったからだ。

赤い戦艦を、竜馬は凝視する。間違いない。それはゲッターロボだ。ゲッターの頭部を模した造形をした艦首から放たれたゲッタービームが、虫型ロボットや戦艦を悉く消

滅させてきた。それに続くように、ゲッター2に似た艦首を持つ白い戦艦と、ゲッター3に似た黄色い戦艦が並ぶ。

竜馬は、理解した。

あれは、ゲットマシンだ。

だとしたら。

だとしたらゲッターロボはどこまで強大になっていくのだろうか。

夢の中で、その光景を見ながら竜馬は戦慄する。ただただ、ゲッターの強さに。それが、宇宙に住む者達に牙を剥いているこの光景に。

『ゲッターチェンジをさせてはならん！ 全軍突撃！』

無駄だ。近づくだけで昆虫メカ達はゲッター線に焼かれて蒸発していく。それがなぜか、竜馬にはわかる。そして、その通りになった。

3つのゲットマシンが、垂直に並ぶ。それが、何を意味することか竜馬にはわかってきた。

「や……」

やめろ。そう、叫ぼうとした。しかし、その声は宇宙を切り裂くような絶叫に掻き消される。

『チエエエエンジゲッターエンペラアアアアアアッ!?!』

宇宙を震撼させる、その声は。

竜馬の知る声だった。

「あれは……」

ゲッターチェンジが、始まる。動くだけで命を潰していくその巨体が、一つになっていく。

そして、漲る闘志のままにゲッターを操るその声は。

紛れもなく、流竜馬のものだった。

……

……

……

「ツ?!?!」

そこで、竜馬は目を覚ました。

「今のは……」

宇宙で起こる戦争。侵略者となったゲッター。そしてそれを操る自分自身。

真ゲッターの操縦で、ハイになっていたのだろうか。今になって強烈な吐き気が、竜

馬を襲う。

「ウツ……」

しかし、何も食べずに眠りに落ちた竜馬の胃からは何も出ては来なかった。ただ、気持ち悪さが竜馬の強靱な肉体を支配する。

隼人や弁慶も、同じような症状に陥っているのだろうか。それとも、自分だけだろうか。竜馬はこの気持ち悪さをどうにかしたくて、洗面所へ向かう。鏡に映る顔は、どこかやつれているような気がした。

「一回乗っただけで、竜馬様がザマねえな……」

ひとりごちて、顔を洗う。冷たい水の感触が、気持ちよかった。そして、タオルで顔を拭いてもう一度鏡を見ようとして、動きが止まる。

「……………」

後ろに、気配がした。

いるはずのない人間の気配だ。

空手の達人である竜馬は、気配だけで背後の人間が誰か大方予想がつく。そしてその気配は竜馬の記憶しているそれと同じだったならば、あり得てはいけないのだ。

なぜなら、その気配は。

「達人さん……?」

もう、いない人の気配だったのだから。

じわり、と脂汗が額に滲む。心なしか寒気がする。それが、この現象と無関係とは思えない。だが、幽霊？ 今更早乙女達人の幽霊が現れるとでも言うのだろうか。

「……………」

背筋が、凍りつく。気配が、近づいてくる。

ひたり。ひたり。

コツン、コツン。と小さな靴音が静かな部屋に響いている。あり得ない、幽霊の足音が。

「……………達人さん、なのか」

恐る恐る、竜馬は口を開いた。

「……………来る」

達人の、声な気がした。しかし、達人ではない気もした。

一体、誰だ。そして、

「何……………？」

気配は、声は。何かを伝えようとしていた。

「敵が、来る……………」

「敵……………？」

それは、デーモンか。そう問おうとして竜馬が振り返った時。気配は霧散し、もうそこには誰もいなかった。

「……………何が、起きているんだ？」

そう呟いたと同時に、サイレン音とミチルの声が竜馬の部屋に響く。

「リョウ君、バードス島で異常事態が発生。ドラゴンの繭が巨大化しているわ！」

「何だと!？」

繭の巨大化。敵を告げる達人の幽霊。それにあの……ゲッターエンペラーの夢。

何かが起こる。そんな予感に竜馬は、戦慄していた。

……………

……………

……………

新光子力研究所からグレンダイザーとダブルスペイザーが出撃した時、既にドラゴンの繭は落下時よりも3倍以上に膨れ上がっていた。

「これは……………」

グレンダイザーは、百鬼帝国との戦いで大きなダメージを受けていた。しかし新光子

力研究所の設備で修復を受け、万全の状態まで回復していた。

元々、甲児にとってグレンダイザーには謎が多かった。遠い宇宙の彼方、フリード星のメカであるグレンダイザーはしかし、各部にマジンガーと共通する技術が使われている。

勿論、全く同じというわけではない。理論の多くは甲児にも理解が及ばないものだ。しかし、それでもマジンガーのメカニズムがこうして修理の際に流用できる。

どうしてそんなことができるのか、甲児は勿論、宇宙科学研究所の宇宙博士や、弓教授にもわからない。技術体系が偶然近かったのだろう、と結論づけるしかできなかった。

そして今、グレンダイザーとマジンガーの共通点と同じかそれ以上に原理のわからぬ現象が起きている。

「ゲッタードラゴンが……」

巨大化した繭は、ゲッターロボの貌を形作っている。まるでイースター島のモアイのように、巨大な顔が浮かび上がっていた。

それが、3つ。

ゲッタードラゴンのような貌。

ゲッターライガーのような貌。

ゲッターポセイドンのような貌。

それはまるで、ドラゴンを構成する3つのゲットマシンが意思を持って成長しているように甲児には見える。

「……甲児君、君はどう思う?」

眉間に皺を寄せながら、険しい顔のデュークが訊く。

「わかんねえ。わかんねえけど、ゲッターがまるで……」

自らの意思で何かを起こそうとしている。そんな予感はずたしかにした。

「甲児、デューク!」

すぐに、早乙女研究所から真ゲッターが飛来する。真ゲッターとダブルスピードとドッキンングしたグレンダイザーは、他のロボットの追隨を許さないスピードで日本からバードス島まで飛び出したのだった。

グレートマジンガーとブラックゲッターは、待機している。明確に敵が現れたわけはない以上、次なるデーモンの襲撃に備える

ために鉄也と元気は日本に残っていた。

「これは……」

ドラゴンの変化に、隼人は目を奪われる。その禍々しい繭の成長に。

「お、おい隼人、竜馬……」

「ああ、ドラゴンはどうなっちゃってるんだ……」

ゲッターと10年付き合ってきた彼らも、理解の及ばない変化。竜馬の脳裏にはあの夢で見た巨大なゲットマシンの姿が過ぎる。

「……エンペラー」

「竜馬君？」

怪訝そうにデュークが聞き返す。答えに窮する竜馬。その直後だった。

突如、耳を裂くような強烈な音波が5人を襲う。キイイイインというその音のする方を、デュークは見た。

「クツ……あれは……」

巨大な、顔だった。長い髪をもち、その広い面積の半分を目と口が占有する不気味な顔。人間ならばあり得ないその姿はしかし、手足がついているのでギリギリ人型を止めていた。

「あれは、デーモン……!?!」

グレンダイザーは、咄嗟にハンドビームを撃った。しかし、見えない何かによつてビームは曲がり、巨大な顔に届かない。

そして、その直後背後から無数の巨大な奇形達が姿を表した。

「……いつらはっ……全員、デーモンか！」

デーモンに合体された機動兵器。さやかによつて「メタルビースト」と名付けられた。それらは狂気を孕んだ目でグレンダイザーと真ゲッターに向かつていく。

「竜馬!」

「ちようどいい、こつちはむしゃくしゃしてんだ。バトルウィイイング!」

竜馬が叫び、真ゲッターロボはその翼を大きくはためかせた。

その翼で迫り来るメタルビーストを切り裂き、真ゲッターは進む。

「オラオラオラアツ!」

戦いながらも竜馬の脳裏には、一抹の疑念が湧いていた。

——あのドラゴンは何だ?

——デーモンとは何だ?

——あの夢で見た光景は、何だ?

悩むなんて性に合わない。悩んだところで答えなどでない。それでも。あの夢の中で聞いた竜馬自身の声が、まるで竜馬の未来を暗示しているかのようで。竜馬の思考を鈍らせる。

「どうした竜馬、動きがコンマ一秒ずれてるぞ?」

その思考の曇りが、竜馬の戦いまでもを鈍らせる。たちまちメタルビースト達は真ゲッターロボに取りつき、その牙で、その爪で真ゲッターを襲った。

「こ、こいつらゲッターを喰う気だぜ!？」

弁慶が驚愕する。

「キャベツじゃねえんだ。そう簡単に喰われてたまるか！ ゲッターアアビイイムツ
！」

それをしかし、真ゲッターはものともしない。だが、他勢に無勢。

「竜馬、ゲッター3だ。海中で奴らを迎撃するぞ！」

「おう、任せるぜ弁慶！ オープンゲット！」

直後、3機のゲットマシンに分離した真ゲッターはそのまま垂直に降下。そして海面ギリギリで再び合体する。

その姿は、筋肉質な真ゲッター1や、シャープな真ゲッター2とも違う巨体。見るものに威圧感を与える巨大な腕を持つ重戦車。真ゲッター3は、海中に潜ると海の中から無数のゲッターミサイルを放ちメタルビースト達へ撒き散らした。凝縮したゲッターエネルギーの塊であるゲッターミサイルに命中したメタルビーストは、ゲッターエネルギーとデーモンとしての生体部分が融合し、そして膨張。たちまち爆発していく。

「へっ、さすが真ゲッター3、パワーと火力は真ゲッターの中でもピカイチだぜ」

「油断するな弁慶！ 次が来るぜ！」

「おう任せろ！」

おそらく、潜水艦と合体しているのだろう巨大な深海魚のような姿のメタルビーストが、真ゲッター3に迫った。しかし、真ゲッター3の口元から発生した竜巻に巻き込まれ、メタルビーストはたちまち空へと飛ばされる。

「ゲッターサイクロン！ さあ、トドメはお前だ竜馬！」
「任せろ！ オープンゲッター！」

再び、真ゲッターがゲットマシンへと分離し空へ。空中で真ゲッター1に合体して、竜巻から離脱したメタルビーストへと迫る。そして、ゲッタートマホークを一振りし、メタルビーストを両断した。

「来るならきやがれ悪魔ども！ 俺は今、暴れたくて仕方ねえんだ！」
流竜馬は、本質的に兜甲児や剣鉄也とは違う人間だ。それは神隼人も、車弁慶もそう
だ。

竜馬は、戦いなしでは生きられない。

平和を愛し、人の命を守ることに使命感も感じている。それでも、流竜馬にとってその「平和」や「守るべき命」の中に自分という存在は勘定に入っていない。

あるのはただ、それらを脅かすために無法を振るうものに、さらなる無法を。

自らの命果てる時まで戦う以外の人生など、竜馬という男には考えられなかった。それが、28歳の流竜馬だ。

だからだろう。もし、もしも。あの夢が現実を起こるのだとしたら。

ゲッターエンペラーを操縦し宇宙を巻き込む無限の闘争へと旅に出してしまう自分の姿を、竜馬はこれ以上なく想像できてしまうのだ。

そして、その姿は。

今まさに竜馬と敵対し真ゲッターを、ドラゴンを奪おうとするデーモンの姿そのものではないか。

悪魔よりも悪魔らしい。そんな自分の闘争本能に怖気が走る。

それでも。

だとしても。

流竜馬には戦い以外の選択肢など存在せず、今日の前で起きているこの殺戮に、歓喜の血を滾らせてしまうのだった。

.....

.....

.....

「スペースサンダー！」

一方、グレンダイザーもダブルスペイザーとスペイザークロスし、ドラゴンの繭を防御していた。あの繭が将来、フリード星を滅ぼす可能性を恐れながらも、デューク・フリードは目の前の脅威と戦っている。

グレンダイザーのお告げに見た巨大なゲッターが、デーモンと合体して悪魔となったゲッターロボであるという可能性も否定はできない。それはつまり、ゲッターを狙うデーモンは地球だけでなく、フリード星にとつても脅威ということになる。

「大介さん！ あいつ！」

ダブルスペイザーのkokopittから甲兎が、デュークに映像を回す。この戦いに乗じてハンドビームを防いだ巨大な顔を持つデーモンが、バードス島へと上陸していた。

「メタルビーストは、囷か！」

「俺が行く！」

「わかった、スペイザー・オフ！」

デュークの宣言と同時に、ダブルスペイザーと分離したグレンダイザー。その隙を狙い迫る巨大な首を持つ……恐らく猛獣か、機械獣の残骸とでも合体したデーモンが、ダブルスペイザーへ迫った。

「させるか！ スクリュークラッシャーパンチ！」

瞬間、グレンダイザーの左腕が飛び、そのメタルビーストを貫く。

「甲児くん、君はあのデーモンを追ってくれ！」

「わかった、大介さん。無茶はしないでくれよ！」

ダブルスピーザーへ向かうデーモンを牽制しつつ、グレンダイザーは多数のメタルビーストの前に立ちちはだかる。

「さあ来い悪魔ども！ このグレンダイザーが相手だ！」

デューク・フリードにとつて、地球は第二の故郷だ。宇門大介という地球名を、デュークは今でも大事にしている。

その地球が、未来にフリード星の敵になる。そのグレンダイザーが示した未来を変えることこそが、デューク・フリードの使命だった。

だが地球に来てから彼を待っていたのは、その未来を決定づけかねない光景ばかりだった。

復活した百鬼帝国のブライ。繭へ変化するドラゴン。圧倒的な力を持つ真ゲッターロボ。そして、ゲッターの力を狙う悪魔・デーモン族の存在。

「僕は……」

デューク・フリードは思い出す。かつての敵を。ベガ大王率いるベガ星連合軍を。

ベガ星の全ての人間が、ベガ大王のような悪魔ではなかった。かつての婚約者・ルビーナのように清らかな心を持つ……デュークの愛する人がいたのもまた、ベガ星だ。

そして、それは地球も変わらない。

地球の仲間達との友情も、地球の自然へ感じた畏敬も本心だ。しかし一方で、デーモンのようなおぞましい悪魔がいるのも、地球なのだ。

だとしたら、ゲッターがその悪魔側の存在であつてもおかしくはない。

もし、その時が来たら。

デューク・フリードは。

宇門大介は。

ゲッターロボと戦えるだろうか。

そして、勝てるだろうか。

「僕は……恐れている。その未来を」

だからこそ、グレンダイザーは戦うのだ。地球と、フリード星の未来のために。

フリード星の神の力。それを、デューク・フリードは悪魔と戦うために使う。

それは、デューク・フリードの決意だった。

「お前達のような悪魔に、僕は負けん！」

デューク・フリードは。宇門大介は、10年前から変わっていない。穏やかな笑顔の裏に激しい怒りを燃やして戦う、戦士だった。

.....
.....
.....

ドラゴンは尚も、成長を続けている。今もその繭は脈動している。それを巨大な顔を持つ女性のデーモン……サイコジエニーは、間近で感じていた。

「……素晴らしい」

この力こそが、魔王ゼノンが求めるもの。

かつて、デーモンの一族を地上から冷たい氷の世界へ……此処とは異なる暗黒次元へと追いやった忌々しきゲッター線の塊。それが、サイコジエニーのすぐ側にある。

それは、恐ろしいことだった。今にもゲッター線は、サイコジエニーを取り込み消してしまうかもしれない。そんな恐怖すら、サイコジエニーを歓喜させる。

ドラゴン回収の命を受けた勇者アモンは、戻らなかつた。魔王ゼノンはアモンを死んだものと判断し、ドラゴン回収の任をこのサイコジエニーに委ねることとした。

サイコジエニーは、勇者アモンのように強力な力を持つデーモンではない。しかし、そのテレキネシスの能力に関してはデーモン族でも随一である。それ故に、力が弱いサイコジエニーはその能力と狡猾さでデーモンの世界を生き抜いていた。

そんなサイコジエニーに任された大役。それこそがドラゴンの回収と、そして……。
「待ちやがれ！」

しかしそれを果たすのを阻もうと、ダブルスパイザーがサイコジエニーを追う。

「人間か……」

「ああそうさ。人間サマのお通りだ！ てめえの目的、吐いてもらおうか！」

サイコジエニーは、デーモンの中では身は弱い。故に、メタルビースト化するのも難しい。しかし、それでも。

「よかろう、ならば教えてやる！」

そのテレキネシスの力は、デーモン族でも随一なのだ。例えば、相手の脳に幻覚を見せるようなことは、サイコジエニーの最も得意とする戦い方である。

甲児は、そんなサイコジエニーの巨大で不気味な目を見た。見てしまった。

「う……」

甲児の背筋が、凍る。その何も映さない瞳は、人に生理的な恐怖を植え付ける。

そして一度恐怖した人間の心を破壊するなど、サイコジエニーには造作もない。

「なんだ……なんだこれは……う？」

甲児の目には忽ち、サイコジエニーの姿が映らなくなる。代わりに浮かぶ光景は、地獄。

機械と身体を一つに融合させた人間達が、殺し合う光景だった。それはまるで、人間が自らデーモンへと進化の道を辿るような。

「!?!」

甲児は、自分の腕を見やる。スベイザーの機械コードが触手のように伸びて、甲児の腕に入り込んでいる。そして血液の代わりにオイルを甲児に送り込み、脳を活性化させる。

「やめろ、やめろ!」

それは、そんなものは。

甲児の見た未来ではない。

甲児の視界の中で、機械獣になった人間達が殺し合っている。機械の、獣に。メタルビーストに。

その光景は、地獄だった。

『この世界は、存在に値しますか?』

ふと、甲児の耳元で少女の声がある。

「リサ!?!」

忘れられない声。あの声のする方へ振り向き、そして。

マジンガーZと融合し、パイルダーの中で朽ち果てたりサの亡骸がそこに、あった。

「あ、あ……」

ごろん。と、それは転がり……甲児の足下に落ちる。銀色の綺麗な髪は煤けて、水晶のような瞳に何も映さない。端正な顔立ちをした球体が。

「あ、あああああああああつっつ?!?!?」

甲児の絶叫が、バードス島に響く。そして……

「それ」は起こった。

……

……

……

「甲児君?!」

「甲児?!」

甲児の絶叫で、デュークと竜馬はそちらを向く。ダブルスペイザーの周囲に、謎の光が発生していた。

「あれは、光子力か……?」

怪訝そうな顔で、隼人。

「でもよ、スペイザーには光子力は使われてねえぜ」

「だが、甲児はこの世界で一番光子力に触れ続けた言わば、光子力の申し子だ。何が起きてもおかしくはない……!」

弁慶と隼人が問答する中、グレンダイザーと真ゲッターはダブルスペイザーへ向かう。ほぼ一瞬で甲児の下までたどり着いて4人は、甲児の周囲で発生しているそれはつきりと、見た。

甲児の絶叫に呼応するかのようには、光子力が周囲に満ちている。まるで、甲児を守ろうとする意志の力が働いているかのように。

そして、満ちた光子力が誘発させているかのように、ドラゴンの眉がドクン、ドクンと脈動した。

「これは……何が起こっている?」

「甲児が光子力を呼び、光子力がゲッター線を増幅しているのか……?」

不可解な現象に戸惑う中、さらに光子力の光は激しさを増す。

「……………これは」

それは、サイコジェニーにも予想外の出来事だった。

「これは、まずい……!」

ゼノンの、あの方の恐れた事態が起こる。サイコジェニーは念力で自らの身体を飛ば

し、バードス島から離れていく。

「デーモンどもが逃げていく?」

「待ちやがれ!」

それを追おうと真ゲッターが翼を広げた瞬間、ダブルスパイザーを覆っていた光が一本の線となり、空高く伸びていく。そして、その光に吸い込まれるようにダブルスパイザーは、甲児は空へと消えていく。

「なっ!?!」

「甲児君!?!」

グレンダイザーはスパイザーを呼び出し、変形合体して甲児を追う。真ゲッターも、それに続く。やがて雲を突き抜けると、その光の先に、穴があった。

「こいつは……」

「おそらく、甲児の奴はこの先だな」

「……ダメだ。内部の熱反応探知ができません。中がどうなっているか、皆目検討がつかんぞ」

一人冷静に、隼人。

「それでも、僕は行く」

真っ先にその穴へ駆けたのは、グレンダイザーだった。

「おい、デューク・フリード！」

それを制するように弁慶が叫ぶ。

「甲児君は、地球でのかけがえのない友だ。甲児君を救うためなら、僕はこの命を賭ける！」

「へっ、てめえばつかにいいカツコはさせねえぜ」

天に空いた穴へ、竜馬が続いた。

「お、おい竜馬!!」

「なんだよ、ビビってんのか弁慶！」

「そういうわけじえねえ。だが……」

何があるかわからないそこへ、無策で突っ込むのもどうなんだ。そう、弁慶が言った時だ。

「!? 重力崩壊?……竜馬! あと数秒であの穴は消える！」

「ほらよ、準備なんかしてる時間はねえ。それに、穴があつたら突っ込むのが男つてもんじゃねえか！」

真ゲッターが加速し、グレンダイザーと並んだ。

「ああ……もういい! こうなつたらどうにでもなれ！」

観念したように、弁慶。そして、2機のスーパーロボットは天空を裂く空洞へ、飛び

込んでいった。

グレンダイザーと真ゲッターが飛び込み、消えた直後。その穴は完全に消失し、空は元の静寂を取り戻した。

……

……

……

兜甲児が目を覚ましたのは、廃墟の中だった。

「俺は、たしか……」

あのデーモンを見た瞬間、恐ろしいものを見た。正気を保てなくなるとの。

そして、恐怖のままに悲鳴を上げて、それから……。

そこまで思考し、自分がダブルスペイザーの外にいることに気付いた。

「(ハハ)は……っ？」

見覚えがある気がする。しかし、わからない。甲児も見ることがないほどその廃墟は、無残なものだったのだ。

或いは、核爆発の後に残された施設とはこういうものだったのかもしれない。しか

し、そうではないだろう、と甲児は思う。なぜなら、核戦争とは遠い昔の出来事であり……この施設の焼け方はそのような『歴史』を感じなかったからだ。

この施設は廃墟と化しており、至る所に機械の部品や、廃材が散乱こそしているがそれらは精々20年前ほどの経年劣化に見える。

甲児の知る限りで核爆発の跡だとしたら、そんなに最近ではないはずだ。

ふと、落ちていた瓦礫をひとつつまみ取る。焼けてあちこちが炭化しているが、覚えがある。

「これは……」

新光子力研究所で使われていた、研究機材だ。光子力のデータを測る際に使用していたもの。その成れの果て。

少なくとも、甲児の知る限り新しい機材だった。なぜならこれは、インフィニティの解析データを元に甲児自らが発案したものなのだから。

「だとしたら、ここは……」

この、廃墟は。

「新光子力研究所……?」

そう、呟いた時。ガラン、という音と共に靴音が響く。

「誰だっ!？」

思わず振り返り、甲児は見た。

甲児の視線の、その先。

「あっ……」

缶詰めを両手に抱えた、淡い銀髪の女の子。

その瞳は切れ長で、しかしくりくりとした可愛らしさが同居している。

人形のように端正な顔立ちは冷たさすら感じるが、そこにあるのはまるで仔犬のように無邪気な表情。

その顔を、その声を。

兜甲児は、知っていた。

「リサ……?」

リサ。かつてマジンガーインフィニティの中に眠っていた少女。世界を作り替える終末兵器『ゴラーゴン』の鍵であり、しかし甲児と共にこの世界を肯定し、可能性の世界に消えた少女。

それが、確かに甲児の目の前にいたのだ。

少女は、リサはその大きな瞳に涙を浮かべていた。そして、

「……よかった、気づいたんですねお父さん!」

そう言って、缶詰めを放り投げ甲児の胸へ飛び込んでいた。

第三話 『地獄!!』 Bパート

「お父さん……?」

兜甲児は、目の前の少女にそう呼ばれて一瞬硬直していた。たしかに、隣接次元の一部に触れた時……自分とさやかな娘としてリサが、目の前の少女がいたことははっきりと覚えている。

一人の父として、リサという娘を愛した記憶までもはつきりと思い出せる。しかし、それは「あり得たかもしれない世界」「これから起こりうる世界」のはずだ。

それに、甲児と現実世界で関わったアンドロイドのリサはあのインフィニティとの戦いの中で隣接次元に留まり、世界中の光子力を集める中継機の役割を行いそして……消えていった。

いつか、父と娘として再会する日を約束して。

だが、違う。今日の前にいるリサは違う。

本能が、直感が、理性が甲児に語りかける。

「リサ……教えてくれ。俺は……」

それでも、わかるのだ。彼女が甲児の知るリサであると。リサは甲児の様子を察し

て、口を開いた。

「はい、お父さんはダブルスペースイザーの中で意識を失っていました。ダブルスペースイザーは、突然研究所の上空に落ちてきて、私がカイザーで拾わなかったら大事になっていたかもしれません」

「ダブルスペースイザーは？」

「格納庫にありますけど……たぶん、飛ぶのは難しいと思います」

「そうか……」

段々と、甲児の記憶も鮮明になっていく。あのデーモンに幻覚を見せられて、甲児は恐怖の中で我を失った。そして、光子力と思われる光が甲児の周辺に降り注ぎ……。

「……インフィニティが富士山頂に現れたように、俺が光子力に引き寄せられたのか？」
頭を落ち着けるために、甲児は状況を整理することに努める。かつて富士山頂に突如発現した遺跡であり魔神。マジンガーインフィニティ。それと同じ現象が、起きたのかもしれないと。しかし、そうなると今度はここがどこかが問題になる。

新光子力研究所。それはわかっている。しかし、なぜ新光子力研究所が廃墟になっているのかはわからない。甲児は立ち上がり、歩き出す。

「外の様子が見たい。大丈夫か？」

「ダメですよ、ここはまだ安全ですけど、外はゲッター線に汚染されて、デビルマンな

らともかく人間が生身で歩いたら危険です！」

しかし、それを止めるリサの言葉で甲児は立ち止まる。

「……………どういうことだ？」

一から説明してくれ。そう頼む甲児に、リサはひとつ頷いた。

「はい……………まず、お父さんの主観ではここは隣接次元。極めて近い、そして限りなく遠い未来の出来事です。そこでお父さんはお母さん……………兜さやかとの間に私を産んでくれました」

ですが。そういつて続けるリサの口が、どんどん重くなっていく。

「……………私が5歳の頃です。悪魔が現れました」

「……………デーモンか」

「はい」

頷いて、リサは続ける。絶望的な、未来の歴史を。

「……………世界中で、悪魔を恐れるあまりに戦争が起きました。人間に合体し、擬態できる悪魔たちは人間社会に紛れ込んだんです。人々は、隣人が悪魔かもしれない恐怖に支配されて、そして……………人間同士で殺し合ったんです」

「……………」

インフィニティとの戦いの時、人々は団結し世界中の人々がマジンガーZに力をくれ

た。そのおかげで今の世界があった。

それなのに。その後待っていたのが人間同士の戦争だとりサは語る。甲児は、沈痛な面持ちのままリサに話の続きを促した。

「……人間同士で殺し合いを続けるうちに、世界はさらに変化しました。一つが、ゲッターエネルギーの暴走事故です」

「ゲッターの？」

ゲッター線の暴走。その言葉に甲児はゲッタードラゴンの姿を思い出す。あの禍々しい繭となったドラゴン。その繭は着実に成長している。

「具体的なことは、私も知りません。ですが、ゲッターエネルギーの暴走事故が早乙女研究所で起きて、それからです。宇宙から降り注ぐゲッター線が、世界中で膨大なものになりました。かつて、恐竜帝国を滅ぼした時と同じか……それ以上のゲッター線が、世界中に降り注いだんです」

「そんな……」

「人間も、デーモンも、たくさん死にました。そんな中、人間は生き残るためにヒトの身体を捨てたのです」

ヒトの身体を捨てる。いまいちその言葉にピンとこない甲児は、どういふことだと聞き返した。

「……ゲッター線を浴びても生きられるように、身体を機械のパーツにしたんです。コクピットの中に直接、人間を接続します」

「なっ……！」

甲児が見た幻覚を思い出す。自分の腕が、足が、ダブルスペイザーと融合して融けていくあの感覚。光景。ただでさえ狂ってしまいそうなその光景が、この世界の現実であると、リサは語る。

「ゲッターロボの身体を手に入れることができれば、ゲッター線の降り注ぐ中でも長く生きられますから、合理的ではありません。それと……もうひとつの手段。これは正確には手段ではありませんが」

「……さつき口走った、デビルマンってやつか」

「はい。デーモンに取り憑かれながら、ヒトの心を失わず……逆にデーモンを支配下に置いた悪魔人間、デビルマンです」

「ヒトの心と悪魔の身体を持つ、デビルマンか……」

俄かには信じ難い。甲児は見ているのだ。あの邪悪なデーモン達を。あんなものに合体されて、ヒトの心を持つとしたら。

「……デーモンになっちまう方が、いっそ楽かもしれないねえな」

それこそ、人の心を保てる気がしない。

かつて、亡き祖父に言われた言葉を思い出す。

——マジンガーZは、神にも悪魔にもなれる。

しかし甲児は神にも悪魔にもならず、人としてその力を振るい続けた。いつそマジンガーZを神にして世界を束ねた方が、或いは悪魔になつて世界を滅ぼした方が楽になれる。そんな誘惑を感じたことは一度や二度ではない。それを振り払えたのは、甲児の人間としての理性と、正義感と、そして強大な力を持つということへの責任感、そして畏怖と恐怖。そんなあらゆるものだった。

それと同じどころか、決して神にはなれず、悪魔の力だけを渡された人間。人として生きるのはいまにも困難だろうことは、甲児が一番よく知っている。

「……それでも、デビルマンは人間として生きているのか」

それだけが、甲児にとっては救いだった。甲児が守り、救つた世界がたとえ終末的破局を迎えていたとしても……人間が人間の心を持つていたのならば。

「……………」

しかし、リサの表情は暗い。

「……デビルマン達は、人を見限りました。人間同士で殺し合い、心を悪魔にしてしまった人間の味方であることをやめたんです」

そう言いながら、リサは缶詰を開ける。中には、乾パンが入っていた。

「……とりあえず、今は食べてください。これはゲッター線に汚染されていないから、安全ですよ！」

そう言つて笑うリサの微笑みは、氣丈だった。どこかさやかに似ている……そんなことを、甲児は思っていた。

……

……

……

空に空いた穴に突撃した流竜馬が意識を取り戻した時、眼前に広がっていたのは赤い空だった。

「()は……？」

「気がついたか、竜馬？」

隼人の声がする。しかし、どこから聞こえてくるものか。

「隼人……俺たちは……？」

しかも、やたら視界がいい。ゲッターのカメラ越しとは思えない。いや……竜馬は、ふと自分の手を見た。

赤く、大きな手。それは真ゲッター1の手だった。

「まさか……!」

自分の、自分たちの身に何が起きているのかを理解して竜馬は戦慄する。

「気づいたようだな」

「これには、俺もビビったぜ」

隼人と、弁慶は既に気づいていた。

「俺たちは……ゲッターと一つになっちまってるのか!」

自分の視界が、ゲッターと同期している。それだけではない。隼人を、弁慶を自分の中に感じる。竜馬が身体を動かすと、同じようにゲッターも動く。

3人とゲッターは、ひとつになっている。そうとしか思えなかった。

「こいつは……一体……」

「落ち着けリョウ。俺達はあの穴を通ってこの場所に来て、こうなった。それなら、元の世界に出れば元に戻る可能性もある」

動揺する竜馬を、隼人が制す。しかし、次の問題はこの場所だった。

「とにかく、甲児とデューク……大介と合流しなきゃならねえが。ここは一体どうなってるんだ?」

至る所に、マシンの残骸が転がっている。イチナナ式や、米軍で開発された偵察用メ

カのビート。イチナナ式に変わるエース機として開発が進められているステルバー。カナダのロボースーン。その他ありとあらゆるメカが破壊された状態で転がっていた。

それ以外は、何も無い。見ればそれらのメカは全て戦い、争った形跡がある。恐らくは、戦場跡地と言ったところだろうか。

真ゲッターが……竜馬がその地獄の痕を辿るように歩いていると、足元にぱたりと転がるように、そんなメカの残骸がひとつつ倒れ込んだ。

それはやはり、竜馬達には見覚えのあるものだった。

「ゲッター……?」

ゲッター1だ。細部こそ違うが、赤いマントと大きく横に伸びたツノ。それらのパーツは確かに、かつて竜馬が愛機としたゲッター1に酷似していた。

どうして、こんなところでゲッターが倒れているのか。そんなことを推測する暇もなく、空から真ゲッター目がけて何か飛来する。

「これは、メカザウルスのミサイルだ！」

「なんだと!?!」

竜馬は、ゲッターの目でそれを見た。空に浮かんでいる青い翼竜。見間違えようもない。メカザウルス・バドだ。バドのミサイルは、弧を描くような軌道で真ゲッター目がけて飛び込んでくる。

「まさか、ゴールの野郎まで復活したのか!」

竜馬が念じると、真ゲッターは翼を広げ飛び上がった。そして、トマホークをブーメランのように飛ばし、ミサイルを迎撃する。ミサイルはゲッターに命中することなく、トマホークに切り裂かれ、地へ堕ちる。そのままトマホークを回収し、真ゲッターはメカザウルスへ迫った。

「地獄へ堕ちろ、トカゲ野郎!」

トマホークを大きく振りかぶり、真ゲッターは翼竜を真つ二つに切り裂いた。

「……妙だな。手応えがなさすぎる」

ゲッターと真ゲッターでは、たしかに性能が違う。それでも、あのメカザウルスには戦う力を感じない。それを、隼人は訝しむ。

「ともかく……甲児と大介を探さねえことには始まらねえ」

再び、地上に降下したその時だった。急な殺気を感じ、竜馬は振り返る。

「……!」

竜馬の目の前に、立っていたのは。

3体のゲッターポセイドンだ。

「ゲッターポセイドン……。早乙女研究所の者か?」

そう、交信を試みる弁慶。しかし、ゲッターポセイドン達はどこか、様子がおかしい。

「な、なんだ……?」

3人の目は、今ゲッターと一体化している。だからだろうか、ゲッターポセイドン達に表情があるように見えた。そして、その表情はどこか狂気に満ちている。

狂気。それは飽くなき闘争本能だろうか。それとも、目の前にいる何者をも信じられない不信感だろうか。

猜疑、不安、恐慌、野心、絶望、高揚、欲望 e t c e t c e t c.

それらをまとめて狂気でくくった表情を、ポセイドン達は浮かべていた。

「クセエー!」

「デーモンだ!」

ポセイドン達は、ようやくそれだけの言葉を吐くと真ゲッター目がけてゲッターサイクロンを放射する。

「な、何だ!?!」

吃驚する弁慶をよそに、竜馬が真ゲッターの足を動かし竜巻を避ける。

「こいつら、早乙女研究所の者なんかじゃねえ!?!」

隼人が叫ぶ。それと同時に、ポセイドン達は連携された動きで真ゲッター目がけて走り出す。

「こいつら、何だ!?!」

動揺するまま、トマホークを構える真ゲッター1。ポセイドンは大きく飛び上がり、そのまま真ゲッターめがけて飛び込んだ。

「デーモンは、死ねっ!」

「うるせえ、俺達は人間だ!」

ポセイドンと真ゲッターが同時に叫ぶ。トマホークを恐れもせずに飛び込むポセイドンに、真ゲッターはゲッタービームを照射。ゲッター線の超高熱が、ポセイドンを襲った。

しかし、ポセイドンはそのゲッター線の熱を浴びながらも真ゲッターにしがみつく。

「ッ、ッ、っいつつ!」

ゲッター線を動力とするゲッターとて、それを直接熱に変換するゲッタービームを直接モロに受ければタダでは済まない。ポセイドンもゲッターならば、それを理解しているはずだ。しかし、ポセイドンはゲッタービームを浴びながら嬉しそうにニヤリと笑い、真ゲッターにその体重をかけていく。

「クツ、竜馬。このポセイドンは俺達の乗ってた奴よりも遥かに重いぞ!」

「大食らいのムサシに似て、ポセイドンまでデブったか!」

それでもポセイドン1体なら、真ゲッターの敵ではない。真ゲッター1は、両腕でポセイドンを掴み離そうとする。だが、その直後さらに真ゲッターを重量が襲った。

「グオオっ!？」

「ここ、コイツら……!？」

ゲッターポセイドンの上に、ゲッターポセイドンがさらにのしかかっているのだ。そして、さらに最後のポセイドンもそこに重なっていく。

「変われ! 変われ! デーモンに変われ!」

ポセイドンから、狂気に満ちた叫び声が響く。実に3倍の重力が、真ゲッターを襲った。

「い、い、い、い、い、い、い、い……!？」

衝撃で、トマホークを離してしまう。尚もポセイドン達はその重量で真ゲッターを押し潰して行く。

「どうするんだ竜馬。このままじゃ……!？」

真ゲッター2にチェンジすれば、こんなデカブツのプレスすぐに抜けられる。しかし今オープンゲットすれば、ゲットマシンは瞬間に押し潰されてしまうだろう。

超重量ののし掛かり。それはたしかに、ゲッターに対して効果的な攻撃だった。

「てめえら……いい加減にしゃがれ!」

真ゲッターはその両腕でゲッターポセイドンを掴み、バトルウィングに力を込める。この場所に来てから、竜馬の力は漲っていた。まるで、身体がゲッターとひとつになっ

たせいだろうか。それとも、ゲッターロボの墓場とでも言うべきこの場所で、真ゲッターのゲッターエネルギーが急速に充填されているのだろうか。

ともかく、自らの力を振り絞ることで竜馬は理解する。今の真ゲッターのパワーは、これまでの真ゲッターよりも遥かに上がっていることを。

「ううううおおおおおりやああああつ!?!」

その力のまま、渾身のパワーで竜馬は翼をはためかせ、全身に力を込めて3機のポセイドンを、押し返した。

「な、何ッ!?!」

そのままトマホークを拾うと、ゲッターロボの装甲と同様の形状変化・記憶素材でできたトマホークはたちまち、巨大な鎌へと変化する。

「ゲッターアアアサイトオツ!?!」

巨大な鎌の一振りは一撃で、ポセイドン3機を薙ぎ払う。そして、ゲッターサイトを今度は槍へと変化させた真ゲッターは、3機をまとめて、団子のように串刺した。

「グ、グオア……」

「てめえら、ダチに似てるからって手加減してりや調子乗りやがって……なめんなよ!」
スピアを抜いて、再び距離を取る真ゲッター。次なる反撃に備えていたが、ポセイド

ン達はそのまま血のようにオイルを嘔き出し、倒れるのだった。

「貴様ら、さつき俺たちをデーモンと呼んだな。どういう根拠でそう呼んだ？」

隼人が凄む。ポセイドンからは、笑い声のような不気味な音が漏れ聞こえやがて、口を開いた。

「し、知るかよ……どうせお前らの機体のエネルギーを奪うためさ。相手がデーモンなら、いくら殺しても罪悪感が湧かねえからな」

「……………そうか」

相手の人間性を否定することで、自己の正当性を担保する。それは戦場であれば決して珍しいことではなかった。だから、それに内心嫌悪感を感じても隼人はそれを咎めることはしなかった。しかし、次の疑問が浮かぶ。

「お前達が機体のエネルギーを奪おうとするのは、何のためだ？」

「へっ、とぼけんじゃねえ。お前だつてあそこへ……あそこへ行くためにその身体を手に入れたんだろう？」

そう言つて、ポセイドンのうち1機が空を指差す。赤く濁った、血のような色の空を。

「……………あそこに何がある？」

隼人は尚も、質問を続ける。

「お、俺たち人類は……もうダメだからな。このゲッター線に汚染された星から脱出す

るんだ」

そう話しながら、ポセイドン達の中から何かが這い出るのを、隼人は見た。

「ウツ……………」

弁慶が呻く。

「これは……………」

隼人に、戦慄が走った。

「……………」

竜馬の、背筋が凍る。

「あそこに行けば、この世界から出られる！ 宇宙にだって、別の樂園のような星にだつ

て！」

それは、蓑虫のような姿をしていた。全身が機械の塊。そして、ゲッターロボのように頭部と、腹と、腰にそれぞれ顔があり、それらは機械と融合しながら生きている。

それは。

それは。

竜馬達の常識の中にはあり得ないものだった。しかしその奇形はマシンと完全に繋がっているようで、コクピットの外に出てもゲッターから離れはしなかった。

「……………あそこに、何があるんだ」

最後の問いを、隼人が訊いた。

「聖獣、ドラゴン」

奇形は、答える。

「ドラゴン……！」

竜馬達の脳裏に、あの繭の姿となったゲッタードラゴンの姿が過ぎる。あの中で、ドラゴンは悍ましい進化を遂げているのだろうか。そして。

「ゲッター聖ドラゴン！」

このような世界を作り上げてしまったのだろうか。

「……………」

竜馬は、咄嗟にその赤い空を見た。先ほどのメカザウルスがいた場所よりも、高く。雲の上に何かが、たしかにいた。

そして、ゲッターやイチナナ式。それにメカザウルスや機械獣、戦闘獣、百鬼獣に円盤獣。あらゆるメカが、或いはその特性を持った何かが空を駆け……墜ちていく。

「ははは、エネルギーが足りねえんだ。無理もねえ、こんなスクラップを寄せ集めた身体じゃああそこへ行く前に燃え尽きちまう」

奇形は嗤う。それは嘲りだろうか。

「この星はもう、ダメだ。ダメなんだよ……。みんな死ぬしかねえんだ」

それとも、絶望だろうか。

「……行くぞ、隼人。弁慶」

奇形に背を向け、竜馬は真ゲッターのバトルウィングを大きく広げる。

「おい、竜馬」

甲児やデュークはどうするんだ、と弁慶。

「あいつらが生きてるなら、必ず奴らも空を目指すはずだ!」

この世界は、おかしい。その謎を解く鍵は空にある。ならば、あの二人なら遅かれ早かれ空を目指す。その竜馬の推理に隼人と弁慶は心で頷き、3つの心はひとつになった。

「グレンダイザーはともかく、ダブルスペイザーの方はあそこを飛ぶのは危険かも知れねえ、急ぐぞ隼人、弁慶!」

「おう!」

真ゲッターが、空高く飛ぶ。墜ちていく他のマシンを掻い潜り雲を突き抜ける。その先にあるものを、確かめんがために。やがて巨大な雲へ突入し、雷鳴の響く中をさらに、スピードを上げていった。

「何かある。この先に何かがあるというんだ!」

この空間を生み出した元凶か。それともこの世界に君臨する魔王か。鬼か蛇かもわ

からぬまま、真ゲッターロボは突き進んだ。

.....

.....

.....

「.....それで、人類は滅んだってわけか」

乾パンと水を口に含みながら、甲児はリサからこの世界での出来事をさらに詳しく聞いていた。リサの口から語られる出来事の多くが絶望そのものだったが、それでも甲児は耳を傾けている。世界の終焉について。甲児が命を賭けて守り抜いたものが脆く崩れ去った世界について。それは辛いものだったが、おかげでいくつか情報の整理ができた。

ひとつ。今この世界は、ゲッター線に汚染されて生身の人間が住める場所が殆どなくなっていること。この新光子力研究所はバリアが生きているおかげでゲッター線を遮断できているらしく、人類最後のシエルターとして機能しているということ。それでも、残ったのもうリサひとりということ。

ひとつ。生き残るために人類はメカと融合し、この星から脱出するために殺し合いを

続けているということ。それだけでなく、ゲッター線の汚染は地球そのものを深刻化させ、地下に逃げ延びた恐竜帝国の残党も生き残るために地上へ進出し、殺し合いに参加している。

ひとつ。この星が死の星と化した人間同士の戦争を終わらせたのは、グレンダイザーとラーガ……ミケーネに眠っていたあの赤褐色の魔神だったということ。核戦争が起きたと同時にグレンダイザーとラーガはコントロールを離れ、世界中で破壊活動を開始した。その武力の限りを尽くし人間の、地球の文明を滅ぼした。人類も、デーモンも、デビルマンも関係なく滅ぼし……そして機能を停止し、再び地底深くに眠りについたという。これまで聞いてきた話の中で特に甲児にとつて不可解だった。

「しかし、ラーガとグレンダイザーが同時にコントロールを失ったのか。とすると、あの2つは本当に何か、関連があるのかもしれないな……」

「今となつては、それを確かめる術はありません。ですが、可能性は高いと思います」
甲児の推測を、リサは肯定する。そして、疑問といえバリサもそうだ。

「リサ、お前は人類の生き残り。それでいいんだな?」

「はい。お父さんが以前に出会ったリサというアンドロイドとよく似ているらしいですが、私は真正正銘・兜甲児と兜さやかか娘です」

娘。改めてそう聞かされると少々戸惑うところもある。しかし、その戸惑いを押し殺

して甲児は確認を続ける。

「リサが生き残って、たぶん俺ときやかは……」

そう甲児が口にする、リサの表情は心なしか暗く陰る。その様子で、甲児は確信した。

この世界の自分ときやかは、リサを遺して死んだ。そして……。

「お父さんとお母さんは、私に魔神を託してくれました」

「……マジンガーか」

マジンガー乙。甲児が祖父・兜十歳から譲り受けた、神にも悪魔にもなれる力。マジンガーが、リサを護ってくれたのだと、甲児は確信する。

「はい。私は、お父さんとお母さんの残したマジンガーでひとり、戦い続けていました。マジンガーがなければ、私はとつくに……」

今にも泣き出しそうに俯くリサの肩を、甲児はそつと抱き寄せる。辛いことを、思い出させてしまった。それでも、やるべきことは見えた。

「……俺は、きつとリサをこの世界から救うために飛ばされてきたんだ」

そして、破滅の未来を知る者として過去を変えるために。

それは、神の所業だった。

今までに甲児が選ばなかった、神として人類を救う行為。甲児はそれまでずっと、ひ

とりの人間として神にも悪魔にもなれる力を人のために使ってきた。

しかし、今。

兜甲児が背負う使命は、人間の身を越えようとしている。そんな予感に、甲児の額に冷たい汗が滲んだ。

しかし、それ以上に。

兜甲児を突き動かすのは人間としての心だった。

「……俺がこの世界に来た時、膨大な光子力とゲッター線の増幅があつた。きっと、同じことを

起こせばもう一度、世界の穴を開けることができる」

そのための力はリサが持っている。

「……リサ。俺をマジンガーのところに案内してくれ」

兜甲児は立ち上がる。全人類の未来の為と、口で言うのは簡単だった。しかし、甲児にとってその決断は何よりも、未来の娘のために。

妻と迎える明日のために。

兜甲児が掴んだ幸福を、取り戻すために。

神の如き威光を、悪魔の如き力を。

人間として、振るうのだ。

「……はい！」

その決意に、リサはひとつ頷くと立ち上がり、シャツターを開く。

「魔神は、旧光子力研究所に隠しています。急ぎましょう！」

そう言つて、リサはガスマスクのような防護服を瓦礫に埋もれたロッカーのような場所から取り出し甲兎へ渡す。

「旧研究所の中も安全ですが、移動までの間は絶対にそれを取らないでください。地下道は致死量のゲッター線、放射線が検出されていますから」

……

……

……

空を駆ける真ゲッターロボは、遙か上空でそれを見た。

「お、おい。あれは……」

真ゲッターの眼前に広がっていたのは、巨大なゲッターロボだった。造形は、ドラゴンに近い。しかし、ドラゴンではあり得ない。顔だけでも、真ゲッターロボの全身それよりも遙かに巨大だが、それだけではない。

そのドラゴンは、ゲッターロボの集合体だった。装甲の至る所に、ゲッターロボが浮き出ている。まるで、この巨大なドラゴンに吸収でもされ、そのまま固まってしまったかのように。

そうしてゲッター同士で喰い合った末に誕生した怪物。そうとしか思えない異様な姿。竜馬は息を呑む。隼人は戦慄する。弁慶は、それと同じものに乗っているという事実には嫌悪感を覚えた。

「これが、ゲッター聖ドラゴン……!」

あのゲッターポセイドンの姿をした無法者達が真ゲッターを襲った理由も、今なら理解できる。この世界の人々は、この星から脱出するか或いは、これと同じようにならなければ生きていけないのだと。

その怪物を前に、黒い頭部を持つ円盤が対峙していた。

「グレンダイザー!」

「どうやら、竜馬の言う通りだったらしい。デューク・フリードもこの世界に飛ばされそして、空を目指したのだろう。」

「ゲッターチーム、無事だったのか!」

すぐにグレンダイザーと並び、真ゲッターはその怪物……ゲッター聖ドラゴンと対峙する。ゲッター聖ドラゴン。それがいかにして生まれたのか。そこにいる4人にはま

るで検討もつかない。それほどに、ゲッター聖ドラゴンは世界の次元が違うのだった。ゲッター聖ドラゴンのその何も映してない虚な眼が突如、2機を見る。

『オ、オオ……』

声が、聞こえた。宇宙にまで響きそうな、重たい声だった。

『竜馬……流竜馬！』

声は、真ゲッターロボを……流竜馬に突き刺さる。

「な、なんだてめえ……俺を知ってやがるのか！

トマホークを構え、真ゲッターは警戒する。このゲッターは、聖ドラゴンは明らかに尋常なものではない。もしこんな異形がこちらに敵意を向けてきたとするならば、真ゲッターとて木っ端微塵に吹き飛びかねない。そんな危機感が竜馬を煽る。

『竜馬、なぜここに来た！』

返答はしかし、竜馬の求める答えではなかった。声はただ、重く響くのみ。

「竜馬君。これは……」

グレンダイザーも、ハーケンを構えながら警戒していた。無理もない。この化け物ゲッターはまさしく、デューク・フリードがグレンダイザーに見せられた怪物そのものといつても過言ではないのだから。

もしこんな化け物がフリード星へ来たら。そんなことを思わずにはいられない。そ

して、声は、デュークへと矛先を向ける。

『グレンダイザー……デューク・フリード。お前は何故、ここにきた!』

「何故か、だと……。僕は、フリード星を救うためにここに来た!」

ハーケンを構えたダイザーは、その異形のゲッタードラゴンを前にしても怯まない。

「答える、ゲッター線は何を求めているんだ!」

デューク・フリードが叫ぶ。それに対し異形のゲッターは、ただ一言答えるのだった。

『進化』

「何……?」

それは、至極単純な答えだった。進化。生物の形状変化。世代を重ねる事で環境に合わせて生物は進化を重ねていく。しかし、それは同時に生物種の振るい落としてもある。

進化とは即ち、淘汰。デュークは、その異形のゲッター……ゲッター聖ドラゴンへの警戒を強めていた。

しかし一方で、その語るものに魅力を感じている者がいた。

「進化、だと……。お前が、俺たちの行き着く先だとも言うのか」

隼人である。今、隼人は真ゲッター2とひとつになつている。そのせいだろうか隼人は今、かつてないほどの身体の軽さを感じていた。

身体が軽く、自分の身体であって自分ではないような。そんな感覚。10代の頃の、全盛期の肉体でもここまで身軽ではなかった気がしていた。

それが、ゲッターとひとつになることで人類にもたらされる進化なのだろうか。

見てみたい。それが、普段の冷徹な理性とは別の面で掻き立てられる隼人の欲望だった。

自分たちは、人類はどこまで行くことができるのだろうか。そんな興味が、隼人を掻き立てる。

「……………」

しかし、答えはない。

ゲッター聖ドラゴンは、隼人に何も答ええない。

「……………どうした、何故答ええない！」

それが、隼人を焦らさせる。

そして。

『……………来る』

声が、呟いた。

「何が、来るってんだ」

そう、弁慶。

血のように染め上げる。しかしその皮膚は機械のようでもあり、皮膚というよりも装甲と言ったほうが正しいだろう手応えを竜馬は感じていた。

「こいつらは蟲なのか、それともメカなのか……？」

隼人の呟きに、竜馬は怒声で返す。

「有機類ならぶつ殺す！　メカならぶつ壊す！」

サイトをトマホークに変形させ、それをブーメランのように投げつける。空中で弧を描くように回転したそれは、次々と蟲を潰していく。

「竜馬サマを舐めんなよ！　トマホークブーメランは健在だぜ！」

「竜馬！　あれを見ろ!!」

隼人が叫ぶ。真ゲッターとグレンダイザーが蠅螂のような蟲の相手をしている中、本体とも言うべき巨大な蛹は、有機体とメカが複合した触手を大地へ伸ばしていく。

「あいつら、何をするつもりだ？」

「観測結果が出たぞ竜馬。あの触手は、光子力研究所へ向かい伸びている」

「何だ?!」

全員の脳裏にここにいない、竜馬達が探していた人物の顔が浮かんだ。

「甲児君！」

スパイザーを反転させ、グレンダイザーは触手の伸びる先へ降下を試みる。しかし、

大量の蟲はグレンダイザーを通せんぼするように先回り、そして小さな蟲の一つ一つが、より合わさっていく。

「これは……!」

集まった蟲は、赤い体色に巨大な羽根を持つものを象った。

「ゲッターに、擬態しただど!」

その姿はまさしく、真ゲッターロボ。デュークも、竜馬もその姿に驚嘆する。しかし、それで怯んではいられなかった。

「たとえ貴様がゲッターの姿を取ろうと、いや……だからこそ、僕は負けるわけにはいかない!」

ハンドビームを撃ちながら、スペイザーはその偽真ゲッターへと向かっていく。しかし、偽真ゲッターは今までの小型の蟲とは比べ物にならない頑丈さで、ハンドビームを寄せ付けない。そして、ゲッターの姿を維持したまま、さらに蟲が集まりその右手にトマホークを作り出して、グレンダイザーへ大きく振りかぶる。

「!」

「危ねえぞ、デューク・フリード!」

しかしその一撃は、グレンダイザーに届かなかった。僅かの中に2体の間に割り込んで真ゲッターロボが、本物のゲッタートマホークでそれを防いだのだ。

「竜馬君……!」

真ゲッターに庇われ、グレンダイザーは2体の間から距離を取った。

「デューク・フリード! お前がゲッターを疑うのも無理はねえ。こんなもんを見せられちまったんだから、そりゃあゲッターを敵視するだろうよ」

トマホーク同士の剣戟を演じながら、流竜馬はデューク・フリードに……宇門大介に向かつて叫んでいた。

「だがな! 俺は決心したぜ。ゲッター線が全てを喰らっちゃうのが運命だって言うんなら……運命に逆らうのもまた、運命だってな!」

偽物のトマホークをブチ破り、真ゲッターはそのままだ腹部からゲッタービームを照射する。しかし、偽物のトマホークだった蟲達が本体を護るように盾となり焼かれ、肝心の偽真ゲッターには届かない。

「運命に逆らうのも、また運命……」

しかし、竜馬の言葉はたしかにデューク・フリードに。宇門大介に届いていた。

「そうだ、ゲッター線が俺達に何かをさせたがっつていようが関係ねえ! 俺は、ゲッターに勝つ!」

「ゲッターに、勝つ……」

弁慶が復唱する。

「ハッ、大きくでやがったな」

隼人がニヒルに笑う。

「お前達にも当然、付き合ってもらおうぞ隼人、弁慶!」

「面白え、やってやろうじゃねえか!」

弁慶が応える。隼人も、口には出さないが竜馬の、ゲッターチームのリーダーの言葉を認めていた。

(ゲッターの行き着く先。それはこれだけが答えってわけじゃねえ。リョウなら、きつと素晴らしい答えに行きついてくれる……)

3人の、3つの心は今確かに、一つになっていた。

「……竜馬君。わかった」

デューク・フリードが、宇門大介が口を開く。

「僕はフリード星の王子、デューク・フリードとして未来のフリード星に降りかかる災いを取り除くべく地球へ来た。だが……君達の友として、地球人・宇門大介として、僕は君達の戦いを信じる!」

そう言つてスペースサンダーを放ち、偽真ゲッターロボを焼いていく。超高熱の電撃は、蟲の細胞ひとつひとつに決定的な打撃を与えていき、黒焦げとなって落ちていく。しかし、落ちた身体を補うように新たな蟲が偽真ゲッターに補充され、たちまち復活す

る。

「……こりゃあ、持久戦になりそうだな」

「なら、あのデカブツを叩くしかねえな！」

バトルウイングを翻し、真ゲッターが羽ばたこうとした時だった。

「そいつは、俺に任せてくれ！」

4人の耳に、その声が届いたのは。

突如、光子力研究所へ向かい伸びていた触手が巨大な光に飲まれ、消滅する。

「これは……光子力ビーム？ いや……」

隼人の知る光子力ビームは、確かにマジンガーZの必殺兵器だ。しかし、違う。

光子力ビームなら、こんな巨大な光にはならないはずだ。

4人は、光の差した方を見る。

そこには、紅の翼を携えた漆黒の魔神がいた。

「マジンガーZ！」

人類の希望。人々の守り神。兜甲児に与えられた神にも悪魔にもなれる力。しかし、

その姿は竜馬や大介達の知らないものだった。

マジンガーZは流線系の形状と丸みを帯びたボディが特徴だし、違うのだ。

その魔神は、全体的にマジンガーZよりも巨大だった。そして、全身がマジンガーZ

のそれよりも遥かにマツシヴとなり、そして何よりも鋭い形状をしている。

魔神。その姿を見れば誰もがそう形容するだろう。英雄として人々に知られているマジンガーZやグレートマジンガーが「ヒーロー」と認められるものだとするならば、その姿は真正銘の魔神なのだ。

しかし、その魔神から聞こえた声は紛れもなく兜甲児のもの。

空を走る魔神に、竜馬は通信を試みる。

「お前……甲児か？」

本当に甲児なのか。それすらも疑問に思ってしまうほど、その魔神の姿は凶悪だったのだ。

「ああ、そうだけ。すまねえなりヨウ、ハヤト、ベンケイ。それに大介さん。こんな世界まで遙々さ」

その声は間違いなく、兜甲児。そのことに安堵するがしかし、巨大な蛹はさらに蟲を出していく。

「てめえらの相手をする時間はねえ！」

甲児が叫ぶと同時に、その腹部のハッチが開く。

「ミサイル。いつでもいけますー！」

少女の声に甲児はひとつ頷いて、その弾頭を発射する。

「こいつで吹き飛ば、ギガントミサイル！」

放たれたミサイルは、蟲のど真ん中で爆発。たちまち蟲達は蒸発していく。

そして、魔神はついに真ゲッターロボと並び立った。

「甲児君、その機体は……？」

大介が、恐る恐る尋ねる。それに対し甲児は、いつもの人好きする笑顔で応えるのだった。

「こいつはマジンカイザー。お爺ちゃんが作り上げ、お父さんが改良し、そしてさやかとリサが護ってくれた……マジンガーZの進化した姿だ！」

魔神皇帝。マジンカイザーは猛々しく吼えた。

……

……

……

光子力研究所で兜甲児を見た時、それはたしかにマジンガーZの姿をしていた。

ホバーパイルダーも、知っている姿だった。

甲児は、かつてのインフイニティとの戦いの時と同じようにパイルダーの後部座席に

リサを乗せ、マジンガーを出撃させる。

「マジン、ゴー!」

旧光子力研究所のプールがせり上がり、マジンガーが姿を現す。しかし、それだけではマジンガーはただの巨像にすぎない。マジンガーZは、その頭部にホバーパイルダーを合体させ、人の頭脳を加える儀式を経て神にも悪魔にもなれる力を人に齎すのだ。

「パイルダー・オン!」

そして、その儀式……ホバーパイルダーとマジンガーが合体したその時に、それは起こった。

突如、マジンガーZの光子力エネルギーが急激に上がっていく。甲児の乗ったマジンガーZには、そのような機能はなかったはずだ。

「これは……!」

自分の手足とも言うべきマジンガーに、自分の知らない機能がある。その事実には動揺する甲児。しかし、リサはそれを知っているようで冷静に、モニタの表示を確認している。

「空中元素固定装置、正常に起動。マジンフラッシュ・オールグリーン!」

「空中元素固定装置……!?!」

甲児も、噂には聞いたことがあった。祖父と親交のあった科学者・如月博士が発明し

たと言われている機械。大気中に存在するあらゆる元素を抽出し、物質化することができるというそれを最初に聞いたのは、祖父の存命時代だった。

『お爺ちゃん、そんなの錬金術だぜ。如月博士は賢者の石でも作ったつてのだよ』

『さあのお。ワシも現物を見たわけでもないし、如月も信用できる人間にしかその研究を打ち明けておらんからな』

そんな会話をしたことを、思い出す。

その空中元素固定装置が、マジンガーの中に組み込まれているとでも言うのだろうか。

「どういふことだ、リサー！」

甲児は、リサーに説明を促した。

「はい。世界中がゲッター線に汚染される中、お父さんの下にある女性が空中元素固定装置をもたらせてくれたんです。これを使って、ゲッター線を抽出、物質化してほしいと。お父さんとお母さんはその方の遺志を組み、マジンガーに空中元素固定装置を搭載しました。そして……空中元素固定装置は暴走し、無尽蔵にゲッター線を抽出、吸収。そして、光子力とゲッター線が交わって異様な変化を促したんです」

マジンガーの暴走。それについてリサーは口を開こうとしなかった。しかし、それで甲児は察するものがあつた。

きつと、その暴走でこの世界の自分とさやかは……。

「……そうか」

だから甲児はそれ以上暴走の件には触れず、別の部分に触れる。

「空中元素固定装置をもたらしした女性の名前は？」

「ハニー……如月ハニーさんといいます」

如月。その名字だけで十分だった。この空中元素固定装置は、本物だと確信できる。

なぜなら、甲児の乗るパイルダーもろともマジンガーZは変貌を遂げているのだから。

「お父さんは、このマジンガーをこう称しました。『神さえ超え、悪魔をも斃す力』と」

「……神さえ超え、悪魔をも斃す力」

甲児がそれを反芻した時、突如リサが自らの胸を抑える。

「ウツ……!?!」

「リサツ!?!」

苦しみ出すリサ。甲児がそれを受け止めようとするが、リサはそれを「大丈夫です」と制し、呼吸を落ち着けながら話を続ける。

「……私の身体も、ゲッター線に汚染されています。たぶん、もう長くないんです。だから……私は、お父さんが来るのを待ってました」

「……俺が来るのが、わかってたのか？」

「はい……夢を見ましたから。零の魔神と、ゲッターエンペラーの夢を」

それが何を意味することか、甲児には理解できなかった。しかし、リサが命を賭けてこの魔神を自分に託してくれたことだけは、理解できる。

「……………」いつの名前は？」

「魔神皇帝、マジンカイザーです！」

リサが高らかにその名を呼ぶ。それと同時にマジンガーZの変身は、終わっていた。

マジンガーZよりも遥かにマツシブで、そして刺々しく、その剛腕はまさに星をも砕けそうだった。

そして、その胸には「Z」の文字が煌めいている。それはきつと、この魔神が自分とマジンガーZの絆を引き継ぐ存在であるのだと、甲児は感じていた。

魔神皇帝、マジンカイザー。その勇姿が今ここに、立ち上がった。

「お父さん！ 上空から、巨大な触手が伸びてきています！」

リサが叫ぶ。甲児が確認すると、それは無数の蟲が合体してできた触腕だった。そいつは、マジンカイザーを狙っているかのようにこちらへ伸びてくる。

「操縦系統はすべて、マジンガーZと同じ。リサ、お前は空中元素固定装置の制御を頼む

！」

「了解！」

伸びてくる触腕に、マジンカイザーの瞳が輝く。空中元素固定装置は、大気中の成分を無尽蔵に光子力へと変換していく。それが集中し、マジンカイザーの目から放たれたのだ。

「光子力ビーム！」

その叫びと同時に、光が走る。その光に飲み込まれた蟲達は忽ち消滅し、そのあとは何も残らない。

「……すげえ」

マジンガーZどころか、真ゲッターロボにも勝るパワーを感じ、甲児は戦慄する。

「どうやら、空に何かがあるみたいだな！」

マジンカイザーを走らせ、甲児はマジンガーZと変わらぬ操縦法でジャンプさせる。そして、研究所から放たれたジェットスクランダーと合体。スクランダー・クロスと同時にジェットスクランダーも、より巨大な翼へと変化した。

「すげえ、カイザースクランダーか！」

空を走るように加速する魔神皇帝。マジンカイザーは真の主人の下で、ついに解き放たれたのだ。

.....

.....

.....

そうして今、マジンカイザーと真ゲッターロボが並び立っている。

「竜馬、あのデカイ蛹はなんなんだ」

「わからねえが、俺達を仕留めるのが目的でこの次元に来たらしい」

そう言い合う甲児と竜馬。リサは真ゲッターロボの姿を、ゲッター聖ドラゴンを、不安そうな瞳でそれを見つめている。

「……大丈夫だよ」

そんな様子を悟って、甲児。

「……お父さん」

「竜馬達は、俺と一緒に悪い奴らから世界を守ってきたんだ。こいつらならきつと、ゲッターを正しい進化に導いてくれる」

そう語りかける甲児の優しい声にリサはひとつ頷いて、改めて真ゲッターロボを見る。

「はじめまして。私はマジンカイザーのコ・パイロットのリサと言います。よろしくお

願います」

ペコリ、とお辞儀をするリサに、竜馬は「へっ、せいぜい足引つ張んなよ！」と檄を飛ばして真ゲッターを巨大な蛹目掛けて走らせる。

「甲児。お前がこの世界に来た時、訳のわからねえ量の光子力とゲッター線があつた！」
蛹から放たれる蟲をゲッタービームで破裂させながら、竜馬。

「ああ。このマジンカイザーと真ゲッターロボなら、あの時と同じかそれ以上の光子力とゲッター線を引き出せるはずだ！」

マジンカイザーも、迫り来る蟲をスクランダーで斬り伏せながら突き進む。

「マジンカイザーと真ゲッターのフルパワーを、あいつにぶつけるぞ。いいな！」
「おうー！」

2人の応酬を聞いていたのだろうか、蛹はさらに昆虫を吐き出していく。しかし、その蟲達は突如コントロールを失ったかのように動きが鈍くなり、マジンカイザーに、真ゲッターに近寄ることすらできなかつた。

「反重力ストーム！」

スパイザーモードのグレンダイザーが、胸の放射板から放つた重力光線。それを受けた蟲達はまさに重力を失い動けなかつたのだ。

「大介さん！」

「雑魚は僕に任せてくれ！」

「恩に着るぜ！」

そして、真ゲッターは翼を大きくはためかせて巨大な蛹の右に回る。

「必ず、もとの世界に戻るぞ！」

マジンカイザーは、巨大なカイザースクランダーを全力で噴かし蛹の左に回った。

隼人、弁慶。ゲッターの力を信じようぜ！

「ああ、感情を込めろ。リヨウ！」

「こうなりや一蓮托生だ。任せるぞ！」

今、真ゲッターとひとつとなっていた3人にはわかっていった。この真ゲッターロボが、どういうものなのか。ひとつとなった3つの心。その意識を集中させ、両腕にゲッターエネルギーを込めていく。ゲッターエネルギーは、球状のエネルギーボールとなり、真ゲッターの中で大きくなっていく。

「お父さん。光子出力、200%を突破。いけます！」

「なあ、リサ。向こうに行ったら、そのお父さん……つていうのはやめてくれないか？」

「え？」

キョトン。とするリサ。甲児は照れ臭そうに、言葉を続ける。

「実はさ、向こうではリサはこれから生まれるんだ。あと6ヶ月……かな？」

甲児の言葉聞いて、リサは一瞬押し黙った。その間にもマジンカイザーは、光子力を熱に変換していく。

「私は、お父さんとお母さんの娘です。だから……ちゃんと娘として接してくれるなら、いいですよ?」

「ああ。当然だ!」

甲児の答えには、一切の澱みがない。それを聞いて、リサは安心したように頷いた。そして、

「では改めて……いつでもいけます、ご主人様!」

ご主人様。かつて甲児がアンドロイドのリサにそう呼ばれていたのを思い出し、甲児は苦笑と共にさげんだ。

「行くぜ、ファイヤーブラスタアアアアツ!!」

マジンカイザーの胸の放熱版が輝き、超高熱の光を照射する。ファイヤーブラスタア。空中元素固定装置により無尽蔵の光子力を熱に変換していくそれは、マジンガーZのブレストファイヤーを遥かに上回る出力を誇っていた。

そして、真ゲッターも集めたゲッターエネルギーを解放する。

「ストナーアアアアアアアアツサンシャイイイイイッ!!」

球体を解き放ち、巨大な蛹にぶつける。ストナーサンシャインは、ゲッター線の塊を

直接相手にぶつけ、内部爆発を起こす必殺技だ。

おそらくは、早乙女博士も知らない機能。真ゲッターロボのスペックが100%発揮できる状態ではじめて使用可能な切り札。

ファイヤーブラスターと、ストナーサンシャイン。2つの必殺兵器を受けた蛹はその高熱で溶け、ゲッター線で膨張しそして……弾けて消えた。

まるで核爆発のような強烈な光。直視すれば目を焼かれるだろう光が、その場にいた者達を襲い、全員は一瞬目を閉じた。

そして、光が収まると……。

「へっ、やったぜ」

「ああー」

空には黒い、昏い穴が空いている。

『……………』

ゲッター聖ドラゴンは、無言。

「俺達に行くぜ」

竜馬は、ボソリと言葉を吐き捨て真ゲッターを飛ばす。しかし、ゲッター聖ドラゴンはそれに何も答えることはなかった。

「……………あばよ、ダチ公」

そう、小さく言葉を吐いた。竜馬には、わかっていた。あの聖ドラゴンの中に、誰がいるのか。

しかし、それを説明しようとするれば永劫の時間が必要になるだろう。そして、再会の時はすぐそこまで迫っている。

だから、真ゲッターは振り返らずに虚空の穴へと飛び込んだ。

「さあ、俺たちも急ごう！」

「ああー！」

マジンカイザーと、グレンダイザーも続く。

そして3体のマシンが穴の中へ消えると同時、天を裂いた虚無の世界への入り口は……或いは虚無の世界からの出口は、静かに消えた。

第四話 『絶闘!』 Aパート

偉大な勇者が、空を駆ける。その漆黑と鉄色の勇者は目の前の異形を前に怯むことなく、その剣を突き刺していた。

「gyaaaaaa!?!」

異形の悪魔が、絶叫を上げる。

「滅びろ、デーモン!」

勇者は稲妻を剣に落とし、異形はその核を貫かれ、泡のように溶けていった。

「……………こちら鉄也、任務完了!」

「ありがとう、鉄也さん。研究所に戻って」

通信越しに、新光光子研究所の兜さやか……書類やら何やらが面倒なので今でも公的には弓さやか所長からの返答を聞いて、偉大な勇者・グレートマジンガーのパイロット……剣鉄也は深く息を吐いた。

兜甲児とデューク・フリード、そしてゲッターチームがバードス島で姿を消してから、一週間になる。その間にもバードス島のゲッタードラゴンは成長を続けており、そしてドラゴンを狙うように、デーモンは現れていた。

デーモンが無鉄砲にドラゴンを狙うのなら、まだいい。しかしデーモンの中には頭のいいやつがいるらしく、統合軍の軍事拠点や、世界中の要所に一人のデーモンが紛れ込み……そして機動兵器と合体。メタルビーストとなって行動するのがパターンとなっていた。

何より厄介なのは、デーモンに合体された人間が統合軍に紛れ込んでいるという事実だった。軍の主要拠点でメタルビーストが発生している以上、その司令塔とでも言うべきデーモンは軍でもそれなり以上の地位にいる人物であることは間違いない。

デーモンの存在は、まだ一部の人間しか知らない。こんな化け物の存在を世間が知れば、人々はたちまちパニックとなるだろう。世界政府はデーモンについて、SSS級の情報封鎖を行っていた。だが、それもいつまで持つか。

「……問題は山積みか」

しかし、それを考えていても仕方がない。鉄也にできることは、人間の勝利を……友の帰還を信じて戦うことだけだった。

その先に、妻と息子が穏やかに暮らせる明日があると信じて。

それは、先の見えない戦いだった。

鉄也は、疲れていた。無理もない。既に一週間、スクランブルがかからぬ日はないのだから。

唯一マシンと言えるのは、機動性を生かすために現在は新光子力研究所に拠点を置いて
いることである。馴染みの仲間達と共に戦っているという事実だけが、今の鉄也には慰
めだった。

鉄也は周囲の様子を確認し、新光子力研究所までの距離を計算する。

周囲には敵影もなく、安全だった。鉄也はグレートマジンを自動操縦に切り替え
て、僅かな時間眠りについた。

.....

.....

.....

青年は、混濁する記憶を頼りに夜道を歩いていた。そこは、自分の……正確には自ら
の乗った人間の記憶の中にある道だ。人間の言葉に変換するなら通学路というら
しい。この人間……不動明が通っていた道。勇者アモンは、その道を歩きながら不動明
の記憶を反芻していた。

不動明はこの通学路を、女の子とふたりで歩いていた。強気で、お転婆で、だけど笑
顔の可愛い女の子。明るく、優しく、不動明はいつもその笑顔に癒されていた。そんな

記憶を勇者アモンは咀嚼する。

(こんな記憶に……)

その記憶が、不味い。闘争と凌辱と殺し合いに明け暮れていた勇者アモンにとって、その記憶はあまりにも違和感があった。

正確には、それを咀嚼するとき感じた心地よさが……安らぎ。それを感じてしまったことに勇者アモンは、恐怖していた。

「クソッ！ 何故だ！」

電柱に拳をブツけて、勇者アモンは叫んだ。

不動明を取り込んだ事で、勇者アモンは人間の知識を得た。彼とその仲間が愛機とするイチナナ式を取り込み、光子力の力を得た。

デーモン族の中でも有数の戦士であるアモンは、それで最強の戦士になったはずだったのだ。それなのに、なぜ。

「どうして、戦うたびに心が痛む！」

人間を殺した。牛久を喰らった。その事実を思い出すたびに涙が溢れる。こんなざまでは、戦えない。

「美樹……」

記憶の中の女の子の後ろ姿を思い、その名を読む。そんなこと、勇者アモンはしない。

しないのだ。しないはずだ。してはならないのだ。

残酷な、冷酷な、邪悪なデーモンの勇者がこのような……人間のような弱い心を持つなどあつてはならないのだから。

それでも、この息苦しさは治らない。それが腹立たしい。わけがわからない。

(アモン……)

心の奥底で、声がある。心などないデーモンのアモンの、胸の奥から。

それは、不動明の声だ。アモンが人間界での活動のための宿主として、最初に喰った人間。その肉体と頭脳を取り込むのが、目的だった。しかし、今アモンを苦しめているのがその不動明から奪ったものであると、アモンが不動明から得た知識が叫ぶ。

(アモン。お前は俺を取り込んだ時、同時に得ちまったみたいだな……)

「黙れ、黙れ……」

即ち、人間の心を。デーモンは、他の有機物無機物を取り込み合体することでその生物の強さを手に入れる。例えばライオンを取り込めば鋭い爪と牙。そして敏捷な筋肉を得るだろう。人間を取りこんだのは、その頭脳や記憶を得るためだ。

しかし、人間を取り込んだことでアモンが得てしまった人間の心は、戦いに昂るデーモンの気質と、それを嘆く人間の心を併せ持つてしまったらしい。

そして、よりによって喰らったはずの人間……不動明の意識は、アモンの中で生きて

いるようだった。

(アモン、お前はもうデーモンとしては戦えないよ。俺の心を消せない限り、お前はデーモンとしては失格なんだ)

「黙れ、不動明……」

不動明が慣れ親しんだ通学路で、不動明の姿をした悪魔は力なくうなだれていた。こんなはずでは、なかったのだ。

光子力の力を手に入れて、ゲッター線すらも取り込めば自分は、魔王ゼノンをも越える力を手に入れることができる。そう震え上がった自分がもはや、遠くに感じた。誰よりも強い力。それを得て思いの限り暴力を振るう。その快感を忘れたわけではない。それなのに、その度に傷付く人や、失われる命を思うと心が……あるはずのない、あつてはならないものが痛む。

それは、敗北だった。

偉大な勇者・グレートマジンガーを圧倒した地獄の悪魔は今、ちつぽけな人間に負けたのだ。

不動明という、殺したはずの人間に。

「チクシヨウ……」

踞り、アモンが呻いた。

「……明くん？」

ふと、不動明を呼ぶ懐かしく、愛おしい声がある。あまりにリアルなその声に、とうとう幻聴までとアモンは自嘲げに笑った。そして、顔を上げる。

「……やつぱり、明くんだ！」

そこにいたのは紛れもなく、不動明の記憶の中にある女性だった。ショートボブの黒髪に、くりんとした瞳。学生時代は明よりも背が高くて、少しだけ明にとってそれはコンプレックスだった女の子。

「……美樹」

牧村美樹。両親のいない不動明を引き取って、一つ屋根の下で過ごした牧村家の長女。不動明が恋してやまなかった女性が、そこにいた。

「どうしたの明くん。たしか軍でのお仕事があるって……」

不思議そうな様子で、話しかける美樹。不動明は、親友の飛鳥了大佐に誘われる形で統合軍に入隊した過去を持っていると、アモンは確認している。明は主に予備役だが、飛鳥了の私兵として特殊な任務を受ける機会が多かったようだ。

それを美樹も知っていて、なぜ明がここにいるのかと疑問に思っているのだと、アモンは理解する。

「……ああ、少しの間だけど、休暇ができたんだ」

嘘をついた。「不動明はこの勇者アモンが喰った」と、そういうえげきつと美樹は悲しむだろう。だからアモンは咄嗟に不動明のフリをしてみた。

本来なら、牧村美樹が悲しもうが絶望しようがアモンには関係ないはずだった。しかし、それでもなぜか美樹を悲しませるのが嫌だった。

「それで、美樹ちゃんに会いに行こうと思つてさ……」

不動明の演技を続けるアモン。美樹は、明が悪魔に乗っ取られていることなど気づいでないだろう様子で、嬉しそうに微笑むのだった。

「そっか、そっか。えへへ」

明が立ち上がると、美樹は明の……アモンの胸へその華奢な身体を預けるようにもたれかかる。

「私も、明くんに会いたかったよ」

アモンは、そんな美樹の肩を抱けなかった。美樹が会いたがっているのは、自分ではないのだから。自分は、不動明の身体を持っていても不動明ではないのだから。不動明を殺したのは、他ならない自分なのだから。

「……明くん？」

そんなアモンを、美樹は怪訝そうに見つめる。

「いや、なんでもない。行こうか、美樹ちゃん」

悟られまいとアモンは、精一杯不動明の演技をした、記憶の中にある不動明を全力で作り、笑った。

「うん！ パパとママとタレちゃんも、明くんに会いたがつてるよ」

「そういえば、タレちゃんももう中学生か……」

牧村美樹を守るように車道側を歩きながら、アモンは思った。

俺は、誰だ……と。

……

……

……

「こちらコマンド3、ドラゴンに異常なし」

兜シローは、現地に待機するスカーレット・ヒビキ中尉に報告する。スカーレット・ヒビキはその報告を確認すると頷いて、声を上げた。

「了解したコマンド3、あとは我々がやる。お前は次の出撃まで休養を取れ」

「了解！」

兜シローは今、早乙女研究所の開発した偵察メカ・コマンドドローンに操作を担当し

ていた。光子力マシンであるイチナナ式は、世界的に見ても生産台数が限られてる。しかも、その多くが「ゴラーゴン事件」でロストしており、現在シローの下に回せるイチナナ式は存在しない。それでも、何かしていなければ気が収まらないシローは、コマンドマシンをベースに発展させたコマンドドローンでのドラゴン調査班に志願したのだ。

コマンドドローンは、コマンドマシン同様の装備に加えて、映像やデータをゲッター線通信で直に早乙女研究所に送ることができる。新光光子力研究所はこのコマンドドローンで、早乙女研究所と直に情報のやりとりをしていた。そのため、日本にいながら、エーゲ海のバードス島の様子を見ることができた。

現地でのドラゴン観察は、危険が伴う。そのため、先にドローンでの調査を行なっているというのが現状だ。スカーレット・ヒビキ率いるスカルフォース小隊は、行方不明の真ゲッター及びグレンダイザーの捜索と、ドラゴンに何かがあったときすぐに対応できる戦力として現地に拠点を作り作戦行動をしてくれている。

それなのに、自分は比較的安全な日本でドローンの操作。鉄也と元気は相棒の魔神でデーモンと戦っているというのに。その事実には歯痒さを覚えながらもシローは、今は自分にできることをしよう。と心に決めていた。

それでも、苛立ちは募る。

「ふう……」

ため息をひとつつき、ドローン操作用のHMDを頭から外すシロー。

「……今日は、ボスのラーメンでも食べに行こうかな」

そう呟いて、シローはドローン用の管制室のドアを開き、廊下へ出た。と、その時だった。前を見ていなかったのが悪いのだろう。或いは、ドアのせいで見えにくくなっていたのも理由にはある。ともあれ……。

「ひゃっ!？」

「うわっ!」

何かと、激突した。激突した時に、柔らかい感触があった。しかしそれが何かを確認する間も無く、激突したそれは大きく跳ねて、尻餅をついている。

「う……いたた……」

「(づ)。(づ)めん!」

そう言つて謝るシロー。相手は、女性だった。研究所の制服をきているので、新光子力研究所の所員なのだろう。しかし、若い。まだ少女と言つてもよい年齢に見えた。若くして軍属になったシローと同じくらいか。或いは高校生くらいにも見える。ともかく、28の若さで研究所の所長となつたさやかや、一端の考古学者として活動しているミチルよりも歳下に見えた。

その肌は白い。まるで雪のように白く、きめの細かい肌。髪は薄めの金髪を長く伸ば

しており、モデルのように整った姿形をした少女。

「……………」

シローは、その姿に見惚れていた。いや、その少女は正確に言えば、あまりにも似ていたのだ。

「……………ローレライ?」

兜シローの、初恋の少女に。もしローレライが人間で、シローと共に歳を重ねていたらばきつと、こんな感じになったのではないかと思える少女。それが、シローの目の前にいる。

「うう……………それは、私の叔母さんですね」

少女は、「ローレライ」という言葉にそう返して立ち上がった。

「え……………」

困惑する。ローレライは、ロボットだった。ハイブリット・シユトロハイム博士に作られたロボット。たとえそれがシローの初恋で、そのせいで今尚ガールフレンドの一人も作れない兜シローの、憧憬だ。

ローレライを叔母と呼んだ女の子は、シローへ屈託ない笑みを向ける。

「はじめまして、私は聖羅。如月聖羅といいます。セーラって、呼んでね」

その笑顔も、ローレライそっくりだった。

.....
.....
.....

「アンドロイド？」

「正確には少し違うの。私のママはアンドロイドだけど、私はアンドロイドのママと人間のパパの間にできたハーフだから……。で、アンドロイドのママを作るためにママのパパ……つまりおじいちゃん、シュトロハイム博士の研究データを参考にしたらしいわ」

光子力研究所から徒歩で20分。商店街の片隅にボスラーメンはある。今、シローはカウンター席に座りながら隣でラーメンに目を輝かせる少女・如月セーラの話聞いていた。

曰く、如月聖羅はアンドロイドと人間のハーフであり、人として成長し歳を重ねている。一方で、セーラの母でもあるアンドロイド……如月ハニーは、その製造過程にローレイとの共通点があるらしい。

「……………ふーん」

俄かには、信じ難い。しかし、嘘を言っているようには聞こえなかった。

「そんなキミが、どうして光子力研究所に?」

半チャーハンを掬いながら、シローが問う。しかしセーラは味玉に夢中で、「美味しい! 口の中で蕩けて、黄身にスープが染み込んで!」とまるで子供のように感激していた。

「……はは」

その笑顔に、他意はない。そう、なぜだかシローは確信できる。

「へっ、シローちゃんも隅におけないじゃないの。こんな可愛い子とお近づきになっちゃってまあ!」

カウンターの向こう、ラーメンを茹でながらボス……仲間からそう呼ばれておりシローも甲児もそう呼ぶせいで本名を知らない大男が、冷やかしてくる。

「うるせえ、ボスは仕事しろ!」

「今してんだろ!」

こんな軽口を叩けるのも、古い付き合い故だろう。憂鬱なことが続くが、ボスがこうしてラーメンを振る舞って昔のように接してくれるのは、有り難かった。

「……あつ、私が光子力研究所にきた理由よね」

味玉を堪能していたセーラが、それをようやく飲み込んで口を開く。

「私がここの配属になったのは、ママの勧めなの」

「……君のお母さんの？」

「うん。半年前に、すごい大きな事件があったでしょ」

忘れもしない。「ゴラーゴン事件」だ。グレートマジンガーと剣鉄也が復活したドクターヘルに囚われ、ミケーネの遺産・インフイニティによる世界改編・ゴラーゴンをマジンガーZが阻止した戦い。あの時、シローも最前線にいたのだから。

「あの時にね、ママが言ってたの。私がかきつと、必要になる時が来るって」

「それは……」

セーラの、特殊な生い立ち故のことか。そう聞こうとして、躊躇ってしまった。さすがに、そこまで踏み込んだ話になるとはシローも予想していなかったのだ。

「私ね、ずっと自分が何者なのかわからないでいたの。ママはアンドロイドで、パパは人間。じゃあ私はどっち？ って。DNA上は人間だけど、私の顔もスタイルもママ似。アンドロイドのDNAなんて、おかしいのよね」

そう零すセーラは、先程までの無邪気さとは一転してしおらしい。その横顔にドギマギしながら、シローはチャーハンを口に入れて飲み込んだ。ボスは、そんなシローをニヤニヤしながら眺めている。

「……………セーラは、セーラだよ」

なんとか、シローはそれだけ口にした。

「え……………」

「人間かアンドロイドかなんてどうでもいい……………なんて、他人が言っちゃいけないけどさ。それでも、少なくとも俺にとってはセーラは如月聖羅っていう人格のある個人なんだ。って……………」

言っていて何だか恥ずかしくなって、途中からシローの言葉はしどろもどろになっていった。そんな様子を見てセーラは、クスリと笑う。

「ふふっ、ふふふっ」

「な、なんだよ……………」

「何でもないので、シローって優しいのね」

照れ臭くなって、シローはそれを誤魔化すようにチャーハンを掻っ込んだ。

……………

……………

……………

「……それで、兜達が行方不明っていうのはマジなのか？」

他に客がないことを確認して、ボスはシローに問う。

「ああ。アニキとゲッターチーム、それとデューク・フリードって人がバードス島でマシンごと消息を絶つたんだ。マシンごと突然消えて、反応なし。生きているか死んじまつたのかもわかんねえ」

それはシローにとつて、面白くない事態だった。しかし、事実は事実。

「なあるほどな……こいつあ、のつびきならねえ事態になつてゐることか」

ボスは、かつて自分のロボット・ボスボロットで甲児達と共に戦った仲間だ。そのボロットも、このラーメン屋の地下に隠されている。いざとなったら戦うつもりなのだろう。しかし、ボロットでは相手にならないのは、シローが肌で感じていた。

「ボス、気持ちには有難いけどさ……」

シローが、そう言おうとした時である。突如、備え付けのブラウン管テレビの映像が歪み、ザザザという砂嵐の音が店内に響く。

「あつ、おいこいつ高かつたんだぞー！」

ボスが慌てて叫んだ次の瞬間、画面が切り替わった。そして、そこには。

褐色肌のニュースキヤスターが映っていた。最近、全世界放送で流れる放送はこの男性キヤスターが担当している。有名なニュースキヤスター。しかし、先程までテレビに

映っていたのは3人組のアイドルユニットだったはずだ。国営放送のニュースではない。

「皆さん、戦争が始まりました」

男性キヤスターは、神妙な面持ちで確かに、そう言った。

「戦争?」

そんなバカな、一体どこどこが。そんな疑問を口にするより先に、褐色肌のキヤスターは突如、胸を抑えて苦しみ始める。そして、全身の筋肉がブクブクと膨張していく。特に肩と首の間から、何かが競り上がっている。

その何かはたちまち巨大化していき、瞬く間にキヤスターと同じ顔が3つ並ぶ。

「人類はこれより、我らデーモン族との戦争に突入します。ハルマゲドンの始まりです!」

正面の顔は、歪んだ笑顔をたたえていた。右の顔は、何が悲しいのか泣き叫んでいた。左の顔は、無表情のまま視線だけをこちらに向けていた。

「な、なんだありや!」

「きやあつ!」

ボスとセーラが、それぞれに絶叫する。シローは無言のまま、戦慄していた。敵が、デーモンがここまで侵略をしていたのだ。

ニュースキャスターに取り憑いたデーモンは、忽ちその姿を巨大化させていった。そしてそこで、テレビモニタは再び砂嵐に切り替わる。

『人間どもよ！』

直後、シロー達の脳に直接語りかけるように、昏い声が響いた。

「な、何だ……!?!」

「ボ、ボス！」

「あれを!?!」

ボスの子分で、今は共にラーメン屋を営むヌケとムチャが店に飛び込んできた。2人が指差すのは、空。

「な、なんだってんだ!?!」

ボスは咄嗟に、店の外へ出る。シローとセーラも、それに続く。

そこに、あつたものは。

邪悪なオブジェだった。

悪という概念の化身だった。

巨大な、ただ巨大な。想像力を越えた巨大な悪魔が、遠くに見える。しかし、それは本当に遠くなのだろうか。インフィニティよりも遙かに巨大なそれは、人間の想像しうるあらゆる悪魔の姿を持ち、同時にあらゆる悪魔の創作伝承とも違う姿をしていた。

悪魔という名前から感じるパブリックイメージにある山羊のツノのようなもの、あった。だから、悪魔だと理解できた。

しかし、それ以外の全てが異質だった。

胴体には大きな顔。それはまるで、ミケーネ帝国の暗黒大將軍のようでもあった。しかし、その上に般若の形相をした邪悪な貌をもち、右側には女のような貌を持っていた。そして、左側には醜悪な男の貌。

「あつ……!?!」

あの時映った、変わり果てたニユースキャスターの姿とその顔が、シローの中で符合した。

あれは、あのニユースキャスターに取り憑き、擬態していたデーモンなのだと思感が告げていた。そして、その巨大な声は、シロー達の脳に直接・声を響かせる。

『我が名はゼノン、魔王ゼノン!』

「魔王、ゼノン……?」

こいつが、デーモン族の王なのか。

『我らデーモン族の星地球を……よくも汚してくれたな人間どもよ!』

ゼノン。そう名乗った悪魔の王からは、確かな憎しみと怒りを感じる。見れば、あち

らこちらからドアを開け、その姿を見る人の姿。

「ゼノン？」

「悪魔！」

既に、人々は恐怖と混乱に支配されていた。

「……シロー」

「……………」

ぎゅつ、とシローは、セーラの手を握った。恐怖に、負けなかったために。セーラの手は温かくて、確かな体温を感じる。

『人類に告ぐ、人類に告ぐ！ 我らはお前達が悪魔と呼ぶ存在……デーモンなり！』

それは、挑戦状だった。今まで世界の裏側で暗躍を続けドラゴンを狙っていたデーモンの、人間社会への挑戦だった。

『虫ケラの分際で地球の王者を振る舞い、この地球を汚した人間どもに、我らデーモンが裁きを下す！』

『お前達人間は、あのハチユウ人類のように滅ぶのだ！ 人間は、地球に生きていてはならぬ！』

ゼノンは告げる。それは、宣戦布告。

『一人残らず、人間が死に絶えるまで！ 我らデーモンはお前達を滅ぼすだろう！』

それは、呪詛。呪詛の言葉をこの星に生きる全ての人々に植え付けて魔王ゼノンは大
きく嗤い……消えた。

「…………お、おい。ありやあ…………」

「ああ。あれが今俺達が戦ってる敵、デーモン族だ。クソツ、こんな時にアニキ達は
…………」

いや、まさか。最悪の想像がシローの脳裏をよぎった。このタイミングでデーモンが
姿を表したのは、グレンダイザーと真ゲッターロボを倒したからではなからうか。

そして、デーモンの合体能力でグレンダイザーと真ゲッターを手に入れたとしたら
…………。

(人類に、勝ち目はない…………!)

逃げたい。怖い。あの時だって元気が助けてくれなければ死んでいたのに。それな
のに。

「…………シロー」

心配そうに、セーラが呟いた。そして、その時だった。

空に、異形の軍勢。メカを取り込んだ悪魔・メタルビーストの群れが、迫っていた。

「あ、ああ…………!」

脳裏にフラッシュバックする。イチナナ式を失ったあの時の感覚が蘇る。

「シロー！」

セーラが、きつく手を握って呼びかけてくれないければシローは、発狂していたかもしれない。

「あ、ああ……とにかく、避難を」

「こっちだ！」

ボスが、2人の手を引いて店内へと引っ張っていった。

……

……

……

メタルビースト軍団を指揮する上級デーモン・シレーヌは苛立っていた。人間の軍とやらは脆く、デーモン軍団の敵ではない。

「そこだ！」

シレーヌが鋼鉄の翼をはためかせると、ロボット軍団はその突風に突き上げられてしまう。そこを配下のデーモン軍団が襲うだけでいい。

あまりにも、手応えがなかった。

「……弱い。弱い! 弱すぎる!」

あの勇者アモンを、シレーヌ宿命のライバルを倒した人間とはこんなものか。

「どこかに、本物の戦士はいないのか!」

怒りに任せ、メタルビースト・シレーヌは戦っていた。

「……シレーヌ」

側近の部下、カイムはそのシレーヌの様子を見ながら、機械獣を取り込んだその巨体で歩兵を踏み潰していく。

「だったら、俺達が相手だ!」

シレーヌの軍団を前に、果敢に飛び込んでいくものがいた。漆黒のマントを羽織る黒いゲッターロボと、紅の翼を持つ偉大な魔神。

報告にあつた、ブラックゲッターとグレートマジンガー。ミケーネ帝国や恐竜帝国を滅亡に追い込んだと伝え聞く勇者が、シレーヌの前に姿を表していた。

「お前達が、人間の中でも名だたる勇者か!」

シレーヌは、鳥のような鋭い爪と優雅な羽根を持ち、統合軍のビューナスAを取り込んだメタルビーストだった。その胸部から、シレーヌはミサイルを放つ。ブラックゲッターとグレートマジンガーはそのミサイルを避けて、回り込むようにしてシレーヌへと

「お前の相手は俺だ!」

援護に回ろうとしたブラックゲッターを、カイムはその巨大なツノからビームを放ち近づけさせない。

「てめえ……上等だ!」

それを挑戦と受け取り、ゲッタートマホークを構えて元気はカイムへと向かっていった。

グレートとシレーヌの激突は、熾烈を極めていた。シレーヌの鉤爪はマジンガーブレードをもともせず、逆にブレードにヒビが入る。

「アトミックパンチ!」

それを危険と判断し、鉄也はブレードを構えたその手をアトミックパンチで射出した。

「何っ!?!」

ロケット噴射の推力で、シレーヌはグレートから引き剥がされる。そして、距離をとったグレートはもう片方の腕の指にエネルギーを溜めていた。

「貴様っ!」

再び、グレートへ向いたその瞬間に、そのエネルギーは解放される。

「必殺。パワー、サンダーブ레이크！」

光子力エネルギーを雷に変換しての、グレートマジンガーの必殺武器。それが、シレーヌ目掛けて光の速度で突き抜けた。しかし、シレーヌはそれを瞬時に見切り、僅かに自らの身体を逸らして回避する。

「バカなっ!?!」

当たれば必殺。しかし、その光はシレーヌに届かなかった。

「フ、フフフ……」

対するシレーヌは、昂りを隠せないでいる。人間の中にも、こんな強敵がいただなんて。しかし、スピードならこちらが上。そう判断し、シレーヌは再びグレートへ飛び込んだ。

「何度やっても無駄だ！ プレストバーン！」

真正面から向かってくるシレーヌを、グレートはプレストバーンで迎撃する。その熱を浴びながら、シレーヌは突っ込んだ。

「何!?!」

プレストバーンも、グレートの必殺兵器。まともに受けてはただでは済まない。しかし、それでもシレーヌはダメージを覚悟でそのままグレートへと食らい付き、そしてその肩に鉤爪を喰らわせたのだ。そして、直後。突然プレストバーンがその機能を停止さ

せる。

「これは……グアアアアアアアアッ!」

驚く間も無く、鉄也の全身に電流が走った。

「ホホホホホ! このシレーヌのツメにはね、特殊な電流を流す力があるのよ!」

「で、電流……だと……」

衝撃は治った。しかし身体の痺れがとれない。必死でグレートグレートの武装ボタンを押そうとしても、指が届かない。

「このツメに食らいつかれば、たちまち機能を狂わされ身体の自由が効かなくなるのさ。メカだろうが、生き物だろうがね!」

「っ……………」

ぬかった。と鉄也は痛感する。先程マジンガーブレードが刃こぼれを起こしたときに気付くべきだった。敵のツメに気をつけるべき。と。しかし、後悔しても遅い。既にグレートグレートは身体の自由を奪われ、その電流が通ってしまったブレーションコンドルも、脱出不能だろう。

何より、鉄也の身体が満足に動かない。

万事休すだった。

「このまま貴様に、最大の屈辱を与えてやるわ!」

そう言って、シレーヌはツメを深くグレートにめりこませたまま空を飛び回り、周囲のビルや建造物にグレートマシンガーをぶつけていく。崩れ落ちるビルを、鉄也は見ていることしかできない。その瓦礫が、どれだけの人を殺すのか、考えたくもない。「やめろ！　一思いに殺せ！」

鉄也が叫んだ。しかし、シレーヌはそれを嘲笑うように残酷な笑みを浮かべる。

「どうせ人間は皆死ぬ。早いか遅いかの違いしかない。お前はこのシレーヌに刃向かった勇者として、特等席で拝ませてあげるわ。人類の滅びの時をね！」

「鉄也！　クツ……」

ブラックゲッターが助けに回ろうにも、巨大な4速歩行のメタルビースト……カイムは、その重量とパワーでブラックゲッターを果敢に攻め、未熟な元気ではそれを躲すので精一杯。とても鉄也を助けに向かえない。

「クソツ……」

元気が毒付いた時だった。

突如、熱線がシレーヌを襲ったのは。

「何!？」

咄嗟に、シレーヌはグレートを落としてしまう。その瞬間、身体の自由が戻った鉄也はグレートを取り戻し、グレートブーメランをシレーヌへ投げつけた。

「なっ!?!」

ブーメランは、シレーヌの左腕を貫き、斬り落とす。オイルと血が混じった液体がドクドクと流れる中、シレーヌは熱線の主を睨んでいた。

「まさか、生きていたとはね……。どういふつもりかしら、アモン!」

「アモンだと!?!」

アモン。あの上空での戦いで鉄也を窮地に陥れた悪魔。イチナナ式を取り込み、光子力を悪魔の力にする邪悪。その名前をシレーヌは呼んだ。振り返り、鉄也は確認する。それは、確かにあの変貌したイチナナ式……。アモンだった。

.....

.....

.....

あの魔王ゼノンの宣戦布告を聞いた直後、勇者アモンは走っていた。

「悪魔だなんて……。明くん、怖い」

恐怖に怯える美樹の顔が、焼き付いて離れない。

「大丈夫だ美樹ちゃん。美樹ちゃんは安全な場所に避難してて。俺は……。軍人としての

務めを果たさなきゃいけないからさ」

そう言つて、走り出そうとした時に、腕を掴まれた。

「待つて、明くん」

「美樹ちゃん……」

「ごめん。でも……もう、会えない気がして」

そう言つて俯く美樹の肩を、アモンはそれでも抱くことができなかつた。当然だろう。

自分は、不動明ではないのだから。

不動明を殺した、醜い悪魔なのだから。

その正体を知れば、美樹は怯え、悲しみ、憎むだろう。だから、アモンは美樹のその顔を見つめて優しく……不動明がそうしていたように優しく微笑み、踵を返して駆けていった。

「俺は……」

『どうするんだ、アモン』

心の中で、不動明が囁く。悪魔すら屈服させたその心の持ち主は、アモンを憐れむように見つめている気がした。

「俺は……」

アモンの中に芽生えたものに、アモンは苦しんでいた。美樹と共に過ごした時間が、アモンの胸を締め付けた。美樹にとっては、不動明との最後の時間を。

「俺は、美樹の愛するものを奪ってしまった。だから……戦う。せめて美樹が生きる明日を守るために、俺は悪魔を狩る悪魔になるのだ!」

絶叫し、不動明の姿をした悪魔は段々とその姿を変質させていく。正確に言えば、悪魔としての本来の姿へ戻っていく。黒く、禍々しい悪魔の身体に。そして黒い翼で羽ばたき、空を舞う。

『……わかった。アモン』

アモンの中の不動明が、笑った。

『お前はもう、アモンじゃない。不動明の心と、勇者アモンの力を持つ戦士……デビルマンだ』

「デビルマン……」

その響きは、心地のいい響きだった。

『さあ、行こうデビルマン。俺達の愛した人が生きる、明日を救うために!』

「ああ!!」

不動明が、アモンが2つの心が叫ぶ。「デビル!」と。その叫びに呼応するように、アモンはその姿を変質させ、巨大化していく。

自らの中に取り込んだイチナナ式を原型に、勇者アモンの鎧へと変質させた姿。人間が、メタルビーストと呼ぶ形態へと。

白と黒だったアモンの姿は、緑色の鋼鉄の鎧へと変貌していた。そして、真紅の翼を翻し、勇者アモンは……否、デビルマンは飛ぶ。

「アモン！ 生きていたのか！」

眼前に、デーモンが迫った。それをデビルマンは右手で頭を掴み、そのまま頭部を引っこ抜き、空へと捨てる。

「アモンが！ アモンが裏切った!?!」

戦慄するデーモン達。デビルマンはそれを、無言で両の腕からビームを放ち蹂躪していった。

そして今、デビルマンはシレーヌと対峙している。

「どういうつもり、アモン?」

「シレーヌ……俺は、アモンじゃない」

そして、赤い翼を広げた悪魔人間は高らかに叫ぶのだった。

「俺の名はデビルマン！ 貴様らデーモンを、一人残らず地上から消すために生まれた、人の心を持つ悪魔だ！」

第四話 『絶闘!』 Bパート

「デビルマンだと?」

その場にいた誰もが、アモンに……デビルマンに注目していた。デーモンでありながら、デーモンに対立する者。その存在は、シレーヌにも、鉄也達にも想定外の事態だった。しかも、それがあのアモンだなどと。

「てめえ、そんなこと言つて背中からこっちをやる気か!」

「よせ、元氣」

凄む元氣を鉄也が制した。鉄也はアモンと刃を交えた事がある。だからこそ、感じるものがある。今のアモンは、あの時の凶暴な悪魔ではないと。いや、悪魔としての獰猛さや残虐さは確かに残っている。しかし、それとは違うものを感じるのだ。

そう、人間の心を。それが関係しているのかどうかはわからないが、メタルビーストとして巨大化したアモンは以前鉄也が戦った時の漆黒ではなく、緑色の装甲に守られている。

「アモン……いや、デビルマン。お前を、信じていいのか」

何より、鉄也は今助けられたのだ。もしアモンがこちらを殺すつもりならば、とうに

そうしていたはずだ。

「……信じてもらおうなどと、都合の良いことは言わないさ。だが、俺は人間を、その明日を守ると決めた。このデーモンの力は、そのために使うと!」

アモンの、デビルマンの声には一切の澁みがない。信じられる。そう鉄也は判断してひとつ頷いた。

「ならば、行くぞデビルマン!」

「おう!」

偉大な勇者グレートマジンガーが、ネーブルミサイルを斉射する。そのミサイルに隠れるようにしてデビルマンは飛び、シレーヌへと迫った。

「おのれ、ちよこざいな!」

ミサイルの雨を避ければ、デビルマンの接近を許す。二段構えの攻撃。シレーヌはその思惑を理解し、その翼で竜巻を巻き起こす。そして、その台風の目に隠れるように飛び込むとミサイルを迎え撃った。ミサイルは爆裂し、しかしシレーヌに届かない。そして、竜巻と一体化したシレーヌはよりその勢いを上げながらグレートマジンガーとデビルマンへ迫る。

「なるほどな、竜巻を壁にしてネーブルミサイルを防ぎ、そして同時に反撃の体制へ移行する……やってくれぬぜ。だがな!」

グレートマジンガーは、光子力のエネルギーを雷へ変換していく。グレートの必殺武器サンダーブレードを、竜巻目掛けて解き放つ。

「そんなもので、俺を止められると思うなよ!」

さらにデビルマンが吼える。その両手から放たれるデビルビームは熱光線。雷と灼熱その2つのエネルギーが、竜巻の中で混ざり合った。

「ウツアアアアアアアッ!」

シレーヌの悲鳴が渦の中に木霊する。確実に、効いている。そう判断した鉄也はさらにダメ押しの一撃のため、竜巻へと迫っていく。

「グレートブースター、射出!」

その叫びと共に、グレートのコクピットに「承認」の文字が点滅する。その直後、音を切り裂く速度でそれは、グレートの元へ駆けつけた。

グレートブースター。飛行用のスクランブルダッシュと別に存在する、グレートマジンガー専用の背面ブースター。その速度をコントロールできる鉄也の操縦技術と、グレートマジンガーのポテンシャルがあつてはじめて使用可能な質量兵器。空中でグレートブースターと合体したグレートは、竜巻の中心部に照準を合わせる。

「鉄也さん、行けるのか!?!」

相手は竜巻の中に隠れている。それを相手にグレートブースターを命中させるのは

相当な技術が必要だった。何せ、見えないのだから。元気が驚くのも無理はない。しかし、剣鉄也は戦闘のプロである。無理だと判断したことはしないのだ。

逆に、鉄也が行動を行ったということは即ち、可能であるということに他ならない。

「今のサンダーブレードとデビルビームの時、叫び声が反響した部分がある。そこを狙えば、外しはしない！」

鉄也が叫ぶと同時に、グレートマジンガーからブースターが切り離される。超速で駆け抜けるグレートブースターは、竜巻の中に飛び込みそして、それを切り裂いた。

「か……はっ……！」

嵐が霧散し、シレーヌの白い姿が露わになる。オイルと血に塗れたその姿は、上半身と下半身を真つ二つに分けられていた。

「見たか、こいつがグレートの威力だぜ！」

足を失ったシレーヌは、空中で落下し速度を上げる。しかし、まだ息がある。それを確認したデビルマンがシレーヌへ迫った。

「トドメだ！」

デビルチョップ。超合金Zの剛腕から繰り出されるそのパンチ力は、虫の息であるシレーヌを間違いなく絶命させる威力を持っていた。しかし、届かない。

「やらせはせずに、アモン！」

巨大な機械獣の身体と合体したメタルビースト・カイクがシレーヌを庇うように躍り出たのだ。デビルマンの拳をそのボディで受け止めながら、カイクはシレーヌの上半身を抱えて抱き締める。

「カイク、貴様っ！」

驚くデビルマン。

「何を……」

驚愕するシレーヌ。

「何をしているの、カイク！」

シレーヌはもはや、虫の息だった。今更助けられたところで生き延びられる確率は薄い。そのシレーヌを庇い今、カイクは確実にダメージを受けている。

「……シレーヌ。俺の身体を使え」

寡黙な悪魔が、そう言った。それに、シレーヌは首を横に振る。

「何を言うの。私はもう助からない！」

その状態で合体し、万が一シレーヌの意識が主導権を握れば、まだ生きているカイクも共倒れになる。

「わかっている。シレーヌ」

しかし、カイクは譲らない。

「おれは生き延びるつもりはない。シレーヌ、きみにただ勝ってほしい。勝利の喜びの中で死んでほしいだけだ。そのためならば俺は俺の命を、俺の力をきみに差し出そう」
寡黙な悪魔は静かに語る。その目にはただただ、血まみれのシレーヌが映っていた。

「カイク、どうして……」

「シレーヌ、たとえ血まみれでも君は美しい」

その言葉が、カイクの最後の言葉だった。シレーヌとカイクは直後、ドロドロと溶け始めていく。それはデーモンが他者の生命を取り込む力。とけてひとつになったシレーヌとカイクは、瞬く間に新たな姿を手に入れていた。

「これは……!」

「カイクの野郎!」

生まれ変わったその姿は、異様だった。機械獣を取り込みメタルビーストとなったカイクは、その姿をさらに凶暴な四足の獣へと変貌させていた。しかし、そこにカイクの顔はない。カイクの顔があった部分から、シレーヌの上半身が生えていた。まるで神話や空想の中のケンタウロス。人の姿からさらに離れた悪魔が、勇者達の前に立ち塞がっていた。

「デビルマン! そして人間の勇者達よ! カイクの命が、シレーヌの執念が、お前達を殺す!!」

.....
.....
.....

カイクと一体化シレーヌの強さは、圧巻の一言だった。その肩翼の翼の一振りです。ラックゲッターを薙ぎ払い、カイクから受け継がれた獣の足はデビルマンを蹴り飛ばし、そして手に持つ槍はグレートマジンガーを寄せ付けない。

「なんて奴だ……！」

合体により、大きさも格段に巨大化している。25メートルのグレートが地上からでは見上げなければならぬ巨体。そこから繰り出される槍は、蹴りは、竜巻は、スーパーロボット達を圧倒していた。

「どうした！ 人間の戦士達よ！ お前達の全力はこんなものか！」

「人間様を、舐めるんじやあねえ！」

ブラックゲッターがトマホークを突き立てるが、ゲッタートマホークはその強靱な装甲を前に碎けてしまう。

「クソッ、ならこいつはどうだ！」

腹部からのゲッタービーム。本来であればあらゆるメカを、生物を溶かす。恐竜帝国のメカザウルスのように生物とメカの複合であるデーモンには、過剰なゲッターエネルギーは猛毒でもあるはずだった。しかし、それを受けて尚シレーヌは動き続けている。

「なんでもありかよ、あいつ!」

「カイクの力を手に入れて、余計に強くなりやがったか……だがな!」

デビルマンが空高く飛翔する。カイクの身体を手に入れたことで飛べなくなったシレーヌを、上空から攻撃しようとしたのだ。

「デビルマン、そんな手を通じると思ったか!」

しかし、カイクから残された2本のツノから放たれた雷撃光線がデビルマンを襲う。

「ぐうあつ!」

雷撃はデビルマンのボディ全身にダメージ与え、そのショックでデビルマンは地へ落ちる。

「デビルマン!? クソツ……」

せめてグレートブースターが残っていれば、そう鉄也は歯噛みした。あれならばまだ、シレーヌを倒せる可能性があったというのに。

しかし、それは既に使用してしまった。一発限りの切り札なのだ。シレーヌは、残るわずかな命を燃やしながらかめ続ける。カイクという最強の鎧を身に纏ったシレーヌ

はもはや、防御を気にする必要もなかった。ただただ、自らの命果てるまで攻めるのみ。その足が、グレートを蹴り飛ばし大きく吹き飛んだ。ビルに激突し、瓦礫の中力なく垂れる。

「クソツ……！」

たしかに、本人が言ったように奴はもう時期死ぬかもしれない。しかし、今ここで自分たちが倒れたら奴が絶命するまでに一体何人の命が失われるだろう。だからこそ、鉄也は今ここで負けてはいけないのだ。しかし、指が動かない。グレートを動かすための力が出ない。

ブラックゲッターも、同じように大きなダメージを受けていた。元々、ゲッターロボは3人のパイロットが乗ってはじめて力を発揮する。元気が一人で操縦するブラックゲッターは、本来のゲッターロボの10分の1の力しか発揮できないといっても過言ではない。

それでもブラックゲッターが一人乗りなのは、元気の操縦についていけるパイロットがないからだ。竜馬、隼人、弁慶が真ゲッターロボに乗っている以上、元気と連携ができる人間がない。それは元気がスタンドプレイを好む性格であることも起因していたが、結果としてブラックゲッターは元気の戦いの才能によってのみその力を担保されていたと言っている。その元気が立ち向かう力を失えば当然、ブラックゲッター

は戦えない。

今、シレーヌを相手に戦えるのは。

「ま、まだだ……!」

瓦礫の中から立ち上がったデビルマン。ただ一人だった。

「アモン、いやデビルマン! まだ生きていたか!」

「当然だ! 俺の再生能力はお前も知っているだろう」

「フフ、そうね……。ならば今度は2度と再生できぬよう、心の臓を一突きにしてやる!」

シレーヌはその槍を構え、デビルマンと対峙した。そしてしばしの間、睨み合う。

先に動いたのは、シレーヌだった。

「もらった!」

シレーヌの巨体がデビルマンに迫る、デビルマンは寸でのところで飛び上がり、その突進を避けた。そして、その鋭利な爪を湛えた腕を飛ばす。ロケットパンチ。光子力マシン、マジンガーシリーズの腕そのものを質量兵器にしたそれが、シレーヌの胸を貫いた。

「カッ……!」

しかし、それと同時にシレーヌの突き出した槍が、デビルマンの腹を大きく抉っている。

た。

「ガアツ……！」

オイル混じりの血を吐いて、デビルマンの意識が遠くなっていく。その薄くなる意識の中、必死に槍を抜いて身を自由にしたデビルマンだが、そのままコンクリートに追突する。

「や……やられた……！」

シレーヌの執念に、カイクの命に。今まさにデビルマンも力尽きようとしていた。その巨大な緑の巨人は忽ち力が抜けたように倒れ込み、小さな男の姿へ戻っていく。

「だ、ダメだ。変身できない。デビルマンの力が、使えない……！」

このまま踏み潰されれば、その時こそが最期。人の、美樹の明日を守るために命を捨てる覚悟はしていた。しかしその初陣がこんなザマとはな。そう、薄い意識の中でデビルマンは自嘲していた。

しかし、その時は来ない。

「な、なぜだ……どうしてトドメを刺さない……！」

そうして、デビルマンは……不動明は眠りについた。そして、目を覚ましたのは陽の光に照らされてのことだった。

「ウ……！」

生きている。自分の意識がある。目の前にあるのは瓦礫の山と化した都市。それは地獄のような光景だが、地獄ではないことは知っている。

「……目覚めたか？」

明の前に、男がいた。その男は、明の生前の記憶にある。

「剣大佐……」

剣鉄也大佐。グレートマジンガーのパイロット。

「まさか、不動伍長がデビルマンとはな……」

鉄面を作っているが、鉄也は明にその手を差し出す。

「立てるか？」

「はい……」

鉄也の手を取り、明は立ち上がる。地獄と化した夜明けの街は、今尚けたたましいサイレンが響いていた。

「そうだ、シレーヌは？」

あの時、確実にトドメを刺せたはずなのに。それでもシレーヌは来なかった。その事を思い出し、明は周囲を見回す。

「ああ、見ろ不動」

鉄也はそう言って、陽の出の方を指刺した。

「ああ……」

陽の光に照らされて、それはいた。

シレーヌ。女性の身体を持ち、頭に白鳥のような美しい翼を持ったデーモンだった。シレーヌは、メタルビーストとして巨大化してもその白い羽根は美しかった。闘いと殺戮にしか興味のないデーモンですら、見惚れるほどの美貌を持ち、そしてそのデーモンであるカイクが愛してしまうほどの。

朝焼けの中で、シレーヌは微動だにせず固まっていた。死んでいた。

左腕は挽げ、下半身はカイクと同化し、胸は貫かれていた。しかしシレーヌは、歓喜の表情のまま死んでいたのだ。

「……お前を倒したと同時に、絶命したらしい」

「……そうか」

明は、デビルマンはその姿を目に焼き付けていた。

残忍な悪魔であるシレーヌ。強敵だったシレーヌ。しかしその死に姿は間違いなく、美しかったのだ。

……

……

.....

「ゼノン様、シレーヌが死にました」

「そうか……人間達の中にシレーヌを倒すほどの者がいたか」

その場所は、地獄だった。関東地方のある都市。そこはデーモン族の攻撃で地獄と化したのだ。まるで、世界の終わりのような地震が起きた後のような瓦礫と屍の山。そこに悪魔王ゼノンとサイコジエニーはいた。

サイコジエニーは、力の弱いデーモンだ。しかし、その念力により遠くのものを見ることができる。

この場所にいながら、サイコジエニーはデーモンの一斉攻撃の様子を観察し魔王ゼノンに報告していたのだ。

「敵の中には、勇者アモンがいます」

故に、デビルマンの存在もサイコジエニーは見るができる。その報告を聞き、魔王ゼノンの右側にある顔が顔を聳めた。

「あのアモンが、人間に乗っ取られたと?」

「そういうことかと」

デーモンが人間に合体する際、稀に起こる事故がある。それが、意識を人間に乗っ取

られる。或いは人間の機能である心までもを合体能力により備えてしまうことで、デーモンとしての残酷性にブレイキがかかってしまう。そのレアケースに、アモンが。

多くの場合は問題にならない。デーモンの一体などどうとでもできる。しかし、アモンとなれば話は別だ。

シレーヌがやられたとなれば、アモンに比肩しうる存在は……。

「もはや、私が直接アモンを処刑せねばなるまいか」

魔王ゼノンしかいない。ゼノンの貌は、それぞれにクツクツと嗤い始めた。ゼノンは魔王だ。デーモンの中のデーモンだ。

それが強敵の存在を前に、興奮しないなどあり得ない。

「……よろしいのですか、ゼノン様」

サイコジェニーの懸念も、理解していた。デーモン族の本命はゲッタードラゴンだ。ドラゴン奪取こそが最大の目的。しかしバードス島に派遣したデーモン軍のザン将軍も、人間の軍に倒された。

そんな中で、自分から動くというのは。もしアモンに負けたならそれは、デーモン族の敗北を意味する。しかし、これはサイコジェニーにも秘密にしていることだが……デーモン族の勝敗など、ゼノンにとっては、いやその上にいる彼らにとっては些細なことではないのだ。

ゼノンが敗れるなら、彼らは別の手段を取るだろう。ブライを蘇らせたように。しかし、彼らの手足として動くだけなのも癪なのだ。

ゼノンは王なのだ。たとえ相手が神であったとしても、時には王として神の意思よりも優先せねばならぬものがある。

それが、アモンの処刑だった。

アモンの名はデーモン達の中でも広く知れ渡っている。権力に興味を示さず、ひたすら力のみを求めて闘争に明け暮れたアモンは、デーモン達の中では畏怖の対象なのだ。

それが人間の味方になったなど、あつてはならない。たとえ勇者とて、裏切り者の粛清は王自らが行わねばならぬ。

それは、ゼノンの悪魔王としての矜持だった。それに、ゲッターの方も既に手は打っている。今頃、早乙女研究所は地獄と化しているはずだった。

「すぐに仕掛ける。サイコジェニー、お前はアモンの居所を常に我に知らせよ」「はっ」

夜闇は更け、悪魔の宴は闇の中へ消えていく。不気味な笑い声が、死の街と化した廃墟の中で木霊していた。

.....

.....

翌朝、既に早乙女研究所には各会の重鎮が集まっていた。昨日の魔王ゼノンによる宣戦布告と、悪魔軍による人類主要都市への同時多発攻撃。辛くもデーモンを退けた統合軍だが、人々の混乱もピークに達している。当然だった。今までも人類は古代からの襲撃に遭っていたが、今度の敵は悪魔。人々が知る神話の時代に伝え聞く者たちだ。何よりもあの魔王ゼノンの威容と、世界規模の被害は尋常ではなかった。特にロシアは首脳陣の全てがデーモンに操られていたらしく、ワシントンへの核攻撃を突如として開始。テキサスマックによる迎撃が叶わなければ、今頃世界中で核戦争が起きていたはずだ。

それだけの、被害。今早乙女研究所では、今後の対策、方針が練られている。全ては、早乙女博士の一言から始まった。

『敵の狙いはゲッターである』

早乙女博士は明らかに、何かを知っている風だった。恐怖と混乱になす術もない中でその堂々とした態度を取る早乙女博士に操られるかのように、政治、経済、軍事、テクノロジー、イデオロギー、あらゆる分野の専門家がこの日、早乙女研究所に集まっていた。

彼らは今、早乙女研究所の会議室にいる。大きな円卓を囲むようにして、早乙女博士の話を待っている。

「……………」

飛鳥了大佐も、その一人である。彼は、デーモンが現れる数日前から、悪夢にうなされるようになっていた。それは、太古の昔の記憶。人類の生まれるはるか昔、悪魔がこの星に跋扈していた記憶だった。最初は、それを自分の体調不良のせいで変な夢を見るのだと思った。しかし、夢で見た怪物が現実に見れ……親友である不動明が行方を消したことで、この件に積極的に関わらようになっていた。

「…………眠れてないのかね?」

飛鳥の隣に座るのは、弓内閣総理大臣。かつての光子力研究所所長であると同時に、弓さやかの実父でもある彼もまた、目の下に隈ができている。

「総理の方こそ、お顔に出ていますよ」

実際、弓首相は多忙を極めていた。内政、外交、あらゆる面で今日本は危機に立たされている。その危機に日本の顔である自分が不甲斐ない姿を見せるわけにはいかない。そういう覚悟が、弓首相にはあった。

「…………それで、話を進めてもらいたいですな」

そう口に出したのは生物学に精通する科学者の雷沼教授だった。早乙女博士とも旧

知の友である雷沼教授は、かつてハチユウ人類の生態系を解明するために早乙女博士の研究を手伝った経歴を持っている。

そんな彼らが注目しているのが、円卓の向こうに腰掛ける早乙女博士。博士の傍には、長身のサングラスをした大男と、小柄な男の2人が立っている。白衣を着ており、2人とも博士の助手であることが伺えるが、早乙女と旧知の中である雷沼も弓も、その2人の顔ははじめて見た。

「……早乙女博士は、重大な事実をつき止めました」

サングラスの男が言う。小男が、機械を操作すると、円卓の中央に映像が映し出された。

「これは……ゲッター?」

ゲッタードラゴン。正確に言えばその、繭。その存在はトップシークレットだった。軍や政府でもごく一部の人間しか知らない異常。その光景を飛鳥了は、はじめてその目で確認した。

その異様な進化、いや進化と呼べるのかもわからないその変化に飛鳥了は目を奪われていた。

「……このゲッターが、敵の狙いだというのかね?」

雷沼教授が訊くと、早乙女博士は深く頷いた。

「ドラゴンは、成長している。そして悪魔どもはその進化に魅入られたのだ」

「根拠は?」

雷沼がさらに追及する。すると、早乙女博士の両脇を固める2人の科学者が、口を開いた。

「根拠は、そう」

「悪魔が直々に教えたからです」

2人がそう言った直後、大男の口が大きく開かれた。

「なっ!?!」

そこにいたのは、無数の蟲だった。蟲が、蠢いている。蠅の王。そんな言葉が了の脳裏を過った。そして、それは聖書に登場する蠅の悪魔を意味する言葉。その連想ゲームが即座に働いた飛鳥了は、弓の手を掴んで席を立ち、後ろへ下がった。

「総理、逃げてください!」

「飛鳥君!」

「奴らは……奴らは既に、デーモンに取り憑かれています!」

了が叫ぶ。早乙女博士はその言葉を聞き……ニヤリと笑った。

……

……
……

早乙女研究所と音信不通。さやかはその報せを受けて即座に緊急事態態勢を新光子力研究所に発令した。現地に向かった偵察用のコマンドドローンも全てロスト。早乙女研究所の様子は不明。父である弓首相の安否もまた。

「……………」

それでも、さやかは気丈に立っていた。

「……………さやか」

その隣でさやかを支えるように寄り添うミチル。ミチルも当然、父の安否が気になっている。それでも、今すべきことをしなければと立っていた。シレーヌ戦でのダメージが完全に回復こそしていないが、それでもグレートマシンガンとブラックゲッター、そしてデビルマンは早乙女研究所に向けて出撃している。現在、日本にこの3体を超える戦力は存在しない。鉄也達も、ほとんど休めていないはずだ。

それでも、今ここで早乙女研究所を失うわけにはいかなかった。

「……………こんな時、竜馬君達は何してるのかしらね」

「……………ミチルは、信じてるのね。竜馬君達が生きていることを」

さやかも、信じている。兜甲児は死んでないと。だから、甲児が帰ってきた時のための用意もしている。それでも……既に一週間だ。生存は絶望的。そう周囲は判断し始めている。

誰も、それを口にはししない。さやかを氣遣つてのことだ。それでも……そういう空気をさやかは感じていた。

それに加えて、父までいなくなってしまうたら。そんな不安を押し殺しながら、さやかは現場に急行する鉄也達の応答を待つていた。

そして、その時は来た。

「こちらグレート、早乙女研究所に到着！」

鉄也からの通信をキャッチし、さやかはそれを繋ぐ。

「状況は！」

「今、回す。さやか、ミチル……目を背けるな」

その鉄也の言葉と同時に、映像が新光子力研究所に映し出された。

早乙女研究所の周辺には、無数のデーモンが待ち構えている。異形の翼を持つもの、10の目を浮かべるもの。ありとあらゆるこの世の生き物の冒涇とでも言うべき悍ましき悪魔の数々が、早乙女研究所を取り囲んでいた。

そして、その奥。

「そ、そんな……お父様!？」

さやか之父は、十字架に掛けられて研究所に磔られている。弓首相だけではない。雷沼教授も飛鳥了大佐も同様に。

「フッフ、フハハハハハハ!!」

映像越しに、笑い声が木霊する。その笑い声の主は……早乙女博士。

「人類よ、目覚めの時が来たのだ!!」

……

……

……

「ど、どういうことだよ親父!」

ブラックゲッターのкокピットで、元気が叫ぶ。連日のデーモンとの戦いで、早乙女研究所に帰還する時間もなかった。そのわずかな間に様変わりした父の姿は、元気が動揺せざるを得ないものだった。

頬は瘦け、目は一層険しくなり、鬼気迫るものすらあった。しかし、何よりもその口元に浮かべている笑みは人間のそれではない。

悪魔だ。連日、元気が倒してきた悪魔の笑みだった。

「早乙女博士、まさかデーモンに……」

鉄也が、呻く。

「嘘だつ、親父が悪魔なんか……負けるもんか!」

ブラックゲッターが、真つ先に飛び出す。悪魔の群れに。デーモンの群れを切り裂きながら、父の下へ向かう。

「親父! なあおい、親父!」

親父。そう呼ばれて尚早乙女博士の顔は、狂気に満ちていた。

「元気よ……。人類は目覚めの時が来たのだ。審判の日が迫っている」

「何を、何をわけのわからねえこと言ってるんだよ!」

わからない。元気は父の豹変の、その理由がわからない。デーモンに取り憑かれたなど、父に限ってあり得ないのに。

「世界最後の日……黙示録が始まろうとしているのだ。悪魔が現れ、人類に飛躍の時が近づこうとしている!」

早乙女博士の独白は、要領を得ない。しかし、早乙女博士が何かを伝えようとしていることだけは、理解できた。だから、元気は必死にゲッターの手を伸ばす。早乙女博士

へ。

だがその直後、突如として飛び込んだ巨大な腕がゲッターの腕を掴む。

「ッ何だっ!？」

現れたのは、人間のようには見えなかった。サングラスをかけた巨漢。その手はブラックゲッターをゆうゆうと持ち上げ、投げ飛ばした。

「全く、人間は常に理解を拒む。これではゲッター線も悪魔を選ぶというもの。そうだろう、ステインガー君」

ステインガー君。そう呼ばれた小柄な男が、巨漢の横に並んだ。

「う、うん。そうだねコーウエン君」

コーウエンと呼ばれた大男が頷いて、投げ飛ばされたブラックゲッターと、空中でその様子を見守っていたグレート、そしてデビルマンを一瞥する。

「コーウエン……ステインガー……?」

聞き慣れない名前の登場に、鉄也は眉間の皺を寄せた。

「あ……あいつらは、親父の研究に出資してくれていた、サポーターだ……」

ゲッターを立ち上がらせ、元氣。

「元々、得体の知れない奴で……俺はガキの頃からあいつらが嫌いだった。あいつらが

……まさか!」

「ああ……」

デビルマンは、二人の得体の知れない男を睨んでいた。そして、その向こうで磔にされてる青年を。

『あれは、了!』

不動明の親友である、飛鳥了を。

「明……明なのか?」

了の呟きが、デビルマンの地獄耳に届く。しかし、デビルマンはそれに答ええない。答えの代わりにデビルマンは、コーウエンとステインガアの2人を睨め付ける。

「ククク……アモン。まさか人間の味方になったとは驚きだ。そうだろうステインガア君」

「う、うん。そうだねコーウエン君。あれほど他者と群れるのを嫌っていたアモンがまさか、人間に絆されるとはね」

「黙れバアル、ゼブル。地獄から姿を消したかと思えばてめえら……既に人間に取り憑いてやがったのか」

バアル、ゼブル。アモンの記憶の中にあるデーモンの名前だった。二柱でひとつのデーモン。狡猾で、魔王ゼノンすら持て余していた最悪の悪魔。それが今、目の前にいる。

「フフフ……我々はあの方より勅命を受けていたのだよ」

「そのため10年……我々はこの時を待っていたのさ。地球の科学者、コーウエンとステインガーとしてね」

そう言つて、コーウエンとステインガーがグニヤリと融けた。周囲のデーモン達を取り込みながら、巨大化していく。そして、巨大な8本脚のバツタのような姿へと変化していった。その中央には、コーウエンとステインガーの貌。さらにそこに飛び乗った早乙女博士は、狂気に満ちた笑みを浮かべながら宣言する。

「ゲッター線の意味を理解するために、ワシは悪魔と契約を交わしたのよ！ 神の戦士を、ゲッタードラゴンを蘇らせるための儀式が、今日ここより始まるのだ！」

早乙女博士の叫びと同時、突如として地鳴りが起きる。まるで、黙示録の始まりを告げるラツパのように響いたそれと同時、早乙女研究所の至るところから足音が響いた。それと同時に、ブラックゲッターも異常を感知する警告音を発し、元気に知らせる。

「何だよ、これ……っ」

研究所周辺のゲッター線濃度が、異常な高まりを示していた。通常であればゲッター線は人体に無害だが、この異常な量は何が起こるわからない。まるで、ドラゴンの繭と同じ。

それだけのゲッター線が、研究所に満ちている。

「鉄也さん！ 速く弓首相達を助けて！」

咄嗟の判断で、元気は鉄也に叫んだ。

「ゲッター線の量がおかしい。何かが起こってる。こんなところに生身の人間がいたら

……解けて死にしまう！」

「!?!」

元気の叫びを聞くと同時、鉄也はグレートマジンガーを飛ばす。しかし、研究所と弓首相達を守るようにコーウエンとステインガー……バアル・ゼブルがグレートの前に立ち塞がる。

「彼らは生贄なのだよ。世界最後の日を迎えるためのね！」

巨大な昆虫のような腕が、グレートを突き飛ばす。

「ふざけるな！ 貴様らの言う世界最後の日など、俺は認めん！」

マジンガーブレードを構え、グレートはバアル・ゼブルと対峙していた。プレストバーンやサンダーブレードのような大技は高濃度のゲッター線が充満する中で、人質の命を脅かすことになる。ゲッター線が何か、危険な化学反応を起こす可能性を憂慮すれば、グレートは自慢の必殺武器の多くも使えない。一方で、敵は昨日戦ったあのシレーヌ以上の強さがある。そう、鉄也は直感していた。

しかし、マジンガーブレードの硬度よりも遥かに硬いバアル・ゼブルの皮膚を、グレー

トは何度打ち合っても突き崩せない。ブラックゲッターも加勢に入り、トマホークを叩きつける。

それでも、無傷。

「どうしたのかね、君たちの実力はそんなものかな?」

「それでは我々は愚か、魔王ゼノンに勝つことはできないね」

「そう、故に人類は滅ぶのだ!」

コーウエンが、ステインガーが、早乙女博士が三者三様に煽っていく。そして、巨大な口から吐き出される大百足ののような蟲が、グレートマジンガーへと巻き付いた。そして、強烈な握力で締め付けていく。

「グッ!?!」

「鉄也さん!?!」

グレートを助けようとブラックゲッターが動くが、それはバアル・ゼブルの鋼鉄の爪に防がれ、そしてそのままギリギリと押されていく。

「クッソオ……」

鉄也も、元気も。それにグレートもブラックゲッターも。シレーヌとの戦いで受けたダメージが大きく残っていた。到底、フルパワーではない。連戦のダメージが、確実に勇者達の命を削っている。そんな中で立たされた窮地。

「どうして……どうしてだよ父さん!」

元気が、叫んだ。

「……………」

しかし、早乙女博士は無言でブラックゲッターを睨め付けるのみ。

「どうしてだよ、答えてくれよ!」

それが元気には、たまらなく悔しい。本当に、大好きな父が悪魔になってしまったのか。だとしたら、何故。そんなことばかりが浮かんでは消えていく。

「ブラックゲッター、お前のゲッターエネルギーも頂いていく」

コーウエンの声。同時にステインガーの口が開いた。そして、舌がべろりと伸びてブラックゲッターに迫る。

「チクシヨウ……動け、動けよゲッター!」

元気は操縦桿を操作するが、ブラックゲッターは万力のようなバアル・ゼブルの力に押されて動けない。そして、グレートと鉄也も。

その舌がゲッターを舐めた。そして次の瞬間、鋭利な刃が飛び、その舌を切り裂く。

「なあっ!?!」

悲鳴をあげるステインガー。誰もが、その刃を見た。それは、腕のようだった。腕から生えた刃が、デーモンの舌を切ったのだ。

しかし、グレートは腕ごと百足に締め付けられている。ならば、誰が。誰もが、その刃の飛んできた方へ視線を向けた。

そこに立っていたのは、魔神だった。

漆黒のボディと鉄銀色の顔。そして、紅の翼を携えた魔神。

「待てよ化け物ども！ こっから先は、マジンガーZと兜シロー様が相手だぜ！」

鉄の城。マジンガーZが確かに空に、聳え立っていた。

.....

.....

.....

昨日、魔王ゼノンの宣告の直後に話は遡る。ボスに連れられた兜シローとセーラは、隠されていたボスボロットに乗って地下の下水道を走っていた。

そして辿り着いたのは、旧光子力研究所。既に研究所としての機能のほとんどを新光子力研究所に預け、本来は取り壊される予定だったが今でも残っているそこに、シロー達は隠れて、一夜を明かしていた。

「.....」は表向き廃棄された施設だが、光子力バリアも健在だからな。しばらくは安

全だろ」

そう言つて汗を拭うボス。ヌケとムチャは何やら準備をしている。

「……シロー」

心細そうに、セーラはシローの手を握る。

「大丈夫だよセーラ。きつと今頃……」

今頃、シローの仲間達は戦っている。鉄也も、元気も、それなのに、何故自分は戦えないのだろう。そんな悔しさで、シローはセーラの顔を直視できなかつた。

「……今はみんな、できることをすればいいんだよシローちゃん」

そんな様子を見かねてか、ボスが呟く。

「でもさ、ボス……」

それでも、シローの心は晴れない。

「シローよお。お前さんは戦ってんじやねえか。その子の手を握つてさ」

「……………」

それでも黙つたままのシロー。セーラは、不安そうにそんなシローを見つめている。ボスは、ヌケとムチャを手伝いに行つてしまった。

外は地獄のような戦場と化しているのに、シローとセーラの間には流れている時間は、静かだった。

「……ねえ、シロー」

そんな沈黙を破ってセーラが、口を開いた。

「私、シローと会えてよかったわ。だって、もしシローと会えなかったら私、ひとりぼっちだったかもしれないもの」

シローを見つめるセーラの瞳は、シローが恋した青い瞳によく似ていて。どうしても、思い出してしまう。ローレライのことを。

目の前の女の子に、別の女の子を重ねて見てしまっている。それが申し訳なくて、シローはセーラの顔を直視できなかった。

「俺は……君にローレライを重ねて見てる。本当は、そんなことしちゃいけないのに……情けないんだ。仲間と戦うこともできず、君に甘えてしまってる俺自身が」

せめて、それだけでも吐露しなければ壊れてしまいそうだった。そしてセーラは、その言葉を受け止めてくれる。

「ううん、いいの。あなたがローレライのことを思い出しちゃうのも仕方のないことよ。だから……」

そう言つてシローの肩を抱くセーラの優しさに、甘えたくなかった。けれど、できなかった。

「ごめんな、セーラ……」

「ううん、ありがとう……」

そうして2人が抱き合っていた時だ。

「おいお前ら、こつち来い!」

ボスが戻ってきたのは。

「うわあつ!」

「きゃつ!」

びつくりしたような声を上げて、離れるふたり。その様子をニヤニヤ眺めるボスだったが、すぐに本題を思い出す。

「とにかく、こつちだ。来い!」

2人を促すボスに続いて、シローはセーラの手を握り、ふたりでボスに続いた。

「これは……!」

シローが見つけたのは、鉄の城だった。

マジンガーZ。兄の相棒であり、祖父の形見。何度も世界を救ってきた、神にも悪魔にもなれる力。新光子力研究所でオーバーホールされていたはずのそれが、ここにある。それも、あの時のダメージのほとんどが回復している完全な状態で。

「実は、修理が終わった段階でこつちに移送されとったんじゃ」

白衣を着た老人が2人、シローの前にやってきた。

「のっそり博士、せわし博士！」

のんびり屋ののっそり博士と、せわしないせわし博士。今は亡きもりもり博士と共に。三博士と呼ばれていた天才科学者だ。

「実はな、前の戦いで起きた光子力エネルギーの集中現象。あれを解明するためにわれらはマジンガーZの再研究を行なっておったんじや」

前回の、インフィニティとの戦い。マジンガーZは世界中の光子力を一身に受けて巨大化とも呼ぶべき不可解な現象を起こした。それはたしかに奇跡だったが、光子力を悪用しようとする輩は必ず、あの現象に目をつける。そう考えたさやかからの、依頼だったとせわし博士は言う。

「それでな。マジンガーZはあの戦いの後、ブラックボックスが生まれておる。機体の中心部。光子力エネルギーが炉心のような溜まりを作っているようなんじや」

「……それって、つまりマジンガーZは前よりパワーアップしてること？」

「うむ。しかし、その制御方法がわからん。今のままマジンガーZを動かしても問題はないだろうが、前回のような奇跡を狙って起こせるわけじゃない。それどころか、光子力が暴走すればインフィニティのような脅威になるかもしれないんじやよ」

「つまりだね、要するに、単刀直入に言うると、今のマジンガーZは、光子力爆弾になるか

もしれないんだよね」

と、のっそり博士。

「……そのこと、兄貴やさやかさんは知ってるの?」

「いや、つい先日解析が完了したばかりだから、まだだね」

マジンガーZが暴走すれば、下手したらゴラーゴンが起こるかもしれない?

が、シローの額を濡らす。

嫌な汗

「……………あのおう」

ずっと沈黙していたセーラが、口を開いた。

「もしかしたら私、その光子力を制御できるかもしれません」

「えっ!?!」

驚いたと言った風に、博士達が目を丸くする。シローも、セーラの方を見た。

「どういうことだい、セーラ?」

「あのね、シロー。空中元素固定装置って知ってる?」

空中元素固定装置。祖父と兄がそんな話をしていたのを聞いたことがある気がする。しかし、難しすぎて何を言ってるのか珍紛漢紛だった。

「私のママがアンドロイドで、私はアンドロイドと人間のハーフ。それって本来はおかしいでしょ。どうやってできたと思う?」

沈黙するシローに代わり、セーラはその答えを続ける。

「私はね、パパの精子を空中元素固定装置が抽出し、ママの身体の中で人間の姿に作り替えられた。空中元素固定装置の申し子なの。だから、ママの機能を半分だけ、受け継いでる」

そう言つて、セーラは首につけているチョーカーに触れた。すると、チョーカーが輝き出す。その輝きは一瞬。一瞬の間にセーラの手元には、小さなダイヤモンドが転がっていた。

「こんな風に、大気中の元素を別の物質に変換できるの。私がいれば、光子力エネルギーが過剰に回転するたびにそれを別の何かに変換できるわ」

そう言つて、セーラは寂しそうに笑つてみせた。

「……もしかしたら、ママはこのことを予見して、私をここに連れてきたのかもね」
「セーラ……」

シローは、そんなセーラの手を強く握つていた。シローには、わかつた。わかつてしまった。セーラがその特殊な出自ゆえに、どれだけ寂しい思いをしてきたのか。

それは、偉大な祖父と兄を前にして自分が抱いていた劣等感などよりも遥かに辛いものだったのではないかとシローは想像する。

今、セーラ的能力を見てシローは理解してしまったのだ。彼女もまた、兜甲児同様に

運命を背負っているのだと。

そして、その運命は生まれついて離さないものだ。生まれついての異能など、呪い以外の何者でもない。ならば、せめて。

「……お母さんのことは、好き?」

「うん。優しくて美人で、自慢のママよ」

そう言つて気丈に笑うセーラの痛みや苦しみを、分かち合いたい。そう思った。

何より今、シローの尊敬する兄貴は……マジンガーZのパイロット・兜甲児はいない。

「……博士、ボス。俺がマジンガーZを操縦する。俺が、兄貴の分まで戦う」

ニツ、と笑うボス。その言葉を待っていたとばかりにせわし博士とのっそり博士も頷いた。そして、その直後だった。

「お、おいボス、大変だ!」

「早乙女研究所が、デーモンに占領されたぞ!」

ヌケとムチャが、絶望的な報せを持ってきたのは。

「……セーラ!」

「ええ、シロー」

セーラと2人、シローは走り出す。兄が走った道を。その先にある赤い飛行機……ホバーパイルダーに乗り込み、その後部座席にセーラが座る。

「マジン・ゴー！」

兄が叫んだその掛け声を、シローが叫ぶ。パイルダの座席は、小さい頃に座った兄の膝の上のような感触があった。そして、貯水槽から発進するマジンガーZの頭部に、人の頭脳を加える。

「パイルダー・オン！」

マジンガーZの瞳に、光が灯る。それは、争い絶えないこの世界を悲しむ瞳か、それとも、希望を勝ち取るための瞳か。走り出したマジンガー。さらに、滑走路から射出されたジェットスクランダーとドッキングし、マジンガーZは空を飛ぶ。

「兄貴……兄貴の帰ってくる場所は俺が守る。だからセーラ。力を貸してくれ」
「うん。シロー、あなたとならどこまでも」

背後からそう囁かれて、どきりとした。そして、その熱に急かされるようにマジンガーZは、空を駆けた。

.....

.....

.....

「アイアンカッター!」

そして今、シローはマジンガーZで戦友の前に降り立った。アイアンカッターがステインガーの舌を両断し、ブラックゲッターは後方へ下がる。

「お前……シローか?」

「ああ、あの時助けられた借りは返したぜ元気。次は鉄也さんを!」

アイアンカッターを自分の手に戻し、マジンガーZは百足のようなものに締め付けられるグレートへ向かう。

「フ、フフフ。愚かな……、こちらにはまだ人質がいるぞマジンガーZ!」

「そ、そうだぞマジンガーZ。こいつらの命は我々が握っているのだ!」

コーウエンと、舌を再生させたステインガーが吼え、研究所に磔られている弓首相達を見せつけようとした。しかし、既に十字架には誰もいない。

「お前ら、誰かを忘れてないか?」

緑色の皮膚と赤い羽根を持つ悪魔人間が、その爪で鎖を解き3人を抱き抱えて飛んでいた。

「なっ、アモン!?!」

驚愕の声を上げるコーウエン。

「違うね、俺の名は……デビルマンだ!」

離れた場所に3人を降ろし、再び巨大化するデビルマン。

「デビルマン……君は……」

飛鳥了は、そのデビルマンの中に懐かしいものを見た気がしていた。彼が愛する、親友の面影を、確かに感じたのだった。しかし、デビルマンは了に何も言わず背を向ける。（許してくれ、了。不動明は……死んだんだ。俺は、デビルマンだ！）

デビルマンが飛ぶ。一瞬で戦場まで戻ったデビルマンは、その爪で大百足を貫いて、心の臓を潰す。核とも言うべきものを失った百足のデーモンは瞬く間に崩れ落ち、グレートマジンガーも拘束から解き放たれた。

「お前……あの時のデーモンか？」

デビルマンの姿に、シローは怪訝な顔をする。あの時自分の命を奪いかけた悪魔が今、味方している。理由はわからないが。

「……勇者アモンは死んだ。俺は、人の心と悪魔の力を持つ、デビルマンだ」

「デビルマン……信用していいんだな？」

「ああ……。信じられないなら、背後からでも俺を撃て。だが、今はっ！」

デビルマンが、走り出す。巨大なメタルピースト……バアル・ゼブルに向かい。

「こいつを先に、ぶっ倒そうぜ！」

マジンガーZも続いた。巨大な紅の翼……ジェットスクランダーを鋭利な刃にして

の突撃。さらに、スクランダーから無数のナイフが射出されバアル・ゼブルを襲う。

「こいつを喰らえ、サザンクロスナイフ!」

サザンクロスナイフが、バアル・ゼブルの……コーウエンとステインガーの目を潰す。早乙女博士の周囲にはバリアのようなものが浮かび、ナイフは届かなかった。だが、バアル・ゼブルは……コーウエンとステインガーは確実に、そのダメージを受けている。

「小癩なり、マジンガーZ!」

「我らが力、受けるがいい!」

八本の脚を、マジンガーZを目掛けて振りかざした。しかし、その刃はマジンガーZに届かない。

デビルマンのその翼が、鋭利な刃となつて前脚を斬り裂いたのだ。そして、デビルマンは闘争に打ち震える悪魔の形相でバアル・ゼブルを睨む。

それはまさに、悪鬼の形相だった。

「……バアル・ゼブル。てめえら、デーモンじゃねえな。俺と同じ、デビルマンだろ?」
「ククク……その通りだ」

「我々は、ゲッター線を研究するうちに真理に辿り着くには無限の時間が必要だと考えるに至った。そのためには、人の身体のままでは時間が足りないと気づいたのだ」

コーウエンとステインガーが、静かに告げる。

「……そのためにデーモンとわざと合体し、逆に支配したか」

「その通り！ デーモンの力は素晴らしかった。この身体ならば、ゲッター線の真実に行き着ける。そう、告げる声があったのだよ」

「……声、だと？」

また、得体の知れない何者かの影。鉄也は警戒する。コーウエンとステインガーすら、ブライのように何者かに操られている可能性があるということなのだから。

「そう、声だ。この宇宙を、宇宙に巢食うあらゆる種を喰い殺せという神の声。それを聞いた時に我々は、悪魔人間でありながらゼノンと手を組んだのだ。そうだろう、ステインガーくん」

「う、うん。我々の目的とデーモンの本能は矛盾しないからねコーウエン君」

2人で、正確には1人で盛り上がるコーウエンとステインガーのクツクツとした笑い声。それを遮ったのは、「外道が！」というデビルマンの怒りの叫びだった。

「貴様らは……人間の心を持ちながら自ら悪魔に魂を売ったんだぞ。それがどういふことか、わかつているのか!？」

しかし、その怒りを嘲笑するかのようにコーウエンとステインガーは続ける。

「わかつているとも、これが祝福だと言うことがね。人間は、この宇宙で生きるにはあまりに弱く、脆い」

「だからこそ人類はデーモンに平伏し、そしてゲッター線の加護を受けて真理の旅に出るべきなんだよ」

「それが、世界最後の日だ!」

早乙女博士が、高らかに叫ぶ。

「……………シロー、この人たちは」

「わかっている、セーラ。この人たちを放つてはおけない。それがたとえば、ダチの父親だったとしても」

狂ったように笑う早乙女博士を睨み、シローは吐き捨てる。

「おしゃべりは終わりだ。そろそろ死んでもらうぞ人間どもよ!」

コーウエンの口が開く。その直後、周囲のゲッター線の濃度が一気に上昇した。

「気をつけるシロー、ゲッタービームだ!」

元気が叫ぶ。それと同時に、コーウエンの口から放たれたゲッター線を収束した粒子砲……………ゲッターウェーブとでも呼ぶべきゲッター線の波が、マジンガーZを襲った。

「なっ!」

「きやあっ!」

避けきれず、ゲッター線の波に押し流されるマジンガーZ。それと同時に、機体の内部の光子力エネルギーが急激に上昇していくのを、計器類が正確に計測していた。

「っ!？」

セーラが、咄嗟にチョーカーに触れてZの光子力を変換していく。

「シローー!」

「わかつてる!」

マジンガーZそのものを爆発させかねない光子力の渦に指向性を与えながら、セーラが制御する。そして、そのエネルギーを一点に集中させて、シローがスイッチを入れる。

「光子力ビーム!」

マジンガーZの両眼から放たれる光子力ビーム。光子力が渦を巻き、螺旋を作りながらその光はゲッター波を押し返しバアル・ゼブルを……コーウエンとステインガーを呑み込んだ。

「……あれが、光子力ビームだと?」

鉄也が絶句する。自分の知らない威力。あの光子力ビームは間違いなくサンダーブレードと同等か、それ以上の出力を有している。

「なんだ……なんだこれは!？」

「我々の知るマジンガーに、こんな力は!？」

光子力の光の中で、コーウエンとステインガーが叫んだ。一方で、早乙女博士は寸での所でバアル・ゼブルから飛び降り、その光から逃げ延びる。しかし、まだバアル・ゼ

ブルにも息がある。上級悪魔の心の臓を焼くには、まだ届かない。

「許さん……許さんぞ人間どもー!」

怒りのままに、コーウエンが吠えた。そして、八本脚のバツタのような姿からさらに変化していく。どこことなくゲッタードラゴンを思わせる異形の人型。しかし、その胴体にはやはりコーウエンと、ステインガーの顔が浮かび上がっていた。その拳を巨大に膨らませ、マジンガーZへ迫る。

「このまま踏み潰してくれる!」

「させるか!」

マジンガーZは飛び回り、その拳を避けると空高く飛び上がった。そして、ふたつの腕をロケットパンチ。ゲッター態となったバアル・ゼブルはしかし、その巨大な拳でそれを防ぐ。

「無駄だとわからないのか!」

「それは、どうかな?」

兜シローが、ニヤリと笑う。

「セーラー!」

「うん、空中元素固定装置、フルドライブ!」

次の瞬間、光子カビームの余波で残ったエネルギーが形を作っていく。それは、拳。

マジンガーZの拳と同じものが、無数に生み出されていく。

「なんだ……なんだこれは!？」

「喰らえっ、鉄拳!」

シローの合図とともに、その無数の拳は一斉にバアル・ゼブル目掛けて飛んでいった。

「ロケットパンチ、ひゃああく連発!!」

「バ、バカかあっ!？」

一発一発がロケットパンチ。しかし、その数は百。巨大な拳を持つバアル・ゼブルにとつてその一発は蚊ほどの脅威もない。しかし、それが百ならば。

次第にその装甲がえぐれていくのを、シローは見逃さなかった。

「おのれ、許さんぞ!？」

激昂するステインガー。しかし、先ほどまでいた位置にもうマジンガーはいない。

マジンガーZは、百の拳の後ろに隠れて迫っていた。そして、傷ついたバアル・ゼブルへと飛び込んでいく。

「スクランダーカッター!」

百の拳は囹。本命は、その胴体を直接真つ二つにすること!

無数のロケットパンチに動揺していたコーウエンとステインガーは、気づかなかつた。すでに、死角に飛び込まれていたことに。

マジンガー乙は、バアル・ゼブルの胴体を真つ二つに切り裂いた。

「グ、グオオオオオオオツ!？」

「お、お助けくださいサタン様アアアアツツ!？」

コーウエンとステインガーの、断末魔の悲鳴が響く。しかし、その悲鳴は熱光線と雷撃に掻き消された。

「……………地獄に堕ちろ!」

「滅びろ、外道!」

デビルマンのデビルビームがコーウエンを、グレートマジンガーのサンダーブレークがステインガーを。確実に滅ぼしたのだ。核を潰され、そのまま泥のように溶けて消滅するバアル・ゼブル。もといコーウエンとステインガー。

「……………早乙女博士、もう終わりだ」

残されたのは、早乙女博士一人。

「フフフ、フフフ……………まだ、終わってはおらんよ!」

しかし、狂気の瞳を滾らせた早乙女博士は止まらない。そして、早乙女博士の影からそれは、現れた。

巨大な、影。頭と両肩に3つの貌を持つ悪魔。

「あ、ああ……………」

シローとセーラは、いやこの場にいる誰もが、それを知っている。人間の原初の恐怖。その形をした悪魔の王。

この世全ての邪悪をその身に宿した形相でそれは、彼らを一瞥した。

「現れたな……悪魔王ゼノン！」

皆が言葉を失う中、デビルマンだけがその名を呼んだ。

「久しいなアモン。いや、デビルマンよ。デーモンの誇りを失い、人間の味方などに堕ちたお前をこのゼノンが直々に、処刑してやろう」

その声は、まるで脳に直接響いているかのようだった。声を聞いているだけで激しい頭痛が起こる。そんな怪物。人間であるシローや鉄也たちだけでなく、デビルマンすらもそのプレッシャーを受ける怪物。

「……親父？」

元気が気づくと、早乙女博士の姿はどこにもなかった。皆がゼノンに気圧されていた間に、何処かへ消えていた。そして、そんな余所見をした瞬間、

「無礼者め！」

ゼノンの左肩の貌が持つ鬼のような角から、雷撃が放たれてブラックゲッターを襲った。

「ぐ、うわああああっ?!」

「元氣!？」

一撃で、漆黒のマントは襤褸切れへ変化し、黒焦げになってブラックゲッターは倒れる。

「元氣! 元氣!」

「……………」

シローが呼びかけるも、応答はない。まさか、最悪の事態を予感し背筋が凍る。

「安心しろ。お前たちもすぐに後を追わせてやる」

ゼノンの絶望的な宣告が木霊した、その時だった。

「おもしれえ、やれるもんならやってみやがれ!」

早乙女博士が起こした周囲のゲッター線濃度の上昇。そして、マジンガーZのブラックボックスが解放されたことによる光子力エネルギーの充満。それは、空に穴を開けたのだ。

虚無の世界より通じる、救世の穴を。

「あれはっ!？」

鉄也が叫ぶ。いの一番にとびこんできたのは、赤い体躯に青い翼。そして巨大なトマホークを構えた最凶のマシン。真ゲッターロボ!

「ゲッターアアアトマホオウウウウクッ!!」

ゲッターの手の中でトマホークがさらに巨大化し、そしてゼノンの左肩の貌へ振り下ろされる。その質量保存の法則すら無視した鈍器は、圧倒的なスケールを誇るゼノンの肩を容易く潰す。

「ぎゃああつあああつ!?!」

ゼノンの貌が、激痛に叫んだ。

「バカな……バカな!」

中央の貌が、驚愕の声をあげる。

「ゲッター……貴様はあの世界から帰ってきたというのか!?!」

「おっと、俺たちだけじゃねえぜ!」

竜馬が不敵に笑む。その直後、天高くから魔王へと、裁きの雷が落とされる。

「何っ!?!」

「スペースサンダー!」

宇宙の王者、グレンダイザーだ。その雷を受けゼノンは一瞬、その光の中で視界が暗転した。その直後。

巨大な拳が、ゼノンの右肩の顔目掛けて飛んできた。

「ターボスマッシュヤーパアアアアンチッ!」

その剛腕は、右の貌を思いっ切りぶん殴るとそのまま元の持ち主の下へ戻り、さらに

その魔神は降下様にその拳を振り上げて、ゼノンの顔に鉄拳をお見舞いする。そして、スクランダーの出力を最大にしてマジンガーZへ並び立った。

「……………なんだよ、へっ。生きてるなら連絡くらいしろよ」

見たことのない魔神だった。それでも、シローにはわかる。それに乗ってるのが、誰なのか。

「すまねえ、待たせたなシロー」

兜甲児。シローが尊敬する、偉大な背中。

「シロー、マジンガーZに乗ってんのか」

「兄貴が帰ってこないからだぜ」

「へへっ、サマになってんじゃねえか。シロー、背中は任せただぞ」

「……………!」

背中を任された。兄貴から、兜甲児から。小さい頃、大好きだった背中だ。大好きで、だけで遠くて、一生かかっても並べないと感じた背中。

それに今、シローは並び立っている。

「……………シロー、嬉しそう」

セーラが、小さく笑った。

「……………ああ。任せてくれ、兄貴!」

力強い弟の返事に、甲児も嬉しそうに頬を綻ばせる。だが、喜んでばかりもいられない。

「おとう……ご主人様。敵は悪魔王ゼノン。私達の世界を滅亡に追いやった……デーモン族の首領です！」

リサのナビゲートで、敵がどれだけ強大かは理解できている。しかし、負ける気は全くしない。

「リサは空中元素固定装置の制御に専念してくれ。この化け物はマジンカイザーと……」

カイザーに並び立つ、もう一体の鬼神。この2体がいる限り、人類に負けはない。

甲児は、確信していた。

「真ゲッターが相手になってやるぜ！」

マジンカイザーと、真ゲッターロボ。今ここに、2つの最強が並び立ったのだ！

第五話『対決!!』Aパート

浅間山は今、この世界のどんな地獄よりも地獄のような光景が広がっていた。魔王ゼノン。人類が想像するあらゆる悪魔よりも悪魔らしい姿をしたデーモン達の王。しかし、その魔王の顔には憎しみと、恐怖と、畏怖と、戦慄と、それらあらゆる人間的な表情が浮かんでいた。

「バカな！ ゲッター、貴様はあの地獄に落とされたはず……」

ゼノンが行動を起こした最大の理由である「真ゲッターの不在」が今、打ち破られたのだ。サイコジェニーが観測したゲッターの地獄。ここではない未来。そこに堕ちた今、真ゲッターロボは恐るに足らず。だからこそゼノンは表舞台に姿を現したというのに。

「へっ、魔王だかなんだか知らねえがな。てめえなんぞ詮詮、ゲッター線にビビってるケツの穴の小さいビビリ野郎じゃねえか！」

トマホークを構え、ゼノンへと突撃する真ゲッター。ゼノンの右側の貌は、般若の形相で炎を噴いた。灼熱の炎。その熱だけで周囲のものを溶かすそれを真ゲッターはひらりと躲し、その般若面の前に躍り出た。

「喰らいやがれ！」

真ゲッターの腹部にゲッターエネルギーが集中する。そして繰り出されるゲッタービームが、般若面を焼く。

「ギイイイヤアアアッ!?!」

右側の貌を焼かれ、絶叫するゼノン。さらに、真ゲッターの腹部がぐにやりと歪む。

「次は俺に任せろリョウ！」

「ああ、任せたぜ隼人！」

歪んだ中から銀色に煌めく顔が姿を現しそして、そのまま真ゲッター2へと変化した。オーブンゲッターではない。ただただ、変化した。瞬時に姿形を変えるオーブンゲッターよりもさらに速く、そして原理原則を無視した変形。真ゲッター2は、呻くゼノンの般若面にドリルを押し付ける。回転するドリルはゼノンの皮膚を、肉を、骨を削る。

「目だっ！」

ドリルで思い切り、般若面の目を抉る。絶叫するゼノン。しかし、隼人はその悲鳴に歓喜の表情を浮かべながら、更なる追撃を繰り出す。

「耳だっ！」

真ゲッターのスピードに対応できず、翻弄されながらゼノンの般若面は耳を奪われた。そして、

「鼻アツ!？」

ゲッタードリルが鼻をぶち抜いた。ゼノンの般若面はその凄惨な攻撃の数々に晒され絶叫を上げながら、尚も熱線を吐く。

「無駄だっ!」

その熱線が真ゲッター目掛けて飛んだ瞬間、再びぐにやりと歪んだゲッターはその熱線を受ける箇所巨大な2つの腕を生やす。両手で熱を受けながら、尚も止まらない真ゲッター。熱線を吐く口を塞ぐように巨大な腕が般若面を掴むと、全身の変形を終え真ゲッター3へと変貌する。般若面を掴んだ腕が、そのまま伸びた。

「な、何っ!？」

ゼノンの全身に、怖気が走った。ゲッターよりも遥かに巨体なゼノンが、その怪力に引き摺られたのだ。空中から地上に落下しながらも腕を伸ばす真ゲッター3は、その加速を活かしさらに力を込めていた。その力任せの投げが、ゼノンの巨体を大地から離している。

「直伝! 大雪山おろし!」

真ゲッター3に投げられたゼノンは、さらに空中で大きく揺れる。大雪山おろしは、弁慶の手で進化しているのだ。正確には、弁慶と真ゲッター3の力による進化。大雪山おろしで投げ飛ばされる中、真ゲッター3のアームはさらに伸びて相手をもう一度投げ

飛ばす。名付けて、大雪山おろし二段返し。

巴武蔵の奥義を、車弁慶のアイデアと真ゲッターの性能でさらに昇華させた秘伝の技。その柔道の極意が、悪魔の王ゼノンを揺るがしたのだ。

「こ、これが……これが真ゲッターの力だというのか!」

「こつちを忘れてもらつちやこまるぜ、悪魔王さんよ!」

ゲッターに投げ飛ばされたその先で、魔神皇帝が迎え撃つ。胸の放熱板から放たれた熱が、無防備なゼノンに降り注ぐ。

「ファイヤアアアツプラストアアアアツツ!!」

ダブルマシンガアのそれを遙かに越える熱量が、魔王ゼノンに降り注ぐ。並大抵のメタルビーストならば一瞬で蒸発し灰も残らないだろうそれを受けながら、ゼノンはしかし耐えて見せた。

「おのれ……おのれえっ!」

耐えて見せたものの、決して無傷ではない。いや、突如現れた2体の魔神を前にゼノンは明らかに消耗していた。

「す、すげえ……」

マシンガンZの中でシローは、2体の闘いぶりを呆然と眺めていた。それは、あまりにも次元の違う戦いだったのだ。悪魔王の放つ雷撃を躲し、ゲッターがトマホークを振

り翳す。トマホークを封じようと、ゼノンの体毛が触手のように伸びた。直後、ゲッターはその身体をぐにやりと歪めてゲッター2に変形し、今度はスピードで翻弄。それを振るい落とそうとする巨腕を、マジンカイザーの拳が殴り抜く。それらの攻防に加勢しようにも、展開の一瞬一瞬が早すぎてついていけない。

「何を呆けている、シローー！」

しかし、鉄也は違った。既に満身創痕のグレートマジンガーだが、戦意を失つては決してない。

「グレートは満身創痕だ。だがマジンガーZはまだ戦える。そうだろうか？」

「お、おう……！」

シローの答えに鉄也はニヤリと口を釣り上げ、さらにグレンダイザーの大意へ指示を送る。

「グレンダイザー、まだスペースサンダーは使えるか？」

「ああ、グレンダイザーもまだ、戦える！」

「ならば……行くぞッ！ タイミングはお前達に任せる！」

そう叫ぶと同時、グレートマジンガーが走り出した。マジンガーブレードを構え、そして空高く飛び上がる。

「今更雑魚が増えたところで、何ができる！」

「雑魚かどうか、その身で経験してみろるんだな。サンダーブレーク！」

グレートのコクピットに「承認」の文字が浮かぶと同時に、稲妻がゼノンへ走った。

「効かぬ、効かぬわ！」

「それなら、こいつはどうだ！」

サンダーブレークに重ねるように、グレンダイザーもスペースサンダーを放つ。二つの雷撃が混じり合い、その熱を、威力を、破壊力を乗算させていく。

「今よ、シローー！」

セーラが叫んだ。

「ああー！」

その稲妻へ、マジンガーZも光を放つ。

「光子力ビィイツム！」

マジンガーZから放たれた光子力の光。それは螺旋を描いてゼノンの腹に突き刺さった。

「ッ、これはっ?!？」

ゼノンの全ての貌に、焦りの色が見えた。真ゲッターとマジンカイザー。現れた2つのイレギュラーだけではない。塵芥と侮っていた人間どもの兵器……マジンガーが、ゼノンの予想を遥かに上回る力を発揮していたのだ。

あり得ない。ゼノンは戦慄する。

「余所見するんじゃねえ!」

そこに真ゲッターのトマホークが、またひとつ貌を潰した。

「ぐおおおつ!」

何故だ。何故人間にここまで押されているのだ。自分はゼノン、魔王ゼノンだぞ。そう、魔王ゼノンは狼狽していた。あり得なかった。ただでさえバアル・ゼブルやシレーヌを倒して人間達は疲弊していたはずだ。それなのに、何故。何故自分は追い詰められている?!

「そうだゼノン。勇者アモンはこの人間に負けたんだ……!」

ゼノンの真ん中にある貌へ、近づいてくる緑色の悪魔人間……デビルマンがそう、呟いた。

「あ……アモン……!」

「ゼノン! 俺達デーモンは、人間の底力に負けたんだ!」

アモン……いやデビルマンはその掌に熱を込め、ゼノンへと解き放った。

「地獄へ戻ろうぜ、ゼノン! ここは俺達の生きる場所じゃねえ!」

デビルファイヤーを顔面にもろに受け、ゼノンは絶叫する。しかし、それでも。

それでも敵を前に逃げ帰るなど、悪魔王ゼノンの選択には存在しなかった。

「ふ、ぎけるなよ……ふぎけるなよ人間ども！」

その叫びは大地を震わせ、衝撃となりその場にいた全てを襲う。木々は吹き飛び、山は崩れ、早乙女研究所の施設も吹き飛んだ。ブラックゲッターをマジンガーZが掴み、グレートやグレンダイザー、デビルマンにマジンガーZ、真ゲッターもその衝撃で吹き飛びそうになる。しかし、なんとか踏みとどまって再び、一同は魔王ゼノンと対峙した。見れば、先ほどまで受けていた傷が少しずつだが再生を始めている。般若面の貌が扶られた目玉も、復活していた。

「なんて奴だ……！」

鉄也が下を巻く。

「あれが、デーモンの王と言われるゼノンの力だ。あの巨体とあの力で、再生能力まで持ってやがる」

巫山戯たやろうだぜ。とデビルマンが吐き捨てた。さらにゼノンが叫ぶと、激しい雷雨がその場を包み込んだ。

「人間ども……貴様達のその力が、デーモンすら蹂躪せんとするその力が、地球を滅ぼそうとしていることになぜ気づかぬのだ！」

「何だど？」

隼人が眉を顰める。

「お前達は見ただろう。あのゲッターの地獄を。それを生み出したのは貴様ら人間だ。ゲッター線に選ばれた……ただそれだけで万物の霊長を気取る貴様らが生み出した地獄ではないか！」

「それは……！」

カイザーの後部座席でリサが反論しようと声を上げた。しかし、ゼノンは無言を言わさない。

「貴様ら人類は、繁栄の過程でどれだけの生物を滅亡させた？ 貴様ら人類の愚かで無思慮な行為が、結果として地球を食い潰しているのだ。光子力の時代？ ゲッター線の繁栄？ 笑わせてくれる。貴様ら人類は、我らデーモンの星・地球を食い潰す悪魔なのだ！」

滅びろ、人間ども！ そう叫びゼノンの腹部が大きく口を開いた。そして、炎の息吹が英雄達を襲う。

「わけのわからねえことを、言ってるじゃねえ！」

しかしその炎を切り裂いて、真ゲッターが飛び込んだ。

「てめえらが何を言おうとな、はいそうですかと滅ぼされるわけにはいかねえんだよ！」
2枚の翼が羽ばたき、炎を除けて進む真ゲッター。両手にゲッターエネルギーを収束させて、解き放つ。ストナーサンシャイン。真ゲッターロボの解放された真の力が、ゼ

ノンを襲う。ゼノンの腹にぶつけられたゲッターエネルギーの塊は、その中でメガトン級の爆発を起こしていく。その光は強靱な肉体を誇るゼノンの再生能力すら追い付かせず、細胞レベルで消滅させていく。

「こ、これが……この力が！」

ゼノンは、理解した。

あの方が恐れる力。ゲッター線の真の力。その意味を。

「ふ、ふふはははは……」

今際にゼノンは、全てを悟ったのだ。

「見える……見えるぞ……。そうか、そういうことだったのか……」

何故デーモン族は永き氷獄から目を覚ましたのか。

何故ミケーネの神々はデーモンを滅ぼそうとしたのか。

何故あの方は神でありながらデーモンに味方をしたのか。

何故人類だけが増え続けて、デーモンやハチュウ人類は滅びたのか。

否。

「我々は滅ばぬ……ゲッターよ……貴様の果てなき闘争の先で、我は待つぞ。ハハハハ……ハハハ……」

最期にゼノンが見せたのは、笑みだった。

「ゼノン……」

「アモン……いや、デビルマンよ。帰る場所なき貴様の戦いを、虚無の果てで見物させてもらうぞ。さらばだ！」

それが、魔王ゼノンの最期の言葉だった。ゼノンがその時、何を見ていたのか。それを語るには永劫の時が必要になってしまっただろう。竜馬も、デビルマンも、そんな話に耳を傾ける時間は持ち合わせていなかった。

ただ、人類はたしかに勝利したのだ。デーモン族を統べる王。悪魔王ゼノンに。
「……………これで、残る問題は早乙女博士か」

鉄也の呟きが小さく、しかし重く木霊した。冷たい風が、英雄達の間を過った。

……………

……………

……………

「甲児くん！」

弓さやかは今、甲児の腕の中にいた。その頑強な胸の中に蹲るさやかを甲児はただ、優しく抱きしめる。どんな言葉をかけていいのかわからない。だから、甲児はせめて今

言いたいことを口にする。

「……ただいま、さやか」

「……おかえりなさい」

そんな僅かな言葉を交わし、微笑み合う2人を、リサは嬉しそうに見つめていた。しかし、いつまでも安らいではいられなかった。

ここまでくる過程で、何が起きていたかはシローから聞いていた。早乙女博士の反乱。それはリサの経験した歴史では起こらなかった出来事だ。リサの記憶では、早乙女博士は研究所と運命を共にしたはずである。しかし、早乙女博士が反乱を起こしそして、行方を眩ませた。それはリサの生きた世界とは違う歴史を歩んでいる証拠だったが、決して歓迎できる事態ではなかった。

「世界最後の日、か。ジジイ、何考えてやがる……」

すぐに医務室に運ばれた元気を見送りながら、竜馬が呟く。

「……リヨウ、お前は博士がデーモンに寄生されたと思うか？」

何かを考え込むように隼人。

「あり得ねえな。あのジジイはデーモンごときに負けるタマじゃねえ」

「俺もそう思う。だが、博士は何を……」

弁慶も会話に加わるが、それ以上は竜馬も隼人も、答えを持ってはいなかった。

そんな彼らの下に歩いてくる人影が、ひとつ。

「……助けてくれて、ありがとう」

金髪の美青年だった。飛鳥了大佐。その姿に甲児は姿勢を正し、竜馬は「アン？」とガンを飛ばす。

「ところで、君達の仲間……デビルマンと名乗った彼は？」

飛鳥了はあたりを見回す。どうやら、デビルマンを探しているらしかった。

「あいつは人前にはでませんよ、飛鳥」

答えたのは、鉄也。

「剣くん……どういうことだ？」

飛鳥了と剣鉄也は、階級上は同格。しかし、実働部隊の鉄也と参謀本部の飛鳥はあまり認識があるというわけでもなかった。それでも、互いの顔と名前くらいは知っている。2人とも軍内部では有名人だからだ。

鉄也はグレートマシンガンを駆る英雄として。飛鳥は考古学や宇宙科学に精通する知識人であり、変人として。

「……あいつは、デビルマンは、俺達の味方です。ですが、あいつは帰るべき場所を持たない。悪魔と人間、そのどちらにもなれないデビルマンなんです」

「……悪魔にも、人間にもなりきれない。か」

飛鳥はそう呟くと、一礼して踵を返す。

「できれば、礼を言いたいと伝えてくれ。悪魔人間だったとしても、感謝くらいはされてもいいだろう」

最後にそう伝え、飛鳥了は皆の前を後にした。

「……………ふう」

甲児が息を漏らす。

「鉄也さん、あの人は？」

と、さやか。

「飛鳥了。軍の参謀本部に務めるエリートの中のエリート。なんだがあいつは、変人でも通っている」

「変人？」

弁慶が訊く。

「あいつはそうだな……度胸が据わってるくせに極度の怖がりなんだ。それもお化けとか呪いとか、悪魔とかそういうオカルト方面のな」

それではデーモン族など、恐怖そのものではなかったのではないか。そうさやかが訝しむ。

「一方であいつは信心深い。だから魔術だのお祓いだのにも詳しい。デーモン対策に彼

が抜擢されたのも、そういう特性があつてのことだ」

自身の苦手なものだからこそ、対策班に選ばれる。そんな矛盾を受けながらも恐ろしい悪魔そのものの見た目なデビルマンに感謝の言葉を述べるのだから、きつと良い人なのだろう。そう、さやかは感じた。

「……いや、あいつはとんでもねえタマだぜ」

ずつと黙っていた竜馬が、了の歩き去った方を睨んで呟いた。

「……竜馬？」

「……あいつの目は、優しい人間なんかじゃねえ。具体的にどうとは言えねえが、あれは早乙女のジジイと同類だ。目的のためなら手段を選ばない……それこそ鬼か悪魔もかくやというタイプの人間だぜ」

それ以上、竜馬は何も言わなかった。しかし、一堂の間に重い沈黙が流れていた。

……

……

……

「なあ、明。本当のいいのか？」

その日の夜、不動明……デビルマンは兜シローと如月聖羅の二人とともにボスのラーメン屋にいた。ラーメンを箸で摘みながら、シローは明に訊く。

「いいんだ。それに俺は不動明じゃない。不動明の身体を借りた悪魔人間、デビルマンだ。たとえば明の同僚だったとはいえシロー、お前が気を使う必要はないんだぜ」

炒飯を腹に入れながらデビルマン……不動明は答える。質問の内容は、「飛鳥了に会わなくていいのか」だ。その答えは「会うわけにはいかない」の一言。

「でも……それって寂しくない？」

セーラが訊くが、明は取り合わない。

「あいつには、不動明は戦死したと伝えてくれ。それでいい」
「でも……」

セーラが食い下がろうとするが、それをシローは制す。

「……ま、わかったよ。明がそれでいいなら、それでいい」

「……ああ、すまねえシロー」

炒飯を食べ終えて、明は立ち上がる。

「……久しぶりに、うまい飯が食えたよ。ご馳走さん」

「おい明、どこへ行くんだ？」

「決まってる。ゼノンが敗れた今、残る敵は早乙女博士一人。そして奴は必ず、ドラゴン

の下に現れる」

暖簾を潜り、外の街に出た不動明は走り出す。夜の闇に溶け込み、デビルマンに変身した明は、空へと駆け出していった。

「明……」

ただ、それを見守るシロー。

「よかつたのシロー。あの人、とても悲しそうだったわ」

麦茶のカップを置きながら、セーラが呟く。

「あいつはたぶん、それ以外の生き方を選べないんだよ」

シローは麦茶を一気に飲み干すと、そう答えた。

「人間の世界にも、悪魔の世界にもあいつは居場所がない。だけどあいつの心は人間だ」
「だったら……!」

私達の仲間として迎えてあげるべきよ。そう言おうとするセーラだが、シローは首を振る、

「あいつは心が人間だから、不動明という人間じゃなくなつたことに……不動明を愛する人達から不動明を奪つたことを、許せないんだ」

「そんな……」

その気持ちがあっただけ、シローには理解できた。ローレライを殺した兄の事を、散々

恨んだから。けどもしローレイがマジンガーZを倒して兜甲児を殺していたら、今頃シローはローレイを呪っていたらう。今の明は、あの頃の自分が兄に抱いた理不尽な恨みや悲しみを自分自身に抱いている。その怒りを敵にぶつけなければ自分自身を殺してしまいたくなるほどに、明の心が追い詰められているだろうと。

それでも、不動明を救える言葉をシローは持つていなかった。セーラだつてそうだろう。明の悲しみは、怒りは、呪いは、全て明だけのものだから。

それをやり切れない、とは思う。それでも、届かない言葉を吐いて明を追い詰めるよりはマシだと思った。だから、セーラの言葉を遮った。

「……シローちゃんも、大人になったねえ」

ラーメンを茹でながらボスが感慨深そうに呟いた。

「うるせえ」

シローが悪態をつき、セーラがクスクスと笑う。

「……あの人にも、こんなふうに見える日が来るといいわね」

そう言つて寂しげな顔をするセーラに、シローはどきりとして、誤魔化すようにラーメンのスープを啜った。味は、あまりよくわからなかった。

……

……
……

飛鳥了は、新光子力研究所に併設されていたビジネスホテルに停泊していた。本来、早乙女博士との会議が終わった後新光子力研究所に持ち込まれたミケーネの遺産……ラーガの解析作業に参加する手筈だったのだ。デーモンによる世界中での同時多発攻撃を受けて尚、ここは比較的被害が少ない。それでも窓の外から街を見れば、至る所に戦火の被害が見える。

「……………明」

あの時自分を助けてくれたデビルマンは、たしかに明だった。明の、目をしていた。死んだものとはばかり思っていた友は、デビルマンとして生きていたのだ。それが嬉しいと同時に、彼がもう自分の知っている優しい明でないことを思うと寂しくもある。

了は、確信していた。あの悪魔人間は不動明であると。

「明、俺はどうすればいい……………」

自分には、何もできない。悪夢に魘されるばかりの自分では、きつと明を救うことはできない。しかし、明の為に何かがしたかった。

窓の外を眺めながら、了は思う。親友のことを。と、その時だった。

「…………!?!」

背後に、気配がした。

此岸のものの気配では、なかった。

人間なら……或いは動物なら、こんなに冷たい気配を出せるはずがない。

コチ、コチという時計の音だけが、了の聴覚を支配する。振り向けない。振り向いたら、飛鳥了はもう飛鳥了のままではいられない。そんな、確信があつた。だが、しかし。だが、しかし。

おそるおそる、了は振り返る。そこにいたのは、巨大な顔に胴体が潰れた、異様に髪の毛の長い女だ。原始の恐怖を呼び起こされるような、異形の女。その大きな、しかし何も映していない瞳がギョロリと了を見つめていた。

「あ……ああ……!」

デーモン。直感がそう告げる。悪魔だ。悪魔が、何も映していないその瞳でこちらを見つめている。

「お迎えにあがりました」

「な……に……」

その瞳に見つめられた了は、まるで蛇に睨まれた蛙だった。しかし、その瞳を魅入られていくうちに了の脳裏には一つのイメージが去来する。

それは、了の中に存在する、しかし了の経験には存在しない。歪で、だが現実感のある記憶だった。

了は、無数のデーモンを従えて無人の荒野と化した中国大陸を侵攻する。迎え撃つは、悪魔の軍団。その軍団を束ねるのは、見間違いようもない……不動明。

飛鳥了の最も愛する友であり、宿命の敵。

「あき、ら……俺は……」

呆然と、了はその記憶の渦を泳いでいた。何度も生まれ、出会い、そして殺し合う宿命。

その果てに了はいつも、明と離別する。それら、運命の記憶の中に拘泥する中では、自分が何者なのかに気づいた。気づいてしまった。そして、記憶の大海を泳ぎ終えた時……飛鳥了はもう、飛鳥了ではなくなっていた。

「お目覚めですか、サタン」

サタン。そうサイコジエニーと呼ばれた了は、「ああ」と返して口角を歪める。

「苦勞をかけたなサイコジエニー。だが、おかげで全てを思い出したよ」

了は……サタンと呼ばれた者は、サイコジエニーから指環を手渡された。それを一瞥すると、ポケットに突っ込む。それからゆつくりと歩き出し、ドアを開ける。そして、長い廊下を歩き出した。サイコジエニーを従えて。

「俺は、最初からサタンだったんだな」

明を、人類全てを、騙していたんだな。そう、自嘲的に笑うサタン。しかし、全ては新しい世界のためだった。

この記憶を辿りながら、サタンは歩く。辿り着いた先にあるものは、赤褐色の魔神……ラーガ。

「サイコジエニー、お前はガルラを任せる」

サタンがそう言うと、既にサイコジエニーの姿は消えていた。相変わらず仕事がい、と感心しながら、サタンはサイコジエニーから渡された指環をその左手の薬指に嵌め、高く掲げる。

「ミケーネの守護神……否、古代シグマ文明の守護神ラーガよ！　今こそ真の主人の下で目を覚ますがいい！」

その直後、それまでずっと沈黙を守っていたラーガの瞳に光が灯った。

……

……

……

新光子力研究所の地下で大きな爆発が起きたのは、人類が魔王ゼノンを打ち破ったその日の夜のことだった。

駆けつけた弓さやか所長以下数名の所員が見たのは、それまで全く動く気配すらなかったラーガが動き出し、隔壁を破壊して研究所の外へと出ていく姿だった。

マジンガーとゲッターが出勤するがしかし、ラーガは突如空に現れた巨大な竜……かつてゲッタードラゴンと共に百鬼帝国と戦ったウザーラに似た巨竜と共に何処かへ消え、追うことはできなかつた。

そしてその夜、飛鳥了大佐が忽然と姿を消した。

第五話 「対決!!」 Bパート

ラーガの中は暗く、冷たい。それを飛鳥了……いや、サタンはまるで宇宙のようだと
思った。

人類が生まれるより遙か昔。サタンは、宇宙を旅する放浪者だった。正確には、サタン
だけではない。サタンの側には、シグマ文明と呼ばれる文明を築いた数多くの仲間達
がいた。ハーデス、ヘラ、アポロン、ゼウス……。仲間達或いは、神々とも呼ぶべき
者達と共に旅を続けたサタンは、この青い星即ち地球へと降り立った。そして、そこで
種子を芽吹かせ、育み、地球へと帰化していった。

神々の子孫が生まれると、サタンを含めた神々は眠りについた。無理もない。虚無の
軍勢に敗れた神々は疲弊していたのだから。

「しかし、目覚めた我々を待っていたのは子孫達の枝分かれと、殺し合いだった」

それは、地球という星の神秘だった。ある子孫は、爬虫類と交わり独自の文化を発達
させた。ある子孫は、他の種を取り込み合体することで自己進化する力を身につけてい
た。それは、醜い進化と言わざるを得なかった。

神々は悲しみ、激怒した。故に自らの子孫達を滅ぼし、もう一度文明の開発をやり直

すことに決めた。

それに叛旗を翻したのが、サタンだった。

たとえ異常な進化をしたデーモン達とはいえ、既に生まれた命なのだ。身勝手で殺すことなど許されるはずがない。私はデーモンを率いて、神々と戦い……勝利した。神々はバードス島や僅かな場所にその痕跡を残すのみとなり、ハーデスや多くの神々が、それを信奉するミケーネの子らと、闇の奥で眠りについた。

そして、サタンとデーモン達もまた、次なる戦いに備えて氷獄の世界にて眠りについたのだ。

「だが……」

再びサタンは、そしてデーモン達は目を覚ました。声を、聞いたのだ。それは虚無よりの声だった。何千何万という神々の軍団が、それと戦っていた。しかし、それは宇宙よりも巨大なそれは、神々の軍勢が力を尽くしても勝つことの叶わぬものだった。

時を司り、天を戴き、空に至る虚無。それが、サタンたちの故郷を……古代シグマ宇宙を飲み込んだ虚無だった。

虚無が、迫っている。

虚無の到来。それは神の時代と人の時代を諸共に消し去る無の到来。

全ての命を消し去るビックバン。

その時が近づいていることをサタンは自らの超能力で感じ取り、目覚めた。そして、見てしまった。

この地球にまで、ゲッター線が降り注いでいることを。

神々の末裔である人類はゲッター線に選ばれた見返りにその神秘を剥奪され、そして争いの歴史を持つて進化と淘汰を繰り返してきたことを。

虚無の時は、すぐそこまで迫ってしまっていることを。

「僕は、許せなかつた……。ゲッター線が、人類が。あの美しかった地球を汚染し、多くの生き物を滅ぼしてしまつた全てが」

だから、人類を滅ぼすための作戦を敢行することにした。

手始めに恐竜人類を目覚めさせ、地球侵攻の尖兵とした。次にミケーネ人の遺跡で人間の科学者に夢を見せた。世界征服という果てなき夢を。その科学者は極めて優秀だったが故に、こちらの存在にまで気づきかけていた。果ては隣接次元の存在まで確信してしまつたのだからこれはサタンにとつても大きな誤算を孕んだ結果になつた。さらに神々の末裔であるハーデスとの停戦協定。そして、宇宙の果てよりギルギルガンやドラゴノザウルス、ピグドロンを送り込んだ。

その全ては、失敗した。人類は、それらサタンの送り込んだ脅威の悉くを退け強くなつていった。だから、サタンは最後の手段に出るしかなかつた。

人間作戦。自らの記憶をサイコジエニーによって消去させ、人間・飛鳥了として暮らすことで人間の弱点を知る作戦だった。

人間の弱点。即ちそれは恐怖心。飛鳥了は、極度の怖がりであり、それゆえに計算高い性格の人間として成長し……そして、その時が来るのを待った。即ち、裁きの時を。

その時がくるまで、長い年月を要した。しかし、ブライの帰還が合図だった。

ついに、始まったのだ。世界最後の日が。

デーモンは動き出した。ゲッタードラゴンを手に入れるために。人類を抹殺するために。飛鳥了の恐れることをデーモン達は行った。飛鳥了の思念をサイコジエニーがキャッチし、その通りに行動する。それは効率のいい作戦だったが、故に不幸な事故が起きた。

不動明。飛鳥了の親友である彼を喪うことが何よりも、飛鳥了にとって恐ろしいことだった。だから了は明を軍へ所属させることで側に置き……デーモン達は不動明の搭乗していた光子力空母・剣蔵を襲ったのだ。

そして、もう一つデーモンにとって不運な事故があった。それは、不動明という人間が飛鳥了が思うよりも遥かに強い心を持つていたこと。その結果、不動明はあの勇者アモンの心を侵略し……デーモンの天敵・デビルマンとなった。

デビルマンの存在は、結果としてデーモン族を敗北へと導いた。マジンカイザーとい

うイレギュラーと、真ゲッターロボの帰還とそれは重なり……シレーヌやゼノンもは敗れた。もはや、デーモン族に未来はなかった。

そして、飛鳥了の下にサイコジエニーが現れたことでサタンの記憶が蘇り……飛鳥了は全てを思い出した。

「だからこそ、私は今ここに……」

ラーガの中でサタンは、感じていた。

——ゲッタードラゴン。その胎動を。

世界最後の日の、はじまりを。

「サタン様」

ラーガを格納するドラゴンの姿をした要塞……シグマ文明の母艦・ガルラの封印を解いたサイコジエニーは今、ガルラの心臓と化していた。

「サイコジエニー、大義だった」

こうしている間にも、サイコジエニーの思念を受けたデーモン達が次々と集まってくる。決戦の時なのだ。

世界最後の日。それは聖書には黙示録と記されている。人は滅び、神の使いと悪魔の軍勢の一大決戦が起こる。その始まりの儀式。それが今まさにバードス島で起ころうとしている。

「デーモンが生き延びる方法はただ一つ……ゲッターを滅ぼし、黙示録を阻止することのみ。早乙女研究所は滅びた。もう新たなゲッターが生まれることはないだろう。しかし、ゲッターの大元を、進化の根源を絶たねば我々に未来はない!」

——デーモン軍団を結成し、ゲッターの血脈を滅ぼすのだ!

それは、サタンが現世に……この宇宙に戻ってきた理由に他ならないのだ。

デーモンだけではない。全ての命のために必要な決戦なのだ。そうサタンは自らを鼓舞する。ゲッターと、人類を滅ぼすことのみこの宇宙は守られる。もう、その段階にまできてしまったのだ。

「明……」

しかし、明は……デビルマンは、人間を守るために戦うだろう。たとえ人間が守るに値しなかったとしても、だ。

それだけが、サタンの……飛鳥了の心残りであり、未練だった。

……

……

……

一方、新光子力研究所は混乱の只中であつた。

「何が起こつたの!?!」

さやかが所員の報告を聞く。ミチルの発掘したラーガが突如として動き出し、そしてウザーラに似た巨竜型の巨大兵器と共に飛び立ったという内容は、俄かには信じられなかつた。しかし現にラーガは消え、そして研究所のモニタは確かに捉えていた。ラーガに乗り込む飛鳥了大佐と、黒いウザーラの姿を。

既にマジンガー、ゲッターロボ乗組員達は招集を受けてブリーフィングルームに集まっていた。特にウザーラの恐ろしさを体感している竜馬と隼人は、その黒いウザーラ存在に険しい顔をしている。

「……そんなにすごいのか、ウザーラって?」

甲児が訊く。

「……正直、フルパワーの真ゲッターでも勝てるかわからねえ」

それが、隼人の回答だつた。

——ウザーラ。かつて竜馬達ゲッターチームと百鬼帝国の戦いの最中に現れたアトランティス帝国の守護神とも言うべき存在。高度な文明を持っていたアトランティスを一夜のうちに海へ沈めた恐ろしい機体だつた。

ゲッタードラゴンですら、ウザーラに傷一つつけることはできなかつた。黒いウザー

ラがああのウザーラと同一の存在だとすれば、真ゲッターを持つてしても苦戦は必至だろう。そう隼人は分析する。

「そもそも、その黒いウザーラはどこから出てきたんだ？」

当然の疑問を、鉄也が口にする。

「ウザーラは、伝説のアトランティス文明の遺産だったわ。もし、黒いウザーラも同じようなルーツを持つているとすれば……」

ミチルが呟く。

「……例えば、ムー大陸とか」

それはあり得そうだが、断定はできない。という風な口調だった。

「いずれにしても、わからないことが多すぎますね」

セーラが、付け加えた。

「私の体験した歴史にも、黒いウザーラに該当する記録はありませんでした」

そう、リサ。つまり、現時点では何の情報もないに等しいということだ。

「目標の監視は続けてるのか？」

大介が所員に確認する。

「はい、黒いウザーラはデーモンの生き残りを集めて、バードス島へ向かっているようです」

「バードス島!」

「おい、どうしたシロー?」

「……明が、デビルマンが向かったんだ。残る敵は、早乙女博士はきつとバードス島にいるって」

「本当かつ!」

竜馬が、身を乗り出した。

「あ、ああ……」

その勢いに、シローは気圧される。

「シロー、てめえどうしてそれを言わなかった!」

しかし竜馬の勢いは止まらず、シローの胸ぐらを掴む。

「よせ、リョウ!」

それを必死に止める弁慶。と、その時だった。ブリーフィングルームの扉が開く音とともに、少年が一人、包帯を顔に巻いた状態で立っていた。

「行こうぜ、リョウさん」

早乙女元気。早乙女博士の息子であり、ミチルの弟でもある少年。ゼノンとの戦いで重傷を負い、今は医務室で眠っているはずだった。

「元気、お前……!」

「そこに行けば、父さんがいるんだろ。父さんが何を考えているのか、俺は知らなきゃいけない」

身体の怪我は、ゲッターの操縦に耐えられるものではない。だが、それでも。その目は真つ直ぐに竜馬を見据えていた。

「元氣……」

ミチルが、何かを言おうとする。しかし、できない。

元氣の目は、死を覚悟する男の目だった。ミチルは、その瞳を何度も見てきた。

研究所と仲間達を守るために、一人で特攻しようとした竜馬の、隼人の、武蔵の目だ。その武者達に、ミチルは守られてきたのだ。

「だけど、今その目をしているのは他ならぬ……弟なのだ。」

「わかったわ、元氣」

だから、ミチルはそれを許すことしかできない。

「ありがとう、姉ちゃん」

「でも、条件があるわ」

「条件？」

ミチルはひとつ頷くと、それを口にする。

「私もゲッターに乗る」

「なっ、姉ちゃん!？」

「ミチルさんっ!？」

早乙女ミチルも、ゲッターの操縦訓練は受けている。しかし、現役を引退してもう長い。元気達の反応は、当然のものだった。

「あら、『早乙女の血』は元気だけのものじゃないわよ?」

不敵に笑うミチル。そう、早乙女ミチルもまた早乙女博士の血を引く者なのだ。興味の対象がゲッターロボから違うものに変わっていたが、それでも。

「つたく、血は争えないな……」

元気がそう言つて、渋々承諾する程度にはミチルも、早乙女家の一員だったのだ。

「……おそらく、総力戦だな」

研究所のラーガと黒いウザラ。デーモンの残党。そして早乙女博士。それが何を意味することかはわからない。しかし、最終決戦であることだけは、全員が理解できている。

「……………昔、早乙女のジジイに言われたことを思い出すな」

竜馬が、ボヤク。

「……………ああ」

隼人が、ニヤリと笑みを作つて頷いた。

「……愛する人がいる限り、そのためだけにでも戦うべき。か」

そして、今がその時だということをも3人は嫌でも感じていた。だからこそ、

「よしっ！ ゲッターチーム、出撃だ！」

5人は走り出す。ゲッターチームに、作戦など存在しなかった。敵がメカならばつ壊す、有機体ならばぶつ殺す。そして、早乙女博士の真意を聞き出す。それが、彼らの戦いだった。

「……俺たちも、負けてられねえな」

ゲッターチームの5人が走り去った方を見ながら、甲児が呟く。

「さやか、研究所の全モニタでバードス島と周辺の観察と報告を頼む」

「任せて。思いつきり、暴れてきていいわよ甲児くん」

甲児の全てを信じている。そう、言外にさやかは言つて、所員達に指示を出していく。それをこそばゆく思いながら、甲児は「へっ」と笑い、リサも幸せな気持ちだった。

「……おと、ご主人様」

「ああ……」

帰る場所を守るために戦う。それが、甲児達の戦いだった。帰ることを考えないゲッターチームの戦いとは違う。甲児にも、鉄也にも、大介にも、帰るべき場所があった。

そして、シローにも。

「……ねえ、セーラ」

「……なあに？」

シローは、セーラの青い瞳を見つめようとして、だけど恥ずかしそうに視線を僅かに外して、また再びセーラの顔へと向き直り、囁いた。

「……この戦いが終わったら、2人でローレイの墓参りに行きたいんだ。その、いいかな？」

それは、兜シローという男にとって必要な儀式だった。ローレイの面影を持つ少女と、これからも共に生きるために。

心の中に今もいるローレイの幻影に、別れを告げに行く。それをしてはじめて、シローはセーラと共に生きる資格を得られる。そう、思っていた。

セーラは一瞬、びっくりしたように目を丸くして、それからシローの目が真剣なことを読み取り、

「……うん」

と、そう小さく頷くのだった。

「へっ、シローにも死ねない理由ができたな」

茶化すように、甲児が言う。

「うるせえ、とにかく……出撃だろ！」

「ああ、そうだなー！」

かくして、ゲッターチームに続いてマジンガーチームもブリーフィングルームを飛び出していった。

真ゲッターロボ、ブラックゲッター、マジンカイザー、マジンガーZ、グレートマジンガー、グレンダイザー。最強のスーパードロイド達の出撃を見送りながら、弓さやかは少し膨らみ始めているお腹をさすりながら見送った。

若い頃は、自分も甲児と一緒に戦った。若さを、命を燃やしていた。しかし、今は。（あの時ジュンさんが無理にでもビュースで出撃しようとした気持ち、今なら少しだけわかるわね……）

あの時、自分には所長としての責任があった。それが、最後まで大人としての責務を果たすことに終始させてくれた。だけど、今はそれだけじゃない。

お腹の子が生まれた時に、甲児がいなかったら。それを想像するだけで怖い。

できることなら、今すぐにでも甲児達の戦列に加わりたい。一緒に戦って死ぬのならば、本望だ。

だけど、さやかなの戦場はここなのだ。

「みんな、映像は常にチェックして、光子力カメラ、コマンドドローン、全部使いなさい

「！」

ここで、甲児の帰る場所を守る。甲児は並行世界からリサを連れてきていた。それに関してはある程度の説明を貰ったが、このあとリサがどうするのかだって考えなければならぬのだ。だから、

(絶対、帰ってきてね。甲児君……！)

お腹の子が、父と姉を喪うなんてことだけは避けたかった。

……

……

……

バードス島と日本には時差がある。甲児達が出撃した頃、丁度バードス島は夕焼けが世界を覆っていた。その黄昏を呼ぶ光を、ゲッタードラゴンの上で早乙女博士は見つめている。

『早乙女博士』

博士の耳元で、声がする。

「……ゴールか」

それは、帝王ゴール。かつて早乙女博士が、ゲッターロボが滅ぼした恐竜帝国の皇帝。その人の声だった。

『竜馬達が動き出しました。いよいよ、あなたの計画が最終局面を迎える時です』
「うむ……」

帝王ゴールが早乙女博士の前に現れたのは、ドラゴン復活計画を立てている最中のことだった。ゴールは、計画の修正案を持ち込み早乙女博士の計画に大きく貢献したのだ。

「しかし、わからぬ。ワシは貴様らを滅ぼした張本人だ。それがなぜ、ワシに手を貸す？」

『さて、なぜでしょう』

自分でもわからない。そう言いたげにゴールは返す。

『ただ、あなたの側が心地よいのです。仇敵であるゲッターの側が』
『左様。あなたのそばに居ると心が和む』

早乙女博士の背後に、気配がもうひとつ。

「ブライ……」

ブライ大帝。早乙女博士が、ゲッターロボが滅ぼしたもう一つの敵。百鬼帝国の長。今、ゴールとブライ。二人の霊が早乙女博士の傍で力を貸していた。

「ならば、精々ワシの為に戦うがいい」

そう、早乙女博士が言い、夕陽に影を映す深紅の羽根を、深緑の体軀を睨む。

——デビルマン。人間・不動明とデーモン・アモンが合体し、融合した姿。それが今、早乙女博士の眼前に迫っていた。

「早乙女博士！ このデビルマンが、貴様に引導を渡しに来たぞー！」

デビルマンがその翼をはためかせ、飛び込んでいく。早乙女博士目掛けて。しかし、その眼前に海を割って現れるのは、双頭の竜。デビルマンの中にあるアモンの記憶は、それを見たことがあった。かつて、デーモンが氷獄の中に眠る以前のこと。恐竜と呼ばれた、巨大爬虫類だ。それを機械化したサイボーグ兵器……それは不動明の記憶の中では、メカザウルスと呼ばれていた。

『久しいな勇者アモン……。まさかこのような形で再会することになるとは』

その声も、アモンの記憶の中にあつた。

「貴様は、ゴールツ!？」

帝王ゴール。恐竜帝国を総べし偉大な王。巨大なメカザウルス・無敵戦艦ダイからその声が木霊した。無敵戦艦ダイは、背中に格納されたミサイルを放ちデビルマンを牽制する。ミサイルの雨にデビルマンは足を止め、デビルファイヤーでそれを焼き払う。しかし、その間にも無敵戦艦ダイはデビルマンの懐へ突撃していた。炎が止んだ瞬間、デ

ビルマンの眼前に広がるダイの巨体。

『デビルマン、今はまだ早乙女博士をやらせるわけにはいかん!』

「ほぎけつ、亡霊がっ!？」

デビルマンがその鋭利な爪を研ぎ澄ませ、ダイの、帝王ゴールの心臓目掛けてその拳を突き出す。デビルカッター。岩をも砕くその一撃はたしかに無敵戦艦の装甲を貫き、生体部分を抉る。そして、その心臓を握り潰す。

「ゴール、俺の相手はお前じゃねえ!」

絶叫を上げて絶命する無敵戦艦。デビルマンは、それに振り返りもせず早乙女博士へと向かう。しかし、その時だった。背後から放たれた稲妻が、デビルマンを撃つ。

「グアアアアツ!？」

絶叫し、デビルマンはその翼を焼かれ地へ堕ちていく。それを見つめる瞳があった。

「グ……貴様は……」

巨大な竜と、赤褐色のグレンダイザー。そして、それを守るように陣形を組むデーモン達。

「来たか、サタン……」

早乙女博士の声。サタン。まるで全てを知っているとでも言うかのように、早乙女博士はそう呟いた。

「サタン……だと」

ゼノンを越える、デーモンの神。實在すら疑わしかった存在。それが、今デビルマンの前にいる。

「明……」

そして、その赤褐色のグレンダイザー……ラーガから聞こえるサタンの声。それは。

「う……………」

「明……。私達が戦う必要はない」

不動明のよく知る声。牧村美樹を最愛とするならば、その声は不動明にとって親愛を意味する声。彼はいつもと変わらぬ口調で、デビルマンへ、不動明へ語りかける。

「明、デビルマンとなった君は人間の世界で生きることができない。さあ、明。私と共に新しい世界に生きてくれ！」

飛鳥了。不動明にとって牧村美樹同様の、愛する人間。その象徴だった。

「りよ、了……。お前は……」

だが、だがしかし。デビルマンとなった不動明の心の奥底にある闘争心は、了の言葉を跳ね除ける。

「お前は最初からサタンだったんだな。俺を……俺達を騙していたんだな！」

「騙したわけじゃない。私は記憶を失い、人間として暮らしていたんだ明。だが……全

てを思い出した今、私はサタンとしてやるべきことがある!」

そうサタンが宣告すると同時。巨竜……ガルラの周囲のデーモン達がゲッタードラゴン、その繭へと突撃していく。しかし、デーモン達はすべからくゲッタードラゴンが逆に同化していく。何をしているのか、デビルマンには理解できない。

「……何を、している?」

「世界最後の日だよ、明」

「……何?」

世界最後の日。それは、早乙女博士やコーウエンとステインガー……バアル・ゼブルの言っていた言葉だ。

「どういうつもりです。なぜデーモンが早乙女博士の手助けをする?」

「それが、黙示録の始まりだからさ」

サタンは、冷たく宣告した。終末を告げるラツパのように重いその一言は、群れることを嫌い闘争に明け暮れる悪魔達を統率し、ゲッタードラゴンにその命を焼ばさせていく。

「明、人類に未来はないんだ。だからこそ私は目覚め、ドラゴンも覚醒する。君がデビルマンになったのは、私と共に黙示録の先の世界を生きる為に他ならない」

「ふぎ……けるなっ!」

そんなことのために、デビルマンになったわけじゃない。デビルマンは立ち上がり、サタンを睨む。しかし次の瞬間、ラーガから投げ放たれたハーケンがデビルマンの両手を潰す。まるで聖者のような、或いは火刑に処される魔女のような体勢で磔にされたデビルマン。超能力と怪力でそれを退けようとするも、サタンの超能力かハーケンはピクリとも動かない。

「クソツ……!」

「明、そこで見ているといい。世界最後の日が訪れるのを」

サタンが冷たく笑う。それがさらにデビルマンの闘争心を煽る。しかし、どうすることもできない。

万事休す。そんな時だった。

突如伸びたゲッター線の光が、デーモンの軍勢を滅ぼしていく。

「ゲッターアアアアベイベイベイムツ!!」

バードス島を、いやこの星を震わせるその叫び声と共に、巨大な翼と大きな斧を持つ真紅のマシン・真ゲッター1。それに続いて光子の光を放つマジンカイザー、マジンガーZ、グレートマジンガー。さらにグレンダイザーと、ブラックゲッター。スーパーロボット軍団が、バードス島に到着したのだ。

「来たか竜馬、隼人、弁慶!」

サタンとデビルマンの問答には黙っていた早乙女博士は、真ゲッターロボの存在を認めると歓喜の声を上げる。

「ジジイ！ てめえ何を考えてやがる!?!」

竜馬の声を聞き、早乙女博士はクツクツと嗤う。

「世界最後の日だ。その日が近づいているのだ。そして今、全ての因子が揃った!」

「訳のわからねえことを言ってるんじゃないか！ 俺にわかるよう説明しろ!」

真ゲッターは高速でドラゴンへ近づく。ドラゴンの頭上に立つ早乙女博士を守るように、薄らと、しかしはつきりと影が立つ。

『久しいな、流竜馬』

「ブライ大帝……!?!」

隼人が驚愕の声を上げる。ブライ大帝。ゲッターチームの仇敵。そして……

「早乙女博士！ そいつは……そいつは……!?!」

弁慶が、戸惑いの表情を見せる。なぜならば、

「てめえ……ブライは武蔵の仇だぞ!?!」

そう、武蔵の仇であるブライが早乙女博士の傍らに存在している。それは、ゲッターチームにとって認め難いことだった。

「武蔵は、生きている」

しかし、早乙女博士は血走った眼でそう答える。

「何……?」

「武蔵だけでない。達人も……剣蔵、十蔵。みんな、生きているのだ」

それは、明らかに正気を失った人間の言葉だった。

「リヨウ、全てを説明しようとすれば人間の一生では到底叶わないのだよ。だが、夢を見たはずだ」

「夢……だと?」

狂気に堕ちた老人の戯言はしかし、確かな現実感を持つて竜馬に、皆に伝わる。

「そうだ、夢だよ竜馬。ゲッターエンペラーの夢を!」

早乙女博士が叫ぶと同時に、ドラゴンの繭がドクン、と脈打った。そして、ドラゴンが咆哮する。その地を割り空を割く叫びは、竜馬を……ここにいた全員を、虚無の世界へと誘った。

.....

.....

.....

夢。夢を見ていた。宇宙を埋め尽くす無数のゲットマシン。そして、ゲットマシンを展開する巨大な、一つ一つが惑星すら凌駕する巨大なゲットマシンが、3つ。彼らを迎え撃つのは、昆虫のような姿をした機動兵器群。それは、遙かな未来で起こる戦争だった。

『ゲッターアアアアツビイイイイツムツ!!』

宇宙を震撼させる流竜馬の声。そして、一条の光が走ると同時、次々と撃滅していく昆虫兵器達。

『惑星ダウイーン消滅!』

『なんとしても、なんとしてもここで食い止めるんだ! ゲッターを、この宇宙に残してはいかん!』

そんな言葉を断末魔に消えていく命を喰らうように、ゲッター艦隊は進む。その先にあるものは、果てなき闘い。進化。繰り返す輪廻。進化。更なる強敵。進化。宇宙を超えし魔神。進化。それはヒトの想像力が生み出したもの。進化。それとも機械仕掛けの神か。進化。星を喰らう魔物か。進化。意思を持つ空間か。進化。それは、それこそは大いなる意志なのだろうか。進化。命を喰らうことで命は生きる。進化。それは即ち、生命の一生とは喰い合い、殺し合いの中にしか存在しないということになる。進化。生き残った生命だけが、進化の先へと旅立つことができる。進化。そう、進化だ。進化

こそが、生命が生まれた意味であり、生命が尽きる意味である。だとしたら、この闘いとは何だろう。進化の過程。それに過ぎないのだろうか。

「この戦いの意味は、何だ？」

微睡の中、竜馬は虚空に問うた。それに応えるように、声が出た。聞き覚えのある声だ。誰だろう、と竜馬は思案する。

『進化だよ、竜馬』

誰だ。ずっと近くで聞いていた気がするのに、思い出せない。

『進化とは、命の先にあるものだ。そして今、人類は滅亡の危機に立たされている』

そんなことは、させない。そう強く念じながら、竜馬は声を聞いていた。

『竜馬、時間が無い。人類は滅亡の危機に瀕している。そのために全ては、ここに集ったのだ。それは植物の実が熟し、種子を飛ばすのと似ている。しかし……このままでは人類は種子を散らす前に全てを滅ぼそうとするだろう』

それは、それがこの光景なのか。ゲッター艦隊があらゆる宇宙の命を刈り取り、喰らう、この地獄のような光景が。竜馬はそう口を開こうとしたが、できなかつた。

何か、強大な力が竜馬に働いていた。

『それを……意思を持つもの達は許さない。リョウ……俺達は、新たな旅立ちを迎えねばならん』

リョウ。そう呼んだ声は、その声色は。

まさしく……………。

「ムサシ!？」

巴武蔵。その人だった。

「ムサシ!　そこにいるのか、武蔵!？」

『リョウ……………恐れることはない。俺達は、みんな、ここにいるんだ』

……………

……………

……………

その空間に、不動明は一人だった。それは、全ての滅んだ世界だった。赤い海、赤い空、瓦礫の街。

「これは……………」

そこに、命は残っていないかった。ただ、人類という種がかつて存在していた証。コンクリートや鉄の風化した残骸と、骸の骨があちこちに転がっていた。

『……は、もうひとつの未来だ』

明の脳内に、声が響く。了の声だ。

「了、お前がこれを見せているのか？」

『違う。我々の中にある記憶……あえて呼ぶのならば虚憶とでも呼ぶべき偽りの、しかし真実の記憶だ』

どういふことだ。意味がわからない。しかし、たしかにこの映像には夢と呼ぶにはそぐわない生々しさがあるように明は感じていた。

瓦礫の街を、明は了の声を頼りに歩く。歩き続ける。まるで地獄。いや、地獄と呼ぶのも生ぬるい光景が続いていた。歩いていて、ゴロンとした何かを明は蹴った。

「ん？」

蹴ったものに視線を落とす明。それは、丸いものだった。丸くて、黒くて、白い。それが何かを認めた明の血の気が引いていく。

「あ……あああ……」

牧村美樹。明の愛する女性。

その頭部だけが、ゴロンと転がっていたのだ。

「嗚呼嗚呼嗚呼喚喚喚喚荒荒荒荒婀婀婀婀婀婀ツツツツ!!」

ただ、叫ぶことしかできなかつた。

その光景は、たとえ現実ではなかつたとしても、明の……デビルマンの心を砕くには

十分過ぎた。

「美樹……そんな……」

『明、これが人間だ。人間は人間同士で殺し合い、いずれ自滅する。この世界では、そのきっかけがデーモンだった。だが、たとえばデーモンが現れなかったとしても、遅かれ早かれ人類は自らを滅ぼす。それは、人類がこの惑星に生まれた命である以上変えられない』

何を、言っているんだ。そう、口にする気力も明にはなかった。

『全ての命は、繋がっているんだ。そして、そのために人類は滅びの時を迎える。お前が守ろうとしているのは、無駄なんだ』

だが、しかし。

その言葉だけは認めるわけにはいかなかった。

「無駄、だと……。ふざけるなよサタン」

お前は、間違っている。本能的にそれだけは理解できた。

「無駄かどうかなんて、関係ねえ。俺が人間を守るのは、俺が守りたい人がいるからだ
！」

たとえば、自分が彼女の隣にいられなかったとしても。明にも、デビルマンにもわかっている。これは自己満足に他ならない。その結果として自分の戦いが徒労に終わる

のならば、構わない。しかし、だとしても。

『明、わからないのか。大いなる意思はこの結果を望まない。だからこそ、目覚めの時が来ている。僕と君に虚憶を与えてくれた。これは、天命なんだ。私と共に、あたらしい世界を生きることこそが！』

「ははっ、天命か。サタン……お前からそんな言葉が聞けるとはな。だが、だがな！」

明の背中から、翼が生える。悍ましい悪魔の姿へ、みるみるうちに変化していく。

「俺はデビルマンだ！ 人の心を守るために戦う、悪魔の使者だ！ 大いなる意思も天の意志も関係ねえ！」

その絶叫が、不動明として最期の言葉だった。

「不動明も、勇者アモンも、あの時死んだっ！」

俺は……デビルマンだっ！」

……

……

……

その夢の中で、兜甲児は幼かった。幼い頃に両親と死別し、祖父の下で過ごした記憶。

記憶の中の祖父は優しかった。甲児とシローは祖父の下で暮らし、そして祖父を看取った。

「マジンガーZは、おじいちゃんの形見でもある……」

だからこそ、今シローがマジンガーZに乗っているのはある種の縁だと思っている。そして、並行世界の変貌したマジンガーZ……マジンカイザーに自分が乗っていることも。

そんな現実を意識を向けた瞬間、夢は姿を変えた。虚無の宇宙。真空の暗闇の中に甲児はひとり。それが何を意味しているのかはわからない。ただ、暗闇の奥にマジンガーがいた。

あつた。ではない。その存在が生きているように甲児は感じたのだから。

『甲児……マジンガーは神にも悪魔にもなれる』

マジンガーから声がする。円環の翼を持つ魔神。その言葉は、祖父からマジンガーZを託された時に聞いた言葉だ。

神にも悪魔にもなれる力。マジンガーは所詮器でしかない。マジンガーを神や悪魔にするのは人間なのだ。

だとすれば、目の前にいる魔神はなんだろう、と甲児は思った。そして、すぐ答えに行きあたる。

「おじいちゃん……」

兜十蔵。マジンガーZの開発者である天才科学者にして、甲児の祖父その人だ。あの円環の魔神は、十蔵の心を宿している。そう、甲児は感じていた。

『甲児……今私は円環の世界にいる。遍く、あらゆる世界を、隣接するあらゆる可能性を観測した。そしてその全てでお前は……マジンガーを託された。しかし、お前は神にも、悪魔にもならなかった』

それは。それは……。

「おじいちゃん、俺は人間だ。人間でたくさんだよ！ 人間として飯食って、眠って、好きな人の隣にいて、笑って、泣いて、愛して……そんな幸せを手放せなかった。だから、マジンガーを神にも悪魔にもしなかった」

円環の魔神は、零の魔神は甲児の言葉を受けて沈黙する。続きを、答えを促すように。「俺は、人間がいいんだおじいちゃん！ どうして、どうしてマジンガーを生み出しちゃったんだよ！ どうして、俺やシローにこんな責任を押し付けたんだよ！」

甲児が叫ぶ。魔神は、祖父は、それを受けて言葉を紡いだ。

『甲児。全て大いなる意思だ。今ならわかる。なぜ私がマジンガーZを作り上げたか。なぜお前達を遺し逝くことになったか。なぜヘルが世界征服に王手をかけ、しかしお前に倒されたか。なぜあの時私の祖母は死んだのか。なぜ1+1は2なのか……時間と

空間と私たちの関係。全てはこんなにも簡単なことだったのだ……」

「おじいちゃん……?」

後半になるにつれ、その言葉は詩的なものを帯び、意味不明になっていく。

『これを人間の言葉に変換すると、運命というものになるのだろう。全ての命が、その時のために生まれたのだ』

「それが、世界最後の日だったのか……!」

甲児の叫びに、魔神は応えない。しかし、しばらくの後、零は口を開いた。

『甲児、今から24分42秒後に、ロシアの核ミサイルがバードス島に投下される』

「な………?!」

『この危機を回避できるのは、お前達だけだ……』

そう、零の魔神が囁くと同時に、甲児の意識は現実へと引き戻されていく。それはつまり、祖父との2度目の別れを意味していた。

「待つてくれおじいちゃん! まだ、話し足りないよ! 俺、結婚したんだ! 娘もできるんだよ! シローにも、彼女ができてさあつ! 鉄也もジュンさんも、ボスもヌケもムチャも、大介さんもひかるさんも、マリアちゃんも、リサも、みんな、みんないい奴でさ! おじいちゃんにも会ってもらいたかったんだよ! なあつ!」

しかし、甲児の叫びも虚無の中に消えていく。やがて意識は完全に覚醒し………

.....
.....
.....

「今のは……………?」

甲児は、目を覚ました瞬間に時計を確認する。時間は、あれから1分も立っていない。体感した時間は何時間もあの空間にいた気がするのに、だ。

「ウ……………お父さん……………?」

後部座席で、リサが目を覚ます。どうやら自分だけでなく、全員が眠っていたらしい。

「リサ……………何を見た?」

「……………別の私。お父さんがインフィニティの中で発見した私と、会いました」

「そうか……………」

どうやら、全員が全員違うものを見ていたらしい。それがどういう理屈で起きたものなのか、甲児にもわからなかった。しかしその直後、さやかからの通信であれが幻覚の類ではないことを思い知る。

『甲児君、みんなっ！ たった今入った情報よ。ロシア政府がバードス島への核攻撃を

決定したわ。今から25分後、ミサイルが発射される!」

「何だどっ!」

驚愕の声を上げる鉄也。

「ククク……」

サタンの笑い声がクツクツと響く。

「明! これがお前の守ろうとした人間の正体だ! 人間は守る価値はあつたかあつ!」

「……………サタンツ!」

「愚かな……………今のゲッタードラゴンに核などを浴びせてしまえば、それこそ地球はゲッター線に汚染される!」

「ツ!」

ゲッター線の汚染。あの世界を見た者たちには、地獄の光景がリフレインする。

「そんな……………この世界まで……………」

リサが、絶望の声を上げる。

「そんなこと、させるわけにはいかない!」

しかしグレンダイザーの介介は、毅然と言い放った。

「ああ、その通りだ！」

シローが続く。

「シロー……」

「アニキ……俺、おじいちゃんに会ったんだ。夢の中でおじいちゃんは、金色の巨人の姿をしていた。あれはたぶん、マジンガーだと思う」

金色の魔神。それは甲児が見た円環の魔神とは違う姿だった。しかし、それでも祖父なのだろう。甲児はそう確信する。きっと、それもまた魔神のひとつの姿なのだろう、と。

「おじいちゃんは、マジンガーは神にも悪魔にもなれるといった。だけど、俺は愛する人を守るなら神も悪魔も関係ない。なあ、そうだろ明！」

シローの言葉を受けたデビルマンは、磔になりながらもニヤリと笑う。

「ああ。人の心がある限り、神も悪魔も関係ねえ！」

デビルマンの叫びと共に、磔にしていたハーケンが砕け散る。

「明ッ!？」

サタンの超能力を、デビルマンが上回ったのだ。翼を作り出し、デビルマンは飛ぶ。既に満身創痍の悪魔人間が。

「核をどうにかできるのは、俺たちだけだ。なら、やるしかないっ！」

二元気が叫び、指の骨をポキポキ鳴らす。

「できるかな元気、ミチル。この父を倒せるか!？」

「お父様……」

ジャガー号のミチルが、逡巡を見せる。それを振り切るようにイーグル号の元気が叫ぶ。

「うるせえ！ 親父、あんたが人類を滅ぼそうって言うなら、俺はあんたを倒す！ それ
が早乙女の、血のケジメだっ！」

「へっ、二気はやつ言うようになったじゃねえか」

弁慶が少し嬉しそうに、しかし寂しそうに口元を歪める。いつの間にか、二気もゲッターロボ乗組員として一人前になっていたのだ。

「竜馬……お前も、見たのか?」

隼人が、竜馬へ訊く。それが何を意味しているのか、竜馬はわかってきた。

「ああ……」

「そうか。竜馬、俺達はゲッターロボに……ゲッター線に生かされてきた。もし、あれが運命だというのなら……」

「ふざけんな、俺はゲッターに生かされた覚えもないし、運命だからって何もかも受け入れるつもりはねえよ。誰かが言ってたぜ、運命に逆らうのもまた、運命だつてな！」

「そうだ、お前はそういう奴だったな。そう隼人は笑う。『ゲッターに勝つ』、そう豪語した以上竜馬は必ず、ゲッターに、運命に勝つ。そう、信じられる。」

「さあ、仕切り直した。行くぜジジイ！」

トマホークをスピアへ変化させ構える真ゲッター。それに並び、トマホークを構えるブラックゲッター。

「来るがいい、竜馬！」

早乙女博士が叫ぶと同時に、ブライの亡霊とゴールの亡霊がドラゴンへ吸い込まれていく。そして、繭がぐにやりと歪み、それを産み落とした。

それは、ゲッタードラゴンだ。しかし、細部が禍々しく変形している。悪魔。そう形容するのがふさわしいゲッタードラゴン。

『ククク……これがゲッター線の力か。素晴らしい！』

ゴールの声。

「ゴールっ!? 早乙女、てめえブライだけでなくゴールまで！」

「竜馬、このドラゴンはデーモンどもを取り込み進化したメタルビースト・ドラゴンだ。パワーは真ゲッターと同等以上。そしてワシとゴール、ブライの3つの力が一つになつておる！」

「へっ、言うだけならただだがな！」

真ゲッターのスピアが振り下ろされたのが、決戦の合図だった。

.....

.....

.....

「明、どうしても戦うのだな……」

ラーガの中で涙を流しながら、サタンはデビルマンへ問いかける。

「サタン、答えはこの戦いの果てにある。そうだな?」

デビルマンがその爪を構えるのを認めたサタンは、デビルマンを中心に集まるグレートマジンガー、グレンダイザー、マジンガーZ、そしてマジンカイザーを一瞥する。そこにいるのは、サタンにとって個人的な因縁のある者達だった。

「明……それに魔神たち。滅びを受け入れないのなら、見せてやろう!」

ラーガが、ウザラに似た巨大な竜……ガルラから飛び上がる。そして、

「スペイザー、オン!」

そう、叫んだ。

「何っ!?!」

デューク・フリードが驚愕の声を上げる。

「まさか、あの竜は……スペイザーなのかつ!?」

グレンダイザーと同じ姿をしたマシンであるならば、そういう可能性は考慮すべきだった。そうデューク・フリードは己の迂闊さを呪った。そして次の瞬間、赤褐色の魔神と、黒い巨竜は一つの姿になっていた。

かつて、ゲッタードラゴンと戦ったアトランティス帝国のウザーラのように、ラーガの上半身を持ち、下半身を竜……ガルラスペイザーとした魔神。言うなれば、ラーガ・ラーガが、魔神達の前に立ち塞がる。

「かつての同胞……ゼウスの腕より生まれし魔神達よ！ その神なる力を神たる我に返すときが来た！」

まるで、裁きのラッパを鳴らす天使のように、サタンは叫ぶ。

「人間どもに、その力は不要。お前達の世界は、歴史は、今否定される！」
「黙れっ!？」

しかし、その宣告を遮ったのは、兜甲児だった。

「サタン……! たしかにお前が言うように、人間はろくでもない生き物さ。だけど、俺はこの世界を肯定する！」

それは、兜甲児の宣誓だった。

「お父さん……」

「……聞け、サタン。かつて、お前と同じように人間に失望した奴がいた。そいつは、この世界を否定し、作り替えようとした」

「……………」

「俺は、それを否定し、この世界を肯定した。あいつは、俺にとって相容れない敵だが……ある意味もう一人の俺だった。俺は、あいつを否定した責任がある。だから！」

マジンカイザーの胸の「Z」が輝き始める。光子力エネルギーが、フル回転しているのだ。それは、神を超え、悪魔すら斃す力。光子力。人間の可能性そのものであるその力の申し子であるマジンカイザーが、更なる覚醒をはじめていることを意味していた。

「俺は、この世界を肯定するっ！」

今、最後の戦いの火蓋が切って落とされた！

最終話『夢幻!!!』Aパート

雷鳴が轟き、火炎が逆巻く。バードス島は既に、地獄と化していた。集結したスパーロボット軍団と、それに立ちはだかる2つの戦鬼。決して広くはないこのミケーネ文明の遺跡が残る島で、世界最後の戦いが始まっていたのだ。

「喰らえっサンダーブレークツ!!」

剣鉄也の乗る偉大な勇者・グレートマジンガーが巨大な竜神と化したラーガに、稲妻を放った。しかし、龍神……ガルラ・ラーガはその一撃をもともせず、その竜口が開かれ、幾重にも重なった雷が放たれる。それはかつて、一撃でゲッタードラゴンを戦闘不能にまで追い込んだウザラの雷と同様の力を持つ神の怒りだった。受ければひとたまりもない。グレートマジンガー、グレンダイザーら頑強なスパーロボット達が咄嗟にラーガから離れる。その雷を避けながら、マジンカイザーとデビルマンはガルラを抜けてラーガへと迫っていた。

「サタンー……こいつを喰らえー!」

マジンカイザーの中で、兜甲児が叫ぶ。魔神皇帝のその剛腕が、回転しその腕から離れていく。

「ターボスマツシャーパアアンチッ！」

ターボスマツシャーパンチ。マジンガーZのロケットパンチをさらに強化した超重量質量兵器が、ラーガを襲う。しかし、ラーガもまた両手を掲げると、両手を回転させ発射する。

「こちらにも、同じ兵器があるぞ兜甲児！ スクリュークラッシュシャーパンチ！」

飛び出した剛腕同士がぶつかり合い、反発する。その衝撃で2体の魔神は大きくよるめくが、マジンカイザーは既に回り込んでターボスマツシャーパンチを回収すると、そのままラーガの頭上へ躍り出ていた。

「それなら、こいつはどうだっ！」

そのまま、剛腕をラーガへと叩きつける。そして拳よりもさらに重い脚でラーガの頭を蹴り飛ばす。

「クッ……！」

しかし、ラーガを操る神……サタンもただ受けたわけではなかった。ラーガの胴体の放熱版から放たれる反重力ストーム。それが、マジンカイザーを狙っていた。そして、重力場がマジンカイザーを飲み込んでいく。

「くっ、コントロールが効かねえっ?!」

「お父さんっ！」

周囲の重力を奪う反重力ストームを受けたマジンカイザーは、たちまちコントロールを失い動けなくなる。しかし、その反重力光線に対してグレンダイザーから放たれた反重力ストームが、二つの反重力ストームが反発し合い、その力が打ち消される一瞬の隙にマジンカイザーは脱出する。

「大丈夫か、甲児くん！」

「ああ、すまねえ大介さん！」

そして、最大級の攻撃力を持つマジンカイザーを無力化するために放った反重力ストーム。その一瞬が、サタンの隙となった。

「了オオオオオオオッ！」

ラーガの背後を取ったデビルマンが、その口から業火を放つ。デビルファイヤー。溶岩すら溶かすその灼熱を浴びたラーガはしかし、怯むことなくデビルマンへとスクリュークラツシャーパンチを放つ。

「明ああああアアアツツ！」

それは、宿命としか形容できない壮絶なぶつかり合いだった。デビルマンが拳を掲げラーガへと迫るも、ラーガの衝角から放たれる雷・スペースサンダーがそれを阻む。そして、ラーガの下半身……スベイザーとなつているガルラの側面から放たれる無数のミサイルが、デビルマンへ降り注いだ。

「ぐうああっ!?!」

「明、デビルマンの力などそんなものだ! 勇者アモンの武勇も、光子力の力も、この神の器の前には及ばないと、なぜわからない!」

怒れる大魔神は、デビルマンの力を凌駕する。だが、それでも。

爆炎の中から立ち上がり、デビルマンが空を駆ける。それに続くように、マジンガーZ、グレートマジンガー、グレンダイザーの3機が、サタンの……ラーガの前に躍り出る。

「愚かなっ! 神の力に逆らうなっ!」

了の、サタンの叫びと共にラーガの頭部が輝く。スペースサンダー、グレンダイザー同様の必殺武器がラーガにも搭載されている。それをガルラの力とサタンの超能力で増幅した、言わばスペースサンダー・ギガ。それを塵芥目掛けて放とうとした次の瞬間、物凄い握力にラーガの頭部が抑え付けられる。

「さつきは、よくもやってくれたな! こいつは……お返しだ!」

マジンカイザー。地上最強の魔神皇帝が、ラーガの背後を取ったのだ。

「兜………甲兒ツ!?!」

「みんな、今だっ! 俺たち人間の、全力をお見舞いしてやれっ!」

甲兒が叫ぶよりも早く、英雄達がそれぞれの体制に入っていた。即ち、必殺技の。

「アニキ、ちゃんと避けてくれよっ！」

マジンガーZのシローが、その両腕をブンブンと回す。その助走のついた勢いで放たれたロケットパンチ、大車輪ロケットパンチ。

超合金ニューZの剛腕をまともに受けてはまずい。そう判断したサタンは、ラーガの両腕を飛ばしそれを受け止める。

「今だっ鉄也さんっ！」

しかし、それはシローの作戦のうち。厄介なクラッシュヤーパーンチを無力化するために、先手を打ったのだ。その結果今、目の前のラーガは丸腰に近い。

「よくやったシロー！ 命を燃やす時が来た。行くぞっ！」

そう言って、マジンガーブレードを投擲するグレート鉄也。魔神の剣は、大魔神の胸に深く突き刺さる。そして、

「これが、俺とグレートのとっておきだっ！ 食らえ、サンダーブレードっ！」

本来、グレートの指に集める雷エネルギー。それが、マジンガーブレードへと集まっていく。サンダーブレード。本来、雷エネルギーを撃ち放つサンダーブレードをマジンガーブレードに集約することで、突き刺さった部分に直接電撃を浴びせるグレートマジンの必殺攻撃だ。

「こちらからも行くぞっ！」

続けてグレンダイザーの宇門大介。スペイザーと合体した状態からさかさずグレンダイザーへモードチェンジし、肩から展開されたハーケンを一つに合体させる。そして、ブーメランのようにそれを投げる。

空中で回転することでキレを増したハーケンが、ラーガの腹に突き刺さった。

「デューク・フリード……なぜ貴様は人間の味方をする!」

「人間の味方、か。僕は確かに、ゲッターの行き着く先を危惧していた。場合によっては、彼らと戦わなければならないと覚悟も決めていた。しかし、違っただサタン。僕達がすべき事……それは、友を信じることだ!」

グレンダイザーの頭部から放たれたスペースサンダーが、サンダーブレードに上乗せされ更に攻撃力を高めていく。

「友を、信じる事……だと?」

「そうだ。僕は、彼らになら……危険な力を持つゲッター線を託してもいいと信じることにした。お前は、飛鳥了という人間だったんだらうサタン。ならば、信じるに足る友がいたんじゃないのか!」

「友などいない。友など……っ!?」

信じるに足る友。それは今サタンの目の前にいる。しかし、その友をサタンは、飛鳥了は。

「俺は……僕は……私は……」

デビルマンから放たれた火炎。デビルファイヤーが迫る。そこに、言葉はない。

「明……」

友ではない。愛していたのだ。この時サタンは、それを自覚してしまっていた。

サタンは両性生物である。サタンは男性にも女性にもなることができる。いや、そんなことは言い訳に過ぎない。サタンが不動明を愛したのではないのだから。

飛鳥了が、不動明を愛してしまったのだから。

たとえサタンとしての意識が、力が、記憶が蘇ったからと言って、飛鳥了のそれが消えるわけではない。デビルマン不動明の中にデーモンの勇者アモンと、人間不動明の記憶と意識と感情が存在しているのと同じことだ。

そして、だからこそ。

サタンは、明と共に新しい世界を生きたかったのだ。

明が美樹という女性を愛しているのを、了も知っている。だから、全ての人間が死に絶えた後の世界なら……美樹と共に生きられないことを自覚しているデビルマンなら。そんな一抹の期待があったことを今、サタンははじめて自覚したのだ。

友という言葉によって。

それを否定してしまった時に。

愛する者の炎に焼かれながら、ラーガの中でサタンはそれを自覚して、涙した。そして、思い出した。別の世界。虚憶の世界。或いは隣接次元。あり得たかもしれない可能性の中で起きた、黙示録の一頁を。

……

……

……

それは、赤い月の下で語り合う自分と明の姿だった。いや、語り合っているのではない。一方的に、サタンは明に悔恨を吐露していた。しかし、明は答えない。返事はない。

肯定の言葉も、否定の言葉もない。

なぜなら、隣で横たわる明はもう、生きていないのだから。

……

……

……

「明……殺してくれ」

「了……?」

それは、サタンからの本心の言葉だった。それが、デビルマンには、明にはわかる。だからこそ、明から出たのは戸惑いの言葉だった。

「僕は、取り返しのつかない過ちをしてしまったことに気付いてしまったんだ……」
自分達の手を離れて増殖してしまったから、ゲッター線に選ばれたから人類を滅ぼそうなどと。それはかつて、デーモンを滅ぼそうとした神々と同じではないか。

「僕は、お前に討たれることでこの命を終えたい。頼む、明！」

それが、せめてもの情けだ。サタンは贖罪の炎の中、胸に剣を突き立てられた大魔神の中でそう懇願する。しかし、デビルマン……いや、不動明はそんなサタンの言葉を聞き入れなかった。

「ふざけるなよ、了。お前の裏切りがそんなことで帳消しになると思うな！」

「明……」

デビルマンが炎を消し、ラーガの下まで舞い降りる。そして、その腕を突き出した。

「了、すぐにラーガから降りろ。そして俺のところに来い！」

「明……？」

それは、了の予想だにしない言葉だった。戸惑う了を他所に、明は続ける。

「了、お前が裏切りの、この戦いの責任を取りたいというならばやることはひとつしかない。生きろ！ 生きて、その力を……サタンの力を愛する人々のために使うんだ！」

たとえば、人類の中に生きる場所がなかったとしても。

「お前には、俺がいる！俺一人を阿修羅地獄に置いていくなんて、許さんぞ！」

「明……」

その言葉のままに、サタンは、了はラーガを支配する指輪を外す。そして、外へ出ようとした。その時だった。

「サタン様。そのようなことは許しませんよ」

声が、聞こえた。女のような声だ。

「サイコジエニー……？」

ガルラの中で、自らをコアユニットにしているはずのサタンの腹心が、声を上げたのだ。

「あなたには、まだ役割があるのです。サタン様。いや……嗟嘆」

その声は、機械のように冷たかった。そして、突如として了は、激しい頭痛に襲われる。

「グツ……ウワアアアアアツツ!？」

それは、立っているのもままならない激痛だった。神とでもいうべき存在であるサタンを持つてしても抑えることのできない激痛。頭を砕くような痛みと、嘔吐感と、目眩に襲われながら了は、力なく倒れてしまう。

「了!?!」

そして、今までガルラと合体していたラーガが突如として、ガルラの中へ飲み込まれていく。

「な、何だっ!?!」

「放射能、ゲッター線、虚無指数飛躍的に上昇! お父さん、何かが起こります!」

咄嗟にラーガから離れたマジンカイザー。ラーガはみるみるうちに、ガルラの中へと取り込まれていく。

「了ッ! 了ッ!」

明がいくら叫んでも、返事はない。そして、

ガルラの遥か上空……それは、起きた。

……

……

……

「早乙女エエエエッ!?!」

ゲッタースピアとダブルトマホークが、激しくぶつかり合う。真ゲッターとメタルビースト・ドラゴンの戦いは、全くの互角と言って差し支えなかった。

「竜馬！ 感情任せの攻撃などこのワシには通用せんと何度言った！」

真ゲッターの獲物はゲッタートマホーク、ゲッターサイト、ゲッタースピアと自在に変化しリーチを変えている。しかし、メタルビースト・ドラゴンは二本のトマホークでそれをいとも容易く弾いていたのだ。

「早乙女の野郎、耄碌したジジイの割にやりやがる……！」

「ハハハハハ！ リョウ、メタルビースト・

ドラゴンのゲットマシン内部は通常の40倍ゲッター線が増幅されておる。おかげですこぶる体調もいい。身体が自分のものではないかのように軽しい、勘も冴えておる！」

「素晴らしい……これが、ゲッター線……」

「我々はこの力の中に肉の器を失った……そして！」

瞬間、オープンゲットしたメタルビースト・ドラゴンは次の瞬間にポセイドンへと変化し、ミサイルの雨を降らせる。そのミサイル一つ一つがゲッターポセイドンのそれよりも火力が高く、数も多い。

「っ！ ブライの奴……!?!」

しかし、そのミサイルは目眩し。次の瞬間にはライガーに変形合体し、真ゲッターの懐に飛び込んでいた。

「これが、進化の力。なるほど面白い……ハチユウ人類が敗れたわけだ」

ライガーの速度についていくように、真ゲッターもゲッター2へチェンジし、音速の世界の中で激しくぶつかり合った。

「情けないなゴールさんよ、あんなに恨み心頭だったゲッター線に惚れ惚れとはねー」

「隼人くん、全ては小さなことなのだよ。我々が敗北したことすら、この日のための必然だった。そう思えば、安いものよー」

二つのドリルが、機体の端を掠めて過る。それを十繰り返したところで、罅が開かないと判断した隼人はコントロールを弁慶に移した。真ゲッター2の身体がぐにやりと曲がり、みるみるうちにゲッター3の巨体へ変化。ゲッターミサイルを乱射し、ライガーを引き離す。その瞬間に再び真ゲッター1に変化し、上空へ羽撃く。

「元氣！ ミチルさん！」

異次元の戦いに圧倒されていたブラックゲッターが竜馬の声で戦場へ引き戻される。

「2つのゲッタービームを収束させる、行くぞッ！」

「お、おうっ！」

真紅のゲッターと漆黒のゲッター。2体のゲッターから放たれるゲッタービームが、

螺旋を描いていく。そして、ミサイルの中から抜け出したメタルビースト・ドラゴン。その眼前には螺旋のゲッタービームが飛び込んだ。

「何とっ!?!」

「受けるジジイ! スパイラル・ゲッターアアアアビイイイツムツ!?!」

しかし、咄嗟にオーブンゲットすることでそれを躲し、メタルビースト・ドラゴンに再び合体。そしてドラゴンもゲッタービームで2体のゲッターを迎撃する。それを躲しながら、隼人はある事に気付いた。

「……………竜馬」

「ああ、わかってる」

改めて、ゲッタートマホークを構えてメタルビースト・ドラゴンと向き直る真ゲッター。その隣でミサイルマシンガンを構えるブラックゲッターの元気とミチル。

「……………っ」

元気は、コクピットの中にしまっていたアンプル剤を開けて、注射する。ゼノンの戦いで負傷していた元気は、この戦いについていくのでやっとだった。

「……………ハッ、ハッ」

それは、長らくゲッター操縦から遠ざかっていたミチルも同じである。ただでさえ旧式のゲッターを改造したブラックゲッターは、パワー、スピード、全てにおいて真ゲッ

ターにも、ドラゴンにも劣っていた。それでも、2機の戦いについていくために必死で操縦桿を握り、スロットルを踏み続けていたのである。それは、負傷兵と現役を引退した女性にとつて非常に厳しいものだった。それでも、足手まといにだけはなるまいと必死で真ゲッターの援護のために、ミサイルマシンガンを撃ち続けていた。

このミサイルマシンガンも、元々は恐竜帝国との戦いでゲッター1が使用していた旧式の兵器である。それでも威力は折り紙付き。下手な武器よりも使えると判断してブラックゲッターに持たせたのだが、メタルピースと化したドラゴン相手では分が悪い。

「……竜馬さん、俺たちが先に行く」

だから、ここで元気が動いたのは少しでも、一矢でも報いたいと思ったからだ。ミサイルマシンガンでは埒があかない。それならば、とマシンガンを投げ捨てて、ゲッターマホークを持ちドラゴンへ迫る。

「元氣！ ミチル！ この父に齒向かうのか！」

「喋るなアアアアッ!?!」

それは、特攻と言っても過言ではない捨て鉢の戦い方だった。最大出力でも、最大パワーでもブラックゲッターはメタルピース・ドラゴンに勝てない。それでも、やらなければならぬことだった。

「お父様、覚悟！」

ミチルが叫ぶ。それと同時に、ゲッターエネルギーがブラックゲッターの腹部に集中する。ゲッタービーム。そのリミッターを超えた出力をチャージしていることは、ゲッターロボ開発者である早乙女博士にはすぐにわかる。

「愚か者が！」

迫るブラックゲッターを蹴り飛ばし、ドラゴンはさらに迫る。しかし、ブラックゲッターはそのドラゴンに拳を突き立てる。

ゲッターレザー。格闘戦のための刃がついた腕はたしかに、ドラゴンの装甲を抉る確かな手応えを感じていた。

「何とっ!?!」

「親父イイイイイツ!?」

ゲッター炉心がメルトダウンを迎えるまでの残り時間ギリギリまで、殴り続ける。それが、元氣とミチルの見出した、活。

ゲッターエネルギーのチャージが溜まれば溜まるほど、ブラックゲッターの出力も増す。その力で、拳が碎けるまで殴る。右手を、左手を、交互に突き出す。ステゴロしか言いようがない。しかし、ようやく肉薄しチャンスを得たのだ。絶対にこのチャンスは離さない。元氣は、ミチルは、殴り続ける。早乙女博士を、父を。

「親父が思い詰めてたのは知ってるよ！ ゲッター線だって、本当は宇宙開発の、平和利用のために研究してたことも！」

「グウツ……………」

「だけど、恐竜帝国が来て、百鬼帝国が来て、ミケーネも、ベガ連合も！ それにデーモンの奴らもいて！ 達人兄ちゃんや、武蔵さんが死んで…………責任感じてたのも知ってたよ！」

漆黒のゲッターの拳が、異形のゲッターの顔を潰す。

「だけど……………だったら！ せめて俺たちに相談してくれてもよかっただろ！ 俺たち、親子なのに！」

自分でも何を叫んでいるのか、元気にはわからなかった。ただ、だからこそ目の前にいる父を殴らなければ気が済まなかった。

しかし、早乙女博士はただ黙って息子の拳を受けているような男ではない。それは、元気自身が一番知っていることだった。

「元気よ……………ならば、お前から世界最後の日の贄となれ！」

今度はドラゴンの拳が、ブラックゲッターの腹部を大きく打撃した。

「ガツ……………」

衝撃で大きく機体が揺れ、元気の腹にできていた傷口も開く。

「元氣!?!」

ミチルの悲鳴。ブラックゲッターはコントロールを失い、ゲッター炉心を暴走させたまま落ちていく。ミチルが必死でコントロールしようとするが、それまでの戦いで既にミチルの視界も霞み始めていた。

「元氣!?! ミチル!?! 父自ら引導を渡してやる!?!」

そう叫び、オープンゲットするドラゴン。ゲットマシンの状態で落下するブラックゲッターを追う。

「今だ、リョウ!?!」

「任せろ!?! いくぞ隼人、弁慶!?!」

その時だった。真ゲッターロボが動いたのは。ブラックゲッターに追いついたゲットマシンが、再び合体しようとしたその瞬間。その一瞬が、この戦いの勝敗を分かつものとのあの時、竜馬と隼人は見切っていた。

瞬間、ブラックゲッターとメタルビースト・ドラゴンの間に割り込んだ真ゲッターが、メタルビースト・ドラゴンの上半身を掴んでいた。そして、真ゲッターの腹部からぐにやりと曲がり現れた真ゲッター3の腕が、メタルビースト・ドラゴンの下半身を掴んでいる。

「ハ、これはっ!?!」

愕然とする早乙女博士。

「へっ、悪いなジジイ。俺たちは目を瞑りながらも合体できるんだ」

「そんな俺たちからしたら、あんたらの合体にはコンマ3秒のズレがあった」

竜馬と弁慶が、それぞれに言う。

「博士、あんたの負けだ！」

そう、隼人。

「フ、フフフ……」

不気味に笑うゴールの声。

「どうやら、我々の負けのようすな博士」

そして、ブライ。

「何だ、てめえら。負けておきながらヤケに嬉しそうじゃねえか」

「嬉しいのだよリョウ。人類はここまで来たのだ。そう、お前達は命を燃やして実践したのだから」

ゴールと、ブライの気配が消えかかっているのを竜馬は感じていた。姿が見えなくても、わかる、伝わるのだ。命の形が変わっていく瞬間を。

「お前達……」

「リョウ、地球上の生物はすべて滅ぶ」

「な、何……………」

「地球上の生物はようやくここまで来たのだ。滅んではならぬ」

それは、竜馬達の知るブライ大帝という存在からは決して聞くことのできない言葉だった。

「全ての生命を救うために我々はきた…………ハチユウ類も。全ての命は、滅んではならぬ」
ゴールの言葉もまた、地上の王者となるべく全ての生命を淘汰しようとした独裁者の言葉ではなかった。

ならば、ここにいるブライとゴールは何だ？

そう、竜馬の中で何かが揺らいだ時だった。

ラーガが飲み込まれていき、ガルラの頭上、遙か上空で…………それは、起きた。

……………

……………

……………

それは、大いなる虚無だった。全てを呑み込む虚無。上空の空は、空洞だった。そして、その空洞から降りていくものがある。異形の姿だった。左右非対称の巨人。そ

う、巨人。片目が潰れ、そこから昆虫の脚のようなものが生えている。触角が生えている。背中から8本の脚が生えている。しかし、そのシルエツトは人型に見える。そんな醜い異形の巨人だった。その巨人の頭部には、空洞があった。それは空にできた虚無とは違う。あえて表現するならば、マジンガーのパイルダー装着口のような穴だ。ガララが飛び、その穴に入り込む。そして、触手のようなものが伸びて巨人の中にパイルダー・オンするのだった。

「嘘……だろ……」

シローが呻く。

「……………バカな」

鉄也は言葉もない。

「……………どうして」

甲児は、ようやくその言葉を吐く。

「……………みんな?」

大介は知らない。それが何かを。しかし、その異様な姿を見て警戒しないわけにはいかない。それでも、仲間達のその反応の理由は、わからなかった。無理もない。大介はその時唯一、地球にいなかったのだから。

「……………どうして、お前がそこにいるー!」

甲児が叫ぶ。目の前の、巨大な魔神に向かつて。

「お前は、確かにあの時俺たちが倒したはずだ! マジンガーインフィニティ!? ドクターヘルツ?!」

マジンガーインフィニティ。古代ミケーネの残した世界改変装置。半年前、兜甲児とマジンガーZが倒したはずの巨悪が、虚無の淵から姿を現したのだ。

「……………兜甲児、そして地球の戦士達」

インフィニティから、声がする。それは紛れもなく、ドクターヘルの声だ。しかし、その姿は見えない。以前の戦いでは、ドクターヘル自身が乗り込む戦闘獣・地獄大元帥をインフィニティのコアとしていた。しかし、今その場所にはガルラが収まっている。

甲児は、目を凝らす。宿敵が必ず、いるはずなのだ。そして、インフィニティの欠けた右目に埋め込まれた甲虫の脚のようなものが、ぐるりと回転する。

そこに、いた。

自らの貌を醜い蟲の甲に改造された、哀れな天才科学者の成れの果てが。

その才智を人のため、地球のために使えばきつと、人類の発展は今頃一世紀分ほど先まで行っていたであろう男が。

しかしその頭脳故に人間に失望し、果てなき野望にその才能を費やした人類の敵が。

ドクターヘル。兜十蔵の友であり、兜甲児にとって宿命の敵が、そこに埋め込まれていたのだ。

「ウツ……………」

セーラが、思わず口を塞ぐ。リサも、目を逸らす。そのくらいに、その姿は悍ましく、恐ろしい。

「……………どうやら、全ての舞台は整ったようだな」

ヘルが、ポツリと呟く。

「そうだヘルよ。宇宙の果てでお前を拾い上げた恩に、今こそ報いよ」

サイコジェニーの声が、その場にいた全員に響く。

「サイコジェニー……………お前はっ!？」

デビルマンが叫ぶ。サイコジェニーは、デーモンの諜報員だった。その強力な超能力で、デーモン側を有利に導く存在のはずだった。しかし、サイコジェニーはサタンに背き、ドクターヘルを従えている。

「お前は、何者だっ!？」

「……………私は遙かな宇宙よりの端末に過ぎぬ。この宇宙ではない別の宇宙から、使命を帯びたもの」

「何だと……………」

既に機能を停止しているメタルビースト・ドラゴンを放り投げ、真ゲッターも飛ぶ。ゲッターが、あれを撃てと叫んでいるのを竜馬は感じていた。

「我々の宇宙での我の名は、ラーグースと呼ばれていた」

「ラーグース……?」

竜馬にとつて、はじめて聞いた気のしない名前だった。まるでDNAに刻まれているかのような響き。懐かしさと……決してその存在を許してはいけなさと感じる強い衝動が、沸き上がっていた。

「名前など、どうでもいい。サタンを取り込んだガルラと、繭と化したドラゴン。そしてこのインフィニティ。全てが揃っているのだ」

ドクターヘルが遮り、宣言する。

「はじめようか。ゴラーゴンの続きを」

最終話 『夢幻!!!』 Bパート

ドクターヘル。かつて世界征服に王手をかけた、兜甲児最大のライバル。それが今、悍ましい姿で甲児達の前に立ち塞がっている。異形の姿に変貌したマジンガー・インフィニティとひとつになったヘルが告げる。

『ゴラーゴンの続き』

それが何を意味しているのか、甲児達はその肌で体験することになる。マジンガー・インフィニティの胸部が輝くと同時、意識が遠のいていく。その感覚を、甲児は知っていた。

「ッ、これは……!」

ゴラーゴン。マジンガー・インフィニティという世界改変装置の持つ“機能”。隣接次元と呼ばれる“あり得たかもしれない可能性”へ世界を分解し、再構築する言わば“可能性の編纂”それが、インフィニティの持つ力。

甲児はかつて、それを一度受けたことがある。だから、知っている。それがとても、心地よいということ。

“可能性”単位に分解されていく世界。その中に溶けていく感覚。一度は否定した

それが、再び襲ってくる。

世界と自分が切り離されていく感覚を覚える中で、デビルマンが飛ぶのを甲児は見
た。

「ふざけるなよド外道が！ 了を、俺の親友を返しやがれ!？」

デビルマンの拳はしかし、巨大な魔神に届くことはなかった。インフィニティの胸部
から放たれた光……ブレストファイヤー。かつて富士山一帯を壊滅状態にまで陥れた
その熱が、デビルマンに襲いかかる。

「なっ……!？」

それを全身に、モロに受けたデビルマンは全身が焼け爛れ……大地へ墜ちた。

「明ッ!？」

「……………」

シローが叫ぶ。しかし返事はない。まだ辛うじてデビルマンの姿を保っているので、
死んではないのだろうか。だが、既に立ち上がる力も失いつつあるブラックゲッターと
並び倒れ伏すデビルマンから、生氣は感じられない。

「この野郎ッ!」

竜馬の真ゲッターが吼えた。しかし、その直後……それは起こった。

ゲッタードラゴン。巨大な繭と化したドラゴンが、ゲッター線の触手を伸ばして真

ゲッターを掴む。

「なっ……!?!」

「リョウウ！」

変化し、回避しようとする。しかし、真ゲッターが竜馬の、隼人の、弁慶のコントローを受け付けない。

「……恐るなりョウウ、ハヤト、ベンケイ」

メタルビースト・ドラゴンの残骸の中で、早乙女博士が呟いた。そのメタルビースト・ドラゴンもまた、ゲッター線の触手に絡め取られ、繭の中へ引きずり込まれていく。

「ジジイ、てめえ……!?!」

「……これは、始まりに過ぎん」

何かを悟っているかのように、まるで子供に語りかける父のように、早乙女博士は言葉を紡ぐ。

「全てを受け入れるのだ、竜馬」

その言葉と同時に、早乙女博士はドラゴンの中へ取り込まれていった。そして、真ゲッターロボも。

「クソッ、コントローが効かねえ！」

「どうするんだ、竜馬！」

弁慶が唸り、隼人が叫ぶ。そして、竜馬は。

「こうなったら、行つてやろうじゃねえか……。ドラゴンの内部とやらに！」
覚悟を決める。

「フツ……。そうだな。こうなればゲッターと一蓮托生だ」

竜馬の言葉を聞き、隼人もまた。

「お前ら……。ああクソ！ どうなつてもしらねえぞ！」

覚悟を決めた竜馬と隼人に気圧されながら、弁慶は合掌する。

「南無三！」

それは、チームとして弁慶も、竜馬達と運命を共にする覚悟を決めたという合図だった。

「へッ……。気合い入れろ隼人、弁慶！」

「おうっ！」

「おうっ！」

全てをドラゴンに任せ……。真ゲッターロボもまた呑み込まれていった。

「竜馬！ 隼人！ 弁慶！」

その一部始終を見届けて……。インフィニティの異様を前にマジンカイザーに乗りながら兜甲児は、真ゲッターが呑み込まれるのを、デビルマンが焼き墜とされるのを見届

けるしかできなかつた。グレートマジンガーも、グレンダイザーも、マジンガーZも同様に。

こうしている今もゴラーゴンが起きている。現実感すら薄れていくこの情景を前に戦士達は、動くことができなかったのだ。

「クソ……。ここまで来て、こんなのアリかよ……」

マジンガーの操縦桿を握る手から、握力が消えていくのを感じる。鉄也や大介、竜馬達も同じだろうか。甲兎は一瞬、仲間達のことを思った。なんとかして、ゴラーゴンを止めなければ。歯を食いしばりながら、インフィニティを睨め付ける。しかし、視界が霞んでよく見えない。

「兜甲兎よ」

薄れゆく意識の中で、ドクターヘルの声が聞こえる。

「お前が肯定した世界は今、消える。そして、新たな世界が生まれる」

「ヘル……」

ヘル顔は見えない。しかし、醜く歪むヘルの嘲笑は、イメージできた。

「冥土の土産に、教えてやろう。この宇宙の真実を……」

ヘル思念が、強くなる。今のヘルは、バードスの杖を持っていない。それでもインフィニティを制御できているのは、ラーグースとやらの力なのだろうか。

或いは、ヘル自身が制御装置とされているのか。
そして、ヘルの思念が甲児を侵蝕していく……。

……
……
……

「……………、これは？」

甲児の視界に広がっていたのは、暗黒の宇宙だった。暗黒、そう表現したのは星の輝きすらも覆い隠すほどの暗く、虚ろな気配が甲児の五感に張り付いていたからであり、宇宙、であるとわかったのはそんな闇の中でも生きようとする命の気配を感じたからだ。

そして、その命が次々と燃えていく光景が、甲児の前にあった。

昆虫のような姿形の軍団と、神々しい巨人達が戦っていた。昆虫達はまるで一つ一つが細胞のように寄り集まり、組み合わせり、巨人達よりも更に巨大に進化していく。

「あれは……！」

あの世界。ゲッターの地獄で甲児達と、真ゲッターロボを襲った巨蟲を思い出した。

それとそっくりな昆虫軍団に立ち向かう神々しい巨人達……言わば神の軍団とでも呼ぶべき翼を持つ巨人達の激突。それは、マジンガーという神にも悪魔にもなれる力を持つ甲児の目から見ても規模の違う戦いだっただけだ。

巨人の放つ光が、無数の蟲を焼く。それと同時に、数々の惑星が消滅していく。しかし蟲はその牙で巨人を喰らい尽くしていく。呻き、絶叫する巨人は忽ち絶命し、蟲の餌食となっていく。

悪夢のような殺し合いを繰り返す宇宙を、甲児は見ていた。

「なんだよ……。これ、なんだよ……」

目の前で起きていることが、信じられない。

『これが、宇宙だ。甲児』

ドクターヘルの声がする。

『お前に倒された儂の亡骸とマジンガー・インフィニティは、宇宙を彷徨っていた。そして、意志を持つ者に拾われた』

「意志を持つ者……だど？」

何を言っているのか、わからない。ドクターヘルは甲児にとって決して相容れぬ存在だが、それ故にヘルの言葉が理解できないということは甲児には今までなかった。しかし、今のヘルは違う。理路整然とした科学者の顔でも、獰猛な野獣の顔でもないヘルに

甲児は、怖気が走った。

『甲児よ……全ては運命なのだ。このマジンガームも、ゲッターも、全ては運命の時を超えるために生まれたのだ。そう、インフィニティも』

運命の時。意志を持つ者。世界最後の日。デーモン。ミケーネ。光子力。ゲッター線。グレンダイザーとラーガ。空中元素固定装置。リサ。サタン。ラーグース。ゲッターエンペラー。ZERO。それらの断片的な情報が甲児の中で氾濫する。

『この宇宙を作り、全ての命の運命を弄ぶ者がいる』

「それが……ラーグース？」

『ラーグースにとつて、宇宙の創造とは積み木を積み上げるようなものだ。儂をこのよ
うな姿にして、弄ぶのもラーグースならば容易いこと。ブライも然り』

醜い甲虫のような姿にされたヘルを、思い出す。あれが、ラーグースの力によるものだ
というのだろうか。

『ラーグースは、宇宙を創り、壊す。それを繰り返すことを喜びとしているのだ。全ての
命を弄ぶ、創造主であり破壊神。それが……』

意志を持つ者。ラーグース。それらは同じものを指しているのだろうか。いや、違
う。ヘルを拾い上げた“意志を持つ者”と、ヘルを弄ぶ“ラーグース”は違う存在だ。
宇宙に出て鋭敏になった甲児の第六感が、そう告げていた。

「ヘル……！ お前は……！」

兜甲児は、理解した。これは、人生最大の好敵手（ドクターヘル）の、人間としての意識が伝えようとしている遺言なのだ。

『甲児よ、全ての命は……弄ばれるために生まれたのだ……。ワシの野望も、或いは……』

「違う！ お前が世界征服の野望を抱いたのも、俺がお前と戦ったのも、全部……俺達の意志だ！」

そうでなければ、全ての命は報われない。

たとえこの日のために、全ての運命が仕組まれていたとしても。

それまでの歴史を作ってきたのは、あまねく人々の意志と決断と、命だ。

なぜなら、そういう世界を兜甲児は、肯定したのだから。

『フッフッフ、フハハハハ……』

甲児の叫びに、ドクターヘルは不敵な……しかしどこか嬉しそうな笑い声で返した。それは甲児にとつても、悪い気のしない返事だった。

『……ならば、甲児よ。再び奇跡を……起こしてみよ……』

次第に、ヘルの声が小さくなっていく。甲児は、かつての宿敵の声に小さく頷いて、地獄の宇宙を見据えていた。

「わかった。お前の命も……無駄にはしねえぜ。ドクターヘル！」

何をすればいいのか、甲児は理解していた。隣接次元。『可能性』という単位に分断された世界。きっとラীগースはそんな世界でも自己を保てるのだろう。だからこそ、インフィニティを新たな玩具に選んだのだ。

しかし、ここは『可能性』の世界。それを知っているからこそ、甲児は念じる。念じれば、『可能性』は答えてくれる。

全身の神経を集中させる。合言葉は、決まっていた。深く深呼吸するような動作をし、甲児は叫んだ。

「マジーン・ゴー!!」

……………

……………

……………

「なんだ……これは……？」

インフィニティの頭脳となったガルラを支配する意志・サイコジェニー……正確にはラীগース細胞の一部から生まれた個体は、その現象を見てそう、呟いた。

マジンカイザーから溢れる光子力の光。それが、*“可能性”* 単位に分裂した世界を、繋ぎ合わせていく。それは、言わば全てを *“可能性”* に分解するゴラーゴンと真逆の現象。

インフィニティによって分解された *“可能性”* が、マジンカイザーによって *“再構築”* されていく。そんな機能は、マジンガーには存在しないはずだ。それが突然変異で生まれた魔神皇帝であったとしても、それは変わらない。

「いや……マジンカイザーは、まさかー!」

ある、一つの仮説にサイコジェニーは思い立った。

マジンガーのルーツには、ミケーネの神々が関わっている。そして、今ドクターヘルとガルラを介してラーグースの媒介としているこのインフィニティもまた、ミケーネ文明の遺産である。

「マジンカイザー……貴様は、神の領域に届いたというのか!？」

ミケーネの生み出した神の力・インフィニティと対を為す人の生み出した神の力・それこそが、マジンカイザー。マジンカイザーにもインフィニティ同様にゴラーゴンを起こす力が存在するとしたら。

「そいつは……違うぜー!」

カイザーから、声が響く。兜甲児。マジンガーZで戦い続け、今マジンカイザーの魂

となつてゐる戦士。

「マジンカイザーは、神をも越え、悪魔すら斃す力！ こいつは……人が神や悪魔に立ち向かう為に存在する力！ そして、光子力とは……どんなにちつぽけな『可能性』をも現実にする、人間の力だ!？」

甲児の叫びに、呼応するように、立ち上がる者がいた。マジンガーZ。兜甲児と共に戦い続け、今その弟シローと共にある鉄の城。

マジンガーZもまた、無尽蔵の光子力を放出し

ながら、マジンカイザーに並び立っている。

「オレを忘れんなよ、兄貴……！」

「シロー……！」

今のマジンガーZは、前回のインフィニティとの戦いの後巨大な光子力炉心となつてゐる。その光子力の放流をコ・パイとなつてゐるセーラが空中元素固定装置で制御することで、その暴走を止め、力に変換している状態だった。

しかし、マジンカイザーとマジンガーZ。2つの巨大な光子力炉心が並び立ち、そして2つの空中元素固定装置がフル回転することで、光子力は次のステージを迎えようとしていた。

即ち、『可能性』の具現化。

今やインフィニティによって“可能性”単位へ分解された世界は完全に元に戻っていた。しかし、それだけではない。

マジンガーZが、グレートマジンガーが、グレンダイザーが、そしてマジンカイザーが、光子力の光の中に包まれていく。

それは、まるで“可能性”の中に包まれているような光景だった。“可能性”は、四柱の魔神に新たな姿を与えていく。

かつて、インフィニティとの戦いでマジンガーZが起こした奇跡と同じだった。

「……………すげえ、何が起こってるのか。まるでわかんねえ」

シローが呟く。

「でも……………温かくて、優しい。この光の中になると、とても落ち着くわシロー」

後部座席のセーラの囁きが、シローの耳には心地よかった。

「ん……………」

リサが目を覚ましたのは、そのタイミングだった。父の背中では、既に精神力でマジンカイザーを制御している。圧倒的な光子力の本流。それを、リサもまたその肌で感じていた。

状況を確認する。ドラゴンの繭に取り込まれた真ゲッターロボは未だ繭の中。デビルマンも、インフィニティのプレストファイヤーで焼かれたまま斃れている。

現状、立っているのはマジンカイザーとマジンガーZ。それにグレートマジンガーとグレンダイザーだが、グレートとグレンダイザーは中のパイロットに意識があるか確認できない。

甲児は、マジンカイザーの制御で手一杯になっている。この光子力の流れを制御しなければ、どれだけ強力な力だったとしても戦うことはできない。

「お父さん……」

父の助けをする方法を、リサは知っている。『可能性』の世界で、リサはそれを拾い上げていたのだから。今リサの右手には、禍々しい杖が握られている。

——バードスの杖。ミケーネの機械獣を操る力を持つ、ドクターヘルスの遺品。

本来この世界では、失われたもの。

それをリサへ渡したりリサは、笑っていた。

『私が生まれてくる世界を、よろしくね』

という言葉を残して。

リサはその杖を握り、高々と掲げた。それと同時に、マジンカイザーの放出する無限の光子力が、志向性を持って形になっていく。

空中元素固定装置。リサの世界で如月ハニーが齎し、マジンカイザーに取り付けられた賢者の石とでも呼ぶべき代物は、この時のためにあったのだ。リサは確信していた。

即ち、この無尽蔵の光子力を制御するために。そのためにリサはバードスの杖を受け取り、そして今その力を振るう。

カイザーの内部に存在する空中元素固定装置が、バードスの杖に呼応するように回転する。

「光子力、転換完了！　光子出力、56億7000万パーセント！」

リサが叫ぶと同時、光子力の奔流が爆発し……それは起きた。

……

……

……

「これは…………！」

宇門大介が意識を取り戻した時、既にグレンダイザーにそれは起こっていた。光子力が、グレンダイザーに光のマントを纏わせている。そもそも光子力マシンではないグレンダイザーになぜこのような変化が起こったのかは、わからない。しかし、それは決して悪い変化ではないことは、魂で理解できた。

（あの時……）

大介もまた、*“可能性”*の世界にいた。そこで見たものは、ゲッターロボ。いや、あ

れはゲッターロボとっていいのだろうか。

異形の怪物と化したゲッターを駆逐していく、ゲッターを狩るゲッター。言わば、アンチ・ゲッターとでも呼ぶべきモノ。

(あれもまた、“可能性”というのか……)

アンチ・ゲッターを垣間見たことで、大介は確信した。未来は、一つではないと。そして、未来を決定するものは無限の“可能性”の中にこそあると。

光子力のマントを翻し、グレンダイザーが立ち上がる。それと同時に、グレートマジンガーも。

「鉄也君……」

「どうやら、俺たちのマシンはカイザーとZの光子力の共鳴して……“可能性”の力を身に纏っているらしいな」

グレートもまた、光子力の光でできた巨大なマントを羽織っていた。それが、グレートマジンガーの“可能性”の姿ということだろうか。そして、このグレンダイザーの姿もまた。

大介は、グレンダイザーの拳を巨大なマシンガー……インフィニティへ構えた。スクリュークラッシュャーパンチ。それが光子力を纏い、光の拳となってインフィニティ目掛けて飛び出す。

その拳の名前を、大介は無意識に叫んでいた。

「スクリューブロワ・クラッシュャー！」

光子力を纏った拳が、インフィニティに炸裂する。グレンダイザーよりも遥かに巨体なインフィニティが、その拳によるめいた。

「大介さん！」

「すまない甲児君、少しばかり、長く眠っていたようだ……」

グレンダイザーに続くように、グレートマジンガーが往く。光子力を纏い、グレートの身の丈よりも遥かに巨大化したマジンガーブレードを振り上げ、インフィニティの頭上へ迫った。

狙うは、パイルダーとなったガルラ。ガルラ目掛けて、巨大な魔神皇帝の剣は振り上げられる。

「エンペラーソードッ！」

ガルラは雷を起こし、それを壁にするようにしてエンペラーソードと名付けられた巨大な剣を受け止める。しかし、それを雷を突き破りグレートマジンガーは肉薄する。

「まさかっ!？」

皇帝の剣が、巨竜の頭を切り裂いた。

「鉄也！」

「礼を言うぞ甲児、シロー……。お前達のおかげで、この化け物と戦う力が……。俺達にも魔神皇帝の力が宿ったらしい」

魔神皇帝の力。即ちマジンカイザーの持つ無限の光子力が齎した奇跡。それが、マジンカイザーとマジンガーZだけでなく、グレートとグレンダイザーにも無尽蔵の力を与えている。

それは、かつてインフィニティとの戦いの折、マジンガーZに起きた奇跡。それと同じ現象が魔神に起きているということだった。

あの時、マジンガーZは世界中の光子力を身に纏い、インフィニティと同等の体積を手に入れていた。しかし、グレートとグレンダイザーに、そして今マジンカイザーとマジンガーZに起きているそれは、巨大化現象ではない。

無限の光子力が、魔神達に“可能性”を具現した武器を与えていたのだ。

それが、グレンダイザーのスクリューブロウ・クラツシャーや、グレートマジンガーのエンペラーソードとして顕現している。

今や、全ての魔神がマジンカイザーであると言っても過言ではない。

だが、それでもマジンガー・インフィニティの巨体は健在だった。

.....

.....

「なるほどな……これが人間の『可能性』か」

サイコジェニー……ラーグースの尖兵はしかし、それに驚かされたものの、驚愕するには至らない。

なぜなら、『可能性』とは突き詰めれば因果率の収束過程に過ぎず、因果率への干渉などはラーグースの一部に過ぎないサイコジェニーにも多少心得のある超能力だからだ。

ゴラーゴンなど、ラーグースの力の一端にすれば取るに足らぬ誤差である。

ラーグースにとって、宇宙とは積み木である。それを積み上げるのも、崩すのも、娯楽以上でもなければ以下でもない。

ただ、この宇宙は今までとは様子が違った。今までにない成長を遂げる生物があった。幾億繰り返し返した宇宙の生誕と終焉の中で、今まで生まれ得なかったものが生まれた。

それがゲッター線であり、光子力だ。

それらは、ひとつの宇宙という狭い箱庭の中で生まれた生物に、創造主たるラーグー

スに迫る力を与えるものだった。

故に、ラーグースはただこの宇宙を消滅させるのではなく……育てて刈り取ることを選び、推移を観察した。そして、時には未知の宇宙から情報を……虚憶という形でサタンに与えもした。

サタン。ラーグースの尖兵でもある神の軍団に叛いた愚か者。神の軍団に叛いた罰として、サタンには随分と働いて貰っている。

例えば、今もラーガごとインフィニティのコアになっているサタンの記憶から、情報を引き出すことでラーグースの因果律操作を応用すれば……。

「このようなことも、可能だ」

インフィニティの頭上に、時空の裂け目が広がっていく。それは、かつて『ゲッターの地獄』とも呼ぶべき世界で見たものとよく似た現象だった。ラーグース細胞は、因果律に干渉しこのような現象を起こす事ができる。まして裂け目より、配下を呼び寄せることなどラーグース細胞には造作もない。

それは、血のような赤色の怪物だった。怪獣。という表現が正確かもしれない。

その怪獣を、鉄也は知っている。

「ギルギルガン……だど!?!」

ギルギルガン。かつて甲児達が倒した成長する宇宙怪獣。その成体が姿を現す。

「まさか、あの宇宙怪獣も貴様の手先だったのか!」

鉄也が叫ぶ。それにラーグース細胞……サイコジエニーは人間を嘲笑うような不気味な笑みで返す。それに呼応するようにギルギルガンが吼え、その鍵爪でグレートへ襲いかかった。

「今更、ギルギルガン(ゴ)ときによ!?」

魔神皇帝の剣、エンペラーソードでそれを薙ぎ払うも、ギルギルガンは口から破壊光線を放つ。

「鉄也さん!」

動いたのは、マジンガーZ……兜シローだった。マジンガーZもまた、ジェットスクランダーに光子力の光を纏っている。『可能性』の翼で飛んだマジンガーZは、ギルギルガンとグレートマジンガーの前に割り込んだ。

「セーラー!」

「うん!」

セーラの空中元素固定装置が、光子力の翼に実体を与えていく。巨大な翼は背中にもう一つの拳を背負っていた。そして、真紅の翼はまるで本物の鳥か、或いは天使の翼のように可変し、魔神を守る盾となる。

その盾に阻まれた破壊光線は、光子力の中に霧散するように掻き消された。

「見たか！　これが俺とセーラのマジンガー……全てを守る鉄の盾だ！」

その光景を、インフィニティは静観していた。しかし、そのインフィニティにも変化が訪れる。ガルラから伸びたラーグース細胞の触手が、インフィニティの全身を取り込み、そしてインフィニティは変貌をはじめたのだ。

「ウツ」

シローと鉄也に、悪寒が走る。それは、よくないものだという悪寒。世界を地獄へと変貌させていく悪魔の姿に見えたのだ。

魔神に選ばれた男達が、最も忌避すべき姿。悪魔と化した……いや、悪魔など生温い。邪神。悪魔が傳くこの世全ての邪悪の権化。

変貌していくインフィニティは、そういうものだった。

それこそ今、インフィニティの一部になっているドクターヘルの頭脳を解析してラーグースが用意した言わば第二形態。

「させるかよ……！」

シローが叫び、セーラは空中元素固定装置をさらに回転させマジンガーZの周囲に浮遊する光子力を超合金Zの塊へと変換させていく。そして、マジンガーZが自身の右手を掲げる。

「ロケットパンチ……ひやああああく連発！」

シローの合図とともに超合金Zの塊……マジンガーZの剛腕と同じ質量を持つ百の拳が、インフィニティ目掛けて飛び出していった。

「無駄なこととを……」

しかし、その質量を持つてもラールグース細胞と融合していくインフィニティには傷ひとつつかない。ならば、と鉄也はグレートマジンガーでインフィニティの背後へと回り込む。

その胴体の放熱板……プレストバーンも、光子力の力でパワーアップしている。

「グレート・ブラスタ―！」

その光子力の加護を受けた熱線は、マジンカイザーのファイヤーブラスタ―に匹敵するパワーを有していた。しかし、そのグレート・ブラスタ―に飛び込むものがいた。宇宙怪獣ギルギルガン……！

「何……!?!」

ギルギルガンは、まるで主を守るようにグレート・ブラスタ―を受けながら巨大化していく。皮膚を溶かされながら、膨張を続けていく。その様子に只ならぬものを感じた鉄也は、咄嗟にグレート・ブラスタ―を中断する。自由になったギルギルガンはまるで仲間の仇とでも言わんばかりにグレートマジンガー目掛けて迫り、その鎌爪を振り回す。グレートは、エンペラーソードでそれを受けに回る。

「鉄也君!」

グレンダイザーとマジンカイザーも、動いた。しかし、その時だった。

全身にラーグース細胞を移植されたインフィニティの隻眼に、瞳が生まれる。

「お、お、おとおおおとおおっ!」

義眼として埋め込まれてたドクターヘルが、断末魔の悲鳴を上げた。

「ドクターヘル!?!」

「か、兜甲児……。このインフィニティ。いや、ゴッドマジンガー・インフィニティは、

ワシの夢だった……」

「……………」

かつて、兜甲児はこう推測した。ドクターヘルが世界征服に手を出した理由。それは好奇心にあったと。そして、インフィニティの世界改変装置ゴラーゴンにより、つまりないこの世界を否定するのも、世界への好奇心が失せた証拠であると。

しかし、ドクターヘルは広大な宇宙で、ラーグースに触れることで新たな好奇心とそして……初期衝動を思い出したのだろう。

なぜ、世界を手に入れたいと思ったのか。

「このゴッドマジンガー・インフィニティは、無限の闘争と殺戮に彩られた宇宙から、この星を守るためにラーグースを利用して手に入れようとした力だった……。この機体

は、ラーグースとこの星を繋ぐ機能を有している。お前達が負ければ、この宇宙はラーグースの手で滅ぼされるだろう……」

「ヘル……どうして……」

「勘違いするな……ワシも、この星が……天然自然が好きだったのを、思い出したただけだ」

ヘルは瞳から、生気が消えていく。ラーグースによって延命させられていた機能が、死んでいくのをヘルは理解していた。

「よいか兜甲児。全ての命は滅んではならぬ……。ラーグースにも、ゲッター線にも、滅ぼさせては……」

それが、最期の言葉だった。ドクターヘルはついに、死んだのだ。

しかし、それで兜甲児に齎されたものは……。

甲児は、キツと眼前のマジンガーインフィニティ……いや、ゴッドマジンガー・インフィニティを見やる。神と名乗るには、随分と醜悪な姿だった。マジンカイザーは、ゴッドマジンガー・インフィニティを前に一步を踏み出す。

「ラーグース……！ てめえが何のためにここへきたのかは知らねえ。でもな、この星には兜甲児様がいることを、教えてやるぜ！」

マジンカイザーの胸部に、光子力の光が集まっていく。その無尽蔵の光子力が剣の姿

を形作っていく。

「リサー！」

「了解！ 光子力収束確認。空中元素固定装置、フルドライブ。カイザーブレード、リアライズ！」

マジンカイザーが、胸部の「Z」から皇帝の剣を引き抜いた。グレートのエンペラーソードと違い、空中元素固定装置の力で実体化した巨大な剣・カイザーブレードを構え、真紅の翼を広げ飛翔した。

……

……

……

一方、剣鉄也は目の前に相對する敵……ギルギルガンに異様なものを感じていた。ギルギルガン、鉄を喰らい成長する宇宙怪獣。かつて自分とゲッターチームの連携で倒したそれよりも、目の前のギルギルガンは遥かに強力になっている。無尽蔵の光子力で魔神皇帝の力を得た今のグレートと互角……いや、それ以上の力を發揮している。その怪力だけでもグレートを圧倒していると言えた。エンペラーソードで叩き斬ろうとする

も、それを受け止めたまま力を込め、光子力の熱に焼かれながらも巨大化していく。
「こいつ……まさか光子力を喰ってるのか!？」

咄嗟にエンペラーソードの光子力を吸い上げながら巨大化していくギルギルガン。危険を感じた鉄也は、剣から手を離してギルギルガンの下へ回り込む。

「これならどうだ、ルスト・タイフーンツ！」

グレートの口から、巨大な竜巻が巻き起こる。グレートタイフーンよりも遙かに巨大な竜巻に飲み込まれ、ギルギルガンはエンペラーソードから引き離される。グレートはそれを拾い、ギルギルガンを睨め付ける。

嵐の中から飛び出したギルギルガンはさらに巨大化し、既に全長は100mを越えており、25mのグレートではパワーで太刀打ちできない。しかし、何よりも異常だったのはその巨大ではなく……嵐に吹き飛ばされて露出した、皮膚の中身だった。

銀色の機械が、骨と筋肉を作っている。成長する機械生命。果たしてそれは、かつて戦ったギルギルガンだろうか。

「鉄也君！」

グレンダイザーと、マジンガーZがグレートに並ぶ。

「大介、シロー……この化け物は、光子力を食べてパワーアップしてやがる……」

鉄也が叫ぶと同時、ギルギルガンの真紅の皮膚全てが吹き飛んだ。中から出てきたの

は機械怪獣………言わば、メカギルギルガン!

「光子力を喰う怪物……。ならば、僕が相手だ!」

真つ先に飛び出したのは、グレンダイザーだった、グレンダイザーの胸部から放たれた光線が、メカギルギルガンを捉える。

「反重力ストーム!」

フリード星の守護神であるグレンダイザーは、本来光子力マシンではない。その加護を受けながらも、その本質を失ってはいなかった。

反重力ストーム。相手を無重力状態にし動きを止めるグレンダイザーの必殺技のひとつ。メカギルギルガンはそれを浴びて一瞬、動きが止まった。

「今だっ!」

ダブルハーケンを構え、メカギルギルガンへ肉薄する。反重力状態で身動きの取れない宇宙怪獣の、鉄の皮膚にハーケンが食いこんだ。

悲鳴のような絶叫を上げるメカギルギルガン。

「シロー、俺たちも続くぞ!」

「おう!」

グレートと、マジンガーZもありつただけのネーブルミサイルと、ドリルを撃ち込んでいく。光子力なしでも、魔神の全身には一国の軍隊に匹敵する火力が眠っていた。しか

し、今マジンカイザーと戦っているラーグースを相手にする際には、力不足が否めない兵器。それを、ここぞとばかりに叩き込む。

メカギルギルガンの絶叫と共に、爆炎が巻き起こった。

「やったか!?!」

「いや……まだだ!」

鉄也が言った、その直後だった。突如として強力な重力場が発生し、マジンガーZとグレート、グレンダイザーに襲いかかる。

「きやあつ!?!」

「セーラツ!?!」

超重力の渦に、叩き落とされるマジンガー達。それは、メガ・グラビトン・ウェーブ。メカギルギルガンの放つ強力な重力光線は、グレンダイザーの反重力ストームを解析しさらに強力になっていた。

「クツ………!」

目を開けているのも困難な重力の渦の中で、鉄也は霞む目を凝らしながら必死にメカギルギルガンを見つめていた。

光子力を吸収し巨大化する機械の怪物。光子力どころか反重力すらも自らの力にできるといふのならば、どう戦うべきか。

「何か……弱点はないのか?」

そう考え、鉄也はあることに思い至る。

敵の力を吸収し、それを喰らう怪物。それはデーモンに似ている。そして、デーモンの合体能力も決して無尽蔵ではなかった。

「イチかバチか……やるしかない。グレート・ブースター射出!」

鉄也の叫びに呼応し、『承認』の文字がグレートのコクピットに映し出された。それから数秒もしないうちに、銀色のグレート・ブースターがバードス島に飛来し、重力場の中グレート目掛けて突っ込んでいく。グレートブースターならば、この重力場を突破することが可能。そう考えて鉄也は賭けに出た。いつも以上のGがかかっているこの状態での合体は、困難を極める。もし失敗すれば、グレートマシンガーとて粉々に砕けるだろう。

しかし、それでも。

「装着、完了!」

戦闘のプロ・剣鉄也はできないことは言わないのだ。鉄也が言ったのだから、確実にできる。それが、偉大な勇者。

グレートブースターの最大出力で、重力場を抜けたグレートマシンガー。光子力でできた見えないマントが形を変え、グレートブースターに集約されていく。

次第に、グレートブースターはさらに巨大な左右4対の、8枚の翼へ変化し、その翼を授かったグレートは再びメカギルギルガンへ肉薄する。

「まだまだ、もっと加速しろ！ グレート！」

それは、魔神皇帝となったグレートの限界を超えたスピードだった。そのスピードのまま、魔神帝王は加速する。そして、グレートブースターと同じ要領で合体を解除し、光子力の翼を直接メカギルギルガン目掛けてぶつける。

「行けっ、オレオール・ブースター！」

メカギルギルガンの胴体を、魔神皇帝の翼は突き抜けた。メカギルギルガンは絶叫のままに破壊光線を吐き迎撃するが、グレートマジンガーはそれをひらりとかわし、再びブースターと合体する。

それが合図となりマジンガーZ、グレンダイザーも重力場を抜け出し、グレートと並んだ。

「シロー、大介。俺達のありったけの光子力を、奴にぶつけるんだ」

鉄也が言う。

「でも、あの化け物は光子力を喰っちゃまうんだろ？」

「いや……そういうことか！」

シローが疑問を口にするが、大介はその真意を理解したらしい。すぐ様スペイザー・

クロスして、巨大なメカギルギルガンへと迫っていくグレンダイザー。

「大介さん！」

「説明してる時間はない！ シロー、俺に合わせる！」

グレートに合わせるように、マジンガーZも飛翔する。そして、エンペラーソードを投げて先ほどオレオールブースターによってつけられた傷に刺し込んだ。さらに、グレートは全身に漲る光子力を一点に集中させ、それを雷エネルギーに変換していく。圧縮されたエネルギーの多層構造を持った光子力の雷を、グレートは全身から吐き出した。

「サンダーボルト・ブレーカー！」

グレートのサンダーブレードと同じ、しかしさらに強力な稲妻が、皇帝の剣を避雷針としてギルギルガンの一点へ集まっていく。

「シロー！」

「ああ、セーラは光子力の制御を頼む！」

それと同時に、マジンガーZも。

「光子力、ビィィィィィツム！」

魔神の目から、超密度の光子力の光が放たれる。光子力の光が螺旋を描き、メカギルギルガンを飲み込んでいく。

「次は、コイツだ！」

さらに、スペイザーで頭上まで飛んだグレンダイザーが、その王冠とも言うべき二本のツノに全てのエネルギーを集中していた。そして、ギルギルガンの頭部目掛けて突撃し、ツノを突き刺す。そこから自身に与えられた光子力の全てを解放。

「ゴッド・サンダー！」

グレンダイザーの全エネルギーが、メカギルギルガンの全身を駆け巡っていく。トリプルマジンガーの力を結集した攻撃。それを受けてメカギルギルガンはさらに巨大化……膨張していた。

「ダメだ！ これじゃ奴にパワーを与えただけじゃないか！」

シローが叫ぶ。しかし、それを聞いて鉄也はニヤリと口元を歪めた。

「よく見ろシロー。あのメカギルギルガンを……」

言われて、シローは目を凝らす。巨大化するメカギルギルガン。その体躯は風船のように膨らんでいるように見えた。

「今の奴の体内は、光子力を急速に与えられてエネルギーへ変換しきれなくなっている。今が、チャンスだ！」

それを聞き、シローは無言でマジンガーZを動かしていた。空中元素固定装置で進化したスクランダーが、全てを護る鉄の盾が、姿を変えていく。

「だったら、その風船を突き破る!……セーラー!」

「うん! 光子出力、空中元素固定装置、全て正常。いけるわ、シロー!」

瞬間、マジンガーZがフラッシュした。それと同時に、スクランダーがその形状を変えていく。

それは。

その姿は!

その勇姿は!!

「これこそが、オレとセーラの望んだ姿!」

「私とシローが、未来を掴むための、鉄の拳!」

「全ての可能性を掴み取り!」

「全てを原子へ撃ち砕く!」

巨大な拳骨が、メカギルギルガンへ迫る。それがマジンガーZであるなど、誰が信じられようか。

否。

その漆黒の拳は紛れもなく、マジンガーZなのだ。その威容。その存在感。その拳が、“可能性”を切り拓いた元祖スーパーロボットのものではなければ、なんだというのだ!

「飛ばせ、鉄拳！」

「ビッグバン・パアアアアンチッ!」

シローと、セーラの叫び声が響く。そして、メカギルギルガンはその神をも砕く人の“可能性”の拳を前に、木っ端微塵に弾け飛んだ。

光子力の大爆発の中、マジンガーZはその威光を浴びて輝いていた。

「見たか! これがお爺ちゃんからアニキ、そしてオレへと受け継がれた……マジンガーZの力だ!」

それこそが、人の“可能性”であると。シローは、後部座席で自分を支えてくれた女性へ視線を送る。

「うん……。カッコいいよ、シロー」

その透명한金髪が靡き、青い瞳は真っ直ぐにシローを見つめて、微笑んでいた。

最終話『夢幻!!!!』Cパート

鉄也と大介、そしてシローがメカギルギルガンと死闘を演じているその頃、マジンカイザーと兜甲児はゴッドマジンガー・インファイニティと死闘を繰り広げていた。インファイニティの巨体に挑むマジンカイザーは、まるで一寸法師のようでもある。カイザーブレードを振り回し、ゴッドマジンガーの指先から放たれる無数のドリルミサイルを斬り伏せながら、進んでいく。

しかし、いかに最強の魔神皇帝であるマジンカイザーとて、ゴッドマジンガーの巨体と、そこから繰り出される火力をまともに受ければただでは済まない。甲児は神経を研ぎ澄ませ、精神力でカイザーを操っていた。

「そこだ、ギガントミサイル!」

カイザーの腹部から放たれたミサイルはしかし、ゴッドマジンガー・インファイニティの腹部から放たれた光に相殺される。

「無駄だ。兜甲児、終焉を受け入れろ!」

サイコジェニーの声と共に、頭部のガルラ……グレートのエンペラーソードで頭を失いながらも、まだ生きている太古の巨竜から、再び頭が生えた。しかし、それは今まで

のそれとは違う。昆虫のような複眼を持つ、異形の頭部。それが、ラーグース細胞で生まれたものであることは、甲児は理解した。その異形の口から、業火が放たれる。灼熱に晒されながらも直撃を避け、マジンカイザーはゴッドマジンガー・インフィニティの頭部……ガルラへ迫った。

そして、皇帝の剣を一閃。

「これで、どうだ!」

再び、ガルラの頭を斬った。しかし、細胞が細胞を呼ぶようにして再び再生していくガルラの頭部。

「こいつの回復能力は、デビルマン並かよ!」

「お父さん、解析完了しました。ガルラの内部に、生体コアユニットが存在します。それが、ガルラに無限の再生能力を与えているようです!」

リサが言う。しかし、マジンカイザーに内部の生体コアを取り除く方法はない。

「どうする……?」

甲児が一瞬、逡巡したのをゴッドマジンガー・インフィニティは見逃さなかった。カイザーの目の前で、胸の赤が光り輝いていく。

「消えろ、兜甲児……インフェルノ・ブラスター!」

「やべえっ!」

咄嗟にパイルダーをオフにして、カイザーパイルダーが空高く飛び上がる。それと同時にコントロールを失い、落ちていく魔神皇帝。しかしそのおかげで、パイルダーもマジンカイザーも、インフェルノ・ブラスターの射線を逃れることができた。2機の間を、全てを溶かす熱光線が通り過ぎていく。超合金ニューZαのカイザーはそれでも無事かもしれないが、中の人間は無事では済まない熱だった。

熱を避けながら、カイザーパイルダーは急降下しカイザーを追う。大地に激突する直前に再びパイルダーオンし、人の頭脳を取り戻した魔神皇帝は、人の心を失った魔神を見上げた。

「……とにかく、あの再生能力の核になつてるものをどうにかしなきゃならねえ」

恐らくは、サタンだろう。サタンの生命力を吸って、ガルラは……ゴッドマジンガー・インフィニティは無限の生命力を手に入れているのだ。

さらに、ラーグースの未知の力を得ているとすれば、たしかに目の前の存在は兜甲児の生涯最大の敵であると言えた。

そして、その時だった。

「……………奴の再生能力は、オレがどうにかする」

声が、聞こえたのは。

声の方にモニタを拡大すると、巨大化を解かれながらも立ち上がるデビルマン……不

動明の姿があつた。

……
……
……

不動明は、夢の中にいた。これが夢だとわかるのは、目の前にいるのが過去の……幼少期の自分と、了だったからだ。

「オオカミ男！ ミノタウロス！」

絵本の中に描かれた怪物……ルー・ガルーやミノタウロス、ハーピイ、メドゥーサ、黄衣の王といった神話や物語の中のモンスターを嬉々として指し、名前を呼んでは喜んで
いる了。

「了ちゃん、お化け好きなの？」

小心者だった明は、恐る恐るそんな了へ訊く。

「うん、仲間だからな！」

『仲間……』

この頃から、了には自分がデーモンたちの王であるという自覚があつたのだろうか。いや、無意識に仲間意識を感じていたのだろう。と明は思う。

「明、お前も仲間になれ！」

了は、怪物の被り物を持って無邪気にそう言った。明は怖いと思いつつも、それを共に被る。

『了……………』

思えば、了と明はずっと一緒だった。両親の都合で牧村家に引き取られた後も、了とだけは交友関係が続いていた。

そんな了と共に過ごした過去があつたから、明は了と共に統合軍に志願した。

美樹を愛して、美樹を守れるような男になりたいと打ち明けた時に、了が誘ってくれた。

本を読み、静かに過ごす方が好きな温厚な明が軍属になつたきつかけが、了だったのだ。

そして、明は……………。

『俺は…………アモンと合体し、デビルマンとなつた』

それは二度と美樹と共に生きることのできない悲劇の道だが、同時に明にとって、美樹を守る力に他ならなかった。

この運命を、不動明は受け入れている。

それでも、運命を共にする仲間がいるとしたら。

それは、飛鳥了以外に考えることができなかつた。
やがて、微睡の世界は明の視界から霧散していき……………。

……………

……………

……………

目を覚ました不動明……………デビルマンの目の前に広がっていたのは、人の営みだつた。平和な世界、とても表現すればいいのだろうか。行き交う人々の波は、デビルマンの魂をすり抜けて通り過ぎていく。

「なんだ……………これは……………？」

“可能性”に分解された世界。その中の一つをデビルマンは垣間見ていた。そこには、デーモンも、デビルマンもない。ただ人間達が生きている世界。

ある意味それは、不動明が守りたかつた世界そのものであると言えた。

(こんな世界があると言うのなら、俺は……………)

戦う必要など、ないのかもしれない。人間・不動明の理性はそう感じていた。しかし、勇者アモンの……………明と相反するデーモンの野性は、それを否定する。

だがそれは、『闘いたい』『敵がほしい』という獣性とは明確に違う嫌悪感だった。その証拠に、デビルマンの魂……そう呼ぶべき思念は今、安堵と、諦念と、そして違和感を覚えて齒軋りしていた。

人々には、デビルマンの姿は見えない。感じもしない。しかし、それが寂しいのではない。

言うなればこれは、おかしいのだ。

あり得ないのだ。そんな可能性は。

デーモンという種は、地球人類よりも遙か昔に栄えた種族だ。人類が栄えているのならば、その痕跡がなければおかしい。

デーモンの存在を、息吹を。この星が覚えていなければいけないのだ。しかし、デビルマンはそれを感じない。

ならば、この“可能性”は何だ？

その答えを示すように、デビルマンの視界に映っていた大きなビルの時計が19時を指す。すると液晶の巨大なモニターが、アニメを映し出した。

そこに映っていたのは、空に聳える鉄の城。

マジンガーZが、機械獣と戦っている。

唸るロケットパンチが、機械獣を打ち砕く。

「バカな……」

それは。

それは。

デビルマンの、不動明の生きる世界の日常だ。それが、架空の物語として人々に消費され、楽しまれている。

マジンガーZが終わると、ゲッターロボがはじまる。デビルマンの知るものとは随分風貌の違う、スポーツマン然とした流竜馬が映った。ハーモニカを吹き黄昏る神隼人が映った。デビルマンは、その光景を呆然と眺めていた。

そして、テレビモニタはカラフルな色と、独特のフォントで五文字を映し出す。

『デビルマン』

と。

明の中に最初に去来したのは、虚無だった。

「あれは……誰だ……？」

テレビの中でデーモンと戦うあの男は。不動明なのか？ その隣にいる少女は、牧村

美樹なのか？

ならば、その光景を見ている自分は、誰だ？

そして、何よりも明の虚無を広げたのは。

そのテレビアニメの中に、サタンの……飛鳥了の姿がなかったことだ。

サタンが、神に叛いた者だからだろうか。

神とは、このような所業も許されるのだろうか。

「これが……『可能性』の世界だど?」

虚無の後に宿ったのは、業火だった。

「巫山戯るな……巫山戯るなよ……。俺達の生きた証を、戦い続けた記録を、架空の絵空事に貶めるだど?」

それを為すものがたとえ、神だと言うのならば。

「許さん……許さんぞ……!」

このような『可能性』を、断じて許すことはできなかつた。魂だけのその翼を広げ、デビルマンは飛ぶ。倒すべき敵の下へ。

どうすれば辿り着けるのか、デビルマンはその魂で理解していた。

「デツビイイイイイッルツ!!」

不動明の、デビルマンの叫びが、虚構の世界の中で木霊した。

……

……

………

そして今、デビルマンが立ち上がる。しかし、先ほどインフィニティのブレストファイヤー……インフェルノ・ブラスターをモロに受けた傷は完全には癒えておらず、満身創痍。

「デビルマン……お前……！」

「アモン、いやデビルマン。そんな身体で何ができる」

サイコジェニーが嘲笑い、指からギガントミサイルを放つ。しかし、その爆発はデビルマンへ届かなかった。悪魔人間の前に躍り出た、黒いゲッターロボ……ブラックゲッター。メタルビースト・ドラゴンとの戦いで満身創痍となっていた黒いゲッターが、デビルマンの盾となるように庇い、ギガントミサイルを受け止めていた。

「元氣！」

「クツ……おいデビルマン。一度しか言わねえぞ、ブラックゲッターはもう、ゲッター線の臨界点を迎えてる……このままだと、ゲッター線の炉心爆発が起きる」

淡々と、元氣が告げる。

「だが、お前が俺たちとゲッターに合体すれば、ゲッター線は新たな身体を手に入れることができる！俺達と、合体しろ！デビルマン！」

それは、正気の沙汰ではなかった。デーモンに合体され、意識を殺された人間の末路がデビルマンの脳裏を過ぎる。

「バカか！ お前ら……！」

「正直な……。俺も姉さんも、もう長くは保たねえ。俺達が生き残る方法は、デビルマン！ お前に賭けるしかねえんだ！」

コクピットハッチを開けて、元気は自らの顔を見せる。それは、全身の肌が鱗のように膨れ上がり、視界も見えているのかいないのかわからない、見るも無惨なものだった。ゲッターエネルギーの臨界を超えたオーバーロード。かつて、巴武蔵もまた受けたそれが今、早乙女元気と早乙女ミチルを襲っている。

そして、ラーグースと戦う力をデビルマンが持っていないのもまた、事実だった。

「……………わかった」

デビルマンはひとつ頷き、ブラックゲッターに触れる。その時、ブラックゲッターが緑色に輝き始めた。ゲッター炉の臨界突破が、極限を迎えたのだ。

「うおおおおおおおおおおつ!?!」

自身までもを焼き尽くくさんとするゲッター線の光を浴びながらも、デビルマンはそれを吸収していく。やがて、デビルマンもその光に呑み込まれていく。そして……。

光の中から最初に見えたのは、漆黒のゲッタードリルだった。ゲッター2。かつて神

隼人が愛機としたマシンの装備。そして、反対からゲッタートマホークを持つ腕が現れる。

ゲッター1と、ゲッター2。それが同時に存在しているなど、本来あり得ないことだ。そして、巨大な羽根。

それは全てを飲み込むゲッター線の光を、逆に飲み込んでいく。暴食の悪魔のように。或いは、ブラックホールのように。

そして生まれたのは、異様な姿だった。

巨大なブラックゲッターの顔が、中央にあった。そして、ブラックゲッターのトマホークを持つ右手、ゲッタードリルと化した左手。

脚はゲッター3のキヤタピラを持ちながら、人形をしている。

何より悍ましいのは、腰に、背中に、ゲッター2を、ゲッター3を思わせる顔があることだ。

元々、ブラックゲッターはゲッター1を改造したものである。当然、ゲッター2、ゲッター3の姿も存在していた。しかし、それが今一つの形となっているのは、ありえないとしか言いようがない。

そして……その異様な威容を繋ぎ止める、デビルマンの貌が、頭部に存在した。

「デビルゲッターアアアアアッ!!」

デビルマン。悪魔の勇者アモンが、人間不動明と、光子力マシナイチナナ式を取り込んだ姿。そこにさらに、ゲッター炉とゲッターロボを取り込んだ。悪魔のゲッター。それが、デビルゲッター！

『……………これは？』

デビルゲッターの胎内で、早乙女ミチルは目を覚ました。

『姉さん、心を一つにするんだ』

その隣で、姉を支えるように元気。今、デビルゲッターの中で早乙女姉弟は、確かに生きていた。

ゲッターロボを取り込んでも、デビルマンはそれだけではゲッターの力を最大限に發揮することはできない。なぜならゲッターロボは3つの心がひとつになることで真のパワーを発揮するマシンだからだ。しかし、このデビルゲッターは違う。

今、デビルゲッターの中には不動明、早乙女元氣、早乙女ミチルの3つの心がある。

それは、暴走するゲッター炉を加速させながら、デビルマンが取り込んだ光子力がオーバーロードを防ぐ弛緩剤の役割をしている。

「今行くぞ、了！」

デビルゲッターはデビル・バトルウィングを展開し空高く舞った。目指すものは、ガルーラの中で生体ユニットとなっているサタン。いや、飛鳥了。

「おのれ小癩な……アモン！」

ビームを撒き散らしながら、ゴッドマジンガー・インフィニティが吼えた。しかし、デビルマン……もといデビルゲッターは、それを突き破って突き進む。デビルゲッターの左腕。デビル・ゲッタードリルが、ビームを裂いていた。

「何ッ!？」

「すげえ、デビルゲッター!？」

甲児が声を上げる。サイコジェニーが、驚愕する。デビルマンにも、ゲッターロボにも、こんなパワーはなかった。魔神皇帝以外に、敵はない。そんな目算が、完全に破壊された瞬間だった。

やがてデビルゲッターは、ゴッドマジンガー・インフィニティの頭部……ガルラの目前へ迫った。それを振り払うように、ゴッドマジンガー・インフィニティは両の指からドリルミサイルを放つ。四方からのミサイルが、デビルゲッターを襲う。

「危ねえ、デビルゲッター!！」

甲児が叫び、マジンカイザーで援護しようとターボスマッシュヤーパンチを構えた直後、デビルゲッターの『ゲッターロボの顔』がついた部分全てが、悪魔のように口を開く。そして、3つの口全てから放たれた光がミサイルを掻き消した。

「サンダー・ボンバー!！」

サンダー・ボンバー。本来ならデビルマンにも、ゲッターロボにも存在しない武装。プラズマボムスと呼ばれるエネルギーを使用する、未来のゲッターロボの必殺技。デビルゲッターの中の光子力とゲッター線が組み合わせり辿り着いた、「可能性」の力。「知らない……そんな武器、私は知らない!？」

「未知」との遭遇。それが、サイコジェニーを狼狽させる。デビルマンは所詮、デーモンであるはずだ。マジンガーやゲッターロボとは根本的な原理が違う。たとえ巨大な機械融合体……メタルビーストとなつたとしても、このような未知の器官を生成することなど、できないはずだ。

だとしたら、あのデビルマンは……デビルゲッターは……。

「アモン……お前は……何なのだ?」

「教えてやるサイコジェニー。俺はデビルゲッター。悪魔の力と人の心、そしてゲッター線による進化の力を持つ、お前の知らない新たな種族だ!」

人の心と、ゲッター線。それがデビルマンを、新たな種族に進化させたというのか。

それでは、まるで……。

「アモン……お前は、我々と同等の存在になりつつあると言うのか!」

「違う! この進化は人間・不動明と、早乙女元氣、早乙女ミチルの……魂の進化だア!」
ラーグースの細胞片が触手のように伸びて、デビルゲッターを襲う。しかし、それを

デビル・ゲッタートマホークで薙ぎ払い、デビルゲッターはさらに、ゲッタービームでガルラの腹部を焼いていく。

「小癩な、アモン！」

「俺は、俺たちは……デビルマンだアツ!?」

ゲッタービームで焼かれた腹部に、デビル・ゲッタードリルが突き刺さった。そして、超高速の回転が、ガルラを、サイコジェニーを痛めつけていく。

やがて、ドリルはガルラに大きな風穴を開けた。そして、デビルゲッターはその内奥に飛び込んでいく。目指すは内部に囚われているラーガのコア……大魔神サタン。いや、飛鳥了。

ラーガは既に、ラーグース細胞の胎内でドロドロに溶けていた。そして、その中で眠っているサタン……了の姿を認めたデビルゲッターは、その腰からゲッター3を思わせる大きな腕を伸ばし、了を掴む。

それを食い止めようと、ラーグース細胞は触手を伸ばし、デビルゲッターを襲った。それは、白血球が病原体を攻撃するのに似ている。今、神の胎内に侵入した悪魔はまさに、ウィルスだ。

「了ー！」

デビルゲッターは、不動明は呼びかける。サタンにはではない。唯一無二の親友にだ。

「お前はこんな風に、神とやらに利用されて終わっていいのか！ 飛鳥了は、そんなつまらない人間なのか!？」

それは、魂の慟哭だった。

親友のいない世界を、存在の証明を陵辱された世界を垣間見た明の、魂の叫びだった。「俺を一人にするな、了！ お前は……お前は、それでいいのか!？」

明の叫びに呼応するかのように、デビルゲッターのサンダー・ボンバーが吼え、ラ||グース細胞の触手を吹き飛ばす。そして、

「フ、フフフフ……」

デビルゲッターの手の中で、声がした。

「了……!？」

「そうだな、明……。お前一人を地獄へ送ったりするもんか」

大魔神サタン……いや、飛鳥了だった。了は、明の……デビルゲッターの手の中で目を覚まし、そして自らの強大な超能力でラ||グースによる戒めを解き放つ。デビルゲッターと共に飛び立つ、白銀の墮天使サタン。

「お、おのれアモン!？」

サイコジェニーの怒声が、バードス島に響く。それに呼応するように、ゴッドマジンガー・インフィニティは怒りの咆哮を上げた。と、同時、咆哮は衝撃波となりデビルゲッ

ターとサタン……了を襲う。

しかし、デビルゲッターはその衝撃波をすり抜けるように掻い潜り、マジンカイザーへ合流していく。ゲッタービジョン。ゲッター2の超加速能力を応用した分身能力。デビルゲッターは今、封印されているゲッター2、ゲッター3の機能を完全に使いこなせていた。

『こいつは……!』

デビルゲッターの中で、元気が驚愕の声を上げる。

『パワーも、スピードも、全てがブラックゲッターを遥かに超えている……これが、デビルゲッターの力なの!?!』

ミチルにも未知の現象。それを起こしていたのは、デビルマンと心をつなげた3つの心が成せる業。そして、そのデビルマンすら上回る超能力を有するサタン……飛鳥了が、デビルゲッターの不安定な合体を更に安定させるために力を使っていた。

「了……!」

念力で、ゲッター炉の暴走をコントロールする。それにより、光子力はゲッター炉の出力を更に高める為の稼働に回される。その結果、デビルゲッターはゲッタービジョンを獲得したのだ。

「っ……!」

その代償として、了は己の精神力を消耗していた。デビルゲッターの腕の中で、了は汗を滲ませ苦痛に表情を歪める。

「気にするな、明。今は、それよりもラীগースを……倒すんだ！」

「了……お前……」

「明……。こんなメチャクチャな物語、認めるわけにはいかないんだ。黙示録などと……。それが人間が信じる神の御心というなら、それもいいかもしれない。だが、神があのようなものであるなら、人間は……全ての命は、屈してはならない！」

それは、父なる者への叛逆だった。

「明、君がダンテならば俺はヴィルギリウスとなろう。この世界の、全ての命のために！」

了は立ち上がり、念じると自らの身体をデビルゲッターの中に同化させていく。サタンの力が、了の命が、デビルゲッターの中に満ちていく。それは、神と悪魔の調和とも呼ぶべき現象だった。

「なんてこった……禍々しいクセに、どこか神々しい」

その姿に、甲児すら畏敬の念を感じてしまう。神であり、悪魔でもある。今のデビルゲッターは、その意味でマジンガーと同じ存在であると言えた。

しかし、その合体……言わば合神を見ながらサイコジェニーは、不気味に笑っていた。

「何がおかしい!」

明……デビルマンが叫ぶ。それと同時に、カイザーのコクピットでリサが驚愕の表情を浮かべていた。

「お父さん……。統合政府はたった今、バードス島に核ミサイルを発射しました」

それは、絶望の宣告。

「な……」

間に合わなかった。そんな思いが甲児に去来する。それと、同時。

『諦めるのは早いぜ甲児!』

まるで、宇宙を震わせんとする声が響き……。ドラゴンの繭が大きく脈打つ。同時、繭にヒビが入り……。孵化の時が始まった。

……

……

……

流竜馬の前に広がっていたのは、異形の異星人とゲッター艦隊の戦いだった。

もう、何度見たかわからない未来の戦い。ゲッターが侵略者と成り果てた未来。

「俺は……………」

竜馬の視界は、ゲッター艦隊の母艦。ゲッターエンペラーと一体化している。今、竜馬の魂はエンペラーと一つになっていた。

今なら、理解できる。この地獄のような光景は、*“可能性”*に過ぎないのだと。

“世界最後の日” 早乙女がそう言った終焉が、何を意味しているのかはわからない。だが、何が竜馬を呼び、この宇宙を見せていることだけは理解できた。

それが、何を介して竜馬に語りかけているのかも。

「ゲッター…………ゲッターロボ！」

だから竜馬は、竜馬の意識は叫ぶ。宇宙という広大な世界において、その声は小さく、霧散していくしかない。それでも、聞き届けている何者かの存在を今の竜馬は、確信していた。

「貴様は一体何者だ！俺たちに…………俺たちに何をさせようってんだ！」

答えはない。だからこそ、竜馬の意識は研ぎ澄まされる。

「ゲッター！よく覚えておけ、俺は絶対に、てめえの思い通りになんかならねえ！」

竜馬が、吼える。

「俺を…………舐めんじやねえエエエツ！」

ちっほけな一人の人間の叫びが、宇宙を震撼させた。

.....
.....
.....

「竜馬……竜馬！」

竜馬が目を覚ました時、自分が真ゲッターのゲットマシン内にいることに気付くのに、数秒を要した。起こす声は、隼人。

「隼人……俺は、どのくらい眠っていた？」

「わからん。俺と弁慶も、今日を覚ましたばかりでな。計器も狂っちゃまって、どのくらい時間が経ったのかも判断できん」

「ここは……ドラゴンの中なのか？」

あの時、確かに真ゲッターは、ゲッタードラゴンの肥大化した繭の中に入っていた。モニタで外を確認する。内部は、緑色に輝くものが脈打ち、まともに見えているだけで気が狂いそうになる。竜馬はしかし、その輝き脈打つゲッター線の渦を瞬き一つせずに見据えていた。

「ここが……ドラゴンの内部」

そして、ゲッター線の中。

「その通り」

ゲッター線の中を、裸足で歩くものがいた。早乙女博士。本名、早乙女賢。

「ジジイ……お前……」

「竜馬、ついにこの時がきた。このままでは人類は滅ぶ」

ゲッター線に焼かれながら、早乙女博士は魂で、竜馬に、隼人に、弁慶に語りかけていた。

「竜馬、お前はあのゲッターの地獄を見て、エンペラーの未来を見たはずだ」

「ああ……………」

「竜馬、隼人、弁慶。お前達は運命の奴隷か、それとも……」

「言われるまでもねえ」

賢の言葉を遮り、竜馬。

「ここで俺達がゲッターに呑み込まれるかどうか。やってやろうじやねえか！」

「フツ、そういうことだ博士。もう、あんたのルールは必要ない」

「俺達の未来は、俺達を作る。たとえゲッターでも、その邪魔はさせねえ！」

そう言って、竜馬が、隼人が、弁慶が目を閉じてゲットマシンの操縦桿を握る。そして、真ゲッターロボがドラゴンの中で脈打つゲッター線を吸収し始めた。

「そう、本来真ゲッターはドラゴンのゲッターエネルギーを使うことでゲッター線を最大まで満たす計画だった……。随分予定と変わったが、

ついにその時がきた！」

「ああ、見てな博士。俺達が……博士も知らない未来を見せてやる！」

操縦桿を握る手が熱くなる。真ゲッターロボが、ドラゴンのゲッター線を吸収し熱くなっているのだ。

「クツ、こいつは……」

呻く弁慶。しかし、その弁慶の手を優しく包む大きな手。そんな存在感を感じる。

『力むんじゃねえ弁慶。ゲッターを信じるんだ』

声がする。それは、弁慶がいつも憧れていた背中。

「武蔵先輩……！」

『弁慶、感情を込めてゲッターの力を引き出せ。いいな？』

「お、おう……！」

隼人もまた、ゲッターの強大な存在感の中に亡き友の姿を垣間見ていた。

「竜二……。杉山……。それに……」

隼人の従兄弟でもある竜二。そして、隼人と共に学生運動に打ち込んでいた……青春

を共にしたかつての友人達。

『隼人……お前は強い。俺達よりも、ずっと』

「へっ、お前らに鼓舞されるとは……俺も老いたもんだな」

竜二達は、隼人という存在の犠牲者だ。ある者は恐竜帝国に、ある者は百鬼帝国の手によりその若い命を散らされた……隼人の十字架であると言つてもいい。

だが、彼らもまたゲッターと共にあるのならば。ゲッターと共に運命と戦うという、これから先の戦いは。

「若い命が真っ赤に燃えて、か……！」

不敵に笑い、隼人は操縦桿を握る手に力を入れる。そこには、迷いや逡巡といったものは存在しなかった。

『リヨウ……敵が来る……』

「達人さん……！」

竜馬もまた、ゲッターの中で死者と再会していた。早乙女達人。早乙女賢の長男であり、助手であり、竜馬の未熟が故に賢がその手にかけてねばならなかった犠牲者。

「達人さん……俺は、あんたに謝らなきゃならねえ」

『いいんだ。もうそんなことは。それよりも、リヨウ……これから先の旅は、今まで以上

の戦いの連続になるだろう。それでも、いいんだな？」

「実はさ、この平和な10年間で女ができたんだ。あいつを置いてくことになるのは、少し気がかりだが……」

むしろ、それは幸せなことかもしれないと竜馬は思う。地上に、流の血を残すことができたのだから。ならば、心残りなどどこにあるう。

それよりも、これから先の戦いに心が躍る。それが、流竜馬という生き物の……ゲッター線に選ばれた男の本性だった。

「ゲッターが俺に何をさせようとしてるのか。そんなもん今は関係ねえ。男なら、より強いものとの戦いに生きるべきだと教えてくれたのは俺の親父だ。そして……愛するものがある限り、そのためだけにでも戦うべきだって俺に教えたのは達人さん、あんたの親父なんだぜ？」

『フツ……そうだな……』

やがて、ゲッタードラゴンの無尽蔵のゲッターエネルギーを吸収した真ゲッターロボは、その真紅の機体を青に染めていた。

「これで俺の旅も終わりか……。思えば俺は、この時のために生きていたのかもしれないな」

ゲッターエネルギーの充満を感じながら、竜馬がひとりごちた。

「いや……これから始まるのだ！」

真ゲッターの覚醒を見届けながら、早乙女賢が叫ぶ。それと同時に、ドラゴンのエネルギーを、全て吸収し尽くした真ゲッターの目に、瞳が灯る。

瞳。それは、命あるものの証拠だった。

竜馬は、隼人は、弁慶は、それに武蔵、竜二、達人、ゴール、ブライ……ゲッターの中に生き続ける全ての命は、ひとつとなっていた。

それは。

それは。

世界最後の日に目覚める、新たな命。

その瞬間、ドラゴンの繭は崩壊を始める。全てのエネルギーを真ゲッターに吸収されたことで、繭はその役割を失ったのだ。

青い真ゲッターにも、変化が訪れる。全ては、この時のために。

「竜馬！ 隼人！ 弁慶！」

そのゲッター線の光の中で、早乙女博士は……早乙女賢は、その魂で息子同然の三人に叫んだ。

「ワシの敷いたレールはここまでだ！ あとは、お前達が切り拓け！ お前達の、人類の未来を！」

それが、早乙女賢の最後の言葉だった。

「……早乙女のジジイ」

結局、博士は何のためにこれだけの事態を招いたのか、竜馬には最後まで明確な答えは出せなかった。デーモンに合体されたのか、それとも、ゲッター線に魅せられて狂気に堕ちたのか。それすらももう、確かめる術はない。

しかし、はつきりとしていることがひとつだけある。

早乙女博士は、最後まで竜馬を、隼人を、弁慶を信じていた。そして、ゲッター線という人類に余りある力を持ってして、今日この日を越えるために動いていたということだけは、否定することができなかった。

真ゲッターの周囲に纏わりつくゲッターエネルギーを、真ゲッターロボは収束していく。そして……。

「行くぞ隼人、弁慶！ チェエエエエンジン・ドラゴン！ スイッチ・オン！」

世界終末の時、宇宙を震わせる声が響くと同時……ドラゴンの繭はついに、孵化の時を迎えた。

……

……

.....

核ミサイルがバードス島へ到着するのに、1分も必要ない。既に、甲児が目視できる距離までミサイルは迫っている。

「諦めるのは早いぜ、甲児！」

甲児が絶望の呻きを上げたのと、その声が島を揺るがしたのは、ほぼ同時だった。

そして、その声の主は遙か上空へ飛び立ち、姿を現した。

「ゲッター……」

真ゲッターロボ。竜馬、隼人、弁慶が魂で操縦するそのマシン。しかし、赤い体色は青く染まり、本来機械にはあり得ない瞳が、迫り来る核ミサイルを見据えている。

それだけではない、真ゲッターは繭から孵化し、さらに巨大に……力強いフォームへ進化していた。

「竜馬、そのゲッターは……」

見たことのない、青いゲッター。その存在に、バードス島にいる全ての者の注目が集まる。メカギルギルガンとの戦いでエネルギーを消耗したマシンガンZ、グレートマジンガー、グレンダイザーも、その未知なるゲッターに視線を向けていた。

「……いつか……早乙女博士の遺産」

答えるのは、隼人。

「その名も……」

弁慶が、続ける。

「真ゲッタードラゴン！」

高らかに、竜馬はその名を宣言した。

真ゲッタードラゴン。これこそが、繭の中でその時を待ち続けたゲッターの行き着く姿。

真ゲッターを依代として、再誕したゲッタードラゴン。真ゲッタードラゴンは、その巨大なウイングを広げ、核ミサイルと自身の座標を合わせていく。

「何をする気なんだ、竜馬！」

甲児が叫ぶ。いかに真ゲッタードラゴンが真ゲッター以上の存在であるからとて、核ミサイルを正面から受け止められるはずがない。しかし、竜馬はそれに応えなかった。

「隼人、弁慶。感情を込めて、ゲッターの力を引き出すぞ」

「おう！」

「おう！」

そう言つて、真ゲッタードラゴンが取つたのは空手の構え。竜馬が最も得意とする姿勢。やがて、核ミサイルは高速で真ゲッタードラゴンへと迫っていく。両者が激突する

のに、数秒もかからなかった。ただ、迫る核ミサイルは真ゲッタードラゴンの腹部目掛けて……。

「今だっ！」

その時である。竜馬が叫んだと同時に、真ゲッタードラゴンと核ミサイルが触れ合った時。全てが光に飲み込まれることを覚悟したその瞬間。

核ミサイルは、まるで食べられでもしたかのように真ゲッタードラゴンの中に吸い込まれていく。

「な……」

「何が、起きたんだ……?」

鉄也も、大介も、言葉が出ない。真ゲッタードラゴンの中で、核ミサイルはぐにやりとねじ曲がり……そしてまるで胃袋の中に収まるかのように消えてしまったのだ。

残されたものは、一瞬の静寂。

「真ゲッタードラゴン。あれが……」

大介が唾然とした声を上げた。竜馬達が、ゲッター線の宿命と戦うことで手に入れた、誰も知らないゲッター。それが今、ひとつの危機を救ったのだ。

「……おのれ」

重い、サイコジェニーの声がした。

「おのれ、ゲッター！ お前は、お前だけは滅ぼさねばならぬ！」

サイコジェニーの怒りに呼応するように、ゴッドマジンガー・インフィニティが動き出す。怒りに狂った巨腕が、真ゲッタードラゴン目掛けて迫った。

「……………」

対して、真ゲッタードラゴンは動かない。

「竜馬！」

「あのゲッター、核を飲み込んだ衝撃でフリーズ状態です！」

リサが解析し、甲兎が飛び出した。真ゲッタードラゴンを、竜馬をやらせるわけにはいかない。カイザースクランダーが広がり、その巨腕の前に躍り出たマジンカイザーは、その腕にカイザーブレードを突き刺す。

「この野郎！ いい加減観念しやがれ！」

「ちよこぎいな、兜甲兎！」

マジンカイザーを振り払おうと、ゴッドマジンガー・インフィニティはさらに腕を上げる。そして、勢いのまま振り下ろす。単純な攻撃だが、あまりある体格差を生かした攻撃。受ければマジンカイザーとて、ひとたまりもない。

しかし、その剛腕はカイザーには届かなかった。デビルゲッターのゲッタートマホークが巨大化し、巨大な斧となってゴッドマジンガー・インフィニティに食らい付いてい

た。

「またしても、邪魔をするかアモン！」

「へっ、了の力を得た今のデビルゲッターを舐めるなよ……！」

『そうだ、明。行くぞ！』

明と了の心がシンクロすることで、デビルゲッターはさらなるパワーを増す。巨大なゲッタートマホークに、ゲッタービームを纏わせてもう一度、ゴッドマジンガー・インフィニティへ振るう。

「喰らえ、デビルハンマー・ブレイカー！」

悪魔の槌。そう名付けられた一撃は確実に、ゴッドマジンガー・インフィニティの右腕にダメージを与えていた。

「アモン、貴様アツ！」

ゴッドマジンガー・インフィニティは、その口から竜巻を巻き起こす。ルストハリケーンに酷似したその竜巻を、今度はマジンカイザーが竜巻を巻き起こし、それを相殺する。ルストトルネード。超合金ニューZαの装甲を持つマジンカイザー以外に耐えることのできない強烈な酸性嵐は、ゴッドマジンガー・インフィニティのルストハリケーンすら溶かして見せたのだ。

「おのれ、貴様等……！」

サイコジェニーの声色に、焦りの色が濃くなり始めていた。今まで、ラーグースを恐れさせる存在などいかなかった。それがたとえ、細胞片に与えられた擬似人格であったとしても、だ。

それほどに、ここに集まっている存在はラーグースにとつてもイレギュラーというところか。その答えをサイコジェニーは持っていない。

巨大な悪魔の槌……デビルゲッターマホークを構えたデビルゲッターが、先に動いた。

「元氣、ミチル、了。俺達の魂を……奴にぶつけるぞ！」

『おうー』『おうー』『おうー』

デビルゲッターマホークを振るうデビルゲッター。ゴッドマジンガー・インフィニティは、巨大な右腕を振り上げてそれを受け止める。

「同じ手が何度も通用すると思うなよアモン、サタン！」

「同じ手かどうか……受けてみな！」

受け止めたデビルゲッターマホークが、ゲッター線の塊へ融解していく。ゲッタービームの塊……言わば、デビルゲッター版ストナーサンシャインとでも言うべきものが、明の、了の、元氣の、ミチルの魂の一打となつて迫る。

超高熱のデビル・ストナーが、ゴッドマジンガー・インフィニティの右腕を焼き尽く

す。それはまさに、地獄の業火。

「おのれ……地獄に堕ちろ、アモン！」

サイコジエニーの怨嗟の声と共に、ゴッドマジンガー・インフィニティは左腕を振り上げた。

「違うな、サイコジエニー！」

その腕をひよいと避け、デビルゲッターは左腕のデビル・ゲッタードリルをさらに巨大化させてその顔を抉り出す。ドクターヘルが埋め込まれていない、インフィニティの本来の目が衝角の回転で潰れた。

「俺達が、地獄だ！」

『俺達が、地獄だ！』

そう言つて、デビルゲッターがゴッドマジンガー・インフィニティから離れる。デビルゲッターに覆い被さるように、サイコジエニーの死角に迫っていたのは……。

「マジンカイザー、フルパワーだ！」

「了解！ 空中元素固定装置、フルドライブ！」

魔神皇帝、マジンカイザー！ その胸の赤い放熱板が、熱を持つ。次の瞬間……。

「受けてみやがれ、ファイヤー・ブラスタァー！」

マジンカイザーから放たれた灼熱が、ゴッドマジンガー・インフィニティを覆った。

「く、くおおおおおつ!？」

サイコジェニーの、悲鳴にも似た声が響く。そして、その悲鳴は。

「……………待たせたな、甲児」

流竜馬の、真ゲッタードラゴンの。再起動の合図だった。

……………

……………

……………

真ゲッタードラゴンが核ミサイルを吸収した時、竜馬は夢を見ていた。

「なんとということだ……………」

それは、広い宇宙。人類の歴史。生命の歴史。宇宙誕生の歴史。別々に存在しているはずの全ての命が、宇宙という名の塩基配列の中で活動するDNAであるという詳細。

「こんなにも、簡単なことだったのか……………」

なぜ、人間は生まれたのか。なぜ、自分は生まれたのか。なんのために生きて、なんのために死ぬのか。それは、それらは、あまりにも簡単でちっほけで、だからこそ全ての命は平等に価値があり、尊いということが。

「わかる。わかるぞ……」

何も恐れることはないということが。

全ての命は、宇宙の滅びぬかぎり滅びることはない。全ては、同じ場所から生まれ、同じところへ還るエネルギーなのだから。

そして、だからこそ。

「宇宙を滅ぼそうとするラールグースは、このままにしちやあおけねえな……」

それは、悟りにも近いものだった。野蛮で交戦的な竜馬には似合わない言葉かもしれない。それでも、これを悟りと言わずになんというのだろうか。

「……旅立ちの 때가、きたな」

弁慶が言う。

「弁慶……」

「さあ、行こうぜリヨウさんよ」

隼人の口調はどこか嬉しそうで、若い頃に何度もやり合った頃に似ている気がした。

「隼人……お前も見たんだな」

「おそらく、お前さんと同じものをな」

ならば、もう思い残すことはない。竜馬は、隼人は、弁慶は、同時にペダルを踏んでゴッドマジンガー・インファイニティへ迫っていく。

核ミサイルのエネルギーを取り込んだことで、真ゲッタードラゴンのエネルギーは無尽蔵に活性化していた。青く染まったその身体がさらに、ゲッター線の光で満たされていく。

「あれは……!」

甲児は、鉄也は。その光を知っていた。

シャインスパーク。3人のパイロットが心を合わせた時にのみ発揮される、ゲッタードラゴンの真の必殺技。ドラゴンの魂を受け継いだ真ゲッタードラゴンは、それを継承していた。

即ち、真・シャインスパーク。

光の塊となって、ゴッドマジンガー・インフィニティへと迫る真ゲッタードラゴン。ゴッドマジンガー・インフィニティは、胸部の

インフェルノ・ブラスターでそれを迎撃する。しかし、その爆熱は真ゲッタードラゴンに触れた瞬間、霧散し真ゲッタードラゴンの中に吸い込まれていく。

「バカな……!?!」

サイコジェニーが、狼狽の声を漏らす。インフェルノ・ブラスターを喰らい、真ゲッタードラゴンはついに、ゴッドマジンガー・インフィニティへ衝突した。そして……。

「何が、起こってるの……?!」

セーラは、その光景に魅入っていた。

「あれが……ゲッターの……」

鉄也はその光景に、畏敬の念すら抱く。

「……………」

大介は、言葉もない。

「ゲッターアアアアアアアッ!?!」

その叫びが、世界を、宇宙を、銀河を震わせる。

「う、う、うおつあああああつああつああ!?!」

サイコジエニーが叫ぶ。それは悲鳴にも、絶叫にも、嬌声にも聞こえた。なぜそんな声が出てしまうのか、サイコジエニーにも理解できない。

ただ、真ゲッタードラゴンが触れた場所から崩れていくように、ゴッドマジンガー・インフィニティが消えていくのだ。

それは、核ミサイルと同じようにゲッターがゴッドマジンガー・インフィニティを喰っているようにも見える。神の名を冠する巨神が、なす術もなく喰われていく。

「な、なんだ……何が起こっているんだ……?」

呆然と、シロー。

「ゲッターが……目覚めた……」

リサはその光景に、目を奪われていた。無理もない。リサの生まれた世界は、ゲッターによって地獄に変えられたのだから。

しかし、この真ゲッタードラゴンからは恐怖を感じないことに、リサは気づいた。むしろ、温かいものすら感じる。

「ゲッターが……生まれた意味。私が、生き残った意味。それは……」

この瞬間のためだったのかもしれない。とすら思う。

「ゲッター！ お前は……お前はなんなのだ！」

サイコジェニーの最期の意識は、この光景を別の宇宙……銀河の果てに在る母なるラッグースに届けることに全ての力を向けていた。この化け物に、勝ち目はない。そう、本能とでも言うものが悟っていた故の、無意識にプログラムされた行動だった。だが、それでも。

ここでゲッターを……その覚醒を促した地球人類を滅ぼさねば必ず、ラッグースの脅威になる。その一念が、サイコジェニーに最期の行動を起こさせた。ゴッドマジンガー・インフィニティは、真ゲッタードラゴンを掴んでその核を爆走させていく。

「こうなれば……この地球ごと、ラッグース細胞を自爆させる。ヒ、ヒヒ……そうなれば、この星諸共、お前達も滅ぶ！」

みるみるうちに、熱量を上昇させるゴッドマジンガー・インフィニティ。その熱は既

に、バードス島の全てを溶かさん勢いで暴走していた。しかし、

「いや、そうはならない」

冷静に、そう言い切ったのは竜馬だった。そして、真ゲッタードラゴンに並ぶように立ち上がったのは、マジンカイザー。マジンカイザーは、ゴッドマジンガー・インフィニティの暴走する熱を吸い上げていく。

「く、空中元素固定装置……」

バードスの杖を構えて、リサはマジンカイザー内部の空中元素固定装置をさらに加速させていた。マジンカイザーの無敵のボディが、熱くなつていく。

「光子出力、113億%を突破しました。お父さん！」

「ああ、このエネルギーを全て……ぶつけてやる！」

光子力の怪力が、神像を持ち上げる。そして、次の瞬間。

「カイザーアアアアアアアツノヴァアアアアアアアアツツ!?!」

魔神皇帝の全身から放たれた光子力が、ゴッドマジンガー・インフィニティを飲み込んだ。

真ゲッタードラゴンの真シャインスパーク。

マジンカイザーのカイザーノヴァ。

2つの力。陰と陽。ゲッター線と光子力。//進化//の光と//可能性//の光。

「甲児、地球のことはお前達に任せませ」

そう言う竜馬は、真ゲッタードラゴンのコクピットは、あのゲッターの地獄で見た夢のように機械コードが伸び、竜馬を侵蝕している。しかし、その光景に甲児は驚きはしなかった。

むしろ、真ゲッタードラゴンのあの力の源が何かを考えれば、それは自然なことでもあるように思えたからだ。

「竜馬、お前達は……」

「決まってるだろ？」

ニヒルに笑う隼人も、同じく。

「あの先にいる、ラーグースの親玉をぶっ倒すのさー」

言いながら、加速する真ゲッタードラゴン。その加速に、追隨する者がいた。

「待てよ、お前達だけにいい格好はさせねえぜ」

デビルゲッターである。

「デビルマン、お前……」

「元々、俺達は人間界に居場所のない存在だ。人間にも、デーモンにもなれない半端者だが……この先にあるのは、俺達に相応しい地獄らしいからな！」

『竜馬さん、抜け駆けは許さないぞ！』

元氣の声が、竜馬にも伝わった。

「ミチルさん……」

『いいのよ隼人君。私は、望んであなた達と共に行くのだから』

「そうと決まれば……行くぜ！」

真ゲッタードラゴンと、デビルゲッターが共に並び、そして……次元の狭間から顔を覗かせた異形の怪物。その首をトマホークで刎ね、突入していった。

「待て……待てよ竜馬！」

甲児が、叫んだ。長年を共にした盟友へ。

「あばよ……ダチ公！」

それが、竜馬の最後の言葉だった。やがて、2つのゲッターを飲み込んだ時空の裂け目は元通りになり……朝が来きた。

……

……

……

ナガレ流総合格闘道場。若き女性格闘家・流りようが切り盛りするその空手道場に

は、一人息子がいる。簡素な食卓に並べられたメザシと山菜。そして白米と菜根汁という、精進料理のような献立にその少年は、苦い顔をしていた。

「……ハンバーグが食いてえ」

「拓馬！」

流りよう……ご近所からは「おりようさん」と呼ばれ親しまれる拓馬と呼ばれた少年の母は、そんな息子の愚痴に間髪入れずに反応した。

「よいですか、メザシと山菜。これが一番体に良いのです。ハンバーグなど……食べすぎるとロクなことになりません。貴方のお父さんのように、立派な武人になるには、常に精進料理が一番なんですよ！」

そうは言われても、拓馬は父のことを知らない。生まれてこの方、ずっと母子家庭だ。背筋を伸ばし、母の躰の通りに精進料理を完食した拓馬は、ランドセルを背負い学校へ行く支度をする。と、そんな時だ。

「タクマー！」

道場の門から、声がする。母に「行つてきます！」と告げて拓馬は、門の前で待つ幼馴染に顔を出した。

「おはよう、梨沙。リサ姉ちゃんも」

拓馬を待っていたのは、長い、透き通るような銀髪の女性と、拓馬と同一年の少女。少

女もまた、銀髪と青い瞳が抜けるように美しく……そして。

「おはよう、タクマ」

その鈴のような声が、可愛らしい女の子だった。

……

……

……

「……………夢？」

あれからしばらくの時間が過ぎたその日、リサは新光量子力研究所のベッドで目を覚ました。とても、嬉しい夢を見た気がする。希望に満ちた、可能性に満ちた夢を。

あのあと、リサの身体を蝕んでいたゲッター線汚染はみるみるうちに引いていった。ほとんどの後遺症も残ることなく、リサは毎日を生きている。それを、せわし博士とのつそり博士は「よくわからない、未知の現象」と言っていたが、リサはこうも思うのだ。

あの時、真ゲッタードラゴンがリサの中に溜まっていたゲッター線を吸い取ってくれたのではないかと。

ともあれ、こうしてリサは生きています。

「リサさん、やっと起きた!」

傍で、如月聖羅……セーラが声を上げた。あの戦いのあと、シローとセーラも新光子力研究所で世話になっている。シローはやがて、軍属に復帰することになるだろう。しかし、今はしばらくの休暇を貰っていた。

セーラ曰く、「シローが休暇のうちに、パパとママに紹介したい」とのことだが、なかなか日程が合わないのが悩みの種らしい。訊けばセーラの父は世界中を又駆けるジャーナリスト、母はトップモデルというではないか。

そんなセーラは、何やら忙しなさそうにあわふたしており、寝ぼけまなこのリサにはそれがどことなく、面白い。

「セーラちゃん、どうしたの?」

「どうしたもこうしたもないですよ、弓所長……さやかさん、陣痛が始まったんです!」
「!?」

それは、まるで。夢のような報せだった。

……

……

.....

「そうか、甲児君とさやかさんのことも……無事に生まれたか」

宇門大介は電話越しに、その報せを聞いて安堵の表情を浮かべていた。本当なら、甲児達の下へ駆けつけたいのも山々だったが、今大介は新光子力研究所のある富士から離れている。

大介は、甲児から借りたバイクを駆り、八ヶ丘まで足を運んでいた。宇宙科学研究所。デューク・フリードに、宇門大介という名をくれた恩人のいる場所がある。大介は、フリード星へ戻る前に彼ら、地球の家族達へ挨拶周りにしていた。

それは、大介が守りぬいた地球という星を今一度、この目に焼き付けるための儀式でもある。ゲッターチームが旅立った後、地球に降り注ぐゲッター線の総量は目に見えて低下していた。それは、竜馬達がこの世界を去ったことと関係していると思われるが、詳細不明。

観測に携わっているロン・シユバイツァ博士曰く、「ゲッター線が地球に降り注いでいたのは、或いはゲッター線そのものが何かを伝えるために意志を持って行っていたことかもしれない」という。その意志が、フリード星すらも滅ぼす破壊者になるのか……或いは、大いなる意志を持つ者からこの宇宙を守る防人となるのか。それは、竜馬達にか

かっているとも言えた。

今大介にできることは、信じることのみである。だからこそ、大介は信じるに足るものを……自分たちの手で守り抜いたこの地球の自然を、目に焼き付ける旅をしていた。

そして、その旅にはもう一つの目的があった。

雄大な緑に覆われ、青い空がどこまでも広がるシラカバ牧場。そこに、一人の女性がいた。牧葉ひかる。かつて、宇門大介と共にベガ星連合軍から地球の危機を救った女性である。

今、ひかるはこのシラカバ牧場の経営者として父の後を継いでいた。28歳、未婚。今日もひかるは、牧場の馬達の世話をしている。

シカラバ牧場は、デーモンの放棄の中でも大きな被害を受けることなく平和だった。世界の混乱の中でも、平穏だった。それを嬉しく思うと同時に、少しだけ申し訳なくも感じていた。

「あら………?」

そんなひかるが牧場へ行くと、今日はやけに馬達が元気に見える。中には、とても嬉しそうに人を背中に乗せて、走り回っている子もいた。

「え………」

その乗馬術の巧みさ。そして、自然と溶け合うように駆けるその後ろ姿を、ひかるは

一瞬たりとも忘れたことはない。

「大介さん、大介さんなの……!?!」

宇門大介、あの頃ずっと思い合っていた青年が今、目の前にいる。その事実が信じられない。ひかるは、思わず大介を追って走る。

「待って、大介さん。待って!」

ひかるは、走った。その声に気づいたのか、青年は馬を止め、降りて振り返る。

そこにいたのは、その顔は見間違えようもない……。

「また会えたね、ひかるさん」

大介の胸に飛び込んで、ひかるはただ、その存在を肌で感じていた。

いつまでも、いつまでも。

永遠にも感じるほど抱きしめ合い、やがて見つめ合って……。

……

……

……

早乙女研究所。悪魔王ゼノンの戦いで廃墟と化したそこは今、「keep out」立て看板と共に封鎖されている。そこには今、一部の人間以外に立ち入りが許可されて

いない特別な場所となっていた。

かつて、威容を醸し出していたゲッターロボの要塞基地。ある日、そこに兜甲児と剣鉄也、兜シローの3人は足を運んでいた。

「本当にいいのか、甲児……?」

かつて、早乙女研究所のゲッター格納庫だった場所。そこに今、マジンカイザーは鎮座している。玉座に座る皇帝が如く、見るもの全てに畏敬の念を抱かせる黒鉄の魔神は今、その役目を終えようとしていた。

「ああ、ここからの時代にカイザーは、人間が持つのに余りある存在だ」

神をも越え、悪魔すら斃す力。マジンカイザーは今、無数のゲッターロボの墓場となっているこの早乙女研究所の地下格納庫で眠りにつこうとしている。

「でもさ、兄貴。もしかたあのラィグースみたいな奴らが攻めてきたら……」

シローが口を挟む。それに対して甲児は、ニツと笑みを作った。

「大丈夫だよ、竜馬達が宇宙のどこかで戦ってるんだ。それならもう、地球は安全に違いない。それにマジンガーZと、グレートマジンガーは健在だしな」

甲児の愛機……マジンガーZを受け継いだ弟は、「そうだな」と相槌を打ち、改めて魔神皇帝を……マジンカイザーを見やる。

シローは、この休暇が終われば軍属に戻る。マジンガーZは、研究所に残していくこ

とになる。空中元素固定装置の制御なしで今のマジンガーZを使うのは、あまりにも危険でもあった。その意味ではカイザー同様、マジンガーZも封印に近い。

「シロー、マジンガーZのことは兄貴やセーラ、研究所のみんなに任せてやれ。それと……」

鉄也が、口を開いた。

「俺は、この戦いを最後に軍を退役する事にした。グレートは、お前が使い」

「えっ!？」

「いいのかよ、鉄也」

さしもの甲児も、驚いた様子だった。しかし、鉄也は既に決心したらしく一つ頷いて、甲児と、シローへ目を向ける。

「そろそろ、俺も軍の年金生活に甘んじさせてもらいたくてな。育児も、ジュンにばかりやらせてちや親父の面目が立たん。それにグレートは、シロー。お前の親父さんが作った魔神だ。お前が乗ってくれるなら所長……俺にとつても父に等しいあの人も、喜んでくれるに違いない」

「そうか……お父さんが……」

兜剣蔵が残した遺産。その言葉に改めて、シローは頷く。

「……わかった。偉大な勇者の名前は、俺が引き継ぐよ」

「……………ああ、頼んだぞ」

「……………時間だ。行こう」

甲児が言うのと、3人は早乙女研究所を後にする。その直後、研究所全体で、大きな爆発が起きた。甲児達が設置したダイナマイトが、起爆したのだ。

玉座に座る魔神皇帝が、瓦礫の中に埋もれていく。優しい風が、皇帝を讃えるように吹いた。時の音から忘却されゆく魔神。その魂は、ここに眠る。

その振動が収まった後、甲児はマジンカイザーの眠る墓所を一瞥した。

「……………もう二度と、お前をここへは戻さない」

それは、約束。永遠の友とも言うべき魔神との。愚かな未来を、お前は望まない。だから、もう魔神皇帝の力は必要ない。

最後にもう一度だけ、甲児はカイザーへ呟いた。

「静かに眠れ、カイザー……………」

「なあ、兄貴……………」

そんな甲児に、シローが声をかける。

「……………何だ？」

「竜馬さん達が戻ってきた時……………地球は、人類はどうなつてると思う？」

それが、どれほど遠い未来なのかはわからない。それでも甲児がカイザーをここに埋

めたのには、理由があった。

もし、ゲッターが地球に帰還するのなら、最初に訪れるのは早乙女研究所に決まっている。そして、そこにマジンカイザーが……盟友があればきつと、竜馬達を導いてくれる。そう、甲児は信じていた。

その時、果たして帰還した竜馬達は甲児の知る竜馬達なのだろうか。それは、わからない。

しかし、ひとつだけ確信しているものがある。

「きつと、すばらしい世界になつてるさ」

そう言つて、甲児は空を見上げた。

この宇宙のどこかで、竜馬達は今も燃えている。銀河の彼方で、足掻いている。

できることなら、今すぐにでも駆けつきたい。だけど、それは甲児の戦いではない。

「……なあ、ちよつと寄り道していいか。ベビー用品、買い足してくれつてさやかに言われてるんだ」

兜甲児が生きる世界は、今ここにあるのだから。

……

……

.....

拓馬と梨沙が並んで学校へ向かう。途中、リサお姉ちゃんは駅で別れ、そのあとは二人だ。

「ねえ、梨沙ちゃんのところは今日の晩ごはん、なんなの？」

「んー、ハンバーグかな？」

ハンバーグ。拓馬が母から禁じられているこどもの好物の名前が出てきて、「ああ、兜さんのところに生まれたかった」と一瞬、拓馬は思った。商店街を歩いていると、乱暴な自転車スピードを上げて加速し、思わず拓馬は梨沙を庇うように前に出て、自転車をやり過ぎす。

「コラー！ 號ー!？」

「ゴメンゴメン！ 急いでるんだあ!？」

自転車の主は、ご近所でも荒くれで有名な一文字號だった。今日も騒がしく、商店街を賑わせている。

「……………あ、ありがとう」

梨沙が、ほっとしたように胸を撫で下ろす。

「う、うん…………。このくらい、父ちゃんならあんなのキック一発でのしちまうんだぜ！」

会ったことのない、母から伝え聞いた父の真似をして、拓馬は思いつきり脚を上げた。その脚が、何かを突き飛ばす感覚があった。

「あつ……………」

梨沙が声を上げる。思わず見た先には、緑色の肌を持つ、しかし整った顔立ちの拓馬や梨沙と同年代の少年がギロリ、と拓馬を睨みつけている。

「……………随分な挨拶だな、拓馬」

「カ、カムイ……………」

カムイ・シヨウ。恐竜帝国から交換留学生として招かれた、人間とハチュウ人類の友好の証。そして、拓馬の父と戦った恐竜帝国の先王ゴールの息子でもあるカムイは立ち上がり、俊足で拓馬へ近づくと、腹に思いつきりパンチをお見舞いする。

「ゲエツ！」

呻く拓馬。

「拓馬、何を呻いている。遅刻するぞ」

涼しげな顔で、先を歩くカムイ。

「っ待てこの、カムイ!？」

「もうっ、タクマもカムイも、喧嘩しないでよ〜〜!」

それを追い乱闘騒ぎを起こす拓馬と、仲裁に入る梨沙。それは、いつもと変わらぬ日

常の1ページだった。

.....

.....

.....

「.....夢?」

長い旅路の途中、流竜馬は夢を見ていた。懐かしい地球の夢。しかし、見たことのない.....未来の夢。

「.....起きたか竜馬。平和な夢でも見てたのか?」

そう皮肉げに訊く声は、隼人。

「ああ、ひさしぶりに.....いい夢を見た気がする」

それに竜馬は、混ぜっ返すこともなく素直に答えた。夢を見た。それは、まだ竜馬が人間である証拠だ。

「お喋りをしている暇はない.....見ろ」

弁慶の声だ。竜馬が意識を集中させると、眼前には無数のゲッターロボを従えた艦隊が、惑星を蹂躪しているのが見える。

「出たな……」

零落した侵略ゲッターの長と思われる、真ゲッターロボに似た機体が叫ぶ。

「出たな、ゲッタードラゴン!」

真ゲッターもどきから放たれたゲッタービームを、真ゲッタードラゴンはトマホークで薙ぎ払い、そして真ゲッターもどきへと迫った。

「俺を、舐めんじゃねえええええつ!」

その叫びが、宇宙を震撼させる。

この戦いの結末を描くには、無限の時が必要となるだろう。

永劫の時を持つとしても、この戦いの結末を描くことなど不可能なのだ。

しかし、覚えておいてほしい。

今も、この宇宙のどこかでその命を燃やしている男達がいることを。

時代を喰らい、全ての命を泡沫に消費する虚無の時代を斬り裂く者……それこそが!

『マジンカイザーvs真ゲッターロボ!』 完!